

Talmy の類型論から見た日本語と韓国語の様態表現  
—複合動詞を中心に—

宣旻貞

## 目次

1章	はじめに.....	3
2章	先行研究.....	6
2.1	Talmyの類型論.....	6
2.2	Talmyの類型論の多様性.....	8
2.3	問題提起.....	24
3章	調査の概要.....	37
3.1	韓国語の概要.....	37
3.2	調査基準.....	41
3.3	予備調査.....	44
3.4	調査結果.....	55
3.4.1	自律移動.....	55
3.4.2	使役移動.....	61
4章	考察.....	72
4.1	自律移動の様態表現.....	72
4.1.1	事象の連続性における自律移動.....	72
4.1.2	日本語と韓国語の非主要部で一般的な様態動詞が用いられている場合.....	77
4.1.3	日本語と韓国語の非主要部で一般的な様態動詞が用いられていない場合.....	93
4.1.4	様態の副詞を回避しない場合.....	101
4.2	使役移動の様態表現.....	106
4.2.1	事象の連続性における使役移動.....	106
4.2.2	継続操作型と開始時起動型の使役移動.....	110
4.2.3	使役移動の手段でも様態でもない動詞.....	121

4.2.4 被使役者に対する働きかけの詳細化.....	137
5章 まとめと今後の課題.....	142
参考文献.....	144

省略記号

ACC accusative

ADN adnominal

AVS adversative

COND conditional

DAT dative

FP final particle

GER gerundive

GEN genitive

HON honorific

IMP imperative

LOC locative

NEG negative

NMLZ nominalizer

NOM nominative

PASS passive

PART participle

POL polite

PL plural

PROB probability

PRF perfect

PRS present

PS past

PT particle

PURP purposive

Q question

SUBJ subject

TOP topic

本文中の英語からの日本語、韓国語の例は直訳であるので、不自然なところがあることをご了承ください。

## 1章 はじめに

本稿では、Talmy (1991, 2000)の類型論によると、Verb-Framed Language(以下 V 言語)として分類されている日本語と韓国語が、Satellite-Framed Language(以下 S 言語)のように、様態(Manner)が表されやすい言語である可能性を検証する。両言語には、典型的な V 言語とは違い、経路動詞との結びつきの強い非主要部があるので、非主要部で表される様態の頻度は高いと予想される。様態の意味要素は、V 言語と S 言語を区別する意味要素ではなく、本来移動事象を構成しない付加的な要素だが、V 言語では様態が一様に前景化されていないことや、V 言語の典型的な様態は副詞が優勢ではないことを示していくことで、Talmy の類型論の多様性が指摘できるという点では、様態を中心に議論する余地はある。

本稿の類型論的観点、Talmy (1991)が論じた類型化の基準に従い、特定の意味要素（移動の様態）に注目し、それが異なる言語でどの形式により表現されるのかを見ていく。逆に、統語要素に注目し、それが異なる言語でどの意味要素が表現されるのかを見る Talmy (1985)とは手順が違うので注意して頂きたい。図で示すと、次のようになる。

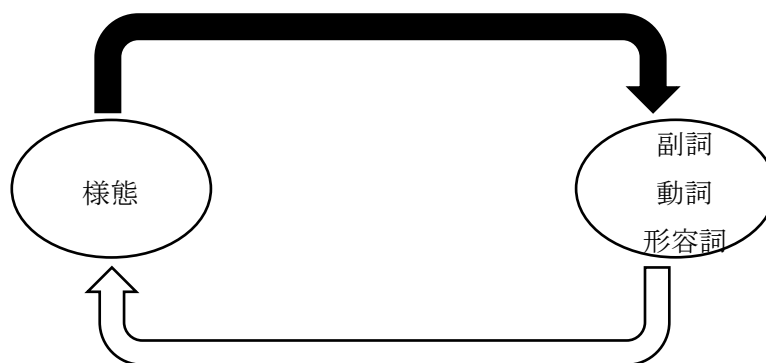


図1 本稿の議論の方向性

図1は、意味と形式の対応づけにおける本稿の方向性を示している。特定の統語要素（動詞など）を固定し、異なる言語でどのような意味要素が表されているのかを観察する（白の矢印）Talmy (1985)とは違い、本稿では、特定の意味要素（様態）を固定し、異なる言語でその意味要素が表される統語要素を観察する（黒の矢印）。移動の様態は、動詞や副詞、形容詞などで表されるが、以下の例が挙げられる（四角で囲った部分が移動の様態）。

(1) a. The bottle floated out of the cave.

b. びんが洞窟の外に流れ出た。

c. 병이 동굴 밖으로 흘러 나왔다.

pyeng-i tongkwul pakk-ulo hulle-na-wassta

びん-が 洞窟 外-に 流れ-出て-きた

‘びんが洞窟の外に流れて出てきた’

(1)では、移動の様態が表されている英語と日本語、韓国語の例を示している。英語では、動詞の *floated* で様態が表されているが、日本語では、複合動詞の前項動詞(V1)の「流れ(出た)」で表されている。韓国語でも、複合動詞<sup>1</sup>の前項動詞(V1)の「흘러(나왔다)」で様態が表されている。これらは英語の移動事象に対応する日本語と韓国語の例だが、同じ状況に対する各言語での表現だと想定して、英語の小説と日本語の翻訳小説、韓国語の翻訳小説を用いることで、日本語と韓国語では、非主要部で様態が表されやすいことを示す。

本稿の構成は以下の通りである。まず、Talmy (1991, 2000)による V 言語と S 言語の区別を 2 章で紹介する。続いて、Talmy の類型論の多様性を指摘した Slobin (1996b, 1997, 2003, 2004, 2005, 2006)と Koga et al. (2008)、松本 (2003)などを紹介し、V 言語に分類されている日本語と韓国語は、個別言語の特徴として、S 言語のように、様態の意味要素も表されやすい可能性を問題提起する。3 章では、本調査に入る前に、対象となる韓国語の概要と、調査の具体的な基準を示し、検証内容の一部の予備調査を行うことで、先行研究の追試及び調査の手法を確かめる。その後、両言語の自律移動と使役移動の調査結果を示す。4 章では、3 章で検証した結果を基に、その動機づけを考察する。具体的には、自律移動では、非主要部の様態が多い要因として、どの言語にもある一般的な様態動詞による様態の中立化(neutralization)や上位カテゴリーの役割などを考察し、使役移動では、継続操作型と開始時起動型の特徴や使役移動における図(Figure)や地(Ground)の情報などについて考察していく。最後に、5 章ではそれまでの内容をまとめ、今後の課題を述べる。

---

<sup>1</sup> 韓国語では、「複合動詞」という用語より「合成用言」の用語が一般的になっている。本稿では、記述の統一上、「複合動詞」とする。合成用言は合成動詞と合成形容詞で構成されるが、本稿で言う「複合動詞」は、合成動詞のみを対象とする。

## 2章 先行研究

### 2.1 Talmy の類型論

Talmy (1985, 1991, 2000)によると、移動事象(Motion event)を構成する意味要素には、図(Figure)と地(Ground)、移動概念(Motion)、経路(Path)、様態、原因(Cause)などがある。そのうち、図と地、移動概念、経路は、イベント全体にまたがる枠組みあるいは参照枠を与える枠付けイベント(framing event)の構成要素になる。各要素の定義は以下の通りである(Talmy 2000, 高尾[訳])。

(2) a. 図(Figure)：目下の注意や関心の最大の中心になっている成分。

b. 地(Ground)：参照物として概念化される成分。図的事物の状態は地的事物との関連で特徴づけられる。

c. 移動概念(Motion)：図的事物が地的事物に関して推移するか固定であるかを定める活性化プロセス(activating process)のうち、推移として実現される場合を指す。イベントに対して動態性(dynamism)を与えると認識される成分。

d. 経路(Path)：図的事物を地的事物に特定の関係で結びつける関連付け機能(relating function<sup>2</sup>)を果たしている成分。

このうち、経路は図的事物と地的事物を結びつける機能上、イベントの特性を決定する度合いが最も大きく、他の枠付けイベントとの違いを示すので、枠付けイベントのスキーマ的な中核部分(core schema)になるという。残りの様態や原因などは、枠付けイベントを補助する機能を果たす共イベント(co-event)の構成要素になる。これらの意味要素は、例えば、次のように表現される。

(3) a. Figure    Motion    Path    Ground    Manner

↓            ↓            ↓            ↓            ↓  
The bottle   floated   into   the cave.

b. Figure    Motion    Path    Ground    Manner

↓            ↓            ↓            ↓            ↓  
La botella   entró   a la   cueva   flotando.  
the bottle   MOVED-in to the   cave   floating

(Talmy 2000:49, 一部修正)

(3)では、英語とスペイン語で移動事象の意味要素が表現されている。英語では、枠付けイベントを構成する図と地、移動概念、経路に加え、共イベントの様態が移動概念と一緒に

<sup>2</sup> Talmy (2000, 高尾[訳])は関連付け機能(association function)としているが、原文の Talmy (1991)では、relating function としているため、ここでは relating function と呼ぶこととする。

動詞で表現されている。一方、スペイン語では、同じ意味要素でも、経路が移動概念と一緒に動詞で表現されている。共イベントの様態は動形容詞(*gerundive*<sup>3</sup>)で表されている。このように、同じ移動事象の意味要素でも、言語によって移動表現は異なる。Talmy (1985, 1991, 2000)は、中核スキーマ(*core schema*)の経路が典型的に動詞で表現されると V 言語 (*Verb-Framed Language*)、動詞の衛星(*satellite*<sup>4</sup>)で表現されると S 言語 (*Satellite-Framed Language*)があるとしている。上記の英語とスペイン語は、次のように、S 言語と V 言語として分類できる (四角で囲った部分が経路)。

(4) a. 英語 : The bottle floated into the cave.

b. スペイン語 : La botella entró a la cueva flotando.

the bottle MOVED-in from the cave floating

(Talmy 2000:49, 一部修正)

(4)では、(3)の英語とスペイン語をそれぞれ S 言語と V 言語として分類している。英語では経路が衛星の *into* で表されているので S 言語、スペイン語では経路が動詞の *entró*(*enter*)で表されているので V 言語として分類している。また、Talmy (1985, 2000)は、イベント統合の観点から、次のように、世界の言語を三つのカテゴリーに分類できるとしている。

(5) a. 移動概念+共イベント : インド・ヨーロッパ語 (ロマンス語は除く)、中国語、  
(*Motion+Co-event*) フィン・ウゴル諸語、オジブウェー語、ワリピリ語

b. 移動概念+経路 : ロマンズ語、セム語、ポリネシア語、ネズ・パース語、  
(*Motion+Path*) カドー語、日本語、韓国語

c. 移動概念+図 : アツゲウィ語、ナバホ語

(*Motion+Figure*)

(Talmy 2000:60)

(5)では、イベント統合の観点から、動詞(*verb root*)でどの意味要素が典型的に表されるのかによって分類した三つのカテゴリーを示している。動詞の意味の中に移動概念(*Motion*)と一緒に共イベント(*co-event*)が表現される言語、移動概念(*Motion*)と経路(*Path*)が表現される言語、移動概念(*Motion*)と図(*Figure*)が表現される言語に分類できる。英語は共イベントの様態が動詞の意味の中に含まれているので((3a)を参照)、(5a)のインド・ヨーロッパ語、スペイン語は経路が動詞の意味の中に含まれているので((3b)を参照)、(5b)のロマンス語の分類に入る。

<sup>3</sup> 動形容詞(*gerundive*)はラテン語にある準動詞の一つで、動詞から派生した形容詞である。英語の動名詞に近いが、英語の動名詞とは用法が完全に一致しないので、ここでは「動形容詞」とする。

<sup>4</sup> Talmy (2000)は *Satellite* について、次のように定義している：“It is the grammatical category of any constituent other than a noun-phrase or prepositional-phrase complement that is in a sister relation to the verb root(Talmy 2000:102)”



## 2.2 Talmy の類型論の多様性

Talmy (1985, 1991, 2000)の議論を深める研究は、経路以外の要素に関するものと、各言語の位置づけに関するものに大きく分けられる。まず、経路以外の要素に関する研究には、様態と直示(Deixis)、動詞の衛星(satellite)について議論した Slobin (1996b, 1997, 2000, 2002, 2003, 2004, 2005, 2006)と Koga et al. (2008)、松本 (2003, 2017)が挙げられる。

Slobin (1996b, 1997, 2000, 2002, 2003, 2004, 2005, 2006)は、Talmy による様態の定義がはっきりしないとして<sup>5</sup>、言語間の違いを様態の際立ち(salience)として捉えている。際立ちとは、言語表現のために、ある成分の意味が前景(foreground)として注目される度合い、あるいは注目がなくなって背景(background)になる度合いだが<sup>6</sup>、Talmy (1985, 2000)も、際立ちについては、一般的な原則を示している。他の条件(例えば、文内の位置や強調する程度)が同じであれば、主動詞(main verb root)や動詞の衛星を含んだ閉じたクラス(closed-class)の表現では、意味要素が背景化されるという。それ以外は前景化される。例えば、次のような例を挙げている。

(6) a. I went by plane to Hawaii last month.

b. I flew to Hawaii last month.

c. I went to Hawaii last month.

(Talmy 2000:128)

(6)では、背景化の違いを示している。同じ情報でも、(6b)のように、主動詞の *flew* で表した方が背景化される。(6a)のように、副詞句の *by plane* だと前景化される。(6b)のように背景化されるほど頻繁に現れ、(6c)よりもさらに手段の情報が加わっていても、その認知的なコストは低く、含意されやすいとしている。このように、Talmy (1985, 2000)は、際立ちに関する一般的な原則を示している。ただし、これらの原則によって、英語とスペイン語の違いを説明している。例えば、次のような違いを取り上げている。

(7) The man ran back down into the cellar.

(8) a. El hombre corrió a -l sótano

the man ran to-the cellar

“The man ran to the cellar”

---

<sup>5</sup> Slobin (2004)は、Talmy (2000)が経路の定義を *The basic Motion event consists of one object(the Figure) moving or located with respect to another object(the reference object or Ground)*とし、経路が移動事象を決める意味要素としているが、様態ははっきりとした定義がなく、*Manner refers to a subsidiary action or state that a Patient manifests concurrently with its main action or state*(Talmy 1985)という定義を引き継いでいるようだとしている。そうすると、様態は、walk や run、fly のような一般的な様態から、limp や sprint、swoop のような、かなり細かい区別をしている様態まで、その範囲が広くなり、言語によっては、hop や jump、skip のような運動のパターン、walk や run、sprint のような移動の速度、step や tread、tramp のような力動性(force dynamics)、amble や saunter、stroll のような態度、sled や ski、skateboard のような道具など、様々な側面があるとしている。

<sup>6</sup> *salience—specifically, the degree to which a component of meaning, due to its type of linguistic representation, emerges into the foreground of attention or, on the contrary, forms part of the semantic background where it attracts little direct attention*(Talmy 2000:128)を引用している。

- b. El hombre volvió a-l sótano corriendo  
 the man went-back to-the cellar running  
 “The man returned to the cellar at a run”
- c. El hombre bajó a-l sótano corriendo  
 the man went-down to-the cellar running  
 “The man descended to the cellar at a run”
- d. El hombre entró a-l sótano corriendo  
 the man went-in to-the cellar running  
 “The man entered to the cellar at a run”

(Talmy 2000:130)

(7)と(8)は、英語とスペイン語の背景化の違いを示している。背景化は、主動詞や動詞の衛星で見られるので、(7)の英語では、*ran* のほか、*back* と *down*、*into* の意味要素が背景化されている。移動の様態が主動詞で背景化されている上、複数の衛星をとることができるので、計4つの意味要素が背景化されている。一方、(8)のスペイン語では、英語のような背景化ができない。スペイン語は、英語とは語彙化のパターンが違い、動詞の衛星の生産性もないので、背景化が主動詞による1つの意味要素しかできない。(8a)のように、移動の様態が主動詞で背景化されるか、(8b)や(8c)、(8d)のように、経路が主動詞で背景化される。複数の経路でも、1つの経路しか背景化ができないので、それぞれの経路が主動詞で背景化されている。残りの意味要素は省かれるか、動形容詞(*gerundive*)の *corriendo* で前景化を強いられている。文脈によって含意される場合もある。

このように、Talmy (1985, 2000)は、際立ちに関しても、S言語とV言語の違いを示している。Slobin (2000, 2004, 2006)も、S言語とV言語の違いによる様態の際立ちを示しているが、さらに、S言語内でも、次のように、様態の際立ちの違いが見られるとしている。

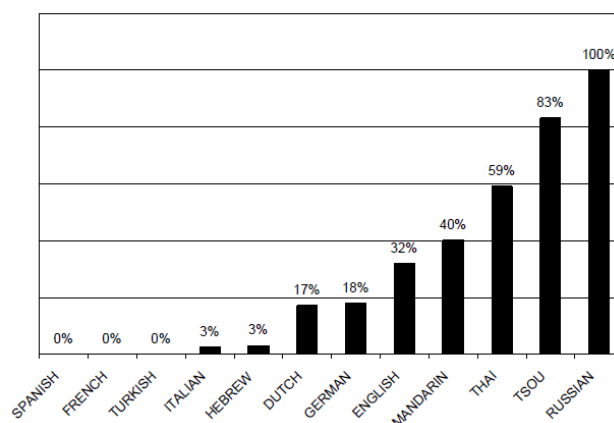


図2 言語別の様態動詞の割合<sup>7</sup>(Slobin 2004)

<sup>7</sup> 図2は、*Frog, where are you?*(Mayer 1969)のある場面を描写した発話の中で様態動詞を使用した割合を言語別に示している。具体的な頻度や調査の詳細はSlobin (2004)より Slobin (2000, 2002)を参照。

図2は、様態動詞を使用した割合を言語別に示している。V言語のスペイン語とフランス語、トルコ語、イタリア語、ヘブライ語は、ほとんど様態動詞がないのに対し、S言語のオランダ語とドイツ語、英語、ロシア語では様態動詞が見られる（中国語とタイ語、ツォウ語は均等枠づけ言語(equipollently-framed language<sup>8</sup>)のため、ここでは詳しく述べない）。このように、S言語とV言語の分類による様態の際立ちの違いはあるが、同じS言語でも、様態の際立ちの違いはある。ロシア語では、様態動詞の割合が100%なのに対し、オランダ語とドイツ語、英語では、それぞれ17%と18%、32%となっている。Slobin (2004, 2006)は、同じS言語でも様態の際立ちの違いがあるのは、個別言語の形態統語的構造が影響しているという。ロシア語では、直示(例えば come)が接頭語として存在するため、必ず動詞を伴わなければならない。また、動詞の衛星(例えば out)も接頭語として存在するので、動詞を伴う必要がある。直示(come)と動詞の衛星(out)だけでは、接頭語同士なので、組み合わせができない。直示の接頭語(*pri-letet(come-fly)*)を選ぶか、動詞の衛星(*vy-letet(out-fly)*)を選ばなければならない。その際、どちらも様態動詞(*letet(fly)*)をとるので、様態動詞を使用する割合は100%になる。一方、オランダ語とドイツ語、英語では、様態(*fly/pop/jump out*)と直示(*come out*)が競争関係にあるため、様態動詞の割合が落ちる。

このように、Slobin (2004, 2006)は、様態の際立ちがS言語とV言語の分類のほかにも、個別言語の形態統語的構造に影響されるとしている。ほかにも、オノマトペのような移動に関連する語彙カテゴリー、境界越え(boundary-crossing)という意味上の制約<sup>9</sup>(結果的には状態変化(change of state)の傾向<sup>10</sup>)、コード化しやすさ(codability<sup>11</sup>)などにも影響されるとしている。様態の際立ちは、S言語とV言語の分類と一致する傾向はあるが、Slobin (2004, 2006)は、S言語とV言語以外の要因もあり、それらの要因ともお互い影響しているとしている。個別言語の様態の際立ち、各言語の語彙化パターンや形態統語的特徴が、アクセスしやすさ(ease of access)や構文の重さ(heaviness of construction)といった心理言語学的要因によって調整されるともしている。

Koga et al. (2008)も、S言語とV言語の様態表現を検証しているが、個別言語の特徴も踏まえて考察している。Koga et al. (2008)は、Talmy (2000)の前景化と背景化、Slobin (1996a,

<sup>8</sup> Slobin (2004, 2006)によると、serial-verb languagesのように、どの動詞が主動詞なのか定まらない言語は、第3の分類として均等枠づけ言語(equipollently-framed language)を提案している。

<sup>9</sup> 境界越え(boundary-crossing)の制約は、境界を越えてしまうと、様態動詞が用いられないという制約で、Aske (1989)の議論を発展させたものである。Aske (1989)は、経路には、①経路の終点や状態変化を表す終結(telic)の経路と、②非終結(atelic)の経路があるが、英語は両方ともできて、スペイン語は後者しかできないという。例えば、英語では、①終結の経路は He ran into the house/off of the bridge. ②非終結の経路は He ran along the road/across the lawn/through the tunnel. と、両方の経路が共起できる。一方、スペイン語では、②非終結の経路の Corrieron hacia adentro de la cueva (They ran towards the inside of the cave)しかできない。このようなスペイン語の制約は、スペイン語を含むV言語全般でも見られ、V言語の様態動詞では、非終結の経路しか共起できないとしている。

<sup>10</sup> Slobin (2004)によると、状態変化(change of state)は、移動事象に関連して言うと、境界を越える(boundary-crossing)事象になる。終結(telic)の経路と様態動詞が共起できないV言語でも、plungeのように、例外的に様態動詞が用いられるのは、瞬時に境界を越える事象が状態変化として捉えられるためとしている。

<sup>11</sup> Slobin (2000)はBrown (1958)、Brown & Lenneberg (1954)を引用してcodabilityという用語を導入している。Slobin (2004)によると、定形動詞(main verb)が非定形動詞(gerund, participle, converb)より、高頻度が低頻度より、単一語が句や節よりコード化しやすい(codable)という。

1997, 2004)の一連の調査から、V 言語を S 言語に訳すと、様態表現が増えることを検証している。ただし、同じ S 言語でも、次のように、様態表現の頻度には、程度の違いが見られるとしている(四角で囲った部分が様態)。

(9) a. 日本語[original]: 服を着て、洗面所に行って...

b. 英語: He'd got dressed, go to the bathroom, ...

c. ドイツ語: Er zog sich an und ging ins Bad,  
he-NOM put.PAST.3SG himself.ACC on and go.PAST.3SG into-the bath.ACC  
'he put himself on and went into the bath'

d. ロシア語: Odevaetsja on, idet v ubornuju umyvatsja.  
dress-PRES.3SG-himself he walk-PRES.3SG in toilet-ACC wash-INF-himself  
'he dress himself, walk in toilet washing himself'

(Koga et al. 2008:21, 一部修正<sup>12</sup>)

(9)では、V 言語の日本語を訳した S 言語の英語とドイツ語、ロシア語を示している。(9a)の日本語では、経路動詞(正確には直示動詞)の「行って」だが、英語では、経路(直示)動詞の *go* と動詞の衛星の *to*、ドイツ語では、経路(直示)動詞の *ging(went)* と動詞の衛星の *ins* で対応している。しかし、ロシア語では、様態動詞の *idet(walk)* で対応し、日本語になかった様態表現が加わっている。このように、同じ S 言語でも、V 言語になかった様態表現が加わる言語もあれば、V 言語と同様に経路(直示)動詞で対応する言語もある。Koga et al. (2008)は、Slobin (2004, 2006)と同様に、S 言語内の違いについて、個別言語の特徴で説明している。ロシア語では、直示や経路が接頭語として存在するので、必ず動詞を伴わなければならない。その際、動詞によるさらなる情報が加わるので、例えば、様態が加わることになるとしている。

また、Koga et al. (2008)は、直示表現についても、個別言語の特徴を踏まえた S 言語内の違いを示している。例えば、次のような例を挙げている。

(10) a. 日本語[original]: そして二人はクスクス笑いながら部屋を出て行った。

b. 英語: The two of them went out tittering.

c. ドイツ語: Kinchernd gingen sie hinaus.  
giggling go.PAST.3PL they.NOM hither-out  
'they went out giggling'

d. ロシア語: Zatem obe vyshli iz kvartiry.  
then both out-walk.PAST-PL from apartment-GEN  
'then both walked out from apartment' (Koga et al. 2008:24, 一部修正)

<sup>12</sup> (9)と(10)のグロスの付け方や略語は引用元に従う。詳しくは Koga et al. (2008)を参照。

(10)では、V 言語の日本語を訳した S 言語の英語とドイツ語、ロシア語を示している。(10 a)の日本語では、経路動詞の「出て」と直示動詞の「行った」だが、英語では、直示動詞の *went* と動詞の衛星の *out* で対応している。ドイツ語でも、英語と同様に直示動詞の *gingen(went)*と動詞の衛星の *hinaus(hither-out)*で対応している。一方、ロシア語では、様態と経路が表現された *vyshli(out-walked)*で対応している。前述したように、ロシア語では、直示が接頭語として存在するので、何らかの動詞を加えないといけない。その結果、動詞による移動の意味要素が新たに加わり、ここでは、様態の情報が加わることになる。それにしても、(10d)のロシア語では、直示の情報が見られない。Koga et al. (2008)は、ロシア語では、直示が接頭語として存在するが、経路も接頭語として存在するので、接頭語のロットをめぐる競争関係があるとしている。その結果、直示の情報が省かれているロシア語では、多くの場合<sup>13</sup>、経路の接頭語が見られるという。

このように、Koga et al. (2008)は、直示表現についても、個別言語の特徴を踏まえた S 言語内の違いを示している。具体的には、①直示動詞の有無、②直示専用のロットの有無によって、言語別に直示の頻度の違いがあるという。まず、ロシア語では、直示が動詞として存在せず、直示専用のロット（接頭語）では直示と経路が競争関係にあるため、直示の頻度が最も低い。次に、英語では、*go* や *come* のような直示動詞は存在するが、動詞のロットをめぐることは、様態と経路、直示が競合関係にあるため、直示の頻度が決して高くはない。最後に、ドイツ語では、*ging* のように、直示動詞は存在するが、動詞のロットをめぐることは競合関係がない。その結果、ドイツ語に続き、英語、ロシア語の順に直示の頻度が高く、同じ S 言語でも頻度の違いがあることがわかる。Talmy (1985, 1991, 2000)は直示を経路から区別しないが、Koga et al. (2008)は、経路を直示経路(*deictic path*)と非直示経路(*non-deictic path*)に区別することによって、同じ V 言語でも、日本語はフランス語とは異なり<sup>14</sup>、V 言語内の多様性も明らかにしている。

最後に、松本 (2003, 2017)は、「動詞」と「(動詞の)衛星(*satellite*)」という用語に問題があるとしている。まず、「動詞」という用語は、Talmy が議論しているのは「文の主要部(*head*)としての動詞」であって、「語彙範疇としての動詞」ではないことを明確にする必要があるという。同じ動詞でも、分詞などもあるので、主要部の動詞に限る必要があるという提案である。また、「衛星」という用語にも問題がある。Talmy は動詞の姉妹関係の位置にある形態素を動詞の衛星として定義しているが、次のように、主動詞以外の位置で経路が表されても、すべて衛星になるとは限らないという。

(11) a. John walked down.

(松本 2003:61, 一部修正)

b. John walked down the river.

(松本 2017:7, 一

<sup>13</sup> 直示と経路の情報が動詞で表現されている日本語の 57 例に対し、ロシア語では、直示の情報が保持されている場合が 11 例、直示の情報が省かれている場合は 38 例が見られた。その 38 例のうち 29 例では、経路の接頭語が見られた。詳しくは Koga et al. (2008)の表 4 を参照。

<sup>14</sup> Koga et al. (2008)と同じ研究報告書内の守田 (2008)が明らかにしている。

部修正)

(11)は、主動詞以外の位置で経路が表されている英語の例を示している。(11a)では、動詞の姉妹関係の位置で経路が表されている。一方、(11b)では、動詞がとる項としての前置詞句の内部で経路が表されている。動詞のとる項の内部は、動詞の姉妹関係の位置ではない。ほかにも、フィンランド語の名詞句<sup>15</sup>も例として取り上げている。このように、松本(2003)は、Talmy が定義する「(動詞の) 衛星」は、主動詞以外の位置で表されている要素の全てを包括するには限界があるとしている。主動詞以外の位置すべてを包括する有意義な概念として、「非主要部(non-head)」を提案している。

したがって、S 言語と V 言語の分類は、「文の主要部としての動詞」によって枠づけられた「主要部枠付け言語(head-framed language)」と「非主要部」によって枠づけられた「非主要部枠付け言語(nonhead-framed language)」に再定義できるとしている。

以上、Talmy の議論を深める研究として、経路以外の要素に関する Slobin (1996b, 1997, 2003, 2004, 2005, 2006)と Koga et al. (2008)、松本 (2003, 2017)を紹介した。松本 (2003, 2017)を受け、本稿では、動詞という用語は「主動詞 (または主要部)」、動詞の衛星は (主要部以外のすべてを包括する意味で) 「非主要部」にしていく。次に、Talmy の類型論における各言語の位置づけに関する研究には、Bowerman and Choi (1991)と高橋 (2015)、守田 (2008, 2011)がある。まず、Bowerman and Choi (1991)は、移動事象における英語と韓国語の語彙化パターンを分析し、言語習得においても、それぞれ言語の語彙化パターンに敏感であることを証明している。英語と韓国語の語彙化パターンは、次のように異なるとしている。

(12) a. The rock slid down the hill

b. John slid the keg into the storeroom. (Bowerman and Choi 1991:87、一部修正)

(13) a. 존이 방에 뛰어들어왔다.

con-i pang-ey ttwi-e-tul-e-o-assta

ジョン-NOM 部屋-to 走る-PART-入る-PART-来る-PS

‘ジョンが部屋に走って入ってきた’ (Bowerman and Choi 1991:88、一部修正)

b. 존이 열쇠를 책상에 던졌다.

con-i yelsoy-lul chayksang-ey tency-essta

ジョン-NOM 鍵-ACC 机-to 投げる-PS

‘ジョンが鍵を机に投げた’ (Bowerman and Choi 1991:93、一部修正)

<sup>15</sup> フィンランド語の名詞句は、次のような例を示している。

a. Elina käveli koti-in.

Elina walked home-III

‘Elina walked home’

a では、名詞句内の in は名詞格のマーキングだが、動詞が項として取る名詞句の主要部名詞に接辞として付加されている。動詞の取る項の内部は、動詞の姉妹関係の位置ではない。

(12)と(13)は、英語と韓国語の語彙化パターンを自律移動(spontaneous motion)と使役移動(caused motion)でそれぞれ示している。(12)の英語では、他のインド・ヨーロッパ語(ロマンス語は除く)や中国語と同様に、動詞の意味の中に移動概念と様態や原因が表現されている。経路は、前置詞や不変化詞のように、動詞から離れて表されている。go や come のように、直示も移動概念と一緒に表現される。(12a)の自律移動では、移動概念と一緒に様態が含まれた *slid* が表されている。(12b)の使役移動でも、*slid* が表されている。このように、英語では、自律移動と使役移動が同じ語彙化パターンで、同じ動詞が表すことができる。一方、韓国語では、異なる語彙化パターンが混在している。まず、韓国語には、スペイン語と同様に、動詞の意味の中に移動概念と経路が表されるパターンがある。(13b)では、移動概念と一緒に原因が含まれた「던졌다(投げた)」が表されていて、経路は含意されている。「던져놓았다(投げた)」のように、経路が含意されない場合は、動詞の意味の中に移動概念と経路が表現される。しかし、(13a)では、経路が移動概念と一緒に表現されていない。(13a)では、移動概念と直示が含まれた「왔다(来た)」が用いられ、経路動詞の「들어(入って)」はそれより先行している。さらに、様態動詞の「뛰어(走って)」は経路動詞より先行している。このように、韓国語では、自律移動と使役移動の語彙化パターンが一致しない。使役移動は、V 言語と同様に、動詞の意味の中に移動概念と経路が表現されているが、自律移動では、経路が移動概念と一緒に表現されていない。Bowerman and Choi (1991)は、Talmy の類型論では、韓国語の自律移動の語彙化パターンを扱っていないとしている。以上の内容を図でまとめると、次のようになる。

English		Korean		
Spontaneous motion				
Verb [Motion+Manner] [Motion+Cause] [Motion+Deixis]	Particle [Path]	Verb [Manner]	Verb [Path]	Verb [Motion+Deixis]
		Caused motion		
Verb [Motion+Manner] [Motion+Cause] [Motion+Deixis]	Particle [Path]	Verb [Manner] [Cause]	Verb [Motion+Path+Ground]	

図3 英語と韓国語の語彙化パターン(Bowerman and Choi 1991:94、一部修正)

図3は、英語と韓国語の語彙化パターンをまとめたものである。英語は、自律移動と使役移動の語彙化パターンが同様に、様態や原因、直示が移動概念と一緒に表現されている。

一方、韓国語では、自律移動と使役移動の語彙化パターンが一致しない。韓国語の自律移動は、経路が移動概念とは別に表される一方、使役移動では、経路が移動概念と一緒に表現されている。このように、韓国語では、自律移動と使役移動の語彙化パターンが一致しないので、Bowerman and Choi (1991)は、それぞれ用いられる動詞も異なるとしている。表でまとめると、次のようになる。

自律移動	使役移動
오르다(OLUTA), 내리다(NAYLITA), 들다(TULTA), 나다(NATA), 지나다(CINATA), 따르다(TTALUTA), 통과하다(THONGHATA), 가로지르다(KALOCILUTA), 들르다(TULLUTA)	올리다(OLLITA), 내리다(NAYLITA), 끼다/빼다 (KKITA/PPAYTA), 넣다/꺼내다(NEHTA/KKENAYTA), 붙이다/떼다(PWUTHITA/TTEYTA), 꽃다(KKOCITA), 담다/꺼내다(TAMTA/KKENAYTA), 신다(SITTA), 붓다/푸다(PWUSTA/PHWUTA), 놓다(NOHTA), 까다(KKATA), 깎다(KKAKTA), 입다(IPTA), 쓰다(SSUTA), 신다(SINTA), 차다(CHATA), 안다(ANTA), 엮다 (EPTA), 지다(CITA), 메다(MEYTA), 이다(ITA), 들다(TULTA), 물다(MWULTA)

表 1 韓国語の自律移動と使役移動における語彙の違い(Bowerman and Choi 1991、一部修正)

表 1 では、韓国語の自律移動と使役移動で見られる経路動詞の語彙の違いを示している。共通するのは「오르다(OLUTA、使役の接尾辞-i が付いて올리다(OLLITA))」と「내리다(NAYLITA)」のみで、そのほかの経路動詞の語彙は異なる。自律移動と使役移動の両方も up や down で一貫している英語とは対照的である。Bowerman and Choi (1991)は、韓国語では、自律移動と使役移動の違いが経路の形態（経路動詞の語彙）だけでなく、その意味にも違いがあるとしている。例えば、結合(joining)や分離(separation)の意味を取り上げている。例えば、「끼다(KKITA)」は、耳栓をしたり、カセットテープをケースに入れるなど、図的事物がたどる経路よりは、図的事物が 3 次元の容器と隙間なく結合しているかどうかを重視している。もし、その容器とは隙間ができるようなゆるい結合なら「넣다(NEHTA)」にした方がいい。また、容器ではなく、表面と接触しているなら「놓다(NOHTA)」や「붙이다(PWUTHITA)」にする必要がある。また、分離する際にも、容器との隙間の有無によって「빼다(PPAYTA)」と「꺼내다(KKENAYTA)」で区別する。表面に付着する程度が強いか弱いかによって「빼다(PPAYTA)または떼다(TTEYTA)」と「집다(CIPTA)」を区別する。このように、韓国語の自律移動と使役移動では、経路動詞の語彙が異なり、自律移動になかった経路の意味が、使役移動では見られる。

Talmy の類型論における韓国語の位置づけに関しては、Im (2000)と Lee (2007)も挙げられる。Im (2000)は、韓国語には独自性が見られるとして、Bowerman and Choi (1991)を、次の



ように捉え直している。

(14) a. 英語 : Youngsoo ran into the room.

b. フランス語 : Youngsoo entra dans la chambre en courant.

Youngsoo-SUBJ enter-PST in the room run-GER

‘Youngsoo entered in the room running’

c. 韓国語 : 영수가 방으로 달려들어갔다.

yengswu-ka pang-ulo tally-e-tul-e-k-assta

ヨンス-NOM 部屋-to 走る-PART-入る-PART-行く-PST

‘ヨンスが部屋に走って入って行った’

(Im 2000:40、一部修正)

(14)は、Bowerman and Choi (1991)の英語と韓国語の例に加え、フランス語の例も示している。Im (2000)は、韓国語では「달려들어갔다(走って入って行った)」という動詞の複合形で移動の様態と経路、直示、移動概念が表現されているとして、英語の経路(into)、フランス語の様態(en courant)とは対照的だとしている。このように、韓国語では、移動の意味情報が動詞の複合形で表現される傾向があるので、英語の単独動詞(ran)やフランス語の単独動詞(entra)とは、根本的に性格が異なるという。また、韓国語では、動詞の複合語内で様々な意味要素の組み合わせができるとしている。(14)の「달려들어갔다(走って入って行った)」は、様態と経路、直示の組み合わせだが、「달려갔다(走って行った)」というように、様態と直示の組み合わせもできたり、「들어갔다(入って行った)」のみにして、経路と直示の組み合わせにすることもできるとしている。Im (2000)は、「가다(行く)」の複合形を調べているが、「가다(行く)」に1つの動詞が先行する場合(V1+가다(行く))は5種類<sup>16</sup>、2つの動詞が先行する場合(V2+V1+가다(行く))は9種類<sup>17</sup>の組み合わせがあり、3つの

<sup>16</sup> Im (2000)は、「가다(行く)」に1つの動詞が先行する場合には、次のような5種類があるという。

- 方向の経路+가다(行く) : 나가다/들어가다(出て行く/入って行く), 나아가다/물러가다(進んで行く/退いて行く), 내려가다/올라가다(下りて行く/上りて行く), 돌아가다(帰る)など
- 背景の経路+가다(行く) : 거쳐가다(経て行く), 건너가다(渡って行く), 넘어가다(超えて行く), 돌아가다(回って行く), 지나가다(過ぎて行く), 둘러가다(回って行く), 비껴가다(避けて行く), 에워가다(迂回して行く), 질러가다(近道して行く)など
- 移動の様態+가다(行く) : 걸어가다(歩いて行く), 굴러가다(転がって行く), 기어가다(這って行く), 날아가다(飛んで行く), 달려가다(走って行く), 뛰어가다(走って行く), 저어가다(漕いで行く), 헤엄쳐가다(泳いで行く)など
- 付帯の様態+가다(行く) : 따라가다(ついて行く), 몰러가다(押しかける), 옮겨가다(移って行く), 잡아가다(捕らえて行く), 쫓아가다(追って行く), 찾아가다(尋ねて行く), 흘러가다(流れて行く)など
- 原因+가다(行く) : 끌러가다(引っ張られて行く), 날려가다(飛ばされて行く), 밀러가다(押されて行く), 쫓겨가다(追われて行く)など

Im (2000)によると、aの「方向の経路」は、内と外、上と下、前と後など、方向に関する経路(主に自動詞)で、bの「背景の経路」は、図的物事が経由する背景に関する経路(主に他動詞)だという。cの「移動の様態」は、手足や腕など、図的物事の移動の手段に関する様態で、dの「付帯の様態」は、移動の多様な様態に関するものだという。

<sup>17</sup> Im (2000)は、「가다(行く)」に2つの動詞が先行する場合には、次のような9種類があるという。

- 背景の経路+方向の経路+가다(行く) : 건너나가다(経て出て行く), 거쳐들어가다(経て入って行く), 건너내려가다(経て下りて行く), 거쳐올라가다(経て上りて行く), 거쳐돌아가다(経て帰る), 건너나가다(渡って出て行く), 건너들어가다(渡って入って行く), 건너내려가다(渡って下りて行く), 건너올라가다(渡って上りて行く), 건너돌아가다(渡って帰る), 돌아나가다(回って出て行く), 돌아내려가다(回って下りて行く), 돌아들어가다(回って入って行く), 돌아올라가다(回って上りて行く)など

- b. 移動の様態+方向の経路+가다(行く) : 걸어나가다(歩いて出て行く), 걸어내려가다(歩いて下りて行く), 걸어올아가다(歩いて帰る), 걸어들어가다(歩いて入って行く), 걸어올아가다(歩いて上って行く), 굴러나가다(転がって出て行く), 굴러내려가다(転がって下りて行く), 굴러돌아가다(転がって帰る), 굴러들어가다(転がって入って行く), 굴러올아가다(転がって上って行く), 달려나가다(走って出て行く), 달려내려가다(走って下りて行く), 달려돌아가다(走って帰る), 달려들어가다(走って入って行く), 달려올아가다(走って上って行く), 뛰어돌아가다(走って帰る), 뛰어들어가다(走って入って行く), 뛰어올아가다(走って上って行く), 헤엄쳐나가다(泳いで出て行く), 헤엄쳐내려가다(泳いで下りて行く), 헤엄쳐돌아가다(泳いで帰る), 헤엄쳐들어가다(泳いで入って行く), 헤엄쳐올아가다(泳いで上って行く)など
- c. 付帯の様態+方向の経路+가다(行く) : 따라나가다(ついて出て行く), 따라들어가다(ついて入って行く), 따라내려가다(ついて下りて行く), 따라올아가다(ついて上って行く), 따라돌아가다(ついて帰る), 물러나가다(押しかけて出て行く), 물러들어가다(押しかけて入って行く), 물러내려가다(押しかけて下りて行く), 물러올아가다(押しかけて上って行く), 물러돌아가다(押しかけて帰る), 잡아나가다(捕らえて出て行く), 잡아들어가다(捕らえて入って行く), 잡아내려가다(捕らえて下りて行く), 잡아올아가다(捕らえて上って行く), 잡아돌아가다(捕らえて帰る), 찾아나가다(尋ねて出て行く), 찾아들어가다(尋ねて入って行く), 찾아내려가다(尋ねて下りて行く), 찾아올아가다(尋ねて上って行く), 찾아돌아가다(尋ねて帰る), 쫓아가다(追って出て行く), 쫓아들어가다(追って入って行く), 쫓아내려가다(追って下りて行く), 쫓아올아가다(追って上って行く), 쫓아돌아가다(追って帰る), 흘러나가다(流れて出て行く), 흘러들어가다(流れて入って行く), 흘러내려가다(流れて下りて行く), 흘러올아가다(流れて上って行く), 흘러돌아가다(行く)など
- d. 原因+方向の経路+가다(行く) : 날려나가다(飛ばされて出て行く), 날려들어가다(飛ばされて入って行く), 날려내려가다(飛ばされて下りて行く), 날려올아가다(飛ばされて上って行く), 날려돌아가다(飛ばされて帰る), 밀려나가다(押されて出て行く), 밀려들어가다(押されて入って行く), 밀려내려가다(押されて下りて行く), 밀려올아가다(押されて上って行く), 밀려돌아가다(押されて帰る), 쫓겨나가다(追われて出て行く), 쫓겨들어가다(追われて入って行く), 쫓겨내려가다(追われて下りて行く), 쫓겨올아가다(追われて上って行く), 쫓겨돌아가다(追われて帰る)など
- e. 移動の様態+背景の経路+가다(行く) : 걸어건너가다(歩いて渡って行く), 걸어넘어가다(歩いて超えて行く), 걸어돌아가다(歩いて回って行く), 걸이지나가다(歩いて過ぎて行く), 굴러건너가다(転がって渡って行く), 굴러넘어가다(転がって超えて行く), 굴러돌아가다(転がって回って行く), 굴러지나가다(転がって過ぎて行く), 기어건너가다(這って渡って行く), 기어넘어가다(這って超えて行く), 기어돌아가다(這って回って行く), 기어지나가다(這って過ぎて行く), 달려건너가다(走って渡って行く), 달려넘어가다(走って超えて行く), 달려돌아가다(走って回って行く), 달려지나가다(走って過ぎて行く), 뛰어건너가다(走って渡って行く), 뛰어넘어가다(走って超えて行く), 뛰어들어가다(走って回って行く), 뛰이지나가다(走って過ぎて行く), 헤엄쳐건너가다(泳いで渡って行く), 헤엄쳐넘어가다(泳いで超えて行く), 헤엄쳐돌아가다(泳いで回って行く), 헤엄쳐지나가다(泳いで過ぎて行く)など
- f. 付帯の様態+背景の経路+가다(行く) : 따라건너가다(ついて渡って行く), 따라넘어가다(ついて超えて行く), 따라돌아가다(ついて回って行く), 따라지나가다(ついて過ぎて行く), 물러건너가다(押しかけて渡って行く), 물러넘어가다(押しかけて超えて行く), 물러돌아가다(押しかけて回って行く), 물러지나가다(押しかけて過ぎて行く), 잡아건너가다(捕らえて渡って行く), 잡아넘어가다(捕らえて超えて行く), 잡아돌아가다(捕らえて回って行く), 잡아지나가다(捕らえて過ぎて行く), 찾아건너가다(尋ねて渡って行く), 찾아넘어가다(尋ねて超えて行く), 찾아돌아가다(尋ねて回って行く), 찾아지나가다(尋ねて過ぎて行く), 쫓아건너가다(追って渡って行く), 쫓아넘어가다(追って超えて行く), 쫓아돌아가다(追って回って行く), 쫓아지나가다(追って過ぎて行く), 흘러넘어가다(流れて超えて行く), 흘러돌아가다(流れて回って行く), 흘러지나가다(流れて過ぎて行く)など
- g. 原因+背景の経路+가다(行く) : 날려건너가다(飛ばされて渡って行く), 날려넘어가다(飛ばされて超えて行く), 날려돌아가다(飛ばされて回って行く), 날리지나가다(飛ばされて過ぎて行く), 밀려건너가다(押されて渡って行く), 밀려넘어가다(押されて超えて行く), 밀려돌아가다(押されて回って行く), 밀리지나가다(押されて過ぎて行く), 쫓겨건너가다(追われて渡って行く), 쫓겨넘어가다(追われて過ぎて行く), 쫓겨돌아가다(追われて回って行く), 쫓겨지나가다(追われて過ぎて行く)など
- h. 付帯の様態+移動の様態+가다(行く) : 따라걸어가다(ついて歩いて行く), 따라굴러가다(ついて転가って行く), 따라기어가다(ついて這って行く), 따라달려가다(ついて走って行く), 따라뛰어가다(ついて走って行く), 따라날아가다(ついて飛んで行く), 따라헤엄쳐가다(ついて泳いで行く), 쫓아걸어가다(追って歩いて行く), 쫓아굴러가다(追って転가って行く), 쫓아기어가다(追って這って行く), 쫓아달려가다(追って走って行く), 쫓아뛰어가다(追って走って行く), 쫓아날아가다(追って飛んで行く), 쫓아헤엄쳐가다(追って泳いで行く), 물러걸어가다(押しかけて歩いて行く), 물러굴러가다(押しかけて転가って行く), 물러기어가다(押しかけて這って行く), 물러달려가다(押しかけて走って行く), 물러뛰어가다(押しかけて走って行く), 물러날아가다(押しかけて飛んで行く), 물러헤엄쳐가다(押しかけて泳いで行く)など
- i. 原因+移動の様態+가다(行く) : 날려굴러가다(飛ばされて転가って行く), 밀려걸어가다(押されて歩いて行く), 밀리기어가다(押されて這って行く), 밀려달려가다(押されて走って行く), 밀려뛰어가다(押されて走って行く), 밀려날아가다(押されて飛んで行く), 밀려헤엄쳐가다(押されて泳いで行く), 쫓겨걸어가다(追われて歩いて行く),

動詞が先行する場合(V3+V2+V1+가다(行く))も存在する<sup>18</sup>という。このことから、韓国語は、S 言語と V 言語のどちらでもない第三の分類として見なすべきだとしている。

しかし、Lee (2007)は、Im (2000)が語彙の形態だけで判断しているとして、統語的特徴も考慮して韓国語の位置づけをすべきだとしている。Lee (2007)によると、韓国語の様態動詞と経路動詞では、次のように統語的特徴の違いが見られるという。

- (15) a. 학교에 뛰어갔다.  
 hakkyo-ey ttwi-e-ka-ssta  
 学校-to 走る-PART-行く-PST  
 ‘学校に走って行った’
- \*b. 학교에 뛰었다.  
 hakkyo-ey ttwi-essta  
 学校-to 走る-PST  
 ‘学校に走った’

- (16) a. 산에 올라갔다.  
 san-ey oll-a-ka-ssta  
 山-to 登る-PART-行く-PST  
 ‘山に登って行った’

---

쫓겨달려가다(追われて転がって行く), 쫓겨기어가다(追われて這って行く), 쫓겨달려가다(追われて走って行く), 쫓겨뛰어가다(追われて走って行く), 쫓겨날아가다(追われて飛んで行く), 쫓겨헤엄쳐가다(追われて泳いで行く) など

<sup>18</sup> Im (2000)は、「가다(行く)」に3つの動詞が先行する場合は、音節の長さや項構造、意味情報の配列などの制約があり、その数はかなり限られているとしている。例示したものは、次のように、全て質問に対する応答となっている。

- a. A: 성을 어떻게 넘어들어갔느냐?  
 seng-ul ettehkey nem-e-tul-e-ka-ss-nunya?  
 城-ACC どう 越える-PART-入る-PART-行く-PST-Q  
 ‘城をどう越えて入って行ったかい’
- B: 기어넘어들어갔습니다.  
 ki-e-nem-e-tul-e-ka-ssupnita.  
 這う-PART-越える-PART-入る-PART-行く-PST  
 ‘這って越えて入って行きました’
- b. A: 나무 위로 왜 기어올라갔느냐?  
 namu wi-lo way kie-olla-kassnunya?  
 木 上-to なぜ 這う-PART-上る-PART-行く-PST-Q  
 ‘木の上をなぜ這い上って行ったかい’
- B: 다람쥐를 따라기어올라갔습니다.  
 talamcwi-lul ttala-kie-olla-kassupnita.  
 리스-ACC つく-PART-這う-PART-上る-PART-行く-PST  
 ‘リスについて這い上って行きました’
- c. A: 동굴 속으로 왜 뛰어들어갔느냐?  
 tongkwul sok-ulo way ttwie-tule-kassnunya?  
 洞窟 中-to なぜ 飛ぶ-PART-入る-PART-行く-PST-Q  
 ‘洞窟の中へなぜ飛んで入って行ったかい’
- B: 토끼를 찾아뛰어들어갔습니다.  
 thokki-lul chaca-ttwie-tule-kassupnita.  
 ウサギ-ACC 探し-PART-飛ぶ-PART-入る-PART-行く-PST  
 ‘ウサギを探して飛んで入って行きました’

b. 산에 올랐다.  
 san-ey oll-assta  
 山-to 登る-PST  
 ‘山に登った’

#c. 산에 갔다.  
 san-ey kassta  
 山-to 行く-PST  
 ‘山に行った’

(Lee 2007:179、一部修正)

(15)と(16)は、韓国語の様態動詞と経路動詞の違いを示している。(15)の様態動詞「뛰다(走る)」は、場所の移動を伴う事象を表すためには、(15a)のように、「가다(行く)」などの移動動詞と一緒に表さないといけない。「가다(行く)」がないと非文になる(\*15b)。このことから、場所格の「학교에(学校に)」をとるのは「가다(行く)」で、様態動詞の「뛰다(走る)」ではないという。一方、(16)の経路動詞「오르다(登る)」は、「가다(行く)」のなどの移動動詞がなくても、非文にはならない(16b)。(16)の「오르다(登る)」も、「가다(行く)」と一緒に表現できるが、場所格の「산에(山に)」をとるのは「오르다(登る)」で、「가다(行く)」ではないという。

もちろん、「가다(行く)」だけでも、非文にはならない(#16c)。しかし、(16a)や(16b)とは、同じ移動事象を表しているとは言えない。(16a)や(16b)は山への経路が見られるが、(16c)は経路が見られない。(16c)の「가다(行く)」は、場所の移動についての移動事象の本質ではなく、話者の心理的な距離感を示している。このことから、(16a)で場所格の「산에(山に)」をとるのは、「가다(行く)」に先行する「오르다(登る)」であることがわかる。

このように、韓国語の様態動詞と経路動詞とでは、統語上の位置が異なる。様態動詞は動詞の姉妹位置で、経路動詞は動詞の位置にある。経路動詞が動詞なので、韓国語では V 言語の特徴が見られると Lee (2007)は結論付けている。

次に、タイ語の位置づけに関しては、高橋 (2015)が挙げられる。タイ語は、これまで Talmy の類型論において S 言語に分類されたり、Slobin (2004)が提案した「均等枠づけ言語 (equipollently-framed language)」に分類されたりしてきた。しかし、高橋 (2015)は、タイ語では、次のように、1つの節の中で6つの動詞が見られることもあるという。

(17) tè? lûuk bəɔn klîŋ yòɔn ʔòk paj yùt nâa tûu  
 蹴る 球 転がる 折り返す 出る 行く 止まる の前 棚

‘球を蹴って(球が)転がって折り返して出て行って棚の前で止まる’ (高橋 2015:66)

(17)は、単一の移動事象を表す1つの節の中で6つの動詞が見られるタイ語の例を示している。tè? (蹴る) と klîŋ (転がる)、yòøn (折り返す)、ʔòøk (出る)、paj (行く)、yùt (止まる) の6種類の異なる動詞が見られるが、高橋 (2015)は、タイ語の移動事情表現の基本構文スキーマに6つの動詞スロットがあるとしている。6つの動詞スロットの中には、必須とされるスロットはなく、同一スロットを奪い合う競合関係もないので、使役動詞の tè? (蹴る) と様態動詞の klîŋ (転がる) が共起しているという。また、動詞の一部は、1つの節の中に複数生起可能<sup>19</sup>なので、様々な動詞の組み合わせができたり、自由に伸び縮みするという。

このように、タイ語では、1つの節の中で6種類の異なる動詞が用いられることがある。高橋 (2015)は、中国語の移動事象表現とも対照することで、タイ語では移動事象表現の統語スロットが多く、節構成素の間の統合度が低い一方、中国語では統語スロットが少なく、節構成素の間の統合度が高いことを明らかにしている。このような両言語の違いは、「経路が主動詞の語幹によって表されるか否か」を基準とする Talmy の類型論では捉えられないという。Slobin (2004)が提案した均等枠づけ言語(equipollently-framed language)の分類も、S 言語と V 言語のどちらにも当てはまらない新たな1タイプを加えただけなので、本質的に同一基準の分類とし、タイ語と中国語の違いは捉えられないというのである。高橋 (2015)は、両言語の最も大きな違いである節構成素の間の統合度、つまり「節統合度」は、Croft et al. (2010)の類型論で捉えられるとしている。Croft et al. (2010)の類型論では、「二重枠づけ>付随要素枠づけ>主動詞枠づけ>複合>連続>並列」の順に節統合度が高いとされているが、タイ語の移動事象は「連続」タイプ、中国語の移動事象は「付随要素枠づけ」タイプに分類でき、節統合度がより低いタイプと、より高いタイプに位置づけられるという。つまり、節統合度の連続性に注目している Croft et al. (2010)の類型論において、タイ語は単一の節に複数の動詞述語が含まれる「連続」タイプに、中国語は経路が付随要素で表され得る「付随要素枠づけ」タイプに分類されることで、両言語の違いが捉えられるとしている。

中国語の位置づけに関しては、Ohori (2000)が挙げられる。Ohori (2000)は、する(Do)型/なる(Become)型言語と S 言語/V 言語の分類から、結果志向(goal-oriented)の程度を捉えているが、中国語では、次のように言語内で結果志向の違いが見られるとしている。

<sup>19</sup> 高橋 (2015)は、タイ語の移動事象表現の基本構文スキーマにおける使役動詞と様態動詞、瞬間相(起動相/前終結相)経路動詞、達成相経路動詞(ただし、khâw (入る)とʔòøk (出る)、khún (上る)、loŋ (下る)は共起制限がある)は、1つの節の中に複数生起可能だとして、次のような例を取り上げている。

a. tè? lúuk bəøn klîŋ phàan pratuu ʔòøk paj (高橋 2015:66)

蹴る 球 転がる 通る 門 出る 行く  
‘球を蹴って(球が)転がって門を通過して出て行く’

a では、2つの達成相経路動詞 phàan (通る)とʔòøk (出る)が使われている。

- (18) a. 我 给 他 打 电 话 ， 但 是 我 没 有 找 到 他  
 wǒ gěi tā dǎ diànhuà dànshi wǒ méi yǒu zhǎo dào tā  
 1SG give 3SG call telephone but 1sg NEG BE reach GOAL 3sg  
 ‘I telephoned her, but I couldn’t reach her’
- b. 他 于 是 就 顺 道 载 他 一 段 路  
 tā yúshìjiù shùn dào zài tā yī duàn lù  
 3sg so then along way carry 3sg one block  
 到 了 一 个 地 方 之 后 就 让 他 下 车  
 dào le yī-ge dìfāng zuǐ hòu jiù ràng tā xià-chē  
 reach PERF one-CLF place PT after then CAUS 3sg get.off-car  
 ‘he then took him for a block along his way, and after reaching a certain place,  
 he let him get off’ (Ohori 2000:38、一部修正<sup>20</sup>)

(18)では、中国語内の結果志向の違いを示している。(18a)では、動詞の「打电话（電話する）」が後続する「但是我没有找到他（しかし私は彼女に通じなかった）」によって結果を否定できる。このことから、動詞の「打电话（電話する）」は結果が語彙の意味には含まれていないことがわかるという。一方、(18b)は談話の一部だが、「到」が結果を明示している。結果志向が高くなかった(18a)とは違い、(18b)では結果志向が高いのである。このように、中国語では語彙レベルと談話レベルで結果志向の違いが見られる。このような言語内の結果志向の違いは、語彙レベルでも談話レベルでも結果志向の程度が一致している英語とは対照的であるという<sup>21</sup>。

Ohori (2000)は、中国語内の結果志向の違いについて、語彙レベルの結果志向が高くなくても、談話レベルでは、中国語が S 言語だという類型が中国語の結果志向を高くしていると見ている。中国語には (S 言語として特徴づけられる) 動詞の衛星(satellite)があるが、この動詞の衛星が結果を表現するための統語的資源(syntactic resource)になるという。その意味で、中国語の動詞の衛星は、英語の動詞の衛星とは違い、結果を表現するための無標のストラテジーだとしている。

最後に、フランス語の位置づけに関しては、守田 (2008, 2011)が挙げられる。守田 (2008)は、日本語とフランス語は同じ V 言語に分類されているが、直示経路と様態の表現

<sup>20</sup> (18)のグロスの付け方や略語は引用元に従う。詳しくは Ohori (2000)を参照。

<sup>21</sup> Ohori (2000)は、英語では、語彙レベルと談話レベルの両方とも、次のように、結果志向が高いとしている。

??a. I burned it, but it didn’t burn.

b. ...and then they run into a sign where the mailman has to go west and then Pingu needs to go east to the aunt’s house so the mailman drops Pingu off and says “oh be careful”.

また、日本語では、語彙レベルと談話レベルの両方とも、次のように、結果志向が高くないとしている。

c. 燃やしたけど、燃えなかった。

d. えっと、道路標識が出ている所で、えーその配達人とピングとは別々の道に行くことになったので、そこで、配達人の人のスノーモービルから降りて、えー別れて、えー別々の道に行くことになりました。

可能性では、両言語の違いが見られるとしている。まず、直示経路は、日本語ではよく見られるが、フランス語では、あまり見られないという。

- (19) a. おじさんは梯子からおりて…  
b. えー作業を終えて下におりて来て… (守田・石橋 2017:289、一部修正<sup>22</sup>)  
c. Il descend de l'échelle.  
He descend.PRES of the-ladder  
'彼は梯子からおります' (守田・石橋 2017:290、一部修正)

- (20) a. 教室のドアを開いて緑が入ってきた。  
b. la porte de la salle s'ouvrit et Midori entra  
the door of the class REFL-open.PS and Midori enter.PS  
\*c. la porte de la salle s'ouvrit et Midori {entra en venant / vînt en entrant}  
the door of the class REFL-open.PS and Midori enter.PS come.GER come.PS enter.GER  
(守田 2008:57、一部修正<sup>23</sup>)

(19)と(20)は、話し言葉と書き言葉における日本語とフランス語の直示経路の違いを示している。(19)の話し言葉では、日本語の話者が経路動詞の「おりて」または経路動詞の「おりて」と直示動詞の「きて」の組み合わせを用いているのに対し、フランス語の話者は、経路動詞の *descend(descend)* を用いている。直示経路は用いられていない。一方、(20)の書き言葉では、日本語では、経路動詞の「入って」と直示動詞の「きた」の組み合わせが一つの事象を表しているのに対し、フランス語では *entra(entered)* のみで表している。直示経路の情報は見られない。守田・石橋 (2017)は、フランス語でも *aller(go)* や *venir(come)* といった直示動詞はあるが、その頻度が日本語よりかなり低いのは、動詞の連続は目的（～しに行く）に限られるという統語的制約<sup>24</sup>と、フランス語の直示動詞は終結的な事象に用いられるため、物語の展開という性質上、経路と直示経路を同時に使うことができないという意味的制約をあるとしている。

また、両言語では、次のような様態表現の違いが見られるという。

- (21) a. 我々は殆んど毎週会って、そんな具合に歩き回っていた。  
b. Nous nous rencontrions presque toutes les semaines, pour déambuler ainsi.  
we REFL meet.IMP nearly all the weeks for strollingwander.INF in.this.way  
(守田 2008:61、一部修正)

(21)は、日本語とフランス語の様態表現の違いを示している。(21)は、境界を超える移動事

<sup>22</sup> (19)のグロスの付け方や略語は引用元に従う。詳しくは守田・石橋 (2017)を参照。

<sup>23</sup> (20)と(21)、(22)のグロスの付け方や略語は引用元に従う。詳しくは守田 (2008)を参照。

<sup>24</sup> フランス語の「*aller(go)*+不定詞」という動詞の連続の詳細とその用例については守田・石橋 (2017)を参照。

象(boundary-crossing)ではないが、日本語では経路動詞の「回っていた」が主動詞に、フランス語では様態動詞の *déambuler*(strolling)が主動詞になっている。守田 (2008)は、日本語とフランス語の様態表現の頻度が低かったので、両言語とも V 言語であることを確認したが、(21)のような経路の種類（境界の横断の有無）によっては、両言語の違いが見られるとしている。さらに、フランス語では、次のように S 言語型の構造になることもあるという。

(22) Je [...] sautai littéralement dans le premier «Hikari»

I jump.PS literary in the first

‘文字通り、いちばん早い「ひかり」に飛び乗り、’ (守田 2008:62、一部修正)

(22)は、S 言語型の構造になっているフランス語の例を示している。動詞では、様態である *sautai*(jumped)が表され、経路は非主要部の *dans*(in)で表されている。守田 (2008)によると、このような構造の頻度は高くないが、従来分類されている V 言語には当てはまらないものとしている。守田 (2011)は、このような S 言語型の構造を許容するのは特定の動詞<sup>25</sup>に限られているとして、その特徴を明らかにしている。このように、フランス語では、様態が主動詞だと、S 言語と同じ構造をとる場合がある。一方、日本語では、様態を主動詞にしても、S 言語のような構造は起こらないという。つまり、フランス語も日本語も様態を主動詞にしたときは、必ずしもその類型が一貫するとは言えない。

以上、Talmy の議論を深める研究として、各言語の位置づけに関する Bowerman and Choi (1991)と高橋 (2015)、守田 (2008, 2011)などを紹介した。いずれの言語も、Talmy の二文法的な分類には収まらず、さらなる類型論の多様化に繋がっている。V 言語として分類されている日本語や韓国語でも、経路以外の要素に注目したり、個別言語の特徴を考察することで、新しい知見の発見の可能性が期待できる。

---

<sup>25</sup> 守田 (2011)は、S 言語型の構造を許容する動詞としては、コーパスの調査では、*glisser*, *foncer*, *marcher*, *courir*, *sauter* が見られ、Frantext([www.atilf.org](http://www.atilf.org)、ただし作業コーパスは 1900 年以降のテキストに限定)を使った分析では、*glisser*, *sauter*, *rouler*, *courir*, *marcher*, *voler*, *ramper*, *se précipiter* を挙げている。これらの動詞は、動詞の記述性 (descriptivity)が低く、統語的自由度が高いため、主動詞に限らず S 言語型の構造ともととしている。



## 2.3 問題提起

Talmy の類型論によると、日本語と韓国語は動詞の意味の中に移動概念(Motion)と経路(Path)が表現される言語として分類されている((5b)を参照)。実際に、次のような日本語と韓国語を見ると、両言語とも経路の情報が動詞で表現されていることが確認できる。

(23) a. 彼は部屋を走り出た。

b. 그는 방을 뛰어나왔다.

ku-nun pang-ul ttwichi-e-na-o-assta

彼-TOP 部屋-ACC 走る-PART-出(る)-来(る)-PS

‘彼は部屋を走り出てきた’

(23)は、日本語と韓国語の移動事象を示している。日本語では、経路が主動詞の「出た」で表され、韓国語でも、経路が主動詞の「나왔다<sup>26</sup>(出てきた)」で表されている。両言語とも、経路が主動詞で表されているので、V 言語であることが確認できる。しかし、両言語では、移動の様態も同時に見られる。日本語では、動詞の連用形の「走り」、韓国語では、主動詞との間に連結語尾の「-어/아(-e/a)」が入った「뛰쳐<sup>27</sup>(走り)」で表されている。このような動詞の連用形や連結語尾の「-어/아(-e/a)」が入った動詞は、次のように、省かれると非文になる場合もある。

(24) a. 警察が現場に\*(駆け)つけた。

b. 그는 물 속으로 \*(뛰어)들었다.

ku-nun mwul sok-ulo\*(ttwi-e-)tul-essta

彼-TOP 水 中-to \*(とぶ-PART-)入(る)-PS

‘彼は水の中へ\*(とんで)入った’

(24)は、移動の様態を表す動詞の連用形や連結語尾の入った動詞が省かれる場合を示している。日本語では、移動の様態が動詞の連用形「駆け」で表されているが、省くと非文になる(\*警察が現場につけた)。一方、韓国語では、移動の様態が「뛰어(とんで)」で表され、主動詞との間に連結語尾の「-어/아(-e/a)」が入っている。しかし、「뛰어(とんで)」を省くと非文になる(\*그는 물 속으로 들었다)。このように、移動の様態を表す動詞の連用形や連結語尾の「-어/아(-e/a)」がつく動詞はそれが省かれると非文になる。これは、両言語の複合動詞の前項動詞が後項動詞と形式上1語になるので、その一部を省くことができないことによるものだろう。動詞の連用形や連結語尾の「-어/아(-e/a)」がつく動詞は省

<sup>26</sup> 本稿では、直示経路と非直示経路を区別していない。いずれも経路として判定している。

<sup>27</sup> 韓国語の「뛰어나오다」の「뛰쳐(뛰치다)」は、「뛰다(走る)」の間違った表記が残っている語彙だという韓国国立語院の答弁を受け、「뛰다(走る)」として見なすことにする。詳しくは [http://www.korean.go.kr/front/onlineQna/onlineQnaView.do?mn\\_id=61&qna\\_seq=55366&pageIndex=2](http://www.korean.go.kr/front/onlineQna/onlineQnaView.do?mn_id=61&qna_seq=55366&pageIndex=2) を参照。

かれにくいので、動詞の連用形や連結語尾の「-어/아(-e/a)」がつく動詞で移動の様態が表されると、その様態は省かれにくく、両言語の非主要部の様態は多いことが予想される。

日本語の動詞の連用形については、Talmy (2000, 高尾[訳])が指摘した動詞のテ形が参考になる。Talmy (2000, 高尾[訳])は、V 言語の様態表現では、主動詞に統合される程度によって変異が見られるとしている。例えば、次のようなスペイン語を取り上げている。

(25) a. La botella salió de la cueva flotando.

‘The bottle exited from the cave, floating’

b. La botella salió flotando de la cueva.

‘The bottle exited floating from the cave’

(Talmy 2000:361, 高尾[訳])

(25)は、主動詞に統合される程度が異なるスペイン語の動形容詞(*gerundive*)を示している。(25a)では、移動の様態を表す *flotando*(floating)が文末に位置し、省いても容認度は落ちない<sup>28</sup>。このような動形容詞は、主動詞への統合度が低く、統語上副詞的従属節と考えられるという。一方、(25b)では、*flotando*(floating)が主動詞の直後に位置し、主動詞と直接組み合わされている「動形容詞形動詞」としている。ただし、主動詞への統合度は、途中までしか進んでいないという。なぜなら、動形容詞という文法形式は別の節から生じたことを示しているからだという。このように、Talmy (2000,)は、スペイン語の動形容詞を例にして主動詞への統合度を説明している。さらに、最も主動詞への統合度が進んでいるのは、ネズパース語(*Nez Perce*)の接頭辞だという。この接頭辞は、主動詞と単一形態素になるので<sup>29</sup>、「紛れなく」Talmy が定義する動詞の衛星だとしている。

日本語のテ形に関しては、Talmy (2000)は、(25a)のように、主動詞への統合度が低いとしている。日本語の連用形は取り上げていないが、連用形の V1 と V2 の結びつきがテ形より強いこと(後述する Koga et al. (2008)と古賀 (2017)を参照)を考えると、連用形はテ形より主動詞への統合度が高いと言える。

また、日本語の連用形については、Koga et al. (2008)と古賀 (2017)、守田 (2008)、守田・石橋 (2017)、Slobin (2005, 2006)も指摘している。まず、Koga et al. (2008)と古賀 (2017)によると、主動詞が経路で、様態の情報も表現されている用例では、動詞の連用形(22) > 動詞のテ形(12) > ナガラ節(4)の順に見られる。これは、節同士の結びつきの強さによる様態の情報の背景化が反映された結果だという。Koga et al. (2008)と古賀 (2017)は、節同士の結びつきの強さを①分離可能性<sup>30</sup>、②統語的結合性(*syntactic integrity*)<sup>31</sup>、③概念的統

<sup>28</sup> スペイン語の文末動名詞を省いても容認度が落ちないのは、次のような Talmy (2000:49)が参考になる。

a. La botella entró de la cueva (flotando)  
the bottle MOVED-in to the cave (floating)  
‘The bottle floated into the cave’

<sup>29</sup> 様態を表すネズパース語の接頭辞の詳細は Talmy (2000:114)を参照。

<sup>30</sup> 分離可能性は、V1 と V2 の間に他の要素が挿入できるかどうかで判断するという。次のように、動詞の連用形は分離可能性がゼロだが、動詞のテ形とナガラ節は分離可能性が高い。

\*a. それから直ちに跳びでもかかって…

(古賀 2017:331)

合性(conceptual unity)<sup>32</sup>で判断している。その結果、節同士の結びつきは、動詞の連用形>テ形>ナガラ節の順に強いという。節同士の結びつきが強いほど、様態の情報の背景化が進むという Koga et al. (2006)を受け、Koga et al. (2008)と古賀 (2017)は、節同士の結びつきが最も強い動詞の連用形は、V1の背景化が進んでいるとしている。一方、節同士の結びつきが最も弱いナガラ節は、V1が前景化されるという。このような節同士の結びつきの強さと情報の背景化の相関は頻度に反映され、節同士の結びつきが最も強い動詞の連用形で様態が表現されている例が一番多いのに対し、節同士の結びつきが弱いナガラ節で様態が表現されている例は一番少ないとしている。

古賀 (2017)は、Talmyの枠組みでは、V言語における動詞の従属形で表示された移動の様態が一様に前景化されているとしている。動詞の連用形とテ形、ナガラ節のように、移動の様態が異なる種類の動詞の従属形で表現される可能性が模索されていないと指摘している。

次に、守田 (2008)と守田・石橋 (2017)は、フランス語には、日本語の動詞の連用形やテ形のような、主動詞との結びつきが強い連結がないので、日本語とフランス語が同じV言語でも、フランス語の様態表現の頻度が日本語より低いとしている。守田 (2008)は、様態を表す主動詞だけを比較すると、日本語とフランス語の頻度に大差はないが、動詞の従属形まで含めると、日本語の頻度が高くなるという<sup>33</sup>。フランス語にも、動詞の従属形はジェロンディフ(gerundive)があるが、ジェロンディフは、日本語のナガラ節に相当する表現で、位置の自由度が高いとしている<sup>34</sup>。節としての独立性が高いので、位置を選択するための認知処理のコストがかかり、その結果、頻度が低いという。一方、日本語には、ナガラ節に加えてさらに動詞の連用形とテ形が存在し、これらは構成要素の間の挿入ができず、語順の変更もできないことを考えると、位置が固定されているので使いやすく、コストが

b. 中に身をかがめてでも入りたかった。

c. 教室を、足を引きずりながらでも出ていきたい。 (古賀 2017:332)

<sup>31</sup> 統語的結合性は、文中の異なる位置に生起が可能かどうかで判断するという。動詞の連用形は(注30で述べたように)分離可能性がゼロなので、統語的結合性もない。一方、動詞のテ形とナガラ節は、次のように、文中の異なる位置を占めることができる。

(1) a. 足を引きずりながら教室を出ていった。

b. 教室を足を引きずりながら出ていった。 (Koga et al. 2008:35、一部修正)

(2) a. 身をかがめて中に入りたかった。

b. 中に身をかがめて入りたかった。 (Koga et al. 2008:35、一部修正)

<sup>32</sup> 動詞のテ形とナガラ節では、ナガラ節の概念的結合性が低く、移動と同時に起きる様態しか統合できない。

(1) 彼は歌を歌いながら帰ってきた。 (Koga et al. 2008:35、一部修正)

一方、動詞のテ形は、移動と同時に起きない様態と結合してもいい。V1はV2の移動を可能にする本質的な様態や原因を表す場合には、次のように、ナガラ節ではなく、動詞のテ形が選択されねばならないという。

(2)??a. 犬が走りながらきた。

b. 犬が走ってきた。 (古賀 2017:332)

<sup>33</sup> 調査の詳細は守田 (2008)の表7を参照。

<sup>34</sup> フランス語のジェロンディフと日本語のナガラ節は、次のように、位置の自由度が高いとしている。

a. 蛭はボトルのまわりをよろめきながら一周したり、

b. 蛭はよろめきながらボトルのまわりを一周したり、

c. よろめきながら蛭はボトルのまわりを一周したり、

d. Elle fit le tour d'un boulon en chancelant et en trebuchant  
she do.PS the tour of-a bolt stagger.GER and totter.GER

e. En chancelant et en trebuchant, elle fit le tour d'un boulon (守田 2008:63)

低いとしている。その結果、動詞の連用形とテ形の頻度は高いという。

守田・石橋 (2017)は、話し言葉と書き言葉でも、主動詞以外の様態表現では、日本語は動詞の連用形とテ形による様態表現が多いのに対し、フランス語では、中心的な表現手段を特定することが難しいとしている<sup>35</sup>。フランス語のジェロンディフは、特に話し言葉では、一定のポーズを置いた後に、あたかも独立節のように加えることもできるという。守田・石橋 (2017)は、これまでの研究では、様態は主要部外要素によって表現されると考えられてきたが、主要部外要素も統語的性質によっては、同じ V 言語でも差異があるとしている。

最後に、Slobin (2005, 2006)も、日本語の動詞の連用形とテ形について言及している。Slobin (2005)は、日本語と韓国語には、様態を表現するさらなる語彙的手段があるとして、Sugiyama (2000)と Oh (2003)を引用している。Sugiyama (2000)は、英語を翻訳した日本語では、様態を表す主動詞は英語より少ないが、動詞の連用形やテ形なども含めると、日本語は英語より様態表現が多様に見られるとしている。また、日本語は、フランス語と同じ V 言語でありながら、様態については異なる選択をしているという。日本語もフランス語も V 言語なので、主動詞の位置で様態が求められていないが、フランス語は様態を詳細に表現しないのに対し、日本語は複合動詞を用いた様態表現が発達していて、様態が表されやすいとしている。また、Slobin (2006)は、日本語は様態動詞と経路動詞を「準語彙ユニット(a quasi-lexical unit)」としてまとめやすい V 言語だとして、他の V 言語より様態の際立ちが高いとした Ohara (2002, 2003)と Sugiyama (2005)を紹介している<sup>36</sup>。

このように、日本語の動詞の連用形については、頻度調査などのいくつかの研究がある。これらの研究からは、日本語には、主動詞以外でも、動詞の連用形とテ形、ナガラ節があり、節同士の結びつきの強さに程度の違いがあることがわかる。節同士の結びつきが最も強い動詞の連用形は、情報の背景化が進んでいるので、その頻度が高いとしている。

Talmy (2000)は、情報の背景化に関して、前述したように、主動詞と動詞の衛星を含んだ閉じたクラスの表現では情報が背景化され、それ以外は前景化されるとしている。従って、英語では、移動の様態が主動詞、経路は動詞の衛星で典型的に表されているため、様態と経路の情報が両方とも背景化されるとしている。一方、スペイン語では、経路が主動詞で表されているが、様態は動形容詞や副詞などをさらに設けないといけないので、経路の情報のみが背景化されるとしている。つまり、スペイン語では、様態の情報が前景化される。しかし、Talmy (2000)は、V 言語でも、様態が動形容詞や副詞などではなく、閉じたクラスの動詞の衛星で表される言語であれば、その様態は、経路と同程度に表されやすいだろうとしている。その一例がネズパース語(Nez Perce)だという。ネズパース語には、Talmy (2000)が前述したように、最も主動詞への統合度が進んでいる接頭辞がある。日本語の動詞の連用形は、ネズパース語のような接頭辞ほどではないが、ネズパース語の接頭辞のよ

<sup>35</sup> 調査の詳細は守田・石橋 (2017)の表 4 と表 5 を参照。

<sup>36</sup> Slobin (2006)の注 6 を参照。

うに、主動詞と形式上1語になり、動詞の連用形それ自体が動詞からなる活用形なので、動詞のように情報が背景化され、V 言語でも移動の様態が表されやすい言語になる可能性はある。

また、Talmy (2000)は、Bowerman and Choi (1991)を受け、韓国語の連結語尾の「-어/아(-e/a)」が入る動詞を動形容詞(*gerundive*)だとしている。しかし、これまで見てきた日本語の動詞の連用形と動形容詞では、主動詞との結びつきの強さに違いがあることを考えると、韓国語の連結語尾の「-어/아(-e/a)」が入る動詞も、動形容詞とは主動詞との結びつきの強さに違いがあると予想される。次節以降では、日本語と韓国語の前項動詞が動形容詞とは違い、主動詞との結びつきが強いため、その頻度が高いことを示していく。そして、日本語と韓国語の前項動詞によって、V 言語でも、移動の様態が経路ほど表されやすい言語であることを明らかにしていく。

このように、日本語と韓国語の前項動詞は頻度が高いと予想されるが、このような予想は Slobin (2004, 2006)とは一致しない。Slobin (2004)は、前述したように、様態の際立ち(*salience*)が S 言語と V 言語の分類のほかにも、コード化しやすさ(*codability*)も影響されるとしている。コード化は、非定形動詞(*gerundive, participles, converb*)よりは定形動詞(*main verb*)、低頻度よりは高頻度、句や節よりは単一語の方が起こりやすい。しかし、日本語と韓国語の前項動詞は、非定形動詞でありながら、その頻度が高いと予想しているので、Slobin (2004)と一致しない。また、Slobin (2006)は、V 言語には主動詞以外の選択肢肢(*gerundive, participles, converb* など)が多い分、それぞれの頻度は低いとしている。しかし、日本語と韓国語の前項動詞は主動詞以外の選択肢肢でありながら、その頻度は高いと予想されるので、Slobin (2006)とは一致しない。いずれも、日本語と韓国語の前項動詞は、典型的な非主要部では予想できない高頻度性を示すことを検証することで、V 言語でも様態が表されやすいという Talmy の類型論の多様化への貢献が期待できる。

複合動詞の研究では、移動事象における複合動詞の研究は多くない。これまでの複合動詞の研究は移動以外も含め、複合動詞全般における構成要素の意味関係や制約を明らかにした研究が多い。影山 (1993)による統語的複合動詞と語彙的複合動詞の分類をはじめ、Matsumoto (1996c)と松本 (1998)、由本 (2005)、影山 (2014)などは、語彙的複合動詞を下位分類している。構成要素の組み合わせの制約に関しては、影山 (1993)の他動性調和の原則と由本 (1996)の主語一致の原則、松本 (1998)の一般的意味的条件が挙げられる。いずれも、複合動詞それ自体の仕組みや全体像を明らかにするもので、移動事象における複合動詞の全体像までにはつながらない。例えば、Tagashira & Hoff (1986)や松本 (1998)、由本 (2005)などは、前項動詞(V1)が後項動詞(V2)の手段や様態、付帯状況などを表すことが多いとしているので、移動事象における複合動詞とも関連はある。しかし、「遊び暮らす」や「すすり泣く」、「溺れ死ぬ」のように、移動事象ではない前項動詞の様態も含まれているので、移動事象における複合動詞を一般化するのには無理がある。また、これまでの複合動詞の研究では、「～込む」や「～上げる」など、特定の後項動詞を中心とした個別研究が

多いので、前項動詞の様態に関する本格的な研究は少なく、移動事象の全体像が見えにくい。

移動事象における複合動詞については、田中・松本 (1997)が参考になる。田中・松本 (1997)は、日本語と英語の空間移動表現を比較し、日本語では経路位置関係や方向性を包入した移動動詞が多く、経路移動動詞を補うものとして複合的移動動詞があるとしている。複合的移動動詞の中でも、本稿が対象としている動詞の連用形やテ形の複合動詞については、前項動詞が移動の様態で、後項動詞が経路位置関係や方向性であるパターンが顕著だという。複合動詞内では、直示性方向性が後項動詞として最も好まれ、続いて経路位置関係と非直示性方向性、様態、付帯状況の順に階層化しているとしている（付帯状況<様態<経路位置関係/非直示性方向性<直示性方向性）。しかし、このような階層に至るまでには、どのようなデータの検証が行われたのかはわからない。また、様態の前項動詞と経路位置関係や方向性の後項動詞のパターンが本当に多いのか、日本語の様態移動動詞のリストは少ないが、その頻度も少ないかどうかについても、さらに検証する必要がある。

以上、日本語と韓国語は、経路を動詞で表す V 言語だが、同時に見られる様態の情報が複合動詞の前項動詞という個別言語の特徴を考えると、両言語の非主要部の様態は表されやすいことを予想した。日本語の動詞の連用形を指摘した研究からは、日本語には、主動詞以外でも複数の動詞の従属形があり、節同士の結びつきの強さに程度の違いが見られることがわかった。節同士の結びつきの強さと情報の背景化の相関が頻度に反映されるため、節同士の結びつきが最も強い動詞の連用形は、その頻度が高いことが予想できる。このような予想は、Talmy や Slobin と矛盾しているようにも見えるが、V 言語では様態が一様に前景化されていないことや、V 言語の典型的な様態は副詞が優勢ではないことを示していくことで、Talmy の類型論の多様化が期待できる。

(26) 検証1：日本語と韓国語では、非主要部の様態が多いのか？もし多いとすれば、主動詞との結びつきが強い非主要部が多いためののか？

次に、複数以上の参加者が関わる「使役移動(caused motion)」でも、日本語と韓国語では、以下のように、動詞の意味の中で移動概念(Motion)と経路(Path)が表現される言語であることが確認できる。

(27) a. 私は丸太を倉庫に入れた。

b. 나는 통나무를 창고에 넣었다.  
na-nun thongnamwu-lul changko-ey neh-essta  
私-TOP 丸太-ACC 倉庫-to 入れる-PS

(27)は、使役移動を日本語と韓国語で示したものである。日本語では使役移動の経路が主動詞の「入れた」、韓国語では主動詞の「넣었다(入れた)」で表されている。このように、両言語は、使役移動でも V 言語であることが確認できる。その際、使役移動の様態<sup>37</sup>は、次のように、主動詞と一緒に表すことができる（四角で囲った部分が様態）。

(28) a. 私は丸太を倉庫に転がして入れた。

b. 나는 통나무를 창고에 굴러(서) 넣었다.  
 na-nun thongnamwu-lul changko-ey kwulli-e(se) neh-essta  
 私-TOP 丸太-ACC 倉庫-to 転がす-PART 入れる-PS

(28)は、(27)の使役移動に様態も一緒に表したものである。日本語では、使役移動の様態を動詞のテ形の「転がして」で表すことができる。連用形の「転がし」だと、容認度がやや落ちる（?私は丸太を倉庫に転がし入れた）。前述したように、動詞の連用形は動詞のテ形より節同士の結びつきが強いので、動詞の連用形よりテ形が用いられた使役移動の様態では、主動詞との結びつきがそれほど強くないと言える。一方、韓国語では、使役移動の様態を「굴러(転がし)」で表すことができる。「굴러(転がし)」は、主動詞の「넣었다(入れた)」との間に連結語尾の「-어/아(-e/a)」が入っているので、その結びつきは強いが、ここでは、その間に分かち書きも必要としている（?나는 통나무를 창고에 굴러넣었다(私は丸太を倉庫に転がし入れた))。従って、主動詞との結びつきは強いとは言えない。あるいは、連結語尾の「-어/아(-e/a)」よりも弱い連結語尾の「-어서/아서(-ese/ase)<sup>38</sup>」が入ることができる。このように、両言語では、使役移動の様態を主動詞と一緒に表すことはできるが、主動詞との結びつきは強いとは言えない。むしろ、次のような使役移動の手段の方が主動詞との結びつきが強い（四角で囲った部分が手段）。

(29) a. 私は丸太を倉庫に投げ入れた。

b. 나는 통나무를 창고에 던져넣었다.  
 na-nun thongnamwu-lul changko-ey tenci-eneh-essta  
 私-TOP 丸太-ACC 倉庫-to 投げる-PART-入れる-PS

(29)は、(27)の使役移動に手段も一緒に表現している。日本語では、使役移動の手段を「投げ」で表している。動詞の連用形で表しているので、主動詞の「入れた」との結びつきは強いと言える。一方、韓国語では、使役移動の手段を「던져(投げ)」で表している。主動

<sup>37</sup> 使役移動の様態は、Slobin (2004)の様態の定義（注5を参照）に従い、運動のパターンや移動の速度、動力(force dynamics)、態度、道具を対象とする。松本 (2017)の言う使役様態動詞に当たる。

<sup>38</sup> 連結語尾の「-어서/아서(-ese/ase)」は、連結語尾の「-어/아(-e/a)」に「서(se)」が加わったもので、連結語尾の「-어/아(-e/a)」より分かち書きが入り、前後する動詞の時間関係は同時発生ができないので、連結語尾の「-어/아(-e/a)」ほど主動詞との結びつきは強くないだろう。詳しくは황명순(1986)を参照。

詞の「넣었다(入れた)」との間には連結語尾の「-어/아(-e/a)」が入り、分かち書きは入っていないので、その結びつきは強いと言えるだろう。このように、両言語では、使役移動の手段は主動詞との結びつきが強い。使役移動の様態よりも、手段の方が主動詞との結びつきが強いと言えるので、その分情報の背景化も進み、その頻度も多いことが予想できる。

このような日本語と韓国語の使役移動における様態や手段については、Talmy (1991, 2000)は、特に述べていない。しかし、次のような英語とスペイン語の使役移動の違いを示していることから、日本語と韓国語も、スペイン語のように、使役移動の様態や手段を非主要部で表現すると見なしている可能性が高い。

(30) a. I rolled the keg out of the storeroom.

b. Saqué el barril de la bodega rodandolo.

“I extruded the keg from the storeroom rolling it”

(31) a. I kicked the ball into the box.

b. Metí la pelota a la caja de una patada.

“I inserted the ball to the box by a kick”

(Talmy 1991:489)

(30)と(31)は、英語とスペイン語の使役移動を示している。使役移動でも、自律移動と同様に、英語は経路が非主要部の *out* や *into* で表されているのに対し、スペイン語では、経路が主動詞の *saqué*(extruded)や *metí*(inserted)で表されている。使役移動の様態や手段は、英語は主動詞の *rolled* や *kicked*、スペイン語では、非主要部の *rodandolo*(rolling)や *de una patada*(by a kick)で表されている。このように、Talmy (1991, 2000)は、使役移動の語彙化パターンを自律移動と同様に捉えている。このような捉え方だと、日本語と韓国語の使役移動も、自律移動と同様に、経路が主動詞で表され、様態や手段は非主要部で表されることになる。確かに、両言語の使役移動では、経路が動詞で表され、様態や手段は非主要部で表される。しかし、自律移動でも指摘したように、主動詞以外でも、節同士の結びつきの強さには程度の違いがある。(30)の動形容詞や(31)の前置詞句は省かれても自然だが、(29)のような動詞の連用形や連結語尾の「-어/아(-e/a)」の入る動詞では、次のように、省かれると不自然になる場合がある。

(32) 私は丸太を倉庫に\*(投げ)つけた。

(33) 나는 통나무를 창고에서 \*(끄집어)냈다.

na-nun thongnamwu-lul changko-eyse \*(kku-e-)nay-ssta

私-TOP 丸太-ACC 倉庫-from つかむ-PART-出す-PS

‘私は丸太を倉庫からつかみ出した’



(32)と(33)は、非主要部が省かれると不自然になる場合を示している。日本語では、使役移動の手段が動詞の連用形「投げ」で表されているが、省かれると不自然になる（\*私は丸太を倉庫につけた）。一方、韓国語では、移動の手段が「끄집어(つかみ)」で表され、主動詞との間に連結語尾の「-어/아(-e/a)」が入っている。非主要部の「끄집어(つかみ)」は省かれると不自然になる(\*나는 통나무를 창고에서 냐다)。このように、使役移動の手段を表す動詞の連用形や連結語尾の「-어/아(-e/a)」が入る動詞は省かれると不自然になる。(27)のように、不自然にならない場合もあるが、前述したように、動詞の連用形や連結語尾の入る動詞は主動詞との結びつきが強い傾向にある。Talmy (1991, 2000)は、同じ非主要部でも、主動詞との結びつきの強さに程度の違いがあることを反映していない。

一方、Bowerman and Choi (1991)は、前述したように、韓国語の使役移動の語彙化パターンを自律移動と同様とは捉えていない（図3を参照）。しかし、使役移動については、Talmy (1991, 2000)の見解と変わらない。経路は移動概念と一緒に動詞の中で表現され、様態や手段は移動概念とは一緒に表現されない。このような捉え方だと、Talmy (1991, 2000)と同様に、主動詞との結びつきが強い動詞の連用形や連結語尾の入る動詞が捉えられない。

(28)や(29)のような使役移動の様態と手段については、松本 (2017)が参考になる。松本 (2017)は、使役と移動の時間的關係と移動する参加者によって、次のように、使役移動を3つのタイプに分類している。

	使役が起こる時間	使役者の移動	移動範囲
随伴運搬型	移動の期間中（継続的）	一緒に移動する	制約無し
継続操作型	移動の期間中（継続的）	移動しない (身体部位は移動あり)	小規模
開始時起動型	移動開始時のみ	移動しない	制約無し

表2 使役移動事象の下位分類(松本 2017)

表2は、松本 (2017)が下位分類した使役移動事象を示している。まず、随伴運搬型は、使役行為が移動の期間中で、使役者が一緒に移動している。継続操作型も、使役行為が移動の期間中だが、使役者は移動しない。使役者の身体部位の移動はあって、移動範囲は小規模となる。最後に、開始時起動型は、使役行為が移動の開始時のみで、使役者は移動しない。このような分類からすると、(29)の使役移動表現の手段は、開始時起動型に当たる。(28)の使役移動の様態は、継続操作型または開始時起動型に当たる。つまり、使役と移動の時間的關係で言うと、(29)の使役移動の手段は移動の開始時のみに使役が起こり、(28)の使役移動の様態は、移動の開始時のみか、移動の期間中に使役が起きている。このような使役移動の様態や手段の特徴は、主動詞との結びつきの強さにも関連があるだろう。

以上、使役移動でも、日本語と韓国語は経路を動詞で表す V 言語だが、その際、一緒に表現できる使役移動の様態や手段は、複合動詞の前項動詞という個別言語の特徴からする

と、主動詞ほど表されやすいと予想される。ただし、使役移動の様態よりは、手段の方が主動詞との結びつきが強く、その分頻度も高いと予想できる。このような予想は、Talmy (1991, 2000)や Bowerman and Choi (1991)では捉えられないが、自律移動とは異なる使役移動の特徴を明らかにすることが期待できる。

(34) 検証2：使役移動でも、日本語と韓国語では、非主要部の様態が多いのか？両言語の非主要部の様態より、使役移動の手段の方が多くないのか？もし、使役移動の手段が多いとすれば、それはなぜなのか？

さらに、日本語と韓国語の使役移動では、様態や手段が主動詞で表されているのに、前項動詞の様態または手段が加わっている場合がある。例えば、次のような例が挙げられる（四角で囲った部分が様態や手段）。

(35) 私は丸太を倉庫に**放り投げた**。

(36) 나는 통나무를 창고에 **집어던졌다**.

na-nun thongnamwu-lul changko-ey **cip-e-tenci-essta**

私-TOP 丸太-ACC 倉庫-to とる-PART-投げる-PS

‘私は丸太を倉庫にとって投げた’

(35)と(36)は、使役移動の手段が主動詞と非主要部の両方に表されている日本語と韓国語を示している。(35)では、使役移動の手段が主動詞の「投げた」にも、前項動詞の「放り」にも表されている。また、(36)では、使役移動の手段が主動詞の「던졌다(投げた)」に加え、前項動詞の「집어(とって)」にも表されている。このように、両言語では、使役移動の手段が主要部と非主要部の両方に表されている。使役移動の手段が主要部にあるのに、さらに非主要部の手段または様態が加わることは、単なる共イベントの余剰にも見えるが、どういう動機づけがあるのか。

使役移動の共イベントが複合動詞の前項動詞と後項動詞の両方に表されている日本語と韓国語については先行研究は乏しいが、使役移動の概念を考えると西村(1998)が参考になる。西村(1998)は使役移動だけではなく、状態変化などの何らかの変化を生じさせる使役の意味を構文の意味として捉えているが、位置の変化を生じさせる使役移動を対象とする本稿にも示唆するところが大きい。西村(1998)によると、使役構文の特徴の1つは、主語の行為(X)の結果としてある事態(Y)が生じることを単一の述語動詞を用いて表すところにあるという。このことから、次のような使役構文も成立すると言える。

(37) a. 私は丸太を倉庫に**投げた**。

b. 나는 통나무를 창고에 던졌다.  
 na-nun thongnamwu-lul changko-ey tenci-essta  
 私-TOP 丸太-ACC 倉庫-to 投げる-PS

(37)では、単一の述語動詞の使役構文を示している。日本語では、主語の行為(X)と目的語の変化(Y)を「投げた」という単一の述語動詞を用いて表している。韓国語でも、主語の行為(X)と目的語の変化(Y)を「던졌다(投げた)」という単一の述語動詞で表している。このように、両言語とも単一の述語動詞で使役移動を表している。Talmy の分類では、両言語は経路を動詞で表す V 言語だが、主語の行為(X)と目的語の変化(Y)を単一の述語動詞を用いて表す典型的な使役構文からすると、目的語の位置の変化(Y)、つまり経路だけでなく、主語の行為(X)も表す必要があるため、目的語の位置の変化(Y)は明示されなくなる場合も出てくる。(37)は経路が明示されなくなった場合で、必ずしも着点(倉庫)までの移動になるとは限らない。

一方、西村(1998)は、使役構文に現れる使役動詞自体も主語の行為(Z)を表しているとしている。例えば、「私はドアを開けた」は、主語の行為(X)と目的語の変化(Y)を単一の述語動詞の「開けた」で表しているが、「開けた」自体も主語の行為(Z)を表しているという。主語の行為(X)と主語の行為(Z)の関係は、独立した2つの事態ではなく、「X と Y との間に(ある種の)因果関係が成立すれば、その X は Z で(も)ある」としている。ドアに対して「押す」という行為を行った結果、そのドアが「開く」ということが起これば、その行為はドアを「開ける」という行為で(も)あるということになる。このように、X を行うことが Z を遂行することに(も)なる関係にある X と Z をそれぞれ基礎行為(basic action、あるいは低次の行為(lower-order action))、と使役行為(causative action、あるいは高次の行為(higher-order action))としている。

使役構文における基礎行為と使役行為の概念は、使役の意味が複合動詞によって表現される構文とも関連づけることができる。「私はドアを開けた」では、「私はドアを開けた」全体が使役行為、「押す」が基礎行為になるわけだが、「私はドアを押し開けた」のように、述語動詞における前項動詞に基礎行為、後項動詞に使役行為を示すことができる。基礎行為(押す)の明示化は、使役構文のプロトタイプ<sup>39</sup>とは一致しないが、使役の意味が述語動詞によって表現される構文という意味には変わりがないだろう。なお、複合動詞の

<sup>39</sup> 使役構文のプロトタイプは以下の通りである。

- a. 行為者(人間)は行為対象に(位置、状態などにおける)何らかの変化を生じさせることを目標としている。
  - b. 行為者は a の目標を達成するために何らかの身体的な動作を行為対象に対して行う。
  - c. 行為者はその身体的な動作をコントロールしている(他者等に強制されているわけではない)
  - d. b の動作によって、行為者から行為対象にエネルギーが伝達された結果、後者に a の目標通りの変化が直ちに生じる。
  - e. b の動作の実行およびその結果行為対象に生じる d の変化の主たる責任は行為者に帰せられる。
- これらは黒田(1975, 1992)と Lakoff and Johnson(1980)、Lakoff(1987)が因果性のプロトタイプだと考える直接操作(direct manipulation)の特徴だが、「私はドアを開けた」のような典型的な使役構文がこれらの特徴に合致していることから、使役構文の中でも因果性プロトタイプを表現する場合を使役構文のプロトタイプだとしている。

研究では、後項動詞のアスペクトへの拡張に関するものもあるので、使役構文における複合動詞の後項動詞が結果としての変化という使役行為を明示することにも関連があるだろう。

以上、日本語と韓国語の使役移動では、共イベントが複合動詞の前項動詞と後項動詞の両方に表されている場合がある。共イベントが主動詞で表されているのに、さらに前項動詞の共イベントが加わるのはどういう動機づけがあるのか。西村(1998)の使役構文の意味と関連づけると、主語の行為(X)と目的語の変化(Y)が一体化した単一の述語動詞が用いられているため、両言語が経路を動詞で表す V 言語であるにもかかわらず、経路が明示されていない可能性が考えられる。経路が明示されていない主動詞に、さらに前項動詞の共イベントが加わるのは、「押し開ける」のように、使役構文における基礎行為と使役行為の明示化になるとも考えられる。いずれにしても、経路が動詞で明示されていない分、共イベントを主動詞とする頻度は多くなり、前項動詞の共イベントも含めると、その頻度は英語並みに多いと予想される。

(38) 検証 3 : 日本語と韓国語では、使役移動の様態や手段が複合動詞の前項動詞と後項動詞の両方に表されている場合が多いのか？主動詞で使役移動の様態や手段が表されているのに、さらに前項動詞でも表されるのはどういう動機づけがあるのか？

以上、日本語と韓国語は、Talmy の類型論では V 言語であるが、移動の様態に注目すると、非主要部の様態が表されやすい言語である可能性を指摘した。経路動詞と一緒に表現できる様態の情報が複合動詞の前項動詞という個別言語の特徴を考えると、主動詞との結びつきが強いので、非主要部の様態の頻度は多いと予想される。また、使役移動でも、両言語では、非主要部の様態が表されやすい可能性がある。使役移動でも、両言語の様態は複合動詞の前項動詞で表されるので、主動詞との結びつきが強く、その頻度は多いと予想される。ただし、使役移動の手段の方が主動詞との結びつきが強いので、手段の頻度がより高いと予想される。さらに、使役移動では、様態や手段が主動詞で表されているのに、さらに前項動詞の様態（手段）が加わっている場合がある。この場合、使役移動の経路は動詞で表されていないので、その分、様態や手段を主動詞とする頻度は高く、前項動詞の様態（手段）も含めると、その頻度は多いと予想される。以上の検証すべき 3 点をまとめると、以下の通りになる。

(39) a. 検証 1 : 日本語と韓国語では、非主要部の様態が多いのか？もし多いとすれば、主動詞との結びつきが強い非主要部が多いためなのか？  
b. 検証 2 : 使役移動でも、日本語と韓国語では、非主要部の様態が多いのか？両言語の非主要部の様態より、使役移動の手段の方が多くないのか？もし、使役

移動の手段が多いとすれば、それはなぜなのか？

- c. 検証3：日本語と韓国語では、使役移動の様態や手段が複合動詞の前項動詞と後項動詞の両方に表されている場合が多いのか？主動詞で使役移動の様態や手段が表されているのに、さらに前項動詞でも表されるのはどういう動機づけがあるのか？

以上の内容を中心に、3章以降では、日本語と韓国語の移動様態が一様に前景化されていないことを示し、その頻度が英語並みに高いことを明らかにしていく。

### 3章 調査の概要

ここでは、本調査に入る前に、本稿が対象としている韓国語の概要や具体的な調査基準を示し、予備調査を行う。

#### 3.1 韓国語の概要

本稿が対象としている韓国語については、移動事象が表現される動詞（複合動詞を含む）と副詞の形態的特徴を紹介する。まず、韓国語の動詞には様々な語尾があり、次のように、動詞の語幹と結合する。その際は、動詞の語幹と語尾を区別して表記し<sup>40</sup>、語幹と語尾の

<sup>40</sup> 動詞の語幹が語尾と結合する際は「母音調和」が発生する。語幹の最後の母音が「ㅏ」や「ㅑ」だと語尾は「-아」、その他の母音は語尾の「-어」が来る。

가-	+	-아	+	먹-	+	-어
막-		-아도		벨-		-어도
얹-		-아서		세-		-어서
고-		-았-		되-		-었-
녹-		-았었-		두-		-었었-

また、特定の語幹と語尾が結合する際には、次のように①語幹、②語尾、③語幹と語尾の両方を原型通りに表記しない。

① 語幹を原型通りに表記しない場合

a. 「ㄹ」で終わる語幹が「ㄴ」、「ㅁ」、「ㅂ」で始まる語尾または語尾の「-오」や「-으」との結合で「ㄹ」が脱落したら、脱落したままで表記する(갈다, 날다, 말다, 물다, 벌다, 붙다, 알다, 울다, 줄다, 팔다などが当たる)。

		-	네			사			
		-세				사			
		-오				사			
살다 :	살-	+	-ㄹ수록	→		살		수록	
			-ㅂ시다			ㅂ		시다	
			-ㄹ뿐더러			ㄹ		뿐더러	

b. 「ㅂ」で終わる語幹が母音の語尾との結合で「ㅂ」が脱落したら、脱落したままで表記する。

		-	어			지			
짓다 :	짓-	+	-은	→		지		은	
			-어도			지		어도	

c. 「ㄷ」や「ㄹ」で終わる語幹は、語尾の「-어/아」と結合すると「ㄷ」や「ㄹ」が脱落する(가쁘다, 고프다, 기쁘다, 끄다, 나쁘다, 답그다, 따르다, 뜨다, 미쁘다, 바쁘다, 슬프다, 아프다, 예쁘다, 잠그다, 치르다, 크다, 트다, 푸다などが当たる)。

		-	어			피			아			아			파	
푸다 :	푸-	+	-어서	→		피		아	-	아	도	→		아	파	
			-었다			꿘		아	-	아	다		→		아	꿘

d. 「ㄷ」で終わる語幹が母音の語尾との結合で「ㄷ」に変わったら「ㄷ」で表記する((걸음을)걷다, 걷다, 깨닫다, 놓다, 단다(빨리 뛰다), 듣다, (물음을)묻다, 분다, 신다, 일컫다などが当たる。一方、(빨래를)건다, 끝다, 군다, (문을)닫다, 돈다, 뜯다, (땅에)묻다, 밋다, 받다, 벌다, 뺏다は当たらない)。

		-	어			물				
묻다 :	묻-	+	-으니	→		물		으니		
			-은			물		은		

e. 「ㅂ」で終わる語幹が母音の語尾との結合で「ㄷ」に変わったら「ㄷ」で表記する(가깝다, 가볍다, 간지럽다, 괴롭다, (고기를)굽다, 깊다, 노엽다, 높다, 더럽다, 덩다, 땀다, 메스겁다, 무겁다, 미덥다, 밋다, 사납다, 서럽다, 쉽다, 아니꼽다, 어둡다, 역겹다, 즐겁다, 지겹다, 차갑다, 춥다などが当たる。一方、(추위에 손이)곱다, (허리가)굽다, 꼬집다, (손을)뽑다, 다잡다, 비집다, 뺏다, 수줍다, 씹다, 엮다, 잡다, 접다, 줍다, 집다, 해집다は当たらない)。

		-	어			누			아			잡			아
놓다 :	놓-	+	-으니	→		누		우	니	잡	-	+	-으니	→	잡
			-었다			누		웠		잡	-	+	-었다		잡
						누		웠		잡	-	+	-었다		잡

② 語尾を原型通りに表記しない場合

a. 「하」で終わる語幹が語尾の「-아」と結合して、語尾が「여」に変わったら「여」で表記する(「하여」は「해」に縮めることができる)。

意味から全体の意味がわかるようにする。

꺾- 잇- 덮- 활- 붙- 먹-	+	-어 -으니 -도록 -는다 -느냐 -거든	→	꺾어 잇으니 덮도록 활는다 붙느냐 먹거든
----------------------------------	---	---------------------------------------	---	---------------------------------------

図4 韓国語の動詞の語幹と語尾

韓国語の動詞の語尾は、その位置によって先語末語尾(prefinal ending)と語末語尾(final ending)に分けられる。まず、先語末語尾（非語末語尾とも言う）は他の語尾の前に位置する語尾で、尊敬(-요-, -시-)や時制(-는-, -았/었-, -겠-)などがある。一方、語末語尾はその種類が非常に多く、例えば、次のような活用形による分類ができる。

終結語尾	平叙形	가-ㄴ다
	疑問形	가-(느)냐
	命令形	가-(아)라
	勧誘形	가-자
	感嘆形	가-는구나
連結語尾	対等的	가-고
	従属的	가-면

- 
- 하다 : 하- +  $\begin{matrix} -아 \\ -아라 \\ -아도 \\ -았다 \end{matrix}$  →  $\begin{matrix} 하여(해) \\ 하여라(해라) \\ 하여도(해도) \\ 하였다(했다) \end{matrix}$
- b. 「르」で終わる語幹は、語尾の「-어」と結合すると、語尾が「러」に変わる(이르다, 노르다, (빛깔이)누르다などが当たる)。
- 푸르다 : 푸르- +  $\begin{matrix} -어 \\ -어서 \\ -었다 \\ -어지다 \end{matrix}$  →  $\begin{matrix} 푸르러 \\ 푸르러서 \\ 푸르렀다 \\ 푸르러지다 \end{matrix}$
- c. 「르」で終わる語幹が語尾の「-어/아」との結合で、「-」が脱落して「-러/라」になると、そのように表記する。
- 부르다 : 부르- +  $\begin{matrix} -어 \\ -어도 \\ -었다 \end{matrix}$  →  $\begin{matrix} 불러 \\ 불러도 \\ 불렀다 \end{matrix}$
- ③ 語幹と語尾の両方を原型通りに表記しない場合  
 : 「ㅎ」で終わる語幹と母音の語尾の結合で、語幹（「ㅎ」の脱落）も語尾も変わったら、そのように表記する(ただし「 좋다」は除く)。
- 노랗다 : 노랑- +  $\begin{matrix} -은 \\ -으니 \\ -아 \\ -아지다 \end{matrix}$  →  $\begin{matrix} 노란 \\ 노라니 \\ 노래 \\ 노래지다 \end{matrix}$

非終結語尾		補助的	가-고 있다
	転成語尾	名詞形	가-로
		冠形詞形	가-는

表3 韓国語の語末語尾の種類

表3は、韓国語の語末語尾の種類を示している。まず、文章を終わらせる機能をするかどうかによって、終結語尾と非終結語尾に分けられる。文章を終わらせる機能が欠けている非終結語尾は、さらに連結語尾と転成語尾に分けられる。連結語尾は文章と文章を繋ぐ機能をするが、前後する文章の意味関係によって、対等的連結語尾と従属的連結語尾、補助的連結語尾に分けられる。

まず、対等的連結語尾は、前後する文章を対等的に繋ぐもので、「-고(-ko)」と「-며(-mye)」、「-면서(-myense)」、「-지만(-ciman)」、「-나(-na)」がある。前後する文章を対等的に繋ぐので、次のように、前後する文章を入れ替えても、その意味は変わらない。

(40) a. 바람이 불고 눈이 옵니다.

palam-i pwul-ko nwun-i opnita  
 風-NOM 吹く-PART 雪-NOM 降る-POL  
 ‘風が吹いて雪が降ります’

b. 눈이 오고 바람이 불니다.

nwun-i o-ko palam-i pwupnita  
 雪-NOM 降る-PART 風-NOM 吹く-POL  
 ‘雪が降って風が吹きます’

次に、従属的連結語尾は、後続する文章が先行する文章に従属されるように繋ぐもので、「-면(-myen)」と「-니(-ni)」、「-는데(-nuntey)」などがある。対等的連結語尾や補助的連結語尾以外が従属的連結語尾だと言えるほど、その範囲は広い。例えば、次のような例が挙げられる。

(41) a. 서리가 내리면 잎이 빨갱게 물든다.

seli-ka nayli-myen iph-i ppalkahkey mwultunta  
 霜-NOM 降る-PART 葉っぱ-NOM 赤く 染まる  
 ‘霜が降れば葉っぱが赤く染まる’

b. 봄이 되니 날씨가 따뜻하다.

pom-i toy-ni nalssi-ka ttattushata  
 春-NOM なる-PART 天気-NOM 暖かい  
 ‘春になると天気が暖かい’



最後に、補助的連結語尾は、補助動詞と本動詞を繋ぐもので、「-어(-e)」と「-고(-ko)」、  
「-게(-key)」、「-지(-ci)」がある。連結語尾は文章と文章を繋ぐ機能をするが、補助的  
連結語尾は動詞と動詞を繋ぐ機能もする。例えば、次のような例が挙げられる。

- (42) a. 서가에 책이 많이 꽂혀 있다.  
seka-ey chayk-i manhi kkochi-e issta  
書架-LOC 本-NOM 多く 刺さる-PART いる  
‘書架に本が多く刺さっている’
- b. 아이들이 공을 차고 있다.  
ai-tul-i kong-ul cha-ko issta  
子供-PL-NOM ボール-ACC 蹴る-PART いる  
‘子供たちがボールを蹴っている’

このような連結語尾は、語幹と区別して表記するのが原則だが、二つの動詞からなる複合  
動詞の場合は、前項動詞本来の意味を保持しているものは、次のように、その原型通りに  
表記する。前項動詞本来の意味から離れているものは、その原型を表記しない。

- (43) a. 넘어지다(넘다), 일어나다(늘다), 늘어지다(늘다), 돌아가다(돌다), 되짚어가다(되짚다),  
들어가다(들다), 떨어지다(떨다), 벌어지다(벌다), 엮어지다(엮다), 접어들다(접다),  
틀어지다(틀다), 흩어지다(흩다)
- b. 드러나다(≠들다), 사라지다(≠살다), 쓰러지다(≠쓸다)

次に、韓国語の副詞については、まず、語源的に本来副詞として機能してきたものがある。  
例えば、次のような例が挙げられる。

- (44) 여간, 얼른, 가끔, 다시, 늘, 이미, 벌써, 더, 꼭, 꽤…

また、韓国語の副詞には、本来副詞ではないが、副詞に派生した「副詞語」がある。次の  
ように、接尾辞の「~이(-i)」や「~히(-hi)」、「~리(-li)」、「~오/우(-o/wu)」、「~로/으  
로(-lo/ulo)」がつく。

- (45) a. 接尾辞の「~이(-i)」 : 같이, 굳이, 길이, 높이, 많이, 실없이, 좋이, 짓궂이…  
b. 接尾辞の「~히(-hi)」 : 가만히, 솔직히, 분명히, 쓸쓸히, 조용히, 급히…  
c. 接尾辞の「~리(-li)」 : 빨리, 달리, 멀리, 게을리, 널리, 배불리…  
d. 接尾辞の「~오/우(-o/wu)」 : 도로, 바로, 따로, 고루, 자주, 마구…  
e. 接尾辞の「~로/으로(-lo/ulo)」 : 홀로, 날로, 참으로, 진실로, 정말로…

副詞に派生した「副詞語」には、本来の品詞を保ったまま、副詞の機能をするものもある。次のような助詞や接尾辞の「~게(-key)」がつく。

- (46) a. 接尾辞「~게(-key)<sup>41</sup>」: 아름답게, 용감하게, 친절하게…  
b. 助詞: 앞에서, 3년 전에, 너만큼, 꽃송이처럼, 국회의원으로서…

副詞には擬声語や擬態語（オノマトペ）も含まれる。例えば、次のような例が挙げられる。

- (47) a. 擬声語: 드르렁드르렁, 졸졸, 짤랑짤랑, 펠럭펠럭…  
b. 擬態語: 반짝반짝, 슬슬, 깡충깡충, 흔들흔들…

ほかにも、韓国語の副詞には、未指定副詞(미지칭부사)と接続副詞がある。

- (48) a. 未指定副詞: 왜, 어디에, 아직, 못…  
b. 接続副詞: 그리고, 그러나, 그러면, 그래서, 그런데, 그래도…

### 3.2 調査基準

調査は、英語と日本語、韓国語のパラレルコーパスを作成して実施した。英語小説の 5 作品を対象に、それぞれ特定の範囲(100~199 ページ)に限定し、移動を表す英語の様態表現を日本語と韓国語ではどのように対応しているのかを調べる。対象となる自律移動の例は、英語が 263 例、日本語は 183 例、韓国語は 176 例だった<sup>42</sup>。複数の参加者が関わる使役移動は、英語が 275 例、日本語は 158 例、韓国語は 144 例だった<sup>43</sup>。以下、具体的な基準を示す。

・基準 1: 移動事象は、事象レベルでは、時間の経過を伴う図(Figure)の起点と着点の不一致を想定する。図の起点と着点が一致するか位置変化の平均があまり変わらない回転<sup>44</sup>や振動<sup>45</sup>などは移動事象に含めない。また、図の起点や着点が特定できない出現<sup>46</sup>も移動事象

<sup>41</sup> 「~게(-key)」は、副詞ではなかったものが、本来の品詞を保ったまま副詞の機能をする「副詞語(adverbial phrase)」の接尾詞としても働くため、(40)のような補助的連結語尾としては見なさない見解もあるが、고영근, 남기심 (2014) は、補助的連結語尾としてまとめている。詳しい議論は고영근 (2004b)と고영근, 구분관 (2008)を参照。

<sup>42</sup> 対象となる英語の 263 例の内訳は、作品 *The Lost Symbol* (以下作品①) が 59 例、作品 *Howl's Moving Castle* (以下作品②) が 47 例、作品 *The Great Gatsby* (以下作品③) が 51 例、作品 *Wicked: The Life and Times of the Wicked Witch of the West* (以下作品④) が 39 例、作品 *The Kite Runner* (以下作品⑤) が 67 例である。これに対応する日本語の 183 例は、作品①が 44 例、作品②が 32 例、作品③が 38 例、作品④が 31 例、作品⑤が 38 例である。韓国語の 176 例は、作品①が 34 例、作品②が 37 例、作品③が 36 例、作品④が 31 例、作品⑤が 38 例である。

<sup>43</sup> 対象となる英語の 275 例の内訳は、作品①が 59 例、作品②が 61 例、作品③が 37 例、作品④が 34 例、作品⑤が 84 例である。これに対応する日本語の 158 例は、作品①が 42 例、作品②が 37 例、作品③が 20 例、作品④が 19 例、作品⑤が 42 例である。韓国語の 144 例は、作品①が 28 例、作品②が 40 例、作品③が 22 例、作品④が 14 例、作品⑤が 40 例である。

<sup>44</sup> 例えば、The ball rolled over and over in the magnetic field. (Talmy 1991:489)がある。

<sup>45</sup> 例えば、The ball bounced up and down on one spot. (Talmy 1991:489)がある。

に含めない。これらの移動事象は、物理的な事象に限るものとし、比喩表現<sup>47</sup>や抽象的な移動事象<sup>48</sup>は含めない。表現レベルでは、図を主語とするものを自律移動(spontaneous motion)、図を目的語にするものを使役移動(caused motion)とする。使役移動には、図を主語とする受け身は含めない。

・基準2：移動事象における図は、前章で述べたように、「目下の注意や関心の最大の中心になっている成分」だが、本稿では、さらなる条件として①その成分が無生物でも排除せず、②まとまりのある固体に限る。自律移動では、図が自らの意志を持つ有生物の移動のほうが望ましいが、無生物の移動も有生物と同じ統語構造や同じ語彙<sup>49</sup>が用いられるほど、その違いは大きくない<sup>50</sup>。実際、Talmy (2000)では、無生物の移動の例も頻繁に取り上げられているので<sup>51</sup>、無生物の移動も排除しないことにする。また、本稿では、図をまとまりのある、有界的な(bounded)固体に限る。液体や気体は、その一部しか移動していない場合があるので<sup>52</sup>、図の起点や着点が特定できないためである。使役移動では、図(被使役者)がまとまりのある固体でも、その一部しか移動していない場合<sup>53</sup>は含めない。図(被使役者)が使役者の身体の一部になる場合<sup>54</sup>は、そもそも図が使役者から独立していないので、まとまりのある固体とは言えない。

・基準3：移動事象における様態(manner)は、hop や jump、skip のような運動のパターン(motor pattern)、walk や run、sprint のような速度、step や tread、tramp のような力動性(force dynamics)、amble や saunter、stroll のような態度、sled や ski、skateboard のような道具、姿勢などを様態とする Slobin (2004)と Slobin (2006)の定義<sup>55</sup>を踏襲する。このような様態が表される全ての表現を「様態表現」とする。様態表現には、主要部の動詞(主動詞)と非主要部の両方を含む。

・基準4：様態表現のうち、主要部の動詞は、英語では Levin (1993)のリスト<sup>56</sup>と Talmy

<sup>46</sup> 例えば、She disappeared into the blackness では、着点の blackness が特定できないので、本稿の移動事象には含めない。

<sup>47</sup> 例えば、Long years will pass before I leave her では、「とても時間がかかる」という意味を移動に喩えた表現だが、目に見える物理的な移動ではないので、本稿の移動事象には含めない。

<sup>48</sup> 例えば、Bill looked into the hole. (松本 2017:1)がある。

<sup>49</sup> Talmy (2000:38)は、The plumber/The rain went into the kitchen を取り上げている。

<sup>50</sup> The distinction between the self-agentive motion of GO and autonomous motion of MOVE has been rigorously maintained in the author's work, although often disregarded elsewhere. However, it is true that languages represent self-agentive and autonomous motion largely with the same syntactic constructions and often with the same lexical forms(Talmy 2000:38).

<sup>51</sup> 例えば、The bottle floated into the cave(Talmy 2000:49)や The rock slid down the hill(Talmy 2000:28)などがある。

<sup>52</sup> 例えば、The smoke was puffing out では、out という移動の経路は見られるが、図である気体それ自体の性質上、移動物が着点にあると同時に、一部は起点にもあると考えられる。その際、図の起点や着点は特定できないので、本稿の移動事象には含めない。

<sup>53</sup> 例えば、He pushed aside curtains は、図(被使役者)のカーテンが固体でも、カーテンの上部は固定されているので、その移動は一部しか見られない。

<sup>54</sup> 例えば、She had her head buried in her iPhone では、図(被使役者)の her head は使役者の身体の一部で、使役者とは独立していない。her head の移動はあっても、使役者のその他の部位の位置は変わらないので、その移動は一部しか見られない。

<sup>55</sup> "Manner" covers an ill-defined set of dimensions that modulate motion, including motor pattern, rate, rhythm, posture, affect, and evaluative factors(Slobin 2004)と"Manner" is a cover term for a number of dimensions, including motor pattern(e.g., hop, jump, skip), often combined with rate of motion(e.g., walk, run, stroll) or force dynamics(e.g., step, tread, tramp) or attitude(e.g., amble, saunter, stroll), and sometimes encoding instrument(e.g., sled, ski, skateboard), and so forth(Slobin 2006)の記述を引用した。

<sup>56</sup> Levin (1993)では、自律移動は 51.2~51.5、51.7 のリストを利用した。51.1 の inherently directed motion は経路動詞のリストとして検証し、51.3 の Roll Verbs は、そのうち図の位置があまり変わらない roll around an axis を様態動詞のリストから除いた。51.6 は follow をはじめとする Chase Verbs だが、Talmy (2000:52)は follow を経路動詞と見なしている

(2000) が例示した動詞<sup>57</sup>を対象とする。日本語は松本 (1997)<sup>58</sup>、韓国語は Wienold (1995)<sup>59</sup> を対象とする。経路動詞も同様のリスト<sup>60</sup>を利用する。なお、様態の主動詞は、移動がなくても成立する場合があるので(例えば、「びんが川に浮かんだ」)、必ず経路表現(経路の前置詞など)を伴う様態の主動詞を抽出する。

・基準5：様態表現のうち、非主要部の様態は、主動詞との結びつきの強さによって3段階に分類する。まず、後項動詞を主動詞とする動詞の連用形を主動詞との結びつきが強い非主要部として見なす。後項動詞が主動詞ではない動詞の連用形<sup>61</sup>や、文と文を結ぶ動詞の連用形<sup>62</sup>、統語的複合動詞(影山 1993)の連用形<sup>63</sup>は主動詞との結びつきが弱い非主要部とする。動詞のテ形や「～ながら」節も主動詞との結びつきが弱い非主要部とする。そのほか、様態の副詞は主動詞との結びつきが弱い非主要部とし<sup>64</sup>、計3段階の非主要部を抽出する。

・基準6：韓国語の非主要部の様態も、主動詞との結びつきが強い非主要部を抽出するために、主動詞との結びつきによって3段階に分類する。まず、①前項動詞と後項動詞の間

---

ので、先行研究の不一致によるリストの排除とする。一方、使役移動は9.1~9.3、9.5~9.10、11、12、17のリストを利用した。9.4の *putting with a specified direction* は経路動詞のリストとして検証した。なお、*move* に関しては、松本 (2017) は、様態動詞と経路動詞、直示動詞のいずれにも分類できないとしているため、様態動詞と経路動詞のいずれのリストからも排除する。

<sup>57</sup> 使役移動のリストには、Talmy (2000) が例示した *pick* も含める。

<sup>58</sup> 自律移動は1.3.2、使役移動は2.2.2のリストを利用した。

<sup>59</sup> Wienold (1995) が取り上げた韓国語の様態動詞は自律移動しかない。使役移動に関しては、参考できる韓国語の先行研究がなかったので、使役移動の様態は、実際に移動する被使役者側における運動パターンや速度、力動性、態度、道具、姿勢になるもの(Slobin 2004, Slobin 2006)を想定した。使役移動の使役手段動詞に関しては、英語に対して韓国語で何らかの動詞が用いられている際に、日本語でも使役手段動詞が用いられ、その使役手段動詞と韓国語の動詞の辞書上の意味がある程度一致するか、英語にも日本語にもある使役手段動詞の意味に相当する動詞が韓国語にある場合(具体的には、던지다(投げる), 밀다(押す), 끌다(引く), 집다(とる), 보내다(送る), 차다(蹴る))を想定している。

<sup>60</sup> 英語では、Talmy (2000) がスペイン語のように移動の経路が動詞の意味に表現された *advance, arrive, ascend, circle, cross, descend, enter, exit, join, pass, return, separate, approach, depart, follow, leave, near, part, proceed, rise* を経路動詞として判断した。Levin (1993) では、51.1(自律移動の経路動詞)と9.4(使役移動の経路動詞)を参考にした。日本語では、松本 (1997) の1.3.1(自律移動の経路動詞)と2.2.1(使役移動の経路動詞)のリストを利用した。韓国語では、Wienold (1995) に加え、Bowerman and Choi (1991) も参考にした(表1)。

<sup>61</sup> 例えば、「ボーチの階段を駆け上がり、邸内へ行った。(小川 2009:233)」では、前項動詞の「駆け」が動詞の連用形でも、後項動詞の「上がり」は定形動詞の主動詞ではないので、主動詞との結びつきが弱いとしている。しかし、4章以降では、「ボーチの階段を駆け上がり」と「邸内へ行った」の2つの事象の連続性を重視するために、先行する「ボーチの階段を駆け上がり」で主動詞ではない後項動詞が強いられているとして、前項動詞の「駆け」と主動詞の結びつきが弱いことではないとやり直している。つまり、表現レベルの問題ではなく、複数の事情が連なる物語をどう捉えているのかという事象レベルの問題としてやり直している。今後はコーディングを文単位ではなく、事象単位にしていける必要がある。

<sup>62</sup> 例えば、「ふたりは"大通り"を端から端まで歩き、<ポット 5>と記された金属のドアの前に着いた。(越前 2010:191)」がある。

<sup>63</sup> 統語的複合動詞は「～始める」、「～続ける」、「～終る」、「～終える」、「～合う」、「～かける」、「～切る」、「～出す」、「～直す」、「～そこなう」、「～すぎる」、「～つける」、「～慣れる」、「～ぬく」、「～まくる」などを後項動詞とする複合動詞を指す。影山 (1993) によると、統語的複合動詞は、意味の不透明化や語彙化が進んでいない。「手紙を書き終える」=「手紙を書くことを終える」、「雨が降り始める」=「雨が降ることが始まる」のように、補文関係として分析できるという。また、その生産性は高い。辞書に登録しておく必要はなく、後項動詞と結合する前項動詞に語彙的制限はない。さらに、統語的複合動詞では、様々な統語的な側面として、①「そうする」で代用しても問題がない(太郎がまだ走っているのを見て、次郎もそうし続けた)。②「お～になる」という主語尊敬表現にしても成り立つ(歌い始める=お歌いになり始める)。③前項動詞の受身形が成立する(愛され続ける)。以上のことから、統語的複合動詞は、前項動詞と後項動詞の結合度が高くはないと言える。言い換えると、前項動詞は、後項動詞への統語度が高くはないとも言える。そのため、本稿では、主動詞への統語度が高くはないと判断した。

<sup>64</sup> 副詞の扱いについては、動詞のテ形や連用形などと同じ非主要部としていいのかという疑問の声もある。今後は副詞を排除した非主要部の検証をしていく必要がある。

の連結語尾がないか<sup>65</sup>、連結語尾の「어/아(e/a、音韻環境による使い分け)」が入り、かつ②辞書<sup>66</sup>に登録されているものを主動詞との結びつきが強い非主要部とする。連結語尾の「어/아(e/a)」が入っても、辞書に登録されていないもの<sup>67</sup>や、補助動詞を後項動詞とするもの<sup>68</sup>、文と文を結ぶもの、後項動詞が主動詞ではないものは、主動詞との結びつきが強い非主要部とする。「어/아(e/a)」以外の連結語尾も主動詞との結びつきが強い非主要部とする。そのほか、様態の副詞を主動詞との結びつきが弱い非主要部とし、計3段階の非主要部を抽出する。

・基準7：主動詞の判断基準は、松本 (2017)を踏襲し、①時制や数、人称を表す定形動詞 (finite verb)で、②項構造 (主語) を決めるものとする。英語の to 否定詞や動名詞は定形動詞ではないので、主動詞には含めない。述語が2つ以上存在する複文では、名詞を修飾する場合を除き、定形動詞は全て抽出する。

・基準8：「引っ張る」や「引きずる」のように、非主要部と主要部の動詞の1語化が進んだ場合は、1語として見なす。韓国語の複合動詞では、前項動詞が本来の意味から離れると、動詞本来の形態を表記しないとされている<sup>69</sup>。日本語でも、「引っ張る」や「引きずる」のように、本来の形態を表記しない場合は、本来の意味から離れていると見なし、動詞全体を1語とする。

### 3.3 予備調査

本調査に入る前に、先行研究を追試する形で予備調査を行う。以下、Koga et al. (2008)とSlobin (2005)について、検証1を日本語と韓国語で追試する。予備調査を検証1に限る理由は、検証できる先行研究が自律移動を対象にしたものしかないためである。

まず、Koga et al. (2008)を日本語と韓国語で追試する。Koga et al. (2008)は、日本語の小説の『ノルウェイの森(村上春樹、1987)』からの英語とドイツ語、ロシア語の対応を調べているので、既にある各言語のデータに加え、韓国語の翻訳小説<sup>70</sup>での対応を検証した。その結果、日本語と韓国語の主動詞は、次のように、経路動詞や直示動詞の頻度が高く、

<sup>65</sup> 前項動詞と後項動詞の間に連結語尾が入らない韓国語の複合動詞は「뛰놀다」や「굽주리다」、<sup>66</sup> 韓国国立国語院の標準国語大辞典[표준국어대사전]に登録されていれば、主動詞への統語度は高いと判断した。

<sup>67</sup> 例えば、「우리는 계단을 천천히 걸어내려갔다.(Kim 2009:192)」では、前項動詞の「걷다」に連結語尾の「어/아(-e/a)」は付くが、辞書に「걸어내려가다」が登録されていない(「내려가다」は登録されている)ので、主動詞への統語度は高くないと判断する。

<sup>68</sup> 韓国語の補助動詞は、「-어/아 가다(-e/a tayta, 継続・進行)」、「-어/아 내다(-e/a tayta, 終了)」、「-어/아 놓다(-e/a nohta, 状態の持続)」、「-어/아 대다(-e/a tayta, 繰り返し)」、「-어/아 두다(-e/a twuta, 結果の維持)」、「-어/아 드리다(-e/a tulita, 奉仕)」、「-어/아 버리다(-e/a pelita, 終了)」、「-어/아 보다(-e/a pota, 試行)」、「-어/아 오다(-e/a ota, 継続・進行)」、「-어/아 치우다(-e/a chiwuta, 終了)」、「-어/아 주다(-e/a cwuta, 奉仕)」、「-어/아 지다(-e/acita, 受身)」を後項動詞とする複合動詞を指す。前項動詞と補助動詞の間には分かち書きをするのが原則で(보조용언은 띄어 씀을 원칙으로 하되, 경우에 따라 붙여 씀도 허용한다(ハングル綴りの法則[한글맞춤법]第47項))、次のような助詞の挿入もできるので、後項動詞への統語度は高くとは言える。

a. 책을 읽어도 보고…  
本-ACC 読む-PART-PT みる-PART  
‘本を読んでもみて’

<sup>69</sup> 韓国語の複合動詞での前項動詞が本来の意味から離れている場合については(41)を参照。

<sup>70</sup> 韓国語の翻訳小説『상실의 시대(sangsiluy sitay, 1989)』から抽出して作成した。

様態動詞は多くなかった。

	経路動詞	直示動詞	様態動詞
日本語[original]	178	151	47
英語	87	86	95
ドイツ語	73	100	86
ロシア語	60	0	247
韓国語	120	200	46

表4 『ノルウェイの森(上)』で見られる主動詞の頻度<sup>71</sup>

表4は、Koga et al. (2008)を追試した各言語の主動詞の頻度をまとめたものである。直示動詞は、前述したように、個別言語の特徴による頻度の違いが見られる。同じS言語でも英

<sup>71</sup> 表4はKoga et al. (2008)が収録されている東京大学21世紀プログラム『空間移動の言語表現の類型論的研究2』の第二部：資料編にある日本語の経路(non-deictic path)動詞の178例、直示経路(deictic path)動詞の151例、様態(manner)動詞の47例を追試した結果である。日本語と英語、ドイツ語、ロシア語の頻度は、次のように、Koga et al. (2008)の表1と表3、表5、表6に近い結果になるように追試した(())はKoga et al. (2008)の頻度。

	一致(CONF)	不一致(N-CONF)	対応なし(NO-COR)	計(日本語)
英語	14(28)	40(27)	22(21)	76
ドイツ語	13(28)	31(17)	32(31)	76
ロシア語	0(0)	64(64)	12(12)	76

表1の追試：直示経路のみ(主動詞が直示経路)の場合

ただし、表1では、英語の頻度が追試ではたいぶ異なる。日本語と一致しない英語の頻度は40例もあるが、そのうち様態の情報が含まれる5例と経路(non-deictic path)の情報のみの10例はKoga et al. (2008)の内訳にもある内容で、追試でも一致している。残りは、直示経路に加え、ほかの情報も含まれているかどうかで日本語との一致と不一致の判定が分かっているようだが、いずれにしても、直示経路を主動詞としているので、主動詞の頻度をまとめている本稿では問題にならない。また、表1では、ドイツ語の頻度も追試ではたいぶ異なる。日本語と一致しないドイツ語の頻度は31例だが、そのうち様態の情報が含まれる5例と経路の情報のみの7例はKoga et al. (2008)の内訳にもある内容で、追試でも一致している。残りは、直示経路に加え、ほかの情報も含まれているかどうかで、主動詞の頻度をまとめている本稿では、主動詞を直示経路として頻度を数えた。表1以外では、次のように、Koga et al. (2008)に近い結果になっている。

	一致(CONF)	不一致(N-CONF)	対応なし(NO-COR)	計(日本語)
英語	15(15)	29(29)	3(13)	57
ドイツ語	13(28)	31(17)	32(31)	57
ロシア語	0(0)	49(49)	8(8)	57

表3の追試：直示経路と経路(主動詞が直示経路)の場合

	一致(CONF)	不一致(N-CONF)	対応なし(NO-COR)	計(日本語)
英語	72(71)	51(47)	25(26)	148(144)
ドイツ語	43(40)	68(66)	37(38)	148(144)
ロシア語	39(38)	80(77)	29(29)	148(144)

表5の追試：経路のみ(主動詞が経路)の場合

	一致(CONF)	不一致(N-CONF)	対応なし(NO-COR)	計(日本語)
英語	17(17)	12(12)	7(7)	36
ドイツ語	4(5)	25(23)	7(8)	36
ロシア語	18(19)	12(13)	5(4)	36

表6の追試：様態のみ(主動詞が様態)の場合

このように、Koga et al. (2008)の表1と表3、表5、表6に近い結果になるように追試したが、本稿ではどの成分が主動詞なのかを数えているので、どう反映されているのかわかりにくい側面がある。なお、Koga et al. (2008)の判定基準は、本稿の基準と一部異なる場合もあるが、表4の韓国語の判定は、Koga et al. (2008)の基準に合わせる形で行った。

語は 86 例、ドイツ語は 100 例、ロシア語は 0 例となっている。日本語と韓国語では、韓国語の頻度が 200 例で、日本語の 151 例より多い。しかし、経路動詞では、日本語が 178 例で、韓国語の 120 例より多い頻度となっている。いずれにしても、両言語の頻度は、S 言語の英語とドイツ語、ロシア語より多い。一方、様態動詞の頻度は、日本語が 47 例、韓国語は 46 例で、英語の 95 例より少ない。両言語の頻度はドイツ語の 86 例より少なく、ロシア語の 247 例よりも少ない。このように、両言語は経路や直示を主動詞にする頻度が S 言語より高い一方、様態を主動詞にする頻度は S 言語より少ない。このことから、両言語は経路を動詞で表す V 言語であることが確認できる。

しかし、両言語の様態は非主要部でも表現できる。中には、主動詞との結びつきが強いものもある。まず、日本語の非主要部の様態を調べると、次のように、その頻度が主要部の様態より高い。

	連用形	テ形	ながら	副詞	計
日本語	21	14	4	23	62

表5 日本語で見られる非主要部の様態の頻度<sup>72</sup>

表5は、表4と同じ範囲内の日本語で見られる非主要部の様態形態ごとの頻度をまとめたものである。非主要部の様態は62例で、主要部の様態(表4)の47例より多い。非主要部の様態では、様態の副詞が23例で最も多いが、動詞の連用形も21例となっている。動詞の連用形は、前述したように、主動詞との結びつきが強いので、様態概念は連用形+主動詞として一緒に表されやすいと予想したが、その予想が一部合っている結果とも言える。つまり、動詞の連用形の様態は、様態の副詞ほど表されやすい様態ではないが、様態の副詞に次ぐ頻度で、非主要部の様態全体の3分の1を占めているので、主動詞と一緒に表されやすい側面はある。一方、韓国語の非主要部の様態では、次のように、主動詞との結びつきが強い連結語尾の頻度が高い。

	連結語尾の-e/a	-e/a以外の連結語尾	副詞	計
韓国語	34	11	17	62

表6 韓国語で見られる非主要部の様態の頻度

表6は、表4と同じ範囲内の韓国語で見られる非主要部の様態の頻度をまとめたものである。韓国語でも、非主要部の様態が62例で、主要部の様態(表4)の46例より多い。非主要部の様態では、連結語尾の「-어/아(-e/a)」が入る動詞の頻度が34例で最も多い。様態の副詞は17例で、連結語尾の「-어/아(-e/a)」の半分以下になっている。連結語尾の「-

<sup>72</sup> 非主要部の様態の調査は、主要部以外の全ての様態の頻度をまとめた。例えば、様態を主動詞とする場合でも、副詞の様態があれば、非主要部の様態として頻度を数えた。表6の韓国語の調査も同様である。

어/아(-e/a)」が入る動詞は、前述したように、主動詞との結びつきが強いので、様態概念は連用形+主動詞として一緒に表されやすいと予想したが、予想通りの結果となっている。このように、日本語と韓国語では非主要部の様態が多い。両言語とも、非主要部の様態の中でも、主動詞との結びつきが強い動詞の連用形や連結語尾の動詞が多く見られる。例えば、次のような例が挙げられる（四角で囲った部分が様態）。

- (49) a. 結局ある日突然外に出てって電車に $\square$ とびこんじゃったんだって。  
 b. And then suddenly one day he left the house and  $\square$ jumped in front of the train.  
 c. Und dann ging er eines Tages plötzlich aus und  $\square$ warf sich vor einen Zug.  
 ‘and then walked he one day suddenly from and threw oneself front of one person a train’  
 d. a v knoce knocov v odin prekrasnyj den’ iz doma sbezhal i  $\square$ brosilsja pod poezd.  
 ‘but in the end night in one beautiful day’ of ran away at home and quit under the train’  
 e. 결국 어느 날 갑자기 집을 나가선 전철에  $\square$ 뛰어들었다는  
 kyeIkwuk enu nal kapcaki cip-ul na-ka-sen cenchel-ey  $\square$ ttwi-e-tul-essta-nun  
 結局 ある日突然 家-ACC 出-行く -PART 電車-toward とぶ-PART-入る-PS-PT  
 거야.  
 (Koga et al. 2008, 一部修正)  
 keya  
 ものよ  
 ‘結局ある日突然家を出て行っては電車に飛び込んだって’

(49)は、日本語と韓国語の非主要部の様態を示している。日本語では、移動の様態が「とび」という動詞の連用形、韓国語では「뛰어(とび)」という連結語尾の「-어(-e)」が入る動詞で表され、両言語とも主動詞との結びつきが強い非主要部の様態を表している。一方、英語では、移動の様態が主動詞の *jumped*、ドイツ語は動詞句の *warf sich(threw oneself)*、ロシア語は主動詞の *brosilsja(quit)* で表され、いずれも主要部が様態となっている。このように、日本語と韓国語では、主動詞との結びつきが強い非主要部で様態が表されている。

検証1では、経路を動詞で表す V 言語の日本語や韓国語でも、非主要部の様態は多いと予想したが、Koga et al. (2008)の追試では、予想通りの結果になった。両言語の非主要部の様態は主要部の様態より多く、非主要部の様態では、主動詞との結びつきが強い動詞の連用形や連結語尾の「-어/아(-e/a)」の入る動詞が多いか多い方だった。主動詞との結びつきが強い動詞の連用形や連結語尾の「-어/아(-e/a)」の入る動詞それ自体は主動詞の頻度より少なかったので、主要部以外の選択肢それぞれの頻度を合わせてはじめて主動詞の様態より多くなることがわかった。主動詞との結びつきが強い動詞の連用形や連結語尾の「-어/아(-e/a)」の入る動詞を含む非主要部の様態全体の実態を見ていく必要があるだろう。

このように、両言語の非主要部が表す様態は多く、主要部だけでは少ない様態の頻度は、非主要部の様態も含めた様態表現だと英語より多い。日本語は 109 例（主要部の 47 例と



非主要部の 62 例)、韓国語は 108 例(主要部の 46 例と非主要部の 62 例)で、英語の 105 例(主要部の 95 例と非主要部の 10 例<sup>73</sup>)より多い。ロシア語の 264 例(主要部の 247 例と非主要部の 17 例)には及ばないが、ドイツ語の 103 例(主要部の 86 例と非主要部の 17 例)より多い頻度となっている。このように、両言語では、主要部の様態は少ないが、非主要部の様態は多く、主要部と非主要部の様態を合わせた様態表現の頻度は、英語やドイツ語並みに多い。

以上、Koga et al. (2008)を日本語と韓国語で追試した予備調査では、検証 1 が予想した通り、両言語の非主要部の様態は主要部の様態より多く、主要部だけでは少ない様態でも、非主要部の様態も含めた様態表現の頻度だと英語より多かった。また、両言語の非主要部の様態では、主動詞との結びつきが強い動詞の連用形や連結語尾の「-어/아(-e/a)」が多いことが確認できた。確かに、非主要部の様態では、様態の副詞が多かったり、結びつきが強くない非主要部も含めないと、主要部の様態より多くないので、非主要部の様態全体の実態を見ていく必要はある。

次に、Slobin (2005)を日本語と韓国語で追試する。Slobin (2005)は、英語の小説の『Hobbit (J.R.R. Tolkien, 1937)』と 10 ヶ国語の翻訳小説で検証している。まず、Slobin (2005)が検証した英語と 10 ヶ国語の翻訳小説での対応を S 言語と V 言語で分けて示すと、以下の通りになる。

	トークン頻度(様態表現)	タイプ頻度(様態動詞)
英語[original]	61	26
オランダ語	62	22
ドイツ語	63	24
ロシア語	57	30
セルビア・クロアチア語	65	26
S 言語(平均)	62.2	25.6

表 7 Slobin (2005)の S 言語の頻度

<sup>73</sup> 英語とドイツ語、ロシア語の非主要部の様態は、以下のような頻度となった(Mvnf : non-finite manner verb, Madv : manner adverb, Madp : manner adposition, Mx : manner satellite)。

	Mvnf	Madv	Madp	Mx	計
英語	3	2	5	0	10
ドイツ語	3	3	5	4	17
ロシア語	2	10	5	0	17

	トークン頻度(様態表現)	タイプ頻度(様態動詞)
フランス語	48	17
イタリア語	54	22
ポルトガル語	46	12
スペイン語	59	19
ヘブライ語	49	17
トルコ語	56	16
V 言語(平均)	52	17.2

表8 Slobin (2005)のV言語の頻度

表7と表8は、Slobin (2005)が検証した各言語の様態表現(manner expressions)のトークン頻度と様態動詞のタイプ頻度をS言語とV言語でそれぞれ示している。英語をはじめ、オランダ語、ドイツ語、ロシア語、セルビア・クロアチア語のS言語はトークン頻度が62.2例(平均)で、フランス語とイタリア語、ポルトガル語、スペイン語、ヘブライ語、トルコ語のV言語の52例(平均)より多い。また、S言語では、様態動詞のタイプ頻度も25.6種類(平均)で、V言語の17.2種類(平均)より多い。

日本語と韓国語の翻訳小説で検証してみると、様態表現のトークン頻度はV言語を上回るが、様態動詞のタイプ頻度は非常に低い。各頻度をまとめると、次のようになる。

	トークン頻度(様態表現)	タイプ頻度(様態動詞)
英語[original]	61	26
V言語(平均)	52	17.2
日本語	55	6
韓国語	60	3

表9 『Hobbit』を日本語と韓国語で追試した頻度<sup>74</sup>

表9は、日本語と韓国語の様態表現のトークン頻度と様態動詞のタイプ頻度を示している。様態表現のトークン頻度は、主要部の様態と非主要部の様態を合わせた頻度で、日本語が

<sup>74</sup> Slobin (2005)は各言語の頻度を示しても、具体的にどの用例が様態表現または様態動詞として抽出されているのかは示していない。まず、英語の追試では、Slobin (2005)が対象とした『Hobbit』の第6章で、Slobin (2005)が取り上げた clamber, climb, crawl, creep, limp, march, run, scramble, scuttle, slide, swarm, wander を含め、表7のように、様態表現のトークン頻度が64例、様態動詞のタイプ頻度が26例になるように追試した。その結果、非主要部の経路を伴う様態動詞のみを抽出した場合、主要部の様態動詞は52例、非主要部の様態は9例が見られた。主要部と非主要部の様態を合わせた様態表現のトークン頻度は61例になった。様態動詞のタイプ頻度は、Slobin (2005)が取り上げた clamber, climb, crawl, creep, limp, march, run, scramble, scuttle, slide, swarm, wander のほか、bound, dash, flee, fly, jump, leap, nip, push, roll, rush, squeeze, sweep, trot, trudge の計26種類を抽出した。以下の分析では、この数字に基準す。一方、日本語と韓国語の追試では、Slobin (2005)が検証していないので、日本語の翻訳小説『ホビット―ゆきてかえりし物語 (山本史郎訳、2012)』と韓国語の翻訳小説『호빗(이미애 옮김, 2005)』から抽出して作成した。日本語と韓国語の判定は、Slobin (2005)を追試して抽出したデータに対応する形で行った。Slobin (2005)の様態表現または様態動詞に対する基準は、本稿の基準とは一部異なるが、Slobin (2005)を追試したデータから読み取れる基準に合わせる形で追試を行った。

55 例、韓国語が 60 例だった。両言語とも英語の 61 例より少ないが、V 言語平均の 52 例より上回る頻度となっている。一方、様態動詞のタイプ頻度は、両言語とも非常に少ない。日本語は 6 例しかなく、韓国語も 3 例しかない。英語の 26 例より遥かに少なく、V 言語平均の 17.2 例よりも少ない。

両言語とも様態動詞のタイプ頻度が低いのは、両言語の様態が主動詞として表現される頻度が低いことによる。様態が主動詞として現れる頻度は、日本語が 6 例、韓国語は 3 例しかない。それでも、両言語の様態表現のトークン頻度が Slobin が調査した V 言語の平均を上回るのは、主要部の様態動詞よりも、複合動詞の前項動詞のような非主要部の様態が多いためである。例えば、次のような例が挙げられる。

(50) a. “So I **jumped** over him and escaped,” (Tolkien[original] 1937:110)

b. 「ボクは頭の上を**とび**越して、逃げに逃げた。 (山本[訳] 2012:169)

c. “그래서 그 녀석 위로 **뛰어**넘어서 도망쳤지요.” (Lee[訳] 2002:145)

kulayse ku lyesek wi-lo **ttwi-e**-nem-ese tomangchi-ess-ciyo

だから その 奴 上-to とぶ-PART 超える-PART 逃げる-PS-POL

‘だからその奴の上に飛び越えて逃げました’

(50)では、英語に対応する日本語と韓国語の非主要部の様態を示している。英語の様態動詞の *jumped* は、日本語では「とび」という動詞の連用形で対応し、韓国語では、「뛰어(とび)」という連結語尾の「-어(-e)」が入る動詞で対応している。両言語とも、英語のような様態の主動詞ではないが、主動詞との結びつきが強い動詞の連用形や連結語尾の「-어/아(-e/a)」が入る動詞で対応している。このように、両言語の様態は非主要部で表されている。

このような追試は、検証 1 が予想した日本語と韓国語の非主要部の様態の高頻度と一致する。両言語の非主要部の様態は主要部の様態より多く、非主要部の様態では、次のように、主動詞との結びつきが強い動詞の連用形や連結語尾が多い。

主要部	非主要部				計
	連用形	テ形	ながら	副詞	
6	20	7	5	17	55

表 1 0 『Hobbit』 を追試した日本語の様態表現の内訳

主要部	非主要部			計
	連結語尾の-e/a	-e/a 以外の連結語尾	副詞	
3	31	10	16	60

表 1 1 『Hobbit』を追試した韓国語の様態表現の内訳

表 1 0 と表 1 1 は、Slobin (2005)を追試した日本語と韓国語の様態表現の内訳を示している。いずれも、その合計は表 9 の様態表現の頻度に当たる。表 1 0 の日本語では、主要部の様態が 6 例で、残りの 49 例は非主要部の様態となっている。非主要部の様態が主要部の様態より多く、非主要部の中でも、動詞の連用形が 20 例で最も多い。一方、表 1 1 の韓国語でも、主要部の様態が 3 例で、残りの非主要部の様態の方が多い。非主要部の様態では、連結語尾の「-어/아(-e/a)」のつく動詞の頻度が 31 例で最も多い。このように、両言語は非主要部の様態が多い。両言語の非主要部の様態は主要部の様態より多く、非主要部の様態では、主動詞との結びつきが強い動詞の連用形や連結語尾の「-어/아(-e/a)」がつく動詞が多かった。

しかし、Slobin (2005)は様態表現しか抽出していない。Koga et al. (2008)のように、様態の情報がない経路動詞や直示動詞からの対応も検証し、英語になかった様態の情報が日本語や韓国語で加わる場合も含めると、次のように、両言語とも英語と同じか英語を上回る頻度になる。

	トークン頻度(様態表現)	タイプ頻度(様態動詞)
英語[original]	61	26
日本語	61	6
韓国語	65	3

表 1 2 英語の経路動詞からの対応も含めた日本語と韓国語の頻度

表 1 2 は、英語の経路動詞からの対応も含めた日本語と韓国語の様態表現の頻度を示している。英語の経路動詞からの対応なので、英語の様態表現の頻度は表 9 とは変わらないが、日本語の頻度は 61 例、韓国語の頻度は 65 例となっている。両言語とも、英語の 61 例と同じか英語を上回る頻度となっている。英語の経路動詞からの対応では、日本語は 6 例、韓国語は 5 例が見られたが、いずれも非主要部の様態だったので、様態動詞のタイプ頻度は表 9 と変わらない。このように、日本語と韓国語の様態表現は、英語の経路動詞からの対応も含めると、その頻度は英語と同じか英語より多い。英語の経路動詞からの対応では、両言語とも非主要部の様態しかなく、例えば、次のような例が挙げられる。

- (51) a. Just at that moment the Lord of the Eagles swept down from above, seized him in his talons, and was gone. (Tolkien[original] 1937:124)
- b. ちょうどその瞬間、<ワシの王>がさっと舞いおりてきて、そのするどい爪でガンダルフをつかんで飛び去ったのです。 (山本[訳] 2012:190)
- c. 바로 그 때 독수리 왕이 높은 곳에서 공중을 스치듯  
palo ku ttay tokswuli wang-i nophun kos-eyse kongcwung-ul suchitus

ちょうど その 時 ワシ 王-NOM 高い 所-LOC 空中-ACC 擦るように  
 내려와 발톱으로 간달프를 움켜잡고는  
 nayli-e-wa palthop-ulo kantalphu-lul wumkhi-e-cap-konun  
 降りる-PART-来 爪-by ガンダルフ-ACC にぎる-PART-とる-PART  
날아가 버렸다. (Lee[訳] 2002:162)  
nal-a-ka peli-essta  
 飛ぶ-PART-行き しまう-PS  
 ‘ちょうどその時、ワシの王が高い所から空中を擦るように降りてきて爪でガンダ  
 ルフを握りしめては飛んで行ってしまった’

(51)は、英語の経路動詞に対応する日本語と韓国語を示している。英語の経路動詞の *was gone* に対し、日本語では、移動表現というより「飛び去ったのです」という結果状態で対応しているが、その際、「飛び」という動詞の連用形で様態が表されている。一方、韓国語では「날아가 버렸다(飛んで行ってしまった)」で対応し、そのうち、連結語尾の「-아(-a)」が入った「날아(飛んで)」で様態が表されている。このように、英語の経路動詞に対応する日本語と韓国語では、様態の情報が非主要部で表されている。英語の経路動詞に対応する両言語の様態表現はいずれも非主要部の様態で、英語の様態表現からの対応でも非主要部の様態が多かったことも考えると、両言語の非主要部の様態は、様態表現の頻度に貢献していると言える。どういう時に日本語や韓国語で英語にない様態が追加されるのかは興味深い問題だが、今後の課題にしていく。

Slobin (2005)については、Sugiyama (2005)も日本語で検証している。Sugiyama (2005)は、日本語が典型的な V 言語とは違い、様態表現において（特に口語では）様々な動詞の連用形とオノマトペという有効な手段があるとしている。例えば、次のような例を取り上げている。

(52) a. [wolves] run about → 走りまわる  
 b. [Bilbo] scuttle about → 走りまわる  
 c. [eagle] sweep off → 羽ばたきして飛び上がる (Sugiyama 2005:305、一部変更)

(53) a. [wolves] rush round and round the circle → 輪のまわりをぐるぐると走りまわる  
 b. [Lord of the Eagles] sweep down → さっと舞いおりる  
 c. slide away → ゴウゴウガラガラと滑り落ちる (Sugiyama 2005:307、一部変更)

(52)と(53)は、英語の様態を動詞の連用形やオノマトペで対応している日本語を示している。(52)では、英語の様態動詞の *run* と *scuttle*、*sweep* に対し、日本語では、動詞の連用形の「走り」や「飛び」で対応している。(52c)では、さらにテ形の「羽ばたきして」を加えて

いる。Sugiyama (2005)によると、英語が様態動詞と非主要部(satellite)で表現する移動事象は、日本語では、動詞の連用形で様態に対応し、主動詞で含意されていた経路を明示するのが一般的だと言う。また、(53)では、英語の様態動詞の *rush* に対して、動詞の連用形の「走り」とオノマトペの「ぐるぐると」、*sweep* に対しては、動詞の連用形の「舞い」とオノマトペの「さっと」で対応している（本稿でも(51)で紹介している）。*slide* に対しては、動詞の連用形の「滑り」とオノマトペの「ゴウゴウガラガラと」で対応している。Sugiyama (2005)は、動詞の連用形でも様態の対応が十分ではない場合、オノマトペが用いられるとしている。オノマトペが用いられることで、実際にその場面を見ているような鮮やかな様態の描写ができるという。

このように、Sugiyama (2005)は、動詞の連用形とオノマトペによる様態表現を取り上げ、日本語では、英語の様態が保持されているとしている<sup>75</sup>。本稿の追試でも、英語の様態表現からの対応（表9を参照）で、動詞の連用形と連結語尾の「-어/아(-e/a)」、オノマトペといった非主要部の様態が多かった（表10と表11を参照）ので、Sugiyama (2005)とは一致している側面もある<sup>76</sup>。

以上、Slobin (2005)を日本語と韓国語で追試した予備調査では、検証1が予想した通り、両言語において非主要部の様態が多いことが確認できた。両言語の非主要部の様態は主要部の様態より多く、非主要部が表す様態では、主動詞との結びつきが強い動詞の連用形や連結語尾の「-어/아(-e/a)」のつく動詞が多かった。英語の経路動詞からの対応でも、両言語で新たに加わる様態表現は非主要部だった。

以上の予備調査では、Koga et al. (2008)とSlobin (2005)の追試を日本語と韓国語で行った。いずれの追試も、検証1が予想した両言語の非主要部の様態は多いことが確認できた。両言語の非主要部の様態は主要部の様態より多く、主要部だけでは少ない様態でも、非主要部の様態も含めた様態表現の頻度だと英語を上回るほど、非主要部の様態が多かった。非主要部の様態では、主動詞との結びつきが強い動詞の連用形や連結語尾の「-어/아(-e/a)」のつく動詞が多かった。ただし、主動詞との結びつきが強い動詞の連用形や連結語尾の「-어/아(-e/a)」のつく動詞の頻度が主要部の様態より低かったり、様態の副詞より低かった場合もあったので、主要部以外の選択肢それぞれの実態を見ていく必要がある。

以上の予備調査を踏まえ、本調査では、日本語と韓国語の非主要部の様態がどのくらい

<sup>75</sup> Sugiyama (2005)によると、非主要部の経路を伴う英語の様態動詞は、日本語の対応で様態が省かれるのは、27例のうち3例しかないで、英語の様態が保持されているという。ほかにも、その他が4例あるが、移動以外の動詞だったり、英語をそのまま翻訳していないものなので、これらを除くとしても、27例のうち20例は英語の様態が保持されることになるとしている。

<sup>76</sup> Sugiyama (2005)では日本語で検証した詳細を示していないが、Sugiyama (2005)の表1と表2の頻度からすると、様態動詞のみの移動表現も対象にしている。本稿の追試では、非主要部の経路を伴う様態動詞のみを抽出しているので、本稿の追試とSugiyama (2005)はデータが一致していない。本稿の追試では、非主要部の経路を伴う様態動詞のみを抽出しても、Slobin (2005)の頻度を追試することができた。様態動詞のみの移動表現を含めるとしても、Sugiyama (2005)の表1と表2を合わせた日本語の様態表現は33例になる。様態表現が33例だと、Slobin (2005)のV言語平均の52例には届かないので、Sugiyama (2005)が検証したのは、様態表現ではなく、様態を主動詞とする用例になっている可能性が高い。つまり、様態表現は検証していない可能性がある。また、Sugiyama (2005)が取り上げた例からすると、日本語の訳が本稿の日本語の訳と一致していないので、用いられている日本語の翻訳小説が一致していない可能性も高い。

多いのか、もし多いとすれば、どういう特徴があるのかをさらに検証していく。主動詞との結びつきの強さは一部検証できたが、それが主要部の様態より少なかったり、様態の副詞に次ぐ頻度になる場合もあったので、さらなる検証と考察が必要になるだろう。

### 3.4 調査結果

#### 3.4.1 自律移動

自律移動では、検証1が予想した通り、日本語と韓国語の非主要部の様態が多かった。まず、主要部と非主要部について、様態が両方含まれている両言語の表現の頻度を示すと、次のようになる。

	作品①	作品②	作品③	作品④	作品⑤
英語[original]	68	64	62	50	73
日本語	38	31	35	33	39
韓国語	33	52	40	36	31

表1-4 自律移動における様態表現の頻度

表1-4は、英語に対応している日本語と韓国語の様態表現の頻度を示している。ここには、主要部と非主要部の様態が両方含まれているが、日本語と韓国語の頻度は英語より少ない。このように、両言語の様態表現は英語より少ないが、様態表現を主要部と非主要部の様態に分類してみると、次のように、非主要部の様態は両言語の方が英語より多い。

作品①	主要部	非主要部	計	作品②	主要部	非主要部	計
英語	58(85%)	10(15%)	68(100%)	英語	47(73%)	17(27%)	64(100%)
日本語	5(13%)	33(87%)	38(100%)	日本語	3(10%)	28(90%)	31(100%)
韓国語	3(9%)	30(91%)	33(100%)	韓国語	3(6%)	49(94%)	52(100%)

作品③	主要部	非主要部	計	作品④	主要部	非主要部	計
英語	51(82%)	11(18%)	62(100%)	英語	39(78%)	11(22%)	50(100%)
日本語	1(3%)	34(97%)	35(100%)	日本語	3(9%)	30(91%)	33(100%)
韓国語	2(5%)	38(95%)	40(100%)	韓国語	0(0%)	36(100%)	36(100%)

作品⑤	主要部	非主要部	計
英語	67(92%)	6(8%)	73(100%)
日本語	2(5%)	37(95%)	39(100%)
韓国語	1(3%)	30(97%)	31(100%)

表1-5 自律移動における主要部と非主要部の様態の頻度

表1-5は、英語と日本語、韓国語の様態表現を主要部と非主要部の様態に分類したものである。主要部の様態は、英語の頻度が日本語や韓国語より高く、様態表現のうち7~9割を占めている。日本語と韓国語の主要部の様態は全て一桁で、作品④の韓国語は1例も見られ



なかった。一方、非主要部の様態は、日本語と韓国語の方が多い。殆どの作品において様態表現の9割を占めている。このように、日本語と韓国語の様態表現は、主要部の様態が少なく、非主要部の様態が多い。両言語の様態表現は英語より少ないが、非主要部の様態に限ってみると、両言語の頻度は英語より多いことがわかる。両言語の非主要部による様態の表現の内訳を見ると、次のように、主動詞との結びつきが強い形態が多い。

	非主要部					計
	連用形	テ形	ながら	その他 <sup>77</sup>	副詞	
作品①	10	5	3	0	15	33
作品②	12	3	2	0	11	28
作品③	13	6	0	1	14	34
作品④	10	7	1	0	12	30
作品⑤	15	7	1	0	14	37

表 1 6 日本語の非主要部の様態の内訳

	非主要部			計
	連結語尾の-e/a	-e/a 以外の連結語尾	副詞	
作品①	12	1	17	30
作品②	23	5	21	49
作品③	17	4	17	38
作品④	23	0	13	36
作品⑤	22	4	4	30

表 1 7 韓国語の非主要部の様態の内訳

表 1 6 と表 1 7 は、日本語と韓国語の非主要部の様態の内訳を示している。両言語の非主要部の様態の合計は、表 1 5 の非主要部の頻度に当たる。日本語では、主動詞との結びつきが強い動詞の連用形が多く、韓国語では、主動詞との結びつきが強い連結語尾の「-어/아(-e/a)」が多い。しかし、様態の副詞も少なくない。両言語とも、様態の副詞の頻度が動詞の連用形や連結語尾の「-어/아(-e/a)」を上回るか同程度の頻度になっている。両言語の様態の副詞は、英語の副詞からの対応もあるので<sup>78</sup>、英語の副詞からの対応を除いて

<sup>77</sup> その他には、日本語の非主要部の様態が動詞の連用形やテ形、ながら節、副詞のいずれにも当てはまらないものを分類している。例えば、次のような例が挙げられる。

(1) a. I hadn't gone twenty yards when I heard my name and Gatsby stepped from between two bushes into the path.  
(Fitzgerald[original] 1925:184)  
b. 二十メートルとは歩かないうちに、名前を呼ばれたように思ったら、ギャツピーが植え込みを抜けて姿を現した。  
(小川[訳] 2009:233)

<sup>78</sup> 英語の副詞に対応する日本語と韓国語の副詞の様態は、例えば、次のような例が挙げられる。

(1) a. He burst jubilantly in.  
(Jones[original] 1986:135)  
b. 意気揚々と入ってきたのはマイケルでした。  
(西村[訳] 1997:131)

みると、次のように、半分ほどしか残らない（英語の副詞に対応しない頻度／副詞全体<sup>79)</sup>）。

	作品①	作品②	作品③	作品④	作品⑤
日本語	7 / 15	7 / 11	7 / 14	7 / 12	12 / 14
韓国語	9 / 17	14 / 21	9 / 17	8 / 13	3 / 4

表 1 8 英語の副詞に対応しない日本語と韓国語の副詞の頻度

表 1 8 は、英語に対応する日本語と韓国語の副詞（右：分母＝表 1 6 と表 1 7）のうち、英語の副詞に対応しない頻度（左：分子）を示している。全体の半分以上も一部あるものの、両言語の殆どの作品では、副詞のの半分ほどが英語の副詞に対応していない。例えば、次のように、英語の様態動詞に対応している。

(54) a. (Tom) hurried into the room. (Fitzgerald[original] 1925:150)

b. (トムは) すぐに室内へ入った。 (小川[訳] 2009:188)

c. (톰은) 서둘러 방 안으로 들어왔다. (Kim[訳] 2009:146)

setwulle pang an-ulo tul-e-o-assta

急いで 部屋 中-to 入る-PART-来る-PS

‘急いで部屋の中へ入って来た’

(55) a. Sophie creaked to her feet and hobbled to the bench. (Jones[original] 1986:106)

b. ソフィーは骨をきしませて立ちあがり、よたよた作業台へむかいました。

(西村[訳] 1997:104)

c. 소피는 삐걱거리며 일어나서 작업대 쪽으로  
sophi-nun ppiekkeli-mye ilena-se cakeptay ccek-ulo

ソフィー-TOP ギンギシする-PART 起き上がる-PART 作業台 方-to

절뚝절뚝 걸어갔다. (Kim[訳] 2004:95)

celttwukcelttwuk kel-e-ka-ssta

よたよた 歩く-PART-行く-PS

‘ソフィーはギンギシしながら起き上がり、作業台の方へよたよたと歩いて行った’

c. 그는 기쁨에 찬 얼굴로 뛰어들었다. (Kim[訳] 2004:119)

ku-nun kippumey chan elkwullo ttwi-e-tul-essta

彼-TOP 喜びに 満ちた 顔で とぶ-PART-入る-PS

‘彼は喜びに満ちた顔でとび入った’

<sup>79)</sup> 副詞全体の頻度は、表 1 6 と表 1 7 の副詞の頻度に当たる。

(54)と(55)は、英語の様態動詞に対応している日本語と韓国語を示している。(54)では、英語の様態動詞の *hurried* に対し、日本語は副詞の「すぐに」、韓国語では副詞の「서둘러 (急いで)」で対応している。両言語とも、様態を表すのは副詞しかなく、主動詞との結びつきが強い動詞の連用形や連結語尾の「-어/아(-e/a)」での様態は見られない。また、(55)では、英語の様態動詞の *hobbled* を、日本語は副詞の「よたよた」で対応している。「むかいました」という経路動詞では、*hobble* の「足を引きずって歩く」という様態は見られない。一方、韓国語では、副詞の「걸쑤걸쑤(よたよた)」で対応している。連結語尾の「-어/아(-e/a)」がついた「걸어(歩き)」の対応も見られるが、*hobble* の「足を引きずって歩く」という様態は、副詞の「걸쑤걸쑤(よたよた)」が対応していると言える。このように、両言語では、英語の様態動詞に対応するために副詞が存在する。

検証1では、日本語と韓国語は非主要部の様態が多く、非主要部の様態の中でも、主動詞との結びつきが強いものが多いと予想した。つまり、主動詞との結びつきが強い非主要部は多く、主動詞との結びつきが弱い様態の副詞は少ないと予想した。しかし、様態の副詞は少なくなかった。様態の副詞の半分ほどが英語に対応するために設けられている結果から、主動詞との結びつきの強い非主要部が多くても、必ずしも主動詞との結びつきの弱い非主要部が少ないことにはつながらないことになる。主動詞との結びつきが弱いと、その分情報は背景化されにくい、それでも主動詞との結びつきが弱い副詞の頻度が高いのは、両言語の移動の様態が主動詞との結びつきや情報の背景化とは関係なく表されることを意味するのだろうか。

一方、両言語の非主要部の様態では、主動詞との結びつきが強い動詞の連用形や連結語尾の「-어/아(-e/a)」のつく動詞が多かったが(表16と表17を参照)、同じ動詞の連用形や連結語尾の「-어/아(-e/a)」がつく動詞でも、主動詞との結びつきが強いとは限らない場合があった。例えば、次のような例が挙げられる。

(56) a. The two women **had walked** the length of “The Street”, arriving at a metal door marked POD  
5. (Brown[original] 2009:133)

b. ふたりは“大通り”を端から端まで**歩き**、<ポット 5>と記された金属のドアの前に着いた。  
(越前[訳] 2010:191)

c. 두 사람은 한참을 **걸어** 들어가 이윽고 5번 포드라는  
twu salam-un hanchamul **kel-e** tul-e-ka iukko 5pen photu-lanun  
二人-TOP しばらく 歩く-PART 入る-PART-行き やがて 5番 ポット-という  
표지판이 붙은 철문 앞에 도착했다. (An[訳] 2009:222)

phyociphan-i pwuthun chelmwun aph-ey tochakha-essta

表示板-NOM つく 鉄門 前-LOC 到着する-PS

‘二人はしばらく歩いて入って行き、やがて5番ポットという表示板がついた鉄門の前で到着した’

(56)では、主動詞との結びつきが強い動詞の連用形や連結語尾の「-어/아(-e/a)」を示している。英語の様態動詞の *had walked* 対し、日本語は動詞の連用形の「歩き」で対応しているが、動詞の連用形の「歩き」は、後続する主節の「<ポット 5>と記された金属のドアの前に着いた」と従属節の関係と結ばれている。主動詞の「着いた」とは、結びつきが強いとは言えない。一方、韓国語では、連結語尾の「-어/아(-e/a)」がついた「걸어(歩いて)」で対応しているが、後項動詞の「들어가(入っていき)」は主動詞ではない(定形動詞ではない)。主動詞は、後続する主節の「도착했다(到着した)」で、従属節の「걸어(歩いて)」とは結びつきが強いとは言えない。このように、両言語では、動詞の連用形や連結語尾の「-어/아(-e/a)」のつく動詞が主動詞との結びつきが強いとは限らない<sup>80</sup>。経路を動詞で表す V 言語である両言語において、同時に見られる様態の表されやすさを検証するためには、さらなる条件<sup>81</sup>を設けて、主動詞との結びつきの強さを厳密に調べる必要がある。両言語の非主要部の様態を主動詞との結びつきの強さでを3段階に分類すると、次のように、主動詞との結びつきが強いものは少ない。

日本語	主動詞との結びつきの強さ			計	韓国語	主動詞との結びつきの強さ			計
	強い	強くない	弱い			強い	強くない	弱い	
作品①	3	15	15	33	作品①	7	6	17	30
作品②	4	13	11	28	作品②	12	16	21	49
作品③	4	16	14	34	作品③	7	14	17	38
作品④	3	15	12	30	作品④	10	13	13	36
作品⑤	7	16	14	37	作品⑤	8	18	4	30

表 1 9 主動詞との結びつきの強さから分類した日本語と韓国語の非主要部の様態

表 1 9 は、日本語と韓国語の非主要部の様態を主動詞との結びつきの強さで分類している。両言語の非主要部の様態の合計は、表 1 6 と表 1 7 の合計に当たる。主動詞との結びつきが弱い頻度は、表 1 6 と表 1 7 の副詞、または表 1 8 の副詞全体である。日本語では、主動詞との結びつきが強くないか弱いものが多い。どの作品でも、主動詞との結びつきが強いものは最も少なかった。一方、韓国語では、主動詞との結びつきが弱いものが、作品⑤を除く全ての作品で多く見られた。作品⑤の韓国語でも、主動詞との結びつきが強くないものが最も多く、いずれにしても、主動詞との結びつきが強いものは少なかった。このように、両言語では、主動詞との結びつきが強い非主要部の様態は少ない。

検証 1 では、主動詞との結びつきが強い非主要部の様態が多いと予想したが、主動詞と

<sup>80</sup> (56)の例では、英語で分詞構文 *arriving* が使われている。分詞構文は背景的情報を表すことが多いが、この原文では結果を表していて、背景的とは言えない。日本語ではよく分詞構文を副詞的に訳すのだが、そうすると、歩くことと到着することの時間的順序が逆になる。この例では、時間的順序を保つことを優先させて、その結果、節の構造的なタイプ(主節と従属節)が入れ替わることになった、と考えられる。

<sup>81</sup> 統語的複合動詞の連用形など、さらなる条件の詳細は 3.2 の調査基準を参照。

の結びつきの強さを調べ直すと、予想した結果にはならなかった。経路を動詞で表す V 言語である両言語において、主動詞との結びつきが強い非主要部の様態が少なく、主動詞との結びつきが強くないか弱い非主要部の様態が多いのは、主動詞との結びつきの強さとは関係なく様態が表されるためなのではないだろうか。前述したように、様態の副詞が少なくなかったのも、主動詞との結びつきの強さとは関係なく様態が表されることを意味するためではないだろうか。

以上、自律移動では、日本語と韓国語の非主要部の様態が多いことがわかった。主要部と非主要部の両方の様態を合わせた様態表現の頻度は、両言語とも英語より少なかったが、非主要部の様態に限ってみると、両言語の方が英語より多かった。非主要部の様態でも、主動詞との結びつきが強い動詞の連用形や連結語尾の「-어/아(-e/a)」のつく動詞が多いように見えたが、主動詞との結びつきの強さを厳密に調べてみると、主動詞との結びつきが強いものは少なかった。主動詞との結びつきが弱い様態の副詞も少なくなかった。このことから、両言語の非主要部の様態が多いのは、主動詞との結びつきの強さとは関係ないと言えるかもしれない。検証 1 の結果をまとめると、次の通りになる。

(57) 検証結果 1 : 自律移動を表す日本語と韓国語では、非主要部の様態が多かった。

しかし、主動詞との結びつきが強い非主要部の様態は少なかった。

次節では、動詞の連用形や連結語尾の「-어/아(-e/a)」のつく動詞の様々な役割を見ていき、主動詞との結びつきが強いからこそ実現できる役割が存在することを示す。さらに、物語の特徴上、動詞の連用形や連結語尾の「-어/아(-e/a)」のつく動詞でも主動詞との結びつきが強くないことを示す。様態の副詞に関しては、特定の英語の様態動詞に対してよく設けられていることを示し、両言語の非主要部の様態が多いのは、やはり主動詞との結びつきの強さとは関連があることを示していく。

### 3.4.2 使役移動

次に、使役移動では、検証2が予想した通り、日本語と韓国語の移動の様態より、使役手段の方が多かった。まず、使役移動における手段の表現の頻度をまとめると、次のようになる。

	作品①	作品②	作品③	作品④	作品⑤
英語[original]	60	59	40	32	79
日本語	24	19	8	7	16
韓国語	13	22	19	9	20

表20 使役移動における手段の頻度

表20は、使役移動の英語に対応する日本語と韓国語において使役の手段が表現される頻度を示している。両言語の頻度は英語の半分以下で、実は、両言語では、使役手段でも使役移動の様態でもない「その他」が多い<sup>82</sup>。「その他」を除くと、両言語の手段の表現は、使役移動の様態より多い頻度となっている<sup>83</sup>。これらの手段の表現には、主要部と非主要部の手段が両方含まれているので、主要部と非主要部の手段に分類してみると、次のように、両言語は非主要部の手段が多い。

作品①	主要部	非主要部	計	作品②	主要部	非主要部	計
英語	55(92%)	5(8%)	60(100%)	英語	54(92%)	5(8%)	59(100%)
日本語	0(0%)	24(100%)	24(100%)	日本語	2(10%)	17(90%)	19(100%)
韓国語	1(8%)	12(92%)	13(100%)	韓国語	3(16%)	16(84%)	19(100%)

<sup>82</sup> 使役移動の英語に対応している日本語と韓国語では、次のように、「その他」の対応が多かった。「その他」には、使役手段でもない使役移動の様態でもない動詞が含まれている。作品によっては、「その他」の対応が「対応あり」を下回る場合もあるが、いずれも「対応あり」に迫るような頻度となっている。なお、「対応あり」には、使役手段や使役移動の様態で対応する場合なので、使役の手段のみを対象としている表20の頻度とは一致しない。「対応なし」は、経路動詞で対応し、使役手段や使役移動の様態は省かれている場合を指す。

作品①	対応あり	対応なし	その他	作品②	対応あり	対応なし	その他
日本語	28	12	22	日本語	25	11	28
韓国語	16	23	24	韓国語	27	13	21
作品③	対応あり	対応なし	その他	作品④	対応あり	対応なし	その他
日本語	7	4	28	日本語	7	3	24
韓国語	20	6	14	韓国語	9	10	14
作品⑤	対応あり	対応なし	その他				
日本語	17	11	58				
韓国語	22	15	47				

<sup>83</sup> 日本語と韓国語の使役移動の様態表現の頻度は、以下のようになる。様態表現の頻度には、主要部と非主要部の様態が両方含まれている。

	作品①	作品②	作品③	作品④	作品⑤
英語	4	6	0	1	6
日本語	4	4	1	0	1
韓国語	0	5	1	0	2

作品③	主要部	非主要部	計	作品④	主要部	非主要部	計
英語	37(92%)	3(8%)	40(100%)	英語	32(100%)	0(0%)	32(100%)
日本語	1(13%)	7(87%)	8(100%)	日本語	1(14%)	6(86%)	7(100%)
韓国語	3(16%)	16(84%)	19(100%)	韓国語	4(44%)	5(56%)	9(100%)

作品⑤	主要部	非主要部	計
英語	78(99%)	1(1%)	79(100%)
日本語	3(19%)	13(81%)	16(100%)
韓国語	4(20%)	16(80%)	20(100%)

表 2 1 使役移動における主要部と非主要部の手段の頻度

表 2 1 は、英語と日本語、韓国語の手段の表現を主要部と非主要部に分類したものである。主要部が手段を表す用例は、英語が日本語や韓国語より多い。英語は手段の 9 割以上が主要部の動詞で、作品④では、全ての手段の表現が主動詞となっている。一方、日本語と韓国語では、主要部の手段は数例しかなく、日本語の場合、5 作品中 2 作品も主要部の手段が 1 例しかない。作品①の日本語は、全ての手段の表現が非主要部となっている。両言語とも手段表現の 8~9 割は非主要部となっている（作品④の韓国語は除く）。このように、両言語の手段の表現は非主要部が多い。さらに、両言語の非主要部の手段の内訳を見ると、次のように、主動詞との結びつきが強いものが多かった。

	主動詞との結びつきの強さ			計		主動詞との結びつきの強さ			計
	強い	強くない	弱い			韓国語	強い	強くない	
日本語					韓国語				
作品①	5	14	5	24	作品①	1	5	6	12
作品②	5	6	6	17	作品②	1	9	6	16
作品③	1	3	3	7	作品③	4	9	3	16
作品④	4	2	0	6	作品④	0	5	0	5
作品⑤	5	7	1	13	作品⑤	4	10	2	16

表 2 2 主動詞との結びつきの強さから分類した日本語と韓国語の非主要部の手段

表 2 2 は、日本語と韓国語の非主要部の手段の内訳を示している。動詞の連用形やテ形などで分類することもできるが、自律移動でも述べたように、動詞の連用形や連結語尾の「-어/아(-e/a)」がつく動詞でも、主動詞との結びつきが強い場合があるので、さらなる条件を設け、主動詞との結びつきの強さを分類する必要がある。その結果、両言語とも、主動詞との結びつきが強い弱いか弱いもの多く、いずれも主動詞との結びつきの強いものは少なかった（作品④の日本語は除く）。韓国語の場合、作品④では、主動詞との結び

つきが強いものが 1 例もなく、作品①と作品②では、主動詞との結びつきが強いものが 1 例しかない。日本語でも、作品③では、主動詞との結びつきが強いものが 1 例しかない。例えば、次のような非主要部の手段が挙げられる（四角で囲った部分が手段）。

(58) a. Michael threw two logs on Calcifer and called him. (Jones[original] 1986:142)

b. マイケルはまきを二本暖炉に投げこみ、カルシファーに呼びかけましたが、  
(西村[訳] 1997:137)

c. 마이클은      칼시퍼에게      장작   두 개비를 던지고      이름을  
maikhul-un      khaylsiphe-eykey      cangcak twu kaypi-lul tenci-ko      ilum-ul  
マイケル-TOP      カルシファー-DAT      まき      二   本-ACC      投げる-PART      名前-ACC  
불렀다.  
(Kim[訳] 2004:125)

pwull-essta

呼ぶ-PS

‘マイケルはカルシファーにまきを二本投げて名前を呼んだ’

(58)は、英語に対応する日本語と韓国語の非主要部の手段を示している。英語の *threw* に対し、日本語では、動詞の連用形の「投げ」で対応しているが、「投げ」との結びつきがある「こみ」は主動詞ではない。主動詞は、後続する主節の「呼びかけました」だが、従属節にある「投げ」とは結びつきが強いとは言えない。一方、韓国語では、連結語尾の「고(ko)」がついた「던지고(投げて)」で対応している。連結語尾の「고(ko)」は、前後する文章を対等的に繋ぐ対等的連結語尾で、連結語尾の「-어/아(-e/a)」より主動詞との結びつきが弱い。このように、両言語では、非主要部の手段と主動詞の結びつきは強くない。

検証 2 では、日本語と韓国語の使役の手段が多いのは、手段が主動詞との結びつきが強く、その分背景化が進んでいるためだと予想した。しかし、実際に調べてみると、両言語の使役の手段は多かったものの、使役の手段では主動詞との結びつきが強くないものは多いことがわかった。つまり、主動詞との結びつきが強い使役の手段は少なかったので、使役の手段が多くても、主動詞との結びつきの強さとは関係ないように見える。

一方、両言語の使役の手段が多いのは、そもそも英語の手段表現が多い影響もある<sup>84</sup>。ソース言語の特徴がターゲット言語でも見られることは、次のような使役移動の下位分類の分布でも同様である。まず、英語の下位分類を示すと、次のように、継続操作型が多い<sup>85</sup>。

<sup>84</sup> 表 2 0 と関連する注釈から、英語の手段表現と使役移動の様態の頻度をまとめると、以下の通りになる。英語でも使役の手段表現が多いことがわかる。一方、使役移動の様態は少なく、作品③では 1 例も見られないほど、その頻度は少ない。

	作品①	作品②	作品③	作品④	作品⑤
使役の手段	60	59	40	32	79
使役移動の様態	4	6	0	1	6

<sup>85</sup> 英語での使役移動の下位分類の判定は、主要部の表現を中心に、松本 (1998) のリストと松本 (2018) の例文を参考に



	作品①	作品②	作品③	作品④	作品⑤
継続操作型	43	35	21	18	35
随伴運搬型	7	7	10	9	33
開始時起動型	5	12	6	5	10

表 2 3 英語の使役移動の下位分類

表 2 3 は、英語の使役移動を下位分類したものである。各作品では、継続操作型の使役移動が最も多く、随伴運搬型と開始時起動型は、継続操作型の半分以下にとどまる作品が多い。このように、英語では継続操作型の使役移動が多いが、対応する日本語と韓国語でも継続操作型の使役移動が多く見られる。両言語の頻度をまとめてみると、次のようになる。

	作品①	作品②	作品③	作品④	作品⑤
継続操作型	21	16	5	5	12
随伴運搬型	0	2	1	0	0
開始時起動型	2	3	0	2	4

表 2 4 日本語の使役移動の下位分類<sup>86</sup>

	作品①	作品②	作品③	作品④	作品⑤
継続操作型	11	16	11	6	13
随伴運搬型	0	0	0	0	0
開始時起動型	2	6	6	2	7

表 2 5 韓国語の使役移動の下位分類<sup>87</sup>

表 2 4 と表 2 5 は、日本語と韓国語の使役移動を下位分類したものである。両言語とも継続操作型が多く、随伴運搬型と開始時起動型は少ない。随伴運搬型の場合は殆ど見当たらない<sup>88</sup>。このように、両言語とも継続操作型が多く、英語の継続操作型の多い影響が考え

した。それ以外の動詞は、松本 (1998) と松本 (2018) が Levin (1993) のどの分類に入るのかを見て、同じ分類なら同じ使役移動の下位分類として見なした。ただし、take の場合は、松本 (1998) では、継続操作型と随伴運搬型の両方で挙げられているので、文脈で使役者も一緒に移動しているかどうかを判断して分類した。

<sup>86</sup> 日本語での使役移動の下位分類の判定は、松本 (1998) のリストを参考にした。それ以外の動詞は、文脈で①使役者も一緒に移動しているかどうか、②使役が起こる時間が継続的か開始時のみかを判断して分類した。なお、各下位分類を足し合わせても、その合計が表 2 0 と一致しないのは、使役移動の様態も含めて下位分類をしているためである。

<sup>87</sup> 韓国語での使役移動の下位分類の判定は、文脈で①使役者も一緒に移動しているかどうか、②使役が起こる時間が継続的か開始時のみかを判断して分類した。なお、各下位分類を足し合わせても、その合計が表 2 0 と一致しないのは、下位分類の判断が難しい場合は除いたためである。

<sup>88</sup> 日本語と韓国語の使役移動の随伴運搬型が殆ど見当たらないのは、本稿で想定した使役手段動詞に限られている影響も大きい。日本語では、随伴運搬型の使役手段動詞が「運ぶ」しかないが、いずれの作品でもあまり見られなかったことになる。一方、韓国語では、使役手段動詞として想定した「던지다(投げる)」、「밀다(押す)」、「끌다(引く)」、「잡다(とる)」、「보내다(送る)」、「차다(蹴る)」のうち、随伴運搬型と言えるようなものはない。そもそも随伴運搬型がないので、いずれの作品でも見られなかったことになる。今後さらに多くの動詞を対象とすれば、随伴運搬型がさらに多い可能性は十分ある。

られる。例えば、次のような継続操作型の使役移動が挙げられる。

- (59) a. Gatsby **took** up the receiver. (Fitzgerald[original] 1925:123)  
b. ギャッツビーが受話器を**と**った。 (村上[訳] 2006:152)  
c. “개즈비는 수화기를 **집어** 들었다.” (Kim[訳] 2009:118)  
kaychupi-nun swuhwaki-lul **cip-e**-tul-essta  
ギャッツビー-TOP 受話器-ACC とる-PART-上げる<sup>89</sup>-PS  
‘ギャッツビーは受話器をとって上げた’

(59)では、継続操作型の使役移動を示している。英語の *take* それ自体は、方向（直示）を表す際は随伴運搬型だが、手動による継続操作型にもなれる。ここでは、使役行為が起こる時間と使役者の移動の有無で、後者の継続操作型だと判断した。つまり、使役が被使役者の移動中に継続的に起こり、使役者が被使役者と一緒に移動しないので、継続操作型の使役移動として分類できる。このような英語の継続操作型に対し、日本語では「とった」で対応している。一方、韓国語では、「집어들었다(とって上げた)」で対応している。両言語とも、英語と同様に、被使役者の移動中に使役行為が継続的に起こり、使役者の移動はない。このように、英語が継続操作型の使役移動で、対応する日本語と韓国語でも、継続操作型の使役移動が見られる。ソース言語の特徴がターゲット言語でも同様に見られることだが、継続操作型の使役移動と使役の手段の頻度、主動詞との結びつきの強さとどのような関係にあるのかを 4.2 で詳しく考察していく。

以上、使役移動では、日本語と韓国語の移動の様態より使役の手段の方が多きことがわかった。両言語では、使役の手段でも使役移動の様態でもない動詞が多いものの、使役の手段と様態では、手段の方が多かった。使役の手段では、非主要部の表現が多く、主要部の手段が多い英語とは対照的だった。非主要部の手段では、主動詞との結びつきが強いものが少なかった。両言語とも、主動詞との結びつきが強くないか弱いものが多かった。このことから、両言語の非主要部の手段が多いのは、主動詞との結びつきの強さとは関係ないとも見える。検証 2 の結果をまとめると、次の通りになる。

- (60) 検証結果 2 : 使役移動を表す日本語と韓国語では、移動の様態より手段の方が多かった。しかし、使役手段の表現では、主動詞との結びつきが強いものが少なかった。

このように、両言語では、非主要部の手段が多くても、主動詞との結びつきの強いものは少なかったが、次節では、使役移動の下位分類で多かった継続操作型や物語の特徴と関連

<sup>89</sup> 韓国語の「들다」は「上げる」という意味もあり、「手に持つ、手に取る」という意味もあるが、本稿では、Bowerman and Choi (1991)に従い、「上げる」と見なしている（表 1 を参照）。

づけて考察していく。使役移動の下位分類で多かった継続操作型が典型的な使役移動だとすると、使役の手段の高頻度や使役移動の経路の含意とも関連づけができる。また、両言語には、使役の手段でも使役移動の様態でもない動詞が多かったが、継続操作型の使役移動からの拡張であることを示していく。

最後に、使役移動を表す日本語と韓国語では、様態と手段の両方が複合動詞の前項動詞と後項動詞に分けて表されている例は殆どなかった<sup>90</sup>。次はそうした表現が見られる数少ない例の一つである（四角で囲った部分が様態や手段）。

- (61) a. He kicked a magazine on his way out. (Hosseini[original] 2003:119)  
 b. ババは出るときに、雑誌を一冊蹴飛ばした。(佐藤[訳] 2007:204)  
 c. 나오는 길에 바바가 잡지 하나를 발로 걷어쳤다. (Lee[訳] 2005:195)  
 na-onun kil-ey papa-ka capci hana-lul pal-lo ketech-assta  
 出-来る 道-LOC ババ-NOM 雑誌 一つ-ACC 足-by 足を上げて強く蹴る<sup>91</sup>-PS  
 ‘出て来る道にババが雑誌 一つを足で上げて強く蹴った’

(61)では、英語の使役移動に対し、複合動詞の前項動詞と後項動詞の両方に使役の手段や様態が表されている日本語の例を示している。英語の *kicked* に対し、日本語は「蹴飛ばした」で対応している。使役移動の様態が後項動詞の「飛ばした」で、使役の手段は前項動詞の「蹴」で表されている。一方、韓国語では「걸어쳤다(足を上げて強く蹴った)」で対応している。「걸어차다(足を上げて強く蹴る)」は本稿で想定している使役手段動詞ではないが、使役の結果生じる移動の様態でもないので、「その他」に分類できるだろう。このように、日本語に限っては、使役の手段や様態が複合動詞の前項動詞と後項動詞の両方に表されている。

しかし、(61)のように使役移動の構成概念が複合動詞の前項動詞と後項動詞の両方に表されている例は殆どなかったもので、その一般化は難しく、限られた例から動機づけを考察することはできない。典型的な使役構文では、主語の行為(X)と目的語の変化(Y)を単一の述語動詞で表すので、目的語の変化(Y)である経路が明示されなくても、目的語の位置の変化が生じるという前提で主語の行為(X)を表すことができる。その分、使役の手段や様態が複合動詞の前項動詞と後項動詞の両方に表される可能性はあるが、実際の頻度が殆どない

<sup>90</sup> 各作品の頻度をまとめると、次のようになる。

	作品①	作品②	作品③	作品④	作品⑤
日本語	1	0	0	0	1
韓国語	0	0	0	0	0

<sup>91</sup> 韓国国立国語院の標準国語大辞典[표준국어대사전]によると、「걸어차다(ketechata)」は、「발을 들어서 세게 차다(足を上げて強く蹴る)」という意味だが、「걸어차다(ketechata)」の「걸어(kete)」の意味が特定できない。動詞の「걸다(ketta)」には、「足を上げる」といった意味がなく、「거두다(ketwuta)」の縮約形が「걸다(ketta)」ではあるが、「거두다(ketwuta)」の「散らかっているものなどを一ヶ所に集める」という意味からも程遠い。このことから、本稿では、「걸어차다(ketechata)」の「걸어(kete)」は動詞本来の意味を保持していないと判断し、「걸어차다(ketechata)」を1語として見なす。

のは、単なる情報の余剰のためなのだろうか。上記の「蹴飛ばす」では、前項動詞の「蹴る」は動詞の連用形なので、主動詞（後項動詞）との結びつきは強い。問題提起で取り上げた「放り投げる」や「집어던지다(つかんで投げる)」でも、動詞の連用形や連結語尾の「-어/아(-e/a)」がつく動詞なので、主動詞との結びつきは強い。主動詞との結びつきの強い動詞の連用形や連結語尾の「-어/아(-e/a)」がつく動詞では、情報の余剰になるような負荷はかからないと思われる。

実は、両言語では、英語の使役移動を経路動詞で対応したり、経路動詞との組み合わせで対応する場合が少なくない。まず、英語の使役移動を経路動詞で対応した頻度をまとめると、次のようになる（経路動詞で対応した頻度／英語の使役移動の頻度<sup>92</sup>）。

	作品①	作品②	作品③	作品④	作品⑤
日本語	11 / 59	11 / 61	3 / 37	2 / 33	8 / 84
韓国語	20 / 59	13 / 61	6 / 37	10 / 33	14 / 84

表 2 6 英語の使役移動を経路動詞で対応した頻度

表 2 6 は、英語の使役移動（右：分母）を経路動詞で対応した日本語と韓国語の頻度（左：分子）を示している。英語の使役移動の様態や手段からの対応が経路動詞<sup>93</sup>なので、両言語では、使役移動の様態や手段の情報は省かれる可能性がある。両言語とも、作品①を中心にまとまった頻度があり、特に、作品①と作品④の韓国語は、使役の手段の頻度（表 2 0）を上回る頻度となっている。例えば、次のような例が挙げられる。

- (62) a. “(and she) pulled out the string of pearls.” (Fitzgerald[original] 1925:101)  
 b. 「(彼女が) ネックレスを出したわ」 (小川[訳] 2009:124)  
 c. “(그녀가) 그 진주 목걸이를 꺼내는 거예요.” (Kim[訳] 2009:97)  
 ku cincwu mokkal-lul kkenaynun ke-yeyyo  
 その 真珠 ネックレス-ACC 出す もの-よ  
 ‘その真珠ネックレスを出したものよ’

(62)は、英語の使役移動を経路動詞で対応する日本語と韓国語を示している。英語の *pulled* に対し、日本語は経路動詞の「出した」、韓国語では、経路動詞の「꺼내는 거예요(出したものよ)<sup>94</sup>」で対応している。両言語とも、目的語のネックレスの経路は表されているが、

<sup>92</sup> 英語の使役移動の頻度は、使役の手段と様態の主要部を対象としている。主要部と非主要部の使役の手段が両方含まれている表 2 0 の英語とは頻度が一致しない。

<sup>93</sup> 英語に対応する日本語と韓国語の経路動詞は主要部と非主要部を区別せず、両方とも含まれた頻度となる。

<sup>94</sup> 韓国国立国語院の標準国語大辞典[표준국어대사전]によると、韓国語の「꺼내다」は、形態素解析が「꺼+내다」になるが、「꺼」の意味が特定できない（韓国国立国語院の答弁 ([http://www.korean.go.kr/front/onlineQna/onlineQnaView.do?mn\\_id=61&qna\\_seq=86334&pageIndex=1](http://www.korean.go.kr/front/onlineQna/onlineQnaView.do?mn_id=61&qna_seq=86334&pageIndex=1)) を参照)。本稿では、Bowerman and Choi (1991)に従い、1 語の経路動詞として見なす（表 1 を参照）。

*pulled* による「手を使って引くまたは引っばる」といった主語の手段は見られない。このように、両言語では、英語の使役移動を経路動詞で対応している。確かに、両言語は V 言語なので、経路は動詞で表す V 言語の条件を満たしている例がある程度存在することになる。また、両言語では、英語の使役移動を経路動詞との組み合わせで対応した例も少なくない。各言語の頻度をまとめると、次のようになる（経路動詞との組み合わせで対応した頻度／英語の使役移動の頻度）。

	作品①	作品②	作品③	作品④	作品⑤
日本語	21 / 59	12 / 61	4 / 37	5 / 33	7 / 84
韓国語	10 / 59	14 / 61	5 / 37	3 / 33	11 / 84

表 2 7 英語の使役移動を経路動詞との組み合わせで対応した頻度

表 2 7 は、英語の使役移動（右：分母=表 2 6）を経路動詞との組み合わせで対応した日本語と韓国語の頻度（左：分子）を示している。英語の使役移動の様態や手段の情報には対応しながらも、その際の経路も一緒に表されるパターンとなる。両言語とも、作品①を中心にまとまった頻度となり、特に、作品①の日本語は 21 例もある。例えば、次のような例が挙げられる。

- (63) a. Kamal's father **shoved** the barrel in his own mouth. (Hosseini[original] 2003:115)  
 b. カマルの父親は銃口を自分の口に**押し**こんでいた。 (佐藤[訳] 2007:197)  
 c. 카말의 아버지가 총구를 자신의 입 안으로 **집어**넣었다.  
 khamal-uy apeci-ka chongkwu-lul casin-uy ip an-ulo **cip-e**-neh-essta  
 カマル-GEN 父-NOM 銃口-ACC 自分-GEN 口 内-to とる-PART-入れる-PS  
 ‘カマルの父が銃口を自分の口のの内にとり入れた’ (Lee[訳] 2005:189)

(63)は、英語の使役移動を経路との組み合わせで対応する日本語と韓国語を示している。英語の *shoved* に対し、日本語は動詞の連用形の「押し」で対応しながらも、その際の経路も「こんでいた」で表されている。一方、韓国語では、連結語尾の「-어/아(-e/a)」がついた「집어(とり)」で対応している。その際に経路の「넣었다(入れた)」も一緒に表されている。このように、両言語では、英語の使役移動を経路動詞との組み合わせで対応している。ここで言う経路動詞は主動詞だけではない。次のように、主動詞ではない経路動詞との組み合わせも、両言語では見られる。

- (64) a. She waited until he **dragged** big leather books off the shelves and began making notes in a frantic, depressed sort of way. (Jones[original] 1986:151)  
 b. (ソフィーはマイケルのようにすをうかがいました) マイケルは棚から大きな革表紙

の書物を「ひっぱり」だすと、とほうにくれたように走り書きをはじめました。

(Jones[original] 1986:146)

c. (소피는 잠시 기다렸다.) 이윽고 그는 선반에서 가죽 장정의 커다란 책들을

iukko ku-nun senpan-eyse kacwuk cangceng-uy khetalan chayk-tul-ul

やがて 彼-TOP 棚-from 革 表紙-GEN 大きな 本-PL-ACC

「 끌어내리고 정신없이 필기를 하기 시작했다.

kkul-e-nayli-ko cengsinepsi philki-lul haki sicakha-essta

引く-PART-下ろす-PART 無我夢中に 筆記-ACC すること はじめる-PS

‘やがて彼は棚から革表紙の大きな本を引き下ろして無我夢中に筆記しはじめた’

(Kim[訳] 2004:133)

(64)は、英語の使役移動を経路動詞との組み合わせで対応する日本語と韓国語を示している。英語の *dragged* に対し、日本語は動詞の連用形の「ひっぱり」で対応している。その際の経路も「だす」で表されているが、主動詞ではない。一方、韓国語では、連結語尾の「-어/아(-e/a)」がついた「끌어(引き)」で対応している。後項動詞の「내리고(下ろして)」では経路が表されているが、主動詞ではない。このように、両言語では、主動詞ではない経路経路とも組み合わせで英語の使役移動に対応している。また、韓国語では、次のように、前項動詞の経路との組み合わせも見られる。

(65) a. (Howl) sent him out into the street among the painted houses. (Jones[original] 1986:107)

b. (ハウルは)色あざやかな町並へとマイケルを「送り」だしました。 (西村[訳] 1997:105)

c. (하울은) 울긋불긋한 집들이 있는 거리로 마이클을 내보냈다.

wulkuspwulkushan cip-tul-i issnun keli-lo maikhul-ul nay-ponay-ssta

色とりどりする 家-PL-NOM ある 街-to マイケル-ACC 出す-送る-PS

‘色とりどりする家たちがある街へマイケルを送り出した’

(Kim[訳] 2004:96)

(65)は、使役移動の経路が前項動詞で表されている韓国語の対応を示している。まず、日本語では、英語の *sent* を動詞の連用形の「送り」で対応している。その際の経路は「だしました」で表されている。一方、韓国語では、「보냈다 (送った)」で対応している。

「보냈다(送った)」は主動詞で、その際の経路は前項動詞の「내(出し)」で表されている。経路動詞との組み合わせは、主動詞ではない経路動詞も見られるが、韓国語の対応で見られる前項動詞の経路もその一種になるだろう。このように、使役の手段や使役移動の様態が複合動詞の前項動詞と後項動詞の両方に表される例が少ない要因として、経路動詞との組み合わせがある。

さらに、使役手段でも使役移動の様態でもない「その他」の動詞でも経路動詞との組み合わせが見られる。例えば、次のような例が挙げられる。

- (66) a. She **swept** all the slime out onto the moors. (Jones[original] 1986:121、一部修正)  
 b. (ソフィーは) 荒野にへどろを掃きだしました。 (西村[訳] 1997:118)  
 c. (소피는) **빗자루로** 모든 오물을 언덕 위 황무지로 쓸어 냈다.  
**piscalwu-lo** motun omwul-ul entek wi hwangmwuci-lo ssul-e nay-ssta  
 ほうき-by 全て 汚物-ACC 丘 上 荒地-to 掃く-PART 出す-PS  
 ‘ほうきで全ての汚物を丘の上の荒地へ掃き出した’ (Kim[訳] 2004:108)

(66)は、英語の使役移動を経路動詞との組み合わせで対応している日本語と韓国語を示している。英語の *swept* に対し、日本語は動詞の連用形の「掃き」で対応している。「掃く」は使役の手段でも移動様態の動詞ではないが、経路の「だしました」との組み合わせになっている。一方、韓国語では、連結語尾の「-어/아(-e/a)」がついた「쓸어(掃き)」で対応している。「쓸다(掃く)」も本稿が対象とする使役の手段や様態の動詞ではないが、その際に経路も「냈다(出した)」と一緒に表されている。韓国語の対応では、使役の手段が前項動詞の「쓸어(掃き)」のほか、副詞<sup>95</sup>の「빗자루로(ほうきで)」でも見られる。このように、両言語では、使役の手段でも様態でもない動詞でも経路動詞との組み合わせが見られる。その頻度もある程度存在するので<sup>96</sup>、経路動詞との組み合わせは、英語の使役移動に対応する両言語でよく見られるパターンであると言える。このような経路動詞との組み合わせのため、使役の手段や使役移動の様態が複合動詞の前項動詞と後項動詞の両方に表されるのは難しいと思われる。

以上、使役移動の様態や手段が複合動詞の前項動詞にも後項動詞にも表される日本語と韓国語の例を見た。両言語とも、その頻度は殆どなかった。その要因として、両言語の経路動詞での対応と経路動詞との組み合わせが挙げられる。いずれの要因とも、経路は動詞で表す V 言語の条件を満たしていると言える。理論上には、目的語の経路は含意できるので、その分、使役の手段と様態の両方が複合動詞の前項動詞と後項動詞に分けて表されるわけだが、実際の頻度とは一致しない結果になった。検証3の結果をまとめると、次のようになる。

- (67) 検証結果3：日本語と韓国語では、使役移動の様態と手段が複合動詞の前項動詞と後項動詞の両方に表されている場合が殆どなかった。その要因として、両言語の経路動詞での対応と経路動詞との組み合わせが挙げられる。

<sup>95</sup> 3.1の(45e)で説明したように、一部の名詞に接尾辞の「-로/으로 (-lo/ulo)」がつくと(転成)副詞になる。

<sup>96</sup> 使役の手段でも使役移動の様態でもない「その他」の動詞でも経路動詞との組み合わせが見られる頻度をまとめると、次のようになる。

	作品①	作品②	作品③	作品④	作品⑤
日本語	5	8	4	4	11
韓国語	8	6	1	3	8

次節では、使役手段でも使役移動の様態でもない「その他」の動詞も含め、経路以外の動詞が複合動詞の前項動詞にも後項動詞にも表される例も一緒に見ながら、使役移動における働きかけの詳細化を捉えていく。

以上、問題提起した3つの項目について検証した。検証結果をまとめると、次のようになる。

- (68) a. 検証結果1：自律移動を表す日本語と韓国語では、非主要部の様態が多かった。  
しかし、主動詞との結びつきが強い非主要部の様態は少なかった。
- b. 検証結果2：使役移動を表す日本語と韓国語では、移動の様態より手段の方が多かった。しかし、使役手段の表現では、主動詞との結びつきが強いものが少なかった。
- c. 検証結果3：日本語と韓国語では、使役移動の様態と手段が複合動詞の前項動詞と後項動詞の両方に表されている場合が殆どなかった。その要因として、両言語の経路動詞での対応と経路動詞との組み合わせが挙げられる。

検証1では、英語の自律移動に対応する日本語と韓国語の様態表現は、主要部の様態が英語より少なかったものの、非主要部の様態は英語より多かった。非主要部の様態では、主動詞との結びつきが強いものは少なかった。検証2では、英語の使役移動に対応する両言語は、予想した通り、使役手段の方が使役移動の様態より多かった。しかし、使役手段の表現では、主動詞との結びつきが強いものは少なかった。検証3では、英語の使役移動に対応する両言語でも、使役移動の様態や手段が複合動詞の前項動詞と後項動詞の両方に表されている場合について、その頻度が殆どなかった。その要因として、両言語の経路動詞での対応と経路動詞との組み合わせが挙げられる。4章以降では、両言語の非主要部が多くても、主要部との結びつきが強いものが少なかった要因について、自律移動と使役移動のそれぞれを考察する。特に、自律移動では、主動詞との結びつきが強いとされる動詞の連用形や連結語尾の「-어/아(-e/a)」の様々な役割について考察していく。



## 4章 考察

### 4.1 自律移動の様態表現

前節の調査では、日本語と韓国語は非主要部の様態が多かったものの、主動詞との結びつきが強いものは少なかった。ここでは、まず、動詞の連用形や連結語尾の「-어/아(-e/a)」のつく動詞は、事象の連続性を重視する捉え方のために主動詞ではない後項動詞を強いられているのであって、主動詞との結びつきが強くないこととは直接関係ないと主張する。次に、動詞の連用形や連結語尾の「-어/아(-e/a)」を中心に、非主要部の様態の様々な役割を見ていくことで、両言語の非主要部の様態が多い要因を示す。最後に、主動詞との結びつきが弱い様態の副詞は、英語の特定の様態動詞からの対応で見られることを示す。以上のことで、両言語の非主要部の様態は、主動詞との結びつきが強いものが多く、かつ様々な役割をしているため、その頻度が高いことを主張する。

#### 4.1.1 事象の連続性における自律移動

まず、前節の表16と17、19をまとめると、日本語と韓国語で主動詞との結びつきが強いとされる動詞の連用形や連結語尾の「-어/아(-e/a)」のつく動詞は、次のように、実際は強くないことになる。

日本語	連用形	結びつきが強い	韓国語	連結語尾の-e/a	結びつきが強い
作品①	10	3	作品①	12	7
作品②	12	4	作品②	23	12
作品③	13	4	作品③	17	7
作品④	10	3	作品④	23	10
作品⑤	15	7	作品⑤	22	8

表28 動詞の連用形と連結語尾の「-어/아(-e/a)」の結びつきの強さ

表28は、動詞の連用形や連結語尾の「-어/아(-e/a)」のつく動詞をまとめたものである。前述したように、同じ動詞の連用形や連結語尾の「-어/아(-e/a)」のつく動詞でも、主動詞との結びつきが強いとは限らないので、後項動詞が主動詞ではないものや文と文を結ぶもの、統語的複合動詞などは除き、さらに主動詞との結びつきが強いものを抽出した。その結果、動詞の連用形や連結語尾の「-어/아(-e/a)」のつく動詞でも、主動詞との結びつきが強いものが全体の半分以下になっている。

しかし、事象の連続性を考えると、動詞の連用形や連結語尾の「-어/아(-e/a)」のつく動詞は、主動詞ではない後項動詞を強いられている可能性がある。例えば、次のような例が挙げられる（四角で囲った部分が様態）。

(69) a. and (Howl) **ran** for the stairs. “I’ll show you,” he called as his feet pounded up them.

(Jones[original] 1986:199)

b. ハウルは階段に**駆け**寄り、「本を見せてあげるよ」と、上りながら二人に声をかけました。  
(西村[訳] 1997:189)

c. 하울은 계단 쪽으로 **달려**갔다. 그리고 쿵쿵거리며  
hawul-un kyeytan ccok-ulo **talli-e**-ka-ssta kuliko khwungkhwungkeli-mye  
ハウル-TOP 階段 方-to 走る-PART-行く-PS そして どしんどしんする-PART  
계단을 오르면서 소리쳤다. (Kim[訳] 2004:175)

kyetan-ul olu-myense solichi-essta

階段-ACC 上がる-PART 叫ぶ-PS

‘ハウルは階段の方へ走って行った。そしてどしんどしんしながら、階段を上りながら叫んだ’

(69)は、英語に対応する日本語の動詞の連用形の後項動詞が主動詞ではない場合を示している。英語の *ran* に対し、日本語は動詞の連用形の「駆け」で対応しているが、後項動詞の「寄り」は主動詞ではない。しかし、声をかけるという行為が続くので、事象の連続性を重視するために、先行する移動事象では主動詞が表れていないのかもしれない。

一方、韓国語では、連結語尾の「-어/아(-e/a)」がついた「달려(走り)」で対応し、後項動詞の「갔다(行った)」は主動詞となっている。同じ英語からの対応でも、先行する移動事象で主動詞が表れているのは、後続する事象とは独立しているという捉え方を反映しているのだろう。このことから、動詞の連用形や連結語尾の「-어/아(-e/a)」のつく動詞は、主動詞との結びつきが強くないことを意味するよりは、複数の事象をそれぞれ独立していると捉えているかどうかによって、後項動詞が主動詞かどうか分かれていることがわかる。英語に対応する日本語を「ハウルは階段に駆け寄りました。そして上りながら二人に声をかけました。」にして、先行する移動事象の後項動詞を主動詞にすることもできるので、事象の連続性をどのように捉えているのかという問題になるのだろう。また、次のような例も挙げられる。

(70) a. She **ran** to the window to see if the thing was still trying to get into the castle.

(Jones[original] 1986:130)

b. ソフィーは窓に**駆け**寄り、かかしがまだ城に入りこもうとしているか、確かめようとしました。  
(西村[訳] 1997:127)

c. 소피는 허수아비가 아직도 성 안으로 들어오려 하는지  
sophi-nun heswuapi-ka acikto seng an-ulo tul-e-o-lye hanunci  
ソフィー-TOP かかし-NOM まだ 城 中-to 入る-PART-来る-PURP するのか

보려고 창문 앞으로 달려갔다. (Kim[訳] 2004:116)  
 po-lye-ko changmwun aph-ulo tall-e-ka-ssta  
 見る-PURP-PART 窓 前-to 走る-PART-行く-PS  
 ‘ソフィーはかかしがまだ城の中に入りこもうとしているかを見ようと、窓の前へ走って行った’

(70)も、英語に対応する日本語の動詞の連用形の後項動詞が主動詞ではない場合を示している。英語の *ran* に対し、日本語は動詞の連用形の「駆け」で対応しているが、後項動詞の「寄り」は主動詞ではない。一方、韓国語では、連結語尾の「-어/아(-e/a)」がついた「달려(走り)」で対応しているが、後項動詞の「갔다(行った)」は主動詞となっている。両言語とも複文で対応しているが、後項動詞が主動詞になるものとならないものに分かれたのは、その事象が主節かどうかによる。日本語は移動を従属節として捉えているので、後項動詞が主動詞ではない。一方、韓国語では、移動を主節で捉えているので、後項動詞が主動詞になっている。

このことから、動詞の連用形や連結語尾の「-어/아(-e/a)」のつく動詞は、事象の連続性を重視しても、どの事象を主節にするのかによって、後項動詞が主動詞かどうか分かれていることがわかる。英語に対応する日本語を「ソフィーはかかしがまだ城に入りこもうとしているか、確かめようと窓に駆け寄りました。」にすると、移動事象は主節になるので、複数の節のうちどの節を主節として捉えるのが問題になるだろう。このように、動詞の連用形や連結語尾の「-어/아(-e/a)」のつく動詞は、複数の事象への捉え方によって、後項動詞が主動詞かどうか分かれている。そのため、単に後項動詞が主動詞ではない理由で、主動詞との結びつきが強くないと判断する必要はない。表 28 を調べ直すと、次のようになる。

日本語	連用形	結びつきが強い	韓国語	連結語尾の-e/a	結びつきが強い
作品①	10	5	作品①	12	10
作品②	12	10	作品②	23	21
作品③	13	10	作品③	17	14
作品④	10	10	作品④	23	18
作品⑤	15	12	作品⑤	22	19

表 29 動詞の連用形と連結語尾の「-어/아(-e/a)」と結びつきの強さ

表 29 は、動詞の連用形や連結語尾の「-어/아(-e/a)」のつく動詞の結びつきの強さを調べ直したものである。後項動詞が主動詞でなくても、後続する事象があったり、後続する主節があれば、主動詞との結びつきの強さは変わらないと見なして調べ直した。その結果、動詞の連用形と連結語尾の「-어/아(-e/a)」のつく動詞の殆どは主動詞との結びつきが強か

った。特に、作品④の日本語は、動詞の連用形の全てが主動詞との結びつきが強いことになる。表28と比べてみると、日本語は作品②と③、④、韓国語は作品③と⑤が2倍以上増えている。このように、動詞の連用形や連結語尾の「-어/아(-e/a)」のつく動詞には、後項動詞は主動詞ではないが、後続する事象があるものが多い。

さらに、複数の事象がいずれも移動事象であれば、事象の捉え方による動詞の連用形と連結語尾の「-어/아(-e/a)」の後項動詞の違いがよりはっきり見えるだろう。前述した(56)は、次のように、捉え直すことができる。

(56) a. The two women **had walked** the length of “The Street”, arriving at a metal door marked POD

5. (Brown[original] 2009:133)

b. ふたりは“大通り”を端から端まで**歩き**、<ポット 5>と記された金属のドアの前に着いた。 (越前[訳] 2010:191)

c. 두 사람은 한참을 **걸어** 들어가 이윽고 5번 포드라는  
 twu salam-un hanchamul **kel-e** tul-e-ka-Ø iukko 5pen photu-lanun  
 二人-TOP しばらく 歩く-PART 入る-PART-行き やがて 5番 ポット-という  
 표지판이 붙은 철문 앞에 도착했다. (An[訳] 2009:222)

phyociphan-i pwuthun chelmwun aph-ey tochakha-essta

表示板-NOM つく 鉄門 前-LOC 到着する-PS

‘二人はしばらく歩いて入って行き、やがて5番ポットという表示板がついた鉄門の前に到着した’

(56)は、動詞の連用形や連結語尾の「-어/아(-e/a)」のつく動詞でも、主動詞との結びつきが強いとは限らないとした例だった。英語の *had walked* に対し、日本語は動詞の連用形の「歩き」で対応するが、主動詞は後続する主節の「着いた」になるため、主動詞とは結びつきが強いとは言えないとした。しかし、事象の連続性から考えると、動詞の連用形の「歩き」には後続する事象がある。事象の連続性を重視するために、先行する動詞の連用形の「歩き」が主動詞ではないと言えるだろう。しかも、後続する主節の「着いた」は、先行する「歩き」と同じ移動事象なので、それぞれ独立した事象だと捉えた場合（ふたりは大通りを端から端まで歩いていった。そして、<ポット 5>と記された金属のドアの前に着いた。）に比べると、「歩いていく」の「いく」のような経路動詞は表されていないことがわかる。

ちなみに、韓国語では、英語の *had walked* を「걸어 들어가(歩いて入っていき)」で対応している。連結語尾の「-어/아(-e/a)」がついた「걸어(歩いて)」は、後項動詞の「들어가(入っていき)」が主動詞ではないが、主節の「도착했다(到着した)」が続いている。先行する「걸어 들어가(歩いて入っていき)」と後続する「도착했다(到着した)」は、いずれも移動事象で、事象の連続性を重視した複文の構造だが、日本語とは違い、先行す

る移動事象で経路動詞（「들어가(入っていき)」）を明示している。日本語のように、経路動詞を明示しないこともできるので(두 사람은 한참을 걸어 이윽고 5 번 포드라는 표지판이 붙은 절문 앞에 도착했다)、さらなる捉え方の違いを反映した表現となるのだろう。

このように、先行する事象と後続する事象の両方が移動事象であれば、事象の捉え方による動詞の連用形や連結語尾の「-어/아(-e/a)」の後項動詞の違いがよりはっきり見える。他にも、次のような例が挙げられる。

- (71) a. I **drove** to Golden Gate Park and **walked** along Spreckels Lake on the northern edge of the park. (Hosseini[original] 2003:176)
- b. **車**でゴールデンゲート公園に行き、公園の北端にあるspreckels湖の湖畔を**散歩**した。(佐藤[訳] 2007:301)
- c. 골든게이트 파크로 차를 몰고 가서 공원의  
koltunkeyithu phakhu-lo cha-lul mok-ko ka-se kongwen-uy  
ゴールデンゲート 公園-to 車-ACC 走らせる-PART 行く-PART 公園-GEN  
북쪽 끝에 있는 스프레클스 호수를 따라 산책을 했다.  
pwuk-ccok kkuth-ey iss-nun suphuleykhulsu hoswu-lul ttala sanchayk-ul hayssta  
北-方 端-に ある-ADN 스프레클스 호수-ACC 沿-って 散歩-ACC する-PS  
'ゴールデンゲート公園へ車を走らせて行き、公園の北端にあるspreckels湖に沿って散歩した'  
(Lee[訳] 2005:288)

(71)は、英語に対応する日本語の動詞の連用形の例を示している。英語の *drove* に対し、日本語は副詞の「車で」に加え、動詞の連用形の「行き」で対応している。様態の副詞が加わっているものの、動詞の連用形の「行き」は主動詞ではない。しかし、後続する主節の「散歩した」があり、先行する「行き」と同様の移動事象である。事象の連続性を重視した捉え方が反映され、複数の節からなる複文の構造となっていると言える。一方、韓国語では、「차를 몰고 가서(車を走らせて行き)」で対応している。後続する「산책을 했다(散歩をした)」も移動事象で、事象の連続性を重視した捉え方を反映しているが、日本語とは違い、先行する移動事象で経路動詞(가서(行き))を明示している。日本語のように、先行する移動事象で経路動詞を明示しないと、意味の違いが生じるので(#골든게이트 파크로 차를 몰고 공원의 북쪽 끝에 있는 스프레클스 호수를 따라 산책을 했다<sup>97</sup>)、使役移動を含む捉え方の違いが反映されていると思われる。

<sup>97</sup> 「(차를) 몰고((車を)走らせて)」の後項動詞の「가서(行き)」を省いた「골든게이트 파크로 차를 몰고 공원의 북쪽 끝에 있는 스프레클스 호수를 따라 산책을 했다」だと、車に乗ったまま散歩をした(ドライブした)とも解釈できるので、(71)とは意味の違いが生じる。

以上、主動詞との結びつきが強いとされる動詞の連用形や連結語尾の「-어/아(-e/a)」のつく動詞では、後項動詞が主動詞ではなくても、文全体の主動詞との結びつきが弱いことではないことを示した。複数の事象が連なる物語では、常に後続する事象があるので、先行する移動事象を後続する事象とは独立したものとして捉えるかどうか、また、後続する事象との連続性を重視して複数の節で表しても、どの節を主節として捉えるかによって、後項動詞が主動詞かどうか分かれている。このような捉え方の違いはあっても、主動詞が表す事象の結びつきの強さは変わらない。そうすると、検証結果1は、主動詞との結びつきが強い非主要部の様態は少なかったとしたが、次のように書き直すことができるだろう<sup>98</sup>。

(72) 検証結果1’：自律移動を表す日本語と韓国語では、非主要部の様態が多かった。

非主要部の様態では、主動詞との概念的な結びつきが強いものが多かった。

#### 4.1.2 日本語と韓国語の非主要部で一般的な様態動詞が用いられている場合

前節では、日本語と韓国語の非主要部の様態の中でも、主動詞との結びつきの強いものが多いことがわかった。ここでは、その要因として、主動詞との結びつきが強いからこそ実現できる様々な役割を取り上げる。まず、主動詞との結びつきが強い非主要部の様態は、様態の中立化(neutralization)の役割をする。様態の中立化とは、Sugiyama (2005)が Slobin (2005)を日本語で検証し、英語の様態動詞が日本語に対応される際に起きるとしたものである。日本語の様態動詞は種類に限りがあるため、英語の様態動詞に対応できない場合は、「歩く」や「走る」のような、どの言語にもある一般的な様態動詞に対応すると、その他の様態は省かれるという。例えば、次のような様態の中立化を取り上げている。

(73) a. [eagles] leap up → 飛び立つ

b. [eagles] fly away → 飛び立つ

<sup>98</sup> 検証結果1は、表29から検証結果1’に書き直すことができる。検証結果1の表19を否定するのであれば、単に表16と表17を根拠にすることもできるが、主動詞との結びつきが強いとされる動詞の連用形と連結語尾の「-어/아(-e/a)」でありながら、主動詞との結びつきが強い場合が依然として、次のように存在する。

(1) a. We walked slowly down the steps. (Fitzgerald[original] 1925:198)

b. 二人でゆっくりと階段を下りる。 (小川[訳] 2009:250)

c. 우리는 계단을 천천히 걸어 내려갔다. (Kim[訳] 2009:192)

wuli-nun kyeytan-ul chenchenhi kel-e-nayli-e-ka-ssta  
我々-TOP 階段-ACC ゆっくり 歩く-PART-下りる-PART-行く-PS  
‘我々は階段をゆっくり歩いて下りて行った’

(2) a. Michael and Sophie walked purposefully down the path to the gate[...]. (Jones[original] 1986:165)

b. マイケルとソフィーはそれにはかまわず、門を目ざして歩きつづけた。 (西村[訳] 1997:159、一部修正)

c. 마이클과 소피는 의식적으로 대문을 향해 걸어 갔다. (Kim[訳] 2004:145、一部修正)

maikhul-kwa sophi-nun uysikcekulo taymwun-ul hyanghay kel-e-ka-ssta  
マイケル-with ソフィー-TOP 意識的に 大門-ACC 向かって 歩く-PART-行く-PS  
‘マイケルとソフィーは意識的に大門に向かって歩いて行った’

c. [eagle] sweep off → 飛び上がる

(73)は、Sugiyama (2005)が取り上げた様態の中立化の例である。英語の *leap* と *fly*、*sweep* に対し、日本語はどの言語にもある一般的な様態動詞の「飛ぶ」に対応している。英語では、*leap* と *fly*、*sweep* という様態動詞で、何らかの様態の違いを示しているだろうが、日本語の対応は「飛ぶ」で揃っているので、様態の違いが見られない。

また、Oh (2003)も、Sugiyama (2005)と同様に様態の中立化を主張している。Oh (2003)は、Slobin (2005)を韓国語で検証してみると、韓国語は英語並みに様態動詞が高頻度だが、複合動詞はあまり用いられず、用いられても英語の様々な様態動詞を区別せずにまとめているとしている。例えば、次のような例を取り上げている。

(74) a. crawl into → 기어가다 (ki-e-kata, 這う-PART-行く)

b. creep down → 기어내려가다 (ki-e-nayli-e-kata, 這う-PART-下りる-PART-行く)

c. climb down → 기어내려오다 (ki-e-nayli-e-ota, 這う-PART-下りる-PART-来る)

d. clamber off into → 기어올라가다 (ki-e-oll-a-kata, 這う-PART-上る-PART-行く)

(74)は、英語の様々な様態動詞に対する韓国語の中立化について、Oh (2003)が例示したものである。英語の *crawl* と *creep*、*climb*、*clamber* に対し、韓国語では一般的な様態動詞の「기다(這う)」で対応している。英語では、*crawl* と *creep*、*climb*、*clamber* という様態動詞で様態の違いを示しているだろうが、韓国語の対応は同じ「기다(這う)」で揃い、「기다(這う)」以外の様態は省かれている。

このように、様態の中立化には、英語に対し一般的な様態動詞が用いられている。本稿の調査では、様態を主動詞とする頻度は低く、複合動詞などの非主要部が多いが、特に、動詞の連用形と連結語尾の「-어/아(-e/a)」のつく動詞では、一般的な様態動詞が用いられているということが明らかになった。各作品の頻度をまとめると、次のようになる（一般的な様態動詞／動詞の連用形または連結語尾の「-어/아(-e/a)」のつく動詞の合計）。

	作品①	作品②	作品③	作品④	作品⑤
動詞の連用形	9 / 10	12 / 12	12 / 13	9 / 10	15 / 15
連結語尾の-e/a	11 / 12	22 / 23	16 / 17	20 / 23	20 / 22

表 3 0 一般的な様態動詞が用いられている頻度

表 3 0 は、動詞の連用形や連結語尾の「-어/아(-e/a)」のつく動詞（右：分母）のうち、一般的な様態動詞の頻度（左：分子）を示している。動詞の連用形や連結語尾の「-어/아(-e/a)」のつく動詞の合計は表 2 8 や表 2 9 などの合計に当たる。動詞の連用形や連結語尾の「-어/아(-e/a)」のつく動詞の殆どで一般的な様態動詞が用いられている。特に、作品②

と作品⑤の日本語は、動詞の連用形の全てにおいて、一般的な様態動詞が用いられている。例えば、次のような例が挙げられる。

- (75) a. Katherine **rushed** through the control-room door. (Brown[original] 2009:105)  
 b. キャサリンは制御室に**飛び**こんできた。 (越前[訳] 2010:151)  
 c. 캐서린이 통제실 안으로 **뛰어**들었다. (An[訳] 2009:178)  
 khayselin-ga thongceysil an-ulo **[t]twi-e**-tul-essta  
 キャサリン-NOM 制御室 中-to とぶ-PART-入る-PS  
 ‘キャサリンが制御室の中へとんで入った’

- (76) a. Hassan dropped her hand and **bolted** out of the house. (Hosseini[original] 2003:194)  
 b. (ハッサンが)手を放して、家の外へ**飛び**出した。 (佐藤[訳] 2007:28(vol.2))  
 c. 하산이 그녀의 손을 놓고 집 밖으로 **뛰쳐**나갔다.  
 hasan-i kunye-uy son-ul noh-ko cip pakk-ulo **[t]twichi-e**-na-ka-ssta  
 ハッサン-NOM 彼女-GEN 手-ACC 放す-PART 家 外-to とぶ-PART-出-行く-PS  
 ‘ハッサンが彼女の手を放して家の外へ飛び出て行った’ (Lee[訳] 2005:316)

(75)と(76)は、英語に対応している動詞の連用形や連結語尾の「-어/아(-e/a)」のつく動詞が一般的な様態動詞になる例を示している。(75)は、英語の *rushed* に対し、日本語は動詞の連用形の「飛び」で対応している。その際の「飛ぶ」は、どの言語にもある一般的な様態動詞である。一方、韓国語では、連結語尾の「-어/아(-e/a)」がついた「뛰어(とんで)」で対応している。「뛰다(とぶ)」も一般的な様態動詞での対応となっている。また、(76)では、英語の *bolted* に対し、日本語は動詞の連用形の「飛び」で対応している。同じく一般的な様態動詞である。一方、韓国語では、連結語尾の「-어/아(-e/a)」がついた「뛰쳐(走って)」で対応し、同じく一般的な様態動詞での対応となっている。このように、英語に対応している動詞の連用形や連結語尾の「-어/아(-e/a)」のつく動詞では、一般的な様態動詞が用いられている。両言語では、どの言語にもある一般的な様態動詞で対応することで、英語による移動の速度の詳細が表現されていない。

一方、動詞のテ形やながら節、「-어/아(-e/a)」以外の連結語尾がついた動詞では、殆どが一般的な様態動詞ではない。例えば、次のような例が挙げられる。

- (77) a. They **ran** past supply boxes and bags of garbage, veering off suddenly through a service door that deposited them in an utterly unexpected world. (Brown[original] 2009:169)  
 b. 備品箱やゴミ袋のあいだを**縫って**進み、向きを変えて通用口を抜けたとたん、思いも寄らない世界が開けていた。 (越前[訳] 2010:239)



c. 비품 상자와 쓰레기봉투들 사이를 헤치고 직원용  
 piphwum sangca-wa ssuleyki-pongthwu-tul sai-lul heychi-ko cikwen-yong  
 備品 箱-with ごみ-袋-PL 間-ACC かき分ける-PART 職員-用  
 출입문을 여니 전혀 예상하지 못한 장소가 나타났다.  
 chwulip-mwun-ul ye-ni cenhye yeysangha-ci moshan cangso-NOM nathanata  
 出入り-門-ACC 開く-PART 全然 予想する-PART できない 場所-が 現れた  
 ‘備品とごみ袋の間をかき分けて職員用の出入り口を開くと、全然予想できない場  
 所が現れた’ (An[訳] 2009:279)

(77)は、英語に対し動詞のテ形や「-어/아(-e/a)」以外の連結語尾で対応している例を示している。英語の *ran* に対し、日本語は動詞のテ形の「縫って」で対応している。その際の「縫う」は、どの言語にもある一般的な様態動詞とは言えず、そもそも移動動詞ではない。一方、韓国語では、連結語尾の「-고(ko)」がついた「헤치고(かき分けて)」で対応している。「헤치다(かき分ける)」もどの言語にもある一般的な様態動詞とは言えない。時間の経過による位置の変化はあるだろうが、それは移動の様態というより、「헤치다(かき分ける)」の「속에 든 물건을 드러나게 하려고 덮인 것을 과거나 짓히다(中に入ったものを表に出すために掘ったりめくる)」という行為に移動の様態が付随するものと言える。

このように、動詞のテ形や「-어/아(-e/a)」以外の連結語尾のつく動詞では、一般的な様態動詞が用いられていない。動詞のテ形やながら節、「-어/아(-e/a)」以外の連結語尾のつく動詞は、殆どが一般的な様態動詞ではなかった<sup>99</sup>。動詞の連用形や連結語尾の「-어/아(-e/a)」のつく動詞の殆どが一般的な様態動詞であることを考えると、主動詞との結びつきが強いほど、一般的な様態動詞が用いられると言える。主動詞との結びつきが強いほど、情報の背景化は進むが、背景化される情報には、どの言語にもある一般的な様態動詞が適しているのだろう。主動詞との結びつきが弱いほど一般的な様態動詞が用いられていないということではないが、主動詞との結びつきが強いほど一般的な様態動詞が用いられているので、一般的な様態動詞による様態の中立化が起きやすいのだろう。

しかし、英語が一般的な様態動詞だと、日本語や韓国語の一般的な様態動詞で対応しても、様態の中立化にはならないだろう。英語の一般的な様態動詞を一般的な様態動詞で対応しても、一般的な様態動詞以外で省かれるその他の様態があまり想定できないためである。例えば、次のような例が挙げられる。

<sup>99</sup> 動詞のテ形やながら節、「-어/아(-e/a)」以外の連結語尾がついた動詞で一般的な様態動詞が用いられている頻度は以下の通りである(一般的な様態動詞/動詞のテ形またはながら節、「-어/아(-e/a)」以外の連結語尾のつく動詞の合計)。作品⑤のテ形のように、一般的な様態動詞が多い作品もあるが、殆どが一般的な様態動詞ではない作品が多い。

	作品①	作品②	作品③	作品④	作品⑤
動詞のテ形	1/5	2/3	2/6	4/7	7/7
ながら節	2/3	0/2	0/0	0/1	0/1
「-e/a」以外	1/1	1/5	2/4	0/1	1/4

- (78) a. I **ran** to Baba. (Hosseini[original] 2003:146)  
 b. わたしはババのもとに**駆け**寄った。(佐藤[訳] 2007:250)  
 c. 바바에게 **달려**갔다. (Lee[訳] 2005:240)  
 papa-eykey **talli-e**-ka-ssta  
 ババ-to 走る-PART-行く-PS  
 ‘ババに走っていった’

(78)は、英語の一般的な様態動詞に対応している日本語と韓国語を示している。英語の *ran* は一般的な様態動詞だが、日本語は動詞の連用形の「駆け」で対応している。その際の「駆ける」は一般的な様態動詞だが、一般的な様態動詞以外で省かれるその他の様態は想定できない。一方、韓国語では、連結語尾の「-어/아(-e/a)」がついた「달려(走って)」で対応している。「달리다(走る)」も一般的な様態動詞だが、英語の一般的な様態動詞の *ran* に対応しても、「달리다(走る)」以外で省かれる様態があるとは思えない。このように、英語の一般的な様態動詞は日本語と韓国語が一般的な様態動詞で対応している。どちらも一般的な様態動詞で、英語の様態が日本語や韓国語で対応されきっていないという印象はない。一般的な様態動詞が殆どだった動詞の連用形や連結語尾の「-어/아(-e/a)」のつく動詞において、英語が一般的な様態動詞かどうかをさらに調べてみると、やはり英語の一般的な様態動詞はあった<sup>100</sup>。

また、一般的な様態動詞ではない英語に対し、日本語や韓国語で一般的な様態動詞が用いられても、さらに様態の副詞が加わっても、様態の中立化にはならないだろう。例えば、次のような例が挙げられる。

- (79) a. She gathered her things in a hurry and **rushed** out, (Maguire[original] 1995:163)  
 b. エルフアバは大急ぎで持ち物をまとめると、**あたふたと**店を**飛び**出していった。  
 (服部・藤村[訳] 2007:216、一部修正)

<sup>100</sup> 動詞の連用形や連結語尾の「-어/아(-e/a)」のつく動詞において、英語が一般的な様態動詞かどうかを調べた結果をそれぞれ示すと、以下の通りになる。動詞の連用形や連結語尾の「-어/아(-e/a)」のつく動詞が一般的な様態動詞になる例の合計は、表30の一般的な様態動詞の頻度に当たる。その結果、英語が一般的な様態動詞ではない頻度が多い作品が殆どだった。

	作品①	作品②	作品③	作品④	作品⑤
一般的な様態動詞	4	6	5	2	3
一般的な様態動詞外	6	6	8	8	12
計	10	12	13	10	15

表1 動詞の連用形が対応する英語の動詞の種類

	作品①	作品②	作品③	作品④	作品⑤
一般的な様態動詞	4	11	8	5	10
一般的な様態動詞外	8	12	9	17	11
計	12	23	17	23	22

表2 連結語尾の「-어/아(-e/a)」のつく動詞が対応する英語の動詞の種類

- c. 엘파바는 서둘러 자기 물건을 주섬주섬 챙겨  
 eylphapa-nun setwulle kaki mwulken-ul cwusemcwusem chayngki-e  
 エルフアバ-TOP 急いで 自分 物を 一つ一つ まとめる-PART  
 들고 뛰쳐나갔다. (Song[訳] 2004:225)  
 tul-ko ttwichi-e-na-ka-ssta  
 持つ-PART 走る-PART-出る-(PART)-行く-PS  
 ‘엘파바는急いで自分の物を一つ一つまとめて持って走って出て行った’

(80) a. Baba and I hurried to the park of onlookers and pushed our way through them.

(Hosseini[original] 2003:114)

- b. ただちに 바바와二人이 駆けつけ, 人の輪に割りこん다. (佐藤[訳] 2007:197)  
 c. 마바와 함께 구경꾼들이 모여 있는 곳으로 허겁지겁  
 papa-wa hamkkey kwukyengkkwun-tul-i moi-e issnun kos-ulo hekepcikep  
 바바-with 一緒に 見物人-PL-NOM 集まる-PART ある-PART 所-to あたふた  
뛰어가서 사람들 사이를 헤집고 들어갔다.  
ttwi-e-ka-se salam-tul sai-lul heycip-ko tul-e-ka-ssata  
 走る-PART-行く-PART 人-PL 間-ACC ほじくり返す-PART 入る-PART-行く-PS  
 ‘바바と一緒に見物人たちが集まっている所へあたふたと走って行き, 人たちの間  
 をほじくり返して入って行った’ (Lee[訳] 2005:188)

(79)と(80)は、英語に対して一般的な様態動詞と様態の副詞で対応している日本語と韓国語を示している。(79)は、英語の様態動詞の *rushed* に対し、日本語は動詞の連用形の「飛び」のほか、副詞の「あたふたと」で対応している。「飛ぶ」はどの言語にもある一般的な様態動詞だが、ほかにも様態の副詞が加わっているのである。一方、韓国語では、連結語尾の「-어/아(-e/a)」がついた「뛰쳐(飛び)」で対応している。日本語のようなさらなる様態の副詞は見られない<sup>101</sup>。

また、(80)は、英語の様態動詞の *hurried* に対し、日本語は動詞の連用形の「駆け」と副詞の「ただちに」で対応している。一方、韓国語では、連結語尾の「-어/아(-e/a)」がついた「뛰어(走って)」と副詞の「허겁지겁(あたふた)」で対応している。両言語とも、一般的な様態動詞ではない *hurry* を一般的な様態動詞で対応しているが、*hurry* の「急ぐ」という様態の詳細は、それぞれ「ただちに」と「허겁지겁(あたふた)」で対応していると言える。このように、両言語では、一般的な様態動詞ではない英語の様態を一般的な様態動詞で対応しても、さらに様態の副詞が加わっている。この際、一般的な様態動詞ではない英語の様態は、両言語の様態の副詞が対応していると言える。英語を一般的な様態動詞で対

<sup>101</sup> 韓国語の副詞「서둘러(急いで)」は、英語の副詞の *in a hurry* に対応する表現、つまり、移動する前の *she gathered her thing* での副詞に対応する表現だと判断したので、*rushed* の対応としては扱っていない。

応している日本語と韓国語において、さらに様態の副詞が加わっているかどうかを調べてみると、いくつかの例はあった<sup>102</sup>。

以上、動詞の連用形や連結語尾の「-어/아(-e/a)」のつく動詞は、殆どが一般的な様態動詞だったので、一般的な様態動詞による様態の中立化を検証した。しかし、英語が一般的な様態動詞だったり、さらに様態の副詞が加わったりすると、様態の中立化とは言えない。英語が一般的な様態動詞ではなく、かつ動詞の連用形や連結語尾の「-어/아(-e/a)」のつく動詞で一般的な様態動詞が用いられているほか、さらなる様態の副詞はないという条件を満たしている頻度を示すと、様態の中立化は、以下のように見られる（一般的な様態動詞が用いられる頻度／一般的な様態動詞ではない英語の合計）。

	作品①	作品②	作品③	作品④	作品⑤
動詞の連用形	6 / 6	6 / 6	6 / 8	6 / 8	7 / 12
連結語尾の-e/a	5 / 8	5 / 12	6 / 9	11 / 17	8 / 11

表 3 1 動詞の連用形と連結語尾の「-어/아(-e/a)」での様態の中立化<sup>103</sup>

表 3 1 は、一般的な様態動詞ではない英語（右：分母）に対し、動詞の連用形や連結語尾の「-어/아(-e/a)」で一般的な様態動詞が用いられている頻度（左：分子）を示している。一般的な様態動詞ではない英語に限ってみると、作品②の連結語尾の「-어/아(-e/a)」を除いた全ての作品において、一般的な様態動詞が用いられている頻度が高い。特に、作品①と作品②の動詞の連用形は、一般的な様態動詞ではない英語の全てにおいて、一般的な様態動詞が用いられている。このように、非主要部の様態、特に動詞の連用形や連結語尾の「-어/아(-e/a)」のつく動詞は、様態の中立化の役割を果たしていると言える。

一方、作品②の連結語尾の「-어/아(-e/a)」では、様態の副詞が加わる対応が多かったことで、様態の中立化の頻度は低かった。連結語尾の「-어/아(-e/a)」のつく一般的な様態動詞があるのに、さらに様態の副詞が加わるのは、二重の非主要部の様態なので避けられるだろう。また、様態の副詞は主動詞との結びつきが弱く、情報の背景化が進んでいないため、さらに様態の副詞が加わるのは負荷がかかる。このような二重の様態への負担のため、結果的には様態の中立化につながることもある。例えば、次のような例が挙げられる。

<sup>102</sup> 一般的な様態動詞ではない英語に対して、一般的な様態動詞と副詞の様態の両方で対応している日本語と韓国語の頻度を示すと以下の通りになる（一般的な様態動詞と副詞の様態の両方で対応する頻度／一般的な様態動詞ではない英語の合計）。一般的な様態動詞ではない英語の合計は、注 1 0 0 の一般的な様態動詞外の頻度に当たる。

	作品①	作品②	作品③	作品④	作品⑤
日本語	0 / 6	1 / 6	2 / 8	1 / 8	5 / 12
韓国語	2 / 8	7 / 12	3 / 9	6 / 17	1 / 11

<sup>103</sup> その際の日本語は動詞の連用形、韓国語は連結語尾の「-어/아(-e/a)」のつく動詞に限り、一般的な様態動詞は用いられても、さらなる副詞の様態はないものに限る。英語の合計は、注 1 0 0 の一般的な様態動詞外の頻度に当たる。

- (81) a. She **stumped** **gamely** along with her stick, (Jones[original] 1986:181)  
 b. (彼女は) 杖をつきながら**元気に****歩き**つづけました。 (西村[訳] 1997:173)  
 c. 그녀는 지팡이를 짚으면서 **씩씩하게** **걸어**갔다. (Kim[訳] 2004:159)  
 kunye-nun ciphangi-lul ciph-umyense **ssikssikhakey** **kel-e**-ka-ssta  
 彼女-TOP 杖-ACC つく-PART 凛々しく 歩く-PART-行く-PS  
 ‘彼女は杖をつきながら凛々しく歩いて行った’

(81)は、二重の様態を回避するため、様態の中立化となった日本語と韓国語を示している。英語の *stumped* に対し、日本語は動詞の連用形の「歩き」で対応している。様態の副詞の「元気に」も見られるが、それは英語の副詞の *gamely* の対応に当たる。そうすると、*stumped* の対応は「歩き」のみで、*stumped* の「重い足取りでとぼとぼ歩く」という様態は省かれることになる。一方、韓国語では、連結語尾の「-어/아(-e/a)」がついた「걸어(歩いて)」で対応している。様態の副詞の「씩씩하게(凛々しく)」もあるが、それは英語の副詞の *gamely* の対応に当たる。*stumped* の対応は「걸어(歩いて)」のみになるが、*stumped* の「重い足取りでとぼとぼ歩く」という様態に対応するための様態の副詞をさらに設けるのは、既に様態の副詞の「씩씩하게(凛々しく)」があるので避けられるだろう。このように、両言語では、英語の副詞からの対応で既に副詞があると、さらに様態の副詞を設けることなく、様態の中立化につながる側面もある。

それでも、作品②の連結語尾の「-어/아(-e/a)」がつく一般的な様態動詞に様態の副詞が加わるのは、原文の情報量に近づけるために、両方とも用いられているのだろう。例えば、次のような例が挙げられる。

- (82) a. Aflatoon **leapt** down from the couch. (Hosseini[original] 2003:175)  
 b. アフラトゥーンはカウチから**びよんと****飛び**降りた。 (佐藤[訳] 2007:299)  
 c. 이플리툰이 소파에서 **뛰어**내렸다. (Lee[訳] 2005:287)  
 iphllithwun-i sofa-eyse **ttwi-e**-nayli-essta  
 アフラトゥーン-NOM ソファー-from 飛ぶ-PART-降りる-PS  
 ‘アフラトゥーンがソファーから飛び降りた’

- (83) a. She **strode** away. (Maguire[original] 1995:157)  
 b. (彼女は) **大胆に****歩いて**いった。 (服部・藤村[訳] 2007:208)  
 c. 엘파바는 **성큼성큼** **걸어**갔다. (Song[訳] 2004:217)  
 eylphapa-nun **sengkhum-sengkhum** **kel-e**-ka-ssta  
 エルフアバ-TOP すたすた 歩く-PART-行く-PS  
 ‘エルフアバはすたすたと歩いていった’

(82)と(83)は、英語に対して動詞の連用形や連結語尾の「-어/아(-e/a)」の様態動詞と様態の副詞の両方に対応している日本語と韓国語の例をそれぞれ示している。(82)は、英語の *leapt* に対し、日本語は動詞の連用形の「飛び」と様態の副詞の「ぴょんと」で対応している。動詞の連用形の「飛び」も副詞の「ぴょんと」も非主要部の様態なので、様態が2つも用いられていることになる。しかし、動詞の連用形の「飛び」は一般的な様態動詞なので、*leap* の様態の詳細までには対応できず、様態の副詞の「ぴょんと」が加わっていると捉えれば、英語の様態の情報に近づけるために用いられているとも言えるだろう。

また、(83)では、英語の *strode* に対し、韓国語が連結語尾の「-어/아(-e/a)」のついた「걸어(歩いて)」と様態の副詞の「성큼성큼(すたすた)」で対応している。連結語尾の「-어/아(-e/a)」のついた「걸어(歩いて)」も副詞の「성큼성큼(すたすた)」も非主要部の様態だが、「걸어(歩いて)」は一般的な様態動詞なので、*stride* の様態の詳細までには対応できるとは言えない。様態の副詞の「성큼성큼(すたすた)」も加わることで、*stride* の様態に対応していると言える。その際の「걸어(歩いて)」は、「성큼성큼(すたすた)」の上位カテゴリーとする階層構造として捉えられるだろう。

因みに、日本語の対応でも様態の階層構造は見られる。日本語では、動詞のテ形の「歩いて」と様態の副詞の「大胆に」で対応し、「歩いて」は、ここで取り上げている動詞の連用形ではないが、一般的な様態動詞は用いられている。「歩いて」は一般的な様態動詞なので、*stride* の様態の詳細には対応していないが、様態の副詞の「大胆に」が *stride* の様態の詳細に対応している。「歩いて」を「大胆に(歩く)」の上位カテゴリーとする階層構造として捉えられる。このように、両言語では、英語に対して動詞の連用形や連結語尾の「-어/아(-e/a)」のつく様態動詞と様態の副詞で対応している。動詞の連用形や連結語尾の「-어/아(-e/a)」のつく動詞も様態の副詞も非主要部の様態なので、様態が2つも用いられていることになるが、動詞の連用形や連結語尾の「-어/아(-e/a)」のつく一般的な様態動詞を上位カテゴリーとする階層構造として捉えれば、どちらの様態も対応が実現できるだろう。

ただし、同じ様態の階層構造でも、英語に対応するためでなく、ターゲット言語内の様態の詳細化を図るために設けられる場合もある。例えば、次のような例が挙げられる。

- (84) a. The child, relinquished by the nurse, **flushed** across the room and rooted shyly into her mother's dress. (Fitzgerald[original] 1925:151)
- b. 子供は乳母の手を離れて、**とことこ駆け**出し、いくぶん照れたように母親のドレスにへばりついた。 (小川[訳] 2009:189)
- c. 보모에게서 풀려난 아이가 방을 가로질러  
 pomo-eykeyse phwul-li-e-nan ai-ka pang-ul kalocill-e  
 乳母-from 放つ-PASS-PART-出る 子供-NOM 部屋-ACC 横切り-PART

달려가 데이지에게 안겼다. (Kim[訳] 2009:147)

talli-e-ka teyici-eykey an-ki-essta

走る-PART-行く デイジー-to 抱く-PASS-PS

‘乳母から放たれ出た子供が部屋を横切って走っていき、デイジーに抱かれた’

(84)は、英語に対して、日本語内の様態の詳細化を図るために設けられた階層構造を示している。英語の *rushed* に対し、日本語は動詞の連用形の「駆け」と様態の副詞の「とことこ」で対応している。動詞の連用形の「駆け」も副詞の「とことこ」も見られるので、一見、*rush* の様態の詳細に対応するために、一般的な様態動詞の「駆け」に副詞の「とことこ」も加わっているように見える。しかし、*rush* の「急いで行く」という様態に対応するために「小また」で「とことこ」と歩く必要はない。つまり、副詞の「とことこ」は、*rush* の様態と一致しない側面がある。むしろ、図(子供)に注目して、動詞の連用形の「駆け」を詳しく表すために設けられた可能性もある。このことから、動詞の連用形や連結語尾の「-어/아(-e/a)」のつく一般的な様態動詞を上位カテゴリーとする階層構造は、英語からの対応とは関係なく、ターゲット言語内の様態の詳細化を図るために設けられる場合もあることがわかる。

いずれにしても、様態の階層構造として捉える場合は、動詞の連用形や連結語尾の「-어/아(-e/a)」の一般的な様態動詞と様態の副詞は共起する傾向がある。例えば、次のような例が挙げられる。

(85) a. “I’ve trudged here laden with stuff for you,” (Jones[original] 1986:194)

b. 「こっちはあんたたちのための買い物でくたくたになってきたんだから」

(西村[訳] 1997:185)

c. “모두를 위해 이렇게 짐을 잔뜩 들고 터덜터덜

motwu-lul wihay ilehkey cim-ul canttuk tul-ko thetelthetel

みんな-ACC ため こんなに 荷物-ACC たくさん 持つ-PART とぼとぼ

걸어왔으니[...]

(Kim[訳] 2004:170)

kel-e-o-ass-uni

歩く-PART-来る-PS-PART

‘みんなのためにこんなに荷物をたくさん持ってとぼとぼ歩いてきたんだから’

(85)は、連結語尾の「-어/아(-e/a)」のつく様態動詞と様態の副詞で対応している韓国語を示している。英語の *trudged* に対し、韓国語は連結語尾の「-어/아(-e/a)」のついた「걸어(歩いて)」と副詞の「터덜터덜(とぼとぼ)」で対応している。非主要部の様態が2つもあるが、副詞の「터덜터덜(とぼとぼ)」は、連結語尾の「-어/아(-e/a)」のついた「걸어(歩いて)」がないと、次のように、容認度がやや落ちる。

?(85') 모두를 위해 이렇게 짐을 잔뜩 들고 터덜터덜 왔다.  
 motwu-lul wihay ilehkey cim-ul canttuk tul-ko thetelthete o-assta  
 みんな-ACC ため こんなに 荷物-ACC たくさん 持つ-PART とぼとぼ 来る-PS  
 ‘みんなのためにこんなに荷物をたくさん持ってとぼとぼきたんだから’

(85')は、副詞の「터덜터덜(とぼとぼ)」は、連結語尾の「-어/아(-e/a)」のついた「걸어(歩いて)」と共起しない場合を示している。非文にはならないが、連結語尾の「-어/아(-e/a)」のついた「걸어(歩いて)」があった方がより自然になる。コーパスでも、副詞の「터덜터덜(とぼとぼ)」は、一般的な様態動詞の「걷다(歩く)」との共起が多く、「걷다(歩く)」がない「가다(行く)」や「오다(来る)」との共起は少ない<sup>104</sup>。副詞の「터덜터덜(とぼとぼ)」は様態が細かすぎるので、副詞の「터덜터덜(とぼとぼ)」の様態を大まかに言う一般的な様態動詞の「걷다(歩く)」をさらに設けることで、細かい様態でも容認できるようにしているだろう。その際、韓国語は V 言語のため経路を動詞で表すことが多く、一般的な様態動詞の「걷다(歩く)」は、連結語尾の「-어/아(-e/a)」のついた「걸어(歩いて)」などの非主要部で表される場合が多い。一方、日本語では、動詞の連用形の様態動詞と様態の副詞が共起する例が韓国語ほど見られないが<sup>105</sup>、例えば、上記の(84)を取り上げることができる。

- (84) a. The child, relinquished by the nurse, rushed across the room and rooted shyly into her mother's dress. (Fitzgerald[original] 1925:151)  
 b. 子供は乳母の手を離れて、とことこ駆け出し、いくぶん照れたように母親のドレスにへばりついた。(小川[訳] 2009:189)

(84)は、英語の様態に対して、動詞の連用形と様態の副詞で対応している。前述したように、動詞の連用形の「駆け」を副詞の「とことこ(歩く・走る)」の上位カテゴリーとする階層構造として捉えることができるが、副詞の「とことこ」は動詞の連用形の「駆け」と共起しないと、次のように、容認度が落ちる。

<sup>104</sup> 韓国国立国語院のコーパスによると、副詞の「터덜터덜(とぼとぼ)」の計 61 件のうち、一般的な様態動詞の「걷다(歩く)」との共起は 35 件だった。他の一般的な様態動詞とは、「달리다(走る)」との共起が 2 件、「기다(這う)」との共起が 1 件見られた。一方、一般的な様態動詞の「걷다(歩く)」がない「가다(行く)」や「오다(来る)」との共起は 3 件しかなかった。一般的な様態動詞の「걷다(歩く)」と共起する 35 件のうち、連結語尾の「-어/아(-e/a)」のつく「걷다(歩く)」は 13 件(修飾も含む)で、副詞の様態と一般的な様態動詞の共起において、連結語尾の「-어/아(-e/a)」による非主要部が貢献していることがわかる。

<sup>105</sup> 本稿の調査では、日本語での動詞の連用形の様態動詞と副詞の様態の共起があまり見られなかったが、日本語では、そもそも直示の経路を主動詞とする前項動詞はテ形しかない(例えば、「歩いていく」、「飛び出していく」、「飛びこえてくる」など)、直示の経路を主動詞とする連用形の様態動詞と副詞の様態の共起はあまり見られないと思われる。動詞の連用形の様態動詞は直示以外の経路、または統語的複合動詞を主動詞とする(例えば、動詞の連用形の「歩き」だと、「歩き出す」、「歩き続ける」、「歩き回る」という特徴が副詞の様態との共起に影響するかもしれない)。



(84') \*a. 子供は乳母の手を離れて、とことこ出した。

??b. 子供は乳母の手を離れて、とことこ出た。

(84')は、副詞の「とことこ」が動詞の連用形の「駆け」と共起しないと、容認度が落ちることを示している。そもそも「駆け出す」の「出す」は他動詞なので、自律移動には適していないが、自動詞の「出る」にしても容認度は落ちる。コーパスでも、副詞の「とことこ」は一般的な様態動詞の「歩く」との共起が多く、「出る」との共起は見られない<sup>106</sup>。このように、副詞の「とことこ」は、一般的な様態動詞との共起が必要になる。一般的な様態動詞とも共起すると、2つの様態が用いられることになるが、副詞の「とことこ」の様態が細かいので、副詞の「とことこ」の様態を大まかに言う一般的な様態動詞の「駆ける」をさらに設けることで、細かい様態が容認できるようにしている。その際、動詞の連用形の「駆け」にすることで、経路を動詞で表す V 言語の条件は満たすことができるだろう。

以上、両言語の様態の階層構造では、動詞の連用形や連結語尾の「-어/아(-e/a)」の一般的な様態動詞と様態の副詞は共起する傾向がある。しかし、あくまでも様態の階層構造として捉えているのが前提で、二重の様態を避けようとする動きは大きい。前述した様態の中立化か、次のような様態の副詞のみの対応を見ると、やはり二重の様態を避けようとする動きが伺える。

(55) a. Sophie creaked to her feet and **hobbled** to the bench. (Jones[original] 1986:106)

b. ソフィーは骨をきしませて立ちあがり、**よたよた**作業台へむかいました。

(西村[訳] 1997:104)

前述した(55)では、英語の様態動詞を副詞のみで対応する日本語の例を示している。英語の様態動詞の *hobbled* に対し、日本語は副詞の「よたよた」で対応している。「むかいました」は方向を表す動詞で、動詞の連用形の一般的な様態動詞との共起は見られない。副詞の「よたよた」は細かい様態を表すので、単独では経路動詞と共起できないはずだが、それでも容認度が落ちないのは、副詞と動詞の間に入っている「作業台へ」の存在のためである。「作業台へ」は移動の別の側面、すなわち移動の着点としての地(ground)を示しているが、「作業台へ」が入ってないと、容認度が落ちる(??ソフィーは骨をきしませて

<sup>106</sup> 筑波ウェブコーパス(NINJAL-LWP for TWC)によると、「とことこ+動詞」の計 186 件のうち、「とことこ+歩く」が 49 件で最も多い。「とことこ+いく」は 26 件だが、26 件の全ては「いく」を主動詞とする動詞の連用形やテ形の挿入があったので、「とことこ」と「いく」が隣接するような共起関係ではない。「とことこ+くる」も 19 件あるが、19 件の全てが「くる」を主動詞とする動詞の連用形やテ形の挿入があったので、同様の共起関係とは言えない。一方、「とことこ+出る」は 1 件も見られず、「とことこ+出す」は 2 件が見られるが、2 件とも「トコトコと歩き出す」なので、動詞の連用形の「歩き」との共起にもなる。また、「とことこ+動詞」の計 176 件のうち、「とことこ+歩く」が 80 件で最も多い。続いて「とことこ+走る」が 34 件で、「とことこ+出す」や「とことこ+出る」は 1 件もなかった。このことから、副詞の「とことこ(と)」は、一般的な様態動詞の「歩く」との共起が多く、その際、動詞の連用形の「歩き」は「とことこ」の 49 件中 7 件、「とことこ」の 80 件中 9 件で、テ形の「歩いて」は「とことこ」の 49 件中 10 件、「とことこ」の 80 件中 40 件が見られるほど、副詞の「とことこ(と)」と一般的な様態動詞の「歩く」の共起において、動詞の連用形やテ形がよく用いられていることがわかる。

立ちあがり、よたよたむかいました)。コーパスでも、副詞の「よたよた」は、様態動詞との共起がない場合、次のように、動詞の間に地の意味要素が入っている<sup>107</sup>。

- (86) a. ターンテーブルから荷物を受け取ったオレは、他の帰国者に大分遅れをとりながら ヨタヨタと 税関へ向かった。(アメリカ旅行記<sup>108</sup>)
- b. 所々に緊張感の無い異音を挟みつつ喋る声の主を振り返って見ると、イイ感じに顔を紅くした沙織様が よたよたと こちらへ向かって歩いて来ている。  
(現代不思議忌憚異聞録 第百夜 化身 下<sup>109</sup>)

(86)は、副詞の「よたよた」と動詞の間に地の意味要素がある場合を示している。副詞の「よたよた」と方向を表す動詞の「向かう」だと容認度が落ちるが、その間に「税関へ」と「こちらへ」という地の意味要素が入ると容認度は落ちない。着点としての「税関へ」と「こちらへ」は、様態の副詞の上位カテゴリーではないが、移動の別の側面を示すことで、様態が細かすぎる副詞の「よたよた」の移動事象を完結させる役割を果たしている。他にも、次のような例が挙げられる。

- (87) a. The antlers stood on their points and skittered, crab like, across the stage.  
(Maguire[original] 1995:182)
- b. 枝角は尖った先端を下にして立ち、カニのように トコトコと 教壇の上を横切った。  
(服部・藤村[訳] 2007:241)
- c. 사슴뿔이            뿔            끝으로            버티고            서서            게처럼  
재빠르게  
sasum-ppwul-i ppwul kkuth-ulo bethi-ko            se-se            key-chelem            cayppalukey  
鹿-角-NOM 角 先-by 耐える-PART 立つ-PART カニ-のように すばやく  
연단을 가로질러 달려갔다.            (Song[訳] 2004:251)  
yentan-ul kalocill-e talli-e-ka-ssta  
演壇-ACC 横切る-PART 走る-PART-行く-PS  
‘鹿の角が先端で立ち、カニのように素早く演壇を横切って走っていった’

(87)は、英語の様態動詞を副詞のみで対応する日本語の例を示している。英語の *skittered* に対し、日本語は副詞の「トコトコ」で対応している。様態動詞との共起は見られないが、動詞の「横切った」との間に「教壇の上を」という地の意味要素が入っているので、

<sup>107</sup> 筑波ウェブコーパス(NINJAL-LWP for TWC)によると、副詞の「よたよた」は、「よたよた+動詞」のパターンの計 75 例のうち、「歩く」が 25 例で最も多く、「する(よたよたする)」が 23 例、「走る」が 6 例の順に続いている。「向かう」は 1 例もなかった。また、「よたよたと+動詞」のパターンでは、計 155 例のうち、「歩く」が 27 例で最も多く、「くる」が 8 例、「いく」が 6 例見られるが、ほとんどが補助動詞の「てくる」と「ていく」として用いられていた。「向かう」は 2 例しかなかったが、2 例とも「よたよた」と「向かう」の間に地の意味要素が入っていた(86)を参照)。

<sup>108</sup> 出典は [www.sakusha.net/americanyokouki/kikoku.html](http://www.sakusha.net/americanyokouki/kikoku.html)

<sup>109</sup> 出典は [kangenpatsu.blog83.fc2.com/blog-entry-132.html](http://kangenpatsu.blog83.fc2.com/blog-entry-132.html)

「教壇の上を」が副詞の細かい様態でも移動事象を完結させる役割を果たしていると言える。しかし、副詞の「トコトコ」と動詞の「横切った」では容認度が落ちない（枝角はカニのようにトコトコと横切った）。副詞の「トコトコ」と直示動詞の「行く」では不自然になることを考えると（??私はトコトコと行った）、様態の副詞は直示以外の経路とは一部共起できても<sup>110</sup>、直示の経路とは共起できない場合があると言える<sup>111</sup>。

一方、韓国語では、副詞の「재빠르게(素早く)」と連結語尾の「-어/아(-e/a)」のついた「달려(走り)」で対応している。日本語のような副詞のみの対応ではないが、例えば、次のような例が挙げられる。

(88) a. I walked back along the border of the lawn, traversed the gravel softly and tiptoed up the veranda steps. (Fitzgerald[original] 1925:187)

b. (私は) 芝生の端を歩いて、砂利道を静かに踏み、階段に足音を忍ばせてポーチへ  
上 が っ た 。

(小川[訳] 2009:237)

c. 나는 잔디밭의 경계를 따라 되돌아가서 자갈밭을  
na-nun cantipath-uy kyengkyyey-lul ttala toytolaka-se cakal-path-ul  
私-TOP 芝生-GEN 境界-ACC 沿って 逆戻りする-PART 砂利-畑-ACC  
가로지른 다음 살금살금 베란다의 계단을 올라갔다.  
kalocilu-n taum salkumsalkum peylanta-uy kyeytan-ul olla-kassta  
横切る-ADN あとこそこそ 베란다-GEN 階段-ACC 上る-PART-行く-PS  
'私は芝生の境界に沿って逆戻りして、砂利道を横切ったあと、こそこそとベラン  
ダの階段を上っていった' (Kim[訳] 2009:181)

(88)は、英語の様態動詞を副詞のみで対応する韓国語の例を示している。英語の *tiptoed* に対し、日本語は「足音を忍ばせて」で対応している。経路動詞の「上がった」に先行するテ形だが、経路動詞との間の「ポーチへ」がないと容認度が落ちることから（??私は階段に足音を忍ばせて上がった）、着点としての地の「ポーチへ」は、様態が細かすぎる「足音を忍ばせて」の移動事象の全体像を完結させる役割をしていると言える。一方、韓国語では、副詞の「살금살금(こそこそ)」で対応している。連結語尾の「-어/아(-e/a)」のついた様態動詞は見られない。しかし、副詞の「살금살금(こそこそ)」と経路動詞の「올라갔다(上っていった)」の間に「베란다의 계단을(ベランダの階段を)」という地の意味要素が入っている。連結語尾の「-어/아(-e/a)」のついた様態動詞がなくても、地の意

<sup>110</sup> 直示以外の経路でも、上記の(84)では、「とことこ出た」の容認度が落ちるので、全ての直示以外の経路が副詞の様態と共起できるとは言えない。今後さらに考察する必要があるだろう。

<sup>111</sup> (85)における「터덜터덜(とぼとぼ)」と「왔다(来た)」と(87)における「トコトコ」と「行った」、(88)における「살금살금(こそこそ)」と「갔다(行った)」といった一連の容認度を見ると、副詞の様態は、直示の経路とは共起できない側面があると言える。

味要素が移動の別の側面を示し、副詞の細かい様態でも移動事象の全体像を完結できるようにしていると言える。

ただし、副詞の「살금살금(こそこそ)」は、地の「베란다의 계단을(ベランダの階段を)」がなくても、経路動詞の「올라갔다(上がっていった)」との容認度は落ちない(나는 살금살금 올라갔다)。副詞の「살금살금(こそこそ)」と直示の経路動詞の「갔다(行った)」だと容認度が落ちることから(?나는 살금살금 갔다)、直示動詞の「갔다(行った)」に先行する非直示動詞の「올라(上がって)」も「살금살금(こそこそ)」の細かい様態でも移動事象の全体像を完結させる役割をしていると考えられる。

このように、様態の副詞が動詞の連用形や連結語尾の「-어/아(-e/a)」の一般的な様態動詞と共起しなくても、他の意味要素が、動詞の連用形や連結語尾の「-어/아(-e/a)」の様態動詞に代わって移動事象の全体像を完結させる役割をしている。他の意味要素は、様態の副詞の上位カテゴリーではないが、移動の別の側面を示すことで、副詞の細かい様態でも移動事象の全体像を完結できるようにしている。また、韓国語では、接尾辞の「거리다(しきりに…する)」が様態の副詞の上位カテゴリーに代わって移動事象の全体像を完結させる役割をしている。例えば、次のような例が挙げられる。

(89) a. I **stumbled** to the edge of the cliff overlooking the deep valley that was shrouded in darkness.  
(Hosseini[original] 2003:103)

b. (私は) **おぼつかない足取りで**、暗闇に包まれた深い谷を見おろす崖の縁まで行く。  
(佐藤[訳] 2007:178)

c. (나는) **비틀거리며**                      절벽    끝으로    가자                      어둠에    쌓인  
pithul-keli-mye                      celpyek kkuth-ulo ka-ca                      etwum-ey ssahin  
よろよろ-しきりにする-PART 崖    縁-to    行く-PART 暗闇-by 包む-PASS  
깊은 계곡이    내려다보였다.  
kiphun kyeykok-i nayli-eta-poi-essta

深い 谷-NOM 下ろす-PART-見える-PS  
'よろよろしながら崖の縁へ行くと暗闇に包まれた深い谷が見えた'

(89)は、英語の様態動詞を副詞のみで対応する韓国語の例を示している。英語の *stumbled* に対し、日本語は「おぼつかない足取りで」で対応している。様態動詞の対応は見られないが、「おぼつかない足取りで」と経路動詞の「行く」との間に入っている「暗闇に包まれた深い谷を見おろす崖の縁まで」という地の意味要素が「おぼつかない足取りで」の細かい様態でも移動事象の全体像を完結させる役割をしている。

一方、韓国語では、「비틀거리며(よろよろしながら)」で対応している。経路動詞の「가자(行くと)」に先行した「비틀거리다(よろよろする)」に、連結語尾の「-며(-mye)」

がついているが、その他の様態動詞は見られない。しかし、「비틀거리다(よろよろする)」には接尾辞の「거리다(しきりに…する)」が付いていて、経路動詞の「가다(行く)」と共起しても容認度は落ちない(나는 비틀거리며 갔다)。このことから、連結語尾の「-어/아(-e/a)」のつく様態動詞と共起しなくても、接尾辞の「거리다(しきりに…する)」が付いていれば、細かい様態でも容認度が落ちないようにしていると言える。また、「비틀거리며(よろよろしながら)」と経路動詞の「가다(行く)」の間には、「절벽 끝으로(崖の縁へ)」という地の意味要素もあるので、細かい様態でも移動事象の全体像を完結させる役割をしていることがわかる。他にも、接尾辞の「거리다(しきりに…する)」が付く様態の副詞は、次のような例が挙げられる。

(90) a. When Sophie **hobbled** over, Michael was standing watching the last light fade out of a little round lump under the dark water. (Jones[original] 1986:184)

b. ソフィーが近寄ると、マイケルは黒い水底で小さな明りが丸いかたまりになってしまふのを見まもっているところでした。(西村[訳] 1997:176)

c. 소피가 **절뚝거리며** 다가갔을 때  
 sophi-ka **celttwuk-keli-mye** tak-a-ka-ss-ul ttay

ソフィー-NOM よたよた-しきりにする-PART 寄る-PART-行く-PS-ADN 時

마이클은 캄캄한 물에 잠긴 작고 동그란

덩어리

maikhul-un khamkhamha-n mwul-e camki-n cak-ko tongkula-n tengeli

マイケル-TOP 黒い-ADN 水-by 沈む-ADN 小さい-PART 丸い-ADN 塊

하나에서 서서히 꺼져가는 마지막 빛을 지켜보고

hana-eyse sesehi kkeci-e-ka-nun macimak pich-ul cikhi-e-po-ko

一つ-LOC 徐々に 消える-PART-行く-ADN 最後 光-ACC 守る-PART-見る-PART  
 있었다.

(Kim[訳] 2004:162)

iss-essta

いる-PS

‘ソフィーがよたよたしながら寄って行った時、マイケルは黒い水に沈んだ小さく丸い塊の一つから徐々に消えて行く最後の光を見守っていた’

(90)は、英語に対して、接尾辞の「거리다(しきりに…する)」が付く様態の副詞で対応している韓国語を示している。英語の *hobbled* に対し、韓国語では副詞の「절뚝거리며(よたよたしながら)」で対応している。連結語尾の「-어/아(-e/a)」のついた一般的な様態動詞は見られないが、場所句や方向も見られず、経路動詞の「다가갔을 때(寄って行ったとき)」が後続している。それでも容認度が落ちないのは、副詞の「절뚝거리며(よたよたしながら)」

には接尾辞の「거리다(しきりに…する)」が付いているためである。副詞の「절뚝절뚝(よたよた)」の一部に接尾辞の「거리다(しきりに…する)」が付くと、動詞との間にもう一つの動詞が入っているような役割をしているのであろう。コーパスでも、接尾辞の「거리다(しきりに…する)」が付いた「절뚝거리며(よたよたしながら)」は、連結語尾の「-어/아(-e/a)」のついた様態動詞と共起しない例が見られる<sup>112</sup>。

このように、韓国語では、様態の副詞につく接尾辞の「거리다(しきりに…する)」が様態の副詞の上位カテゴリーに代わって移動事象の全体像を完結させる役割をしている。接尾辞の「거리다(しきりに…する)」は様態の副詞の上位カテゴリーではないが、様態の副詞が(経路)動詞と隣接しないように、その間でクッションの役割をすることで、副詞の細かい様態でも移動事象の全体像が完結できるようにしていると言える。日本語には見られないストラテジーだが、限られた移動様態動詞を補う動きの一種になるだろう。

以上、日本語と韓国語の非主要部における様態の中立化を見た。両言語では、非主要部の様態が多く、その中でも主動詞との結びつきの強い非主要部の様態が多いのは、主動詞との結びつきが強いからこそ実現できる様々な役割が考えられる。様態の中立化とは、英語の様態動詞に対応する際、どの言語にもある一般的な様態動詞が用いられ、その他の詳細は省かれることだが、本稿では、動詞の連用形や連結語尾の「-어/아(-e/a)」の殆どで様態の中立化が見られた。動詞の連用形や連結語尾の「-어/아(-e/a)」の一般的な様態動詞にさらに様態の副詞が加わる場合も一部見られたが、その場合は動詞の連用形や連結語尾の「-어/아(-e/a)」の一般的な様態動詞が様態の副詞の上位カテゴリーとなる階層構造として捉えていると考えられる。動詞の連用形や連結語尾の「-어/아(-e/a)」の一般的な様態動詞の代わりに、他の意味要素や接尾辞の「거리다(しきりに…する)」が副詞の細かい様態でも移動事象の全体像を完結させる役割を果たしている場合も見られた。次節では、両言語の非主要部の様態における様態の中立化と上位カテゴリー以外の役割を取り上げていく。

#### 4.1.3 日本語と韓国語の非主要部で一般的な様態動詞が用いられていない場合

前節では、日本語と韓国語の非主要部の様態において一般的な様態動詞が用いられる場合を見たが、両言語の非主要部では、一般的な様態動詞が用いられていない場合もある。前述したように、動詞の連用形や連結語尾の「-어/아(-e/a)」以外では、殆どが一般的な様態動詞ではなかった。例えば、次のような例が挙げられる。

<sup>112</sup> 韓国国立国語院のコーパスによると、副詞の派生語の「절뚝거리며(よたよたしながら)」は 19 例(計 25 例のうち移動事象ではない 6 例は除く)のうち、連結語尾の「-어/아(-e/a)」のつく様態動詞(または様態の主動詞)との共起は 9 例、連結語尾の「-어/아(-e/a)」のつく様態動詞と共起しない場合は 10 例が見られた。例えば、次のような例が挙げられる。

(1) 한 토막의 생선 가지와 먹다버린 밥 찌꺼기를 찾아 해피는  
 han thomak-uy sayngsen kasi-wa mek-ta-peli-n pap ccikkeki-lul chac-a hayphi-nun  
 一切れ-GEN 魚 骨-and 食べる-PART-捨てる-ADN ご飯 残り-ACC 探す-PART ハッピー-TOP  
 절뚝거리며 온다.  
 celttwuk-kelimye o-nta  
 よたよた-しきりにする-PART 来る-PST  
 ‘一切れの魚の骨と食べ残したご飯を探して、ハッピーはよたよたしながら来る’

(91) a. he thought as he hurried to meet Elphaba, (Maguire[original] 1995:161)

b. エルフアバとの待ち合わせ場所に急ぎながら、ボックは考えた。

(服部・藤村[訳] 2007:212)

c. 그는 [...] 서둘러 엘파바를 만나러 달려가면서  
생각했다.

ku-nun setwulle eylphapa-lul manna-le talli-e-ka-myense sayngkakha-issta  
彼-TOP 急いで エルフアバ-ACC 会う-PURP 走る-PART-行く-ながら 考える-

PS

‘彼は急いでエルファバに会いに走っていきながら考えた’ (Song[訳] 2004:222)

(91)は、英語に対して、一般的な様態動詞が用いられていない日本語の非主要部を示している。英語の *hurried* に対して、日本語は「急ぎながら」で対応している。動詞の連用形ではない様態動詞だが、どの言語にもある一般的な様態動詞が用いられているとは言えない。「急ぎながら」が一般的な様態動詞ではないことは、韓国語の対応からでも言える。韓国語では、連結語尾の「-어/아(-e/a)」のついた「달려(走って)」と副詞の「서둘러(急いで)」で対応している。連結語尾の「-어/아(-e/a)」のついた「달려(走って)」は一般的な様態動詞で、韓国語でも、日本語の「急ぐ」のような「서두르다(急ぐ)」は存在するのに、「서두르다(急ぐ)」の代わりに「달리다(走る)」が用いられている。「서두르다(急ぐ)」は副詞として用いられている(서둘러(急いで))。「서두르다(急ぐ)」が動詞として用いられるのは、どうやら動作に限られるようである<sup>113</sup>。対応する動詞は存在しても、移動動詞として用いられていないのは、一般的な様態動詞ではないためである可能性が高い。このように、日本語では、英語に対応する非主要部の様態において、動詞の連用形以外では一般的な様態動詞が用いられていない。一方、韓国語では、次のような例が挙げられる。

(92) a. The boys rambled away, rattling doors of other friends, knocking aslant the portraits of old boys now grown into august patrons. (Maguire[original] 1995:121)

b. 少年たちはほかの部屋のドアをガタガタいわせたり、今は立派な後援者になっている卒業生の肖像画を叩いて傾けたりしながら、ぶらぶらと出ていった。

(服部・藤村[訳] 2007:159)

c. 학생들은 다른 친구들의 방문을 두들기기도 하고 이제는

<sup>113</sup> 韓国国立国語院のコーパスによると、「서두르다(急ぐ)」の計 176 件のうち、場所の格助詞「에(=)」との共起が 0 件、移動方向の格助詞「으로(へ)」との共起が 3 件しかなかった。このことは、「서두르다(急ぐ)」が移動の場所や方向と共起する移動動詞として用いられていないことを意味する。しかも、移動方向の格助詞「으로(へ)」と共起する 3 件も、「일본으로 건너갈 준비를 서둘렀다(日本へ渡る準備を急いだ)」のように、「으로(へ)」と「서두르다(急ぐ)」との間には目的語が入っている。「으로(へ)」と「서두르다(急ぐ)」が隣接するような共起は避けられているように見える。また、「서두르다(急ぐ)」では、「퇴근을 서둘렀다(退社を急いだ)」や「결혼을 서둘렀다(結婚を急いだ)」のように、ある動作を急ぐ場合が見られた。

haksayng-tul-un talun chinkwu-tul-uy pang-mwun-ul twutulki-ki-to ha-ko icey-nun  
 学生-PL-TOP 他 友達-PL-GEN 部屋-門-ACC 叩く-NMLZ-も する-PART 今-TOP  
 당당한 저명인사들로 성장한 옛 선배들의 초상화를  
 tangtanga-n cemyeng-insa-tul-lo sengcanga-n yeys senpay-tul-uy chosanghwa-lul  
 堂々なる-ADN 著名-人事-PL-to 成長する-ADN 昔 先輩-PL-GEN 肖像画-ACC

탕탕 쳐서 기울어뜨리는 등 소란을 떨며 가 버렸다.  
 thangthang chi-ese kiwulettuli-nun tung solan-ul ttel-mye ka peli-essta  
 ぱんぱん 打つ-PART 傾ける-ADN など 大騒ぎ-ACC する-PART 行く しまう-

PS

‘学生たちは他の友達の部屋のドアを叩いたり、今は堂々なる著名な者として成長した昔の先輩たちの肖像画ぱんぱん打って傾けるようにするなど、大騒ぎをして行ってしまった’

(Song[訳] 2004:170)

(92)は、英語に対して、一般的な様態動詞が用いられていない韓国語の非主要部を示している。英語の *rambled* に対して、韓国語は動詞句の「소란을 떨며 가 버렸다(大騒ぎをして行ってしまった)」で対応している。「소란을 떨다(大騒ぎをする)」に連結語尾の「-며(mye)」がつき、「가다(行く)」と補助動詞の「버리다(しまう)」が続いているが、連結語尾の「-어/아(-e/a)」がついていない非主要部の様態となっている。その際、連結語尾の「-며(mye)」がつく「소란을 떨며(大騒ぎをして)」は一般的な様態動詞ではない。このように、韓国語では、英語に対応する非主要部の様態において、連結語尾の「-어/아(-e/a)」以外では一般的な様態動詞が用いられていない。

前述したように、動詞の連用形や連結語尾の「-어/아(-e/a)」以外では、主動詞との結びつきが強くないので、情報の背景化はそれほど進んでいない。そのため、必ずしも一般的な様態動詞が用いられる必要はないのだろう。それは同時に様態の中立化を避ける動きにつながる。英語の様態はこの場合一般的な様態動詞では対応しないので、その他の詳細が省かれることはない。例えば、次のような例が挙げられる。

(93) a. Elphaba sidled over to Galinda's side with her chair under her arm(Maguire[original] 1995:109)

b. エルフアバが椅子を抱えてガリンダの横へやってきた。

(服部・藤村[訳] 2007:144、一部修正)

c. 엘파바가 자기 의자를 팔에 끼고 갈린다 옆으로  
 eyphapa-ka caki uyca-lul phal-ey kki-ko kallinta yeph-ulo

エルフアバ-NOM 自分 椅子-ACC 腕-LOC 挟む-PART ガリンダ 横-to

옮겨 왔다.

(Song[訳] 2004:155、一部修正)



olmki-e wassta  
移す-PART 来る-PS

‘エルファバが自分の椅子を腕に挟んでガリンダの横へ移してきた’

(93)は、英語に対して、一般的な様態動詞が用いられていない日本語の非主要部を示している。英語の *sidled* に対し、日本語は動詞のテ形の「やって」で対応している。英語の *sidle* による「横に動く（斜めに歩く・進む）」という様態を正確に対応していないが、何らかの移動の側面を示すことで、単なる一般的な様態動詞での対応ではないことを示すことができる。一方、韓国語では、「 옮겨 왔다(移してきた)」で対応している。主動詞の「왔다(きた)」も、それに先行する非主要部の「 옮겨(移して)」も経路動詞で、*sidled* の様態は省かれている。このように、日本語では、英語の様態に対して一般的な様態動詞が用いられていない。一般的な様態動詞が用いられていないことは、一般的な様態動詞による様態の中立化を避ける動きにつながる。

また、英語の様態を一般的な様態動詞で対応しないことは、様態の副詞を回避する動きでもある。*sidle* の様態を詳細まで正確に対応するためには、辞書で提示しているような「横に（動く）」や「斜めに（歩く）」という様態の副詞をさらに設ける必要はある。しかし、実際には、様態の副詞を設けることなく、動詞のテ形での対応に留まっている。様態の副詞は、両言語の非主要部の様態において主動詞との結びつきが最も弱く、情報の背景化が進んでいないので負荷がかかってしまう。対応の正確さより、副詞を設けることによる負荷を回避する動きが非主要部の動詞のテ形などへの対応に走ったかもしれない。その際、一般的な様態動詞が用いられていないと、英語の様態の詳細には対応したつもりになるのだろう。

以上、両言語の非主要部において一般的な様態動詞が用いられていない場合を見た。英語の様態を一般的な様態動詞で対応しないことは、一般的な様態動詞による様態の中立化を避ける動きにつながる。同時に、様態の副詞を回避する動きにもつながる。言い換えると、英語の様態を一般的な様態動詞で対応しないことは、英語の様態の詳細に対応しようとして、別の移動の側面を示すことだが、主動詞との結びつきの強い動詞の連用形や連結語尾の「-어/아(-e/a)」でも、例えば、次のような例が見られる。

(94) a. People were rushing to us. (Hosseini[original]  
2003:146)

b. 人々が続々と駆けつけてきてくれた。 (佐藤[訳] 2007:250)

c. 사람들이 몰려왔다. (Lee[訳]

2005:308)

salam-tul-i molli-e-o-assta  
人-PL-NOM 殺到する-PART-来る-PS

‘人々が殺到してきた’

(94)は、英語の様態に対して別の移動の側面に注目している韓国語を示している。英語の *were rushing* に対し、日本語は動詞の連用形の「駆け」で対応している。「駆け」は一般的な様態動詞で、*rush* の「急いで行く」という様態の詳細まで対応しているとは言い切れない。一方、韓国語では、連結語尾の「-어/아(-e/a)」がついた「몰려(殺到して)」で対応している。「몰려(殺到して)」は一般的な様態動詞ではなく、複数の図が一方に集中するような移動の様態を示している。日本語でも複数の図による様態は、副詞の「続々と」で示しているが、韓国語では、主動詞との結びつきが強い連結語尾の「-어/아(-e/a)」で示している。このように、韓国語の非主要部では、一般的な様態動詞は用いられず、英語とは異なる移動の側面を示している。他にも、次のような例が挙げられる。

(95) a. So Sophie poured yellow powder into a square of paper as she had seen Michael do, twisted it smartly, and **hobbled** to the door with it. (Jones[original] 1986:189)

b. そこでソフィーはマイケルのやっていたとおり、四角い紙の上に黄色い粉を入れ、手際よくひねってから、戸口へ戻りました。 (西村[訳] 1997:181)

c. 그래서 소피는 노란 가루를 사각형 종이에 쏟아  
kulayse sophi-nun nolan kalwu-lul sakakhyeng cong-i-ey ssot-a  
そして ソフィー-TOP 黄色い-ADN 粉-ACC 四角い 紙-LOC 注ぐ-PART  
놓고 능숙하게 비틀어 여민 후 문가로  
noh-ko nungswukhakey pithul-e yemi-n hwu mwun-ka-lo  
おく-PART 手際よく ひねる-PART 整える-ADN 後 門際-to  
가져갔다. (Kim[訳] 2004:167)

kaci-e-ka-ssta

持つ-PART-行く-PS

‘そしてソフィーは黄色い粉を四角い紙に注いでおいて、手際よくひねて整えた後戸口へ持っていった’

(95)も、英語の様態に対して別の移動の側面に注目している韓国語の例を示している。英語の *hobbled* に対し、日本語では対応が見られない。経路動詞の「戻りました」は見られるが、移動の様態は省かれている。一方、韓国語では「가져갔다(持っていった)」で対応している。連結語尾の「-어/아(-e/a)」がついた「가져(持つ)」は一般的な様態動詞ではなく、主動詞の「갔다(行った)」と同時に見られる付帯状況を示している。このように、韓国語では、英語の様態に対応する非主要部において一般的な様態動詞が用いられていないが、英語とは異なる移動の側面を示している。一方、日本語では、例えば、次のような「引き返す」のような例が見られる。

(96) a. As I tiptoed from the porch I heard my taxi feeling its way along the dark road toward the house. (Fitzgerald[original] 1925:188)

b. こっそり引き返してポーチを離れたところで、まるで暗い道を手さぐりで来るようなタクシーの音がした。 (小川[訳] 2009:238)

c. 포치로 몰래 걸어나오는데 택시가 어두운 길을  
 phochi-to mollay kel-e-na-o-nunthey thayksi-ka etsu-wun kil-ul  
 ポーチ-to こっそり 歩く-PART-出-来る-ところ タクシー-NOM 暗い-ADN 道-ACC

따라 집을 향해 올라오는 것이 보였다.  
 ttala cip-ul hyanghay oll-a-o-nun kek-i poi-essta

沿って 家-ACC 向かって 上がる-PART-来る-ADN 物-NOM 見える-PS

‘ポーチへこっそり歩いて出てくるところ、タクシーが暗い道に沿って家に向かって上ってくるのが見えた’ (Kim[訳] 2009:182、一部修正)

(96)は、英語とは別の移動の側面に注目している日本語の非主要部の例を示している。英語の *tiptoed* に対し、日本語では副詞の「こっそり」で対応している。後続する「引き返して…離れたところで」は複文となっているが、その際の非主要部の「引き返して」は一般的な様態動詞ではなく、ポーチを離れる経路の着点が元の場所であり、予定を変えて途中から逆方向に進むという移動の側面を示している。英語は単なるポーチからの移動を示しているが(*from the porch*)、日本語は英語にはなかった移動の側面を示していることになる。一方、韓国語では、連結語尾の「-어/아(-e/a)」のつく非主要部において一般的な様態動詞の「걸어(歩いて)」が用いられている。それに加え、様態の副詞の「몰래(こっそり)」も見られる。このように、日本語では、英語とは別の移動の側面を示している非主要部が見られる。このような「引き返す」での対応は、次のような例でも見られる。

(97) a. (cars) stayed for just a minute and then drove sulkily away. (Fitzgerald[original] 1925:146)

b. 自動車がしばらく停まってから、当てがはずれて引き返していく。 (小川[訳] 2009:182)

c. 자동차들이 잠깐 기다리다가 횡하니 가버렸다.  
 catongcha-tul-i camkkan kitalita-ka hweyng-hani ka-peli-essta  
 自動車-PL-NOM しばらく 待つ-てから ひゅう-と 行く-しまう-PS  
 ‘自動車はしばらく待ってから、ひゅうと行ってしまった’

(Kim[訳] 2009:142、一部修正)

(97)は、他の英語に対しても「引き返す」で対応している場合を示している。英語の様態

は *drove* のほか、副詞の *sulkily* でも見られるが、日本語は全く同じ様態ではないものの、「当てがはずれて」で対応している。非主要部の「引き返して」は一般的な様態動詞ではなく、英語になかった移動の側面を示している。英語は単に出発点から離れている経路を示しているのに対し(*away*)、日本語では、出発点から離れている経路の着点が元の場所で、英語が出発点とした場所は、実は通過点であることも示している。一方、韓国語では、非主要部で様態に対応するのが副詞の「황하니(ひゅうと)」しかない。「가머렸다(行ってしまった)」は経路動詞だが、英語と同様に、ある場所から離れていく経路を示している。

このように、日本語では、他の英語の様態に対しても「引き返す」で対応している。「引き返す」で英語になかった移動の側面を示しているため、異なる英語の様態動詞に対しても同様の対応ができるのだろう。英語になかった移動の側面を示すこと自体は、限られた移動様態動詞を補うための動きだと思われるが、結果的には異なる英語の様態動詞に対して同様の対応ができたり、同じ英語の様態動詞に対して異なる対応ができるという効果があると思われる。

以上、英語の様態を一般的な様態動詞で対応しないことは、英語とは別の移動の側面を示す役割をしている日本語と韓国語の例を見た。両言語の非主要部では、英語が注目していなかった図の情報や付帯状況を示したり、英語になかった移動の経路を示している。最後に、英語の様態を一般的な様態動詞で対応しないことは、意味の拡張の役割もしている。例えば、次のような例が挙げられる。

- (98) a. Then they **sauntered** over to my house. (Fitzgerald[original] 1925:138、一部修正)  
 b. それから二人で隣の家へ**流れて**いった。(小川[訳] 2009:171)  
 c. 그러고는 그들은 **천천히** 우리집 쪽으로 **걸어**왔다. (Kim[訳] 2009:134)  
 kuleko-nun ku-tul-un **chenchenhi** wuli-cip ccok-ulo **kel-e**-o-assta  
 そして-TOP 彼-PL-TOP ゆっくり 我々-家 方-to 歩く -PART-来る-PS  
 ‘そして彼らはゆっくり我々の家の方へ歩いて来た’

(98)は、英語の様態に対応する日本語の非主要部で意味の拡張が見られる場合を示している。英語の *sauntered* に対し、日本語は動詞のテ形の「流れて」で対応している。「流れて」は一般的な様態動詞ではなく、本来液体を図とする動詞である。しかし、ここでは、人を図にして「液体がある方向へ道筋をなすように移動する」ような移動の様態への意味の拡張で対応していると思われる。一方、韓国語では、連結語尾の「-어/아(-e/a)」の「걸어(歩いて)」と副詞の「천천히(ゆっくり)」で対応している。「걸어(歩いて)」は一般的な様態動詞で、*sauntered* の「のんびり歩く」という様態の詳細は、様態の副詞で補っている。このように、一般的な様態動詞が用いられていない日本語の非主要部では、意味の拡張が見られる。このような意味の拡張は、英語の意味が拡張された動詞からの対応でも見られる。例えば、次のような例が挙げられる。

(99) a. Then he **drifted** back to Lake Superior, and he was searching for something to do on the day.  
 (Fitzgerald[original] 1925:130、一部修正)

b. それでスペリオル湖へ**舞い**戻ってみたものの、いまだ目標は定まっていたわけではない。  
 (小川[訳] 2009:160)

c. 그는 슈피리어 호로 다시 **흘러**들어와 여전히  
 ku-nun syuphelie ho-lo tasi **hull-e**-tul-e-o-a yecenhi  
 彼-TOP スペリオル 湖-to また 流れる-PART-入る-PART-来る-PART いまだ  
 뭔가를 찾아 이리저리 배회하던 중이었다.  
 mwunka-lul chac-a iliceli payhoyha-ten cwung-i-essta  
 何か-ACC 探す-PART あちこち 徘徊する-ADN 中-である-PS  
 ‘彼はスペリオル湖へまた流れ入って来て、いまだに何かを探してあちこち徘徊し  
 ていたところだった’  
 (Kim[訳] 2009:126、一部修正)

(99)は、英語の意味が拡張された動詞に対応している日本語と韓国語の例を示している。英語の *drifted* は「浮遊物が潮流や気流などのまにまに漂う」という意味だが、そもそも潮流や気流の中にいる浮遊物でもない以上、本来の意味通りに用いられているとは言えない。このように、意味が拡張された英語の様態動詞に対し、日本語では動詞の連用形の「舞い」で対応している。一般的な様態動詞ではない「舞い」は「音楽などに合わせて手足を動かし、ゆっくり回ったり、かろやかに移動したりする」という本来の意味がそのまま用いられているとは思えない。ただし、音楽に合わせて手足を動かしているような「ゆっくり回ったり、かろやかに移動したりする」というような意味の拡張で対応していると思われる。一方、韓国語では、連結語尾の「-어/아(-e/a)」がついた「흘러(流れて)」で対応している。「흘러(流れて)」も、液体などが低いところへ行ったり、溢れて落ちるといった本来の意味がそのまま用いられているとは思えない。そもそも図となる「彼」は液体ではない。ただし、液体が滑るように動く様子は「目標が定まっていない」彼の移動の様態へと意味の拡張が解釈できるだろう。

このように、両言語では、意味が拡張された英語の様態動詞に対して、意味が拡張された非主要部で対応している。このような意味の拡張は、英語の様態の詳細に対応したいのだが、負荷がかかる様態の副詞は避けようとする動きとも通じる。特に、意味が拡張された英語の様態動詞は、その詳細に対応することが難しく、正確に対応するためには、様態の副詞も必要になるのだろうが、意味の拡張がある非主要部の動詞で対応することで負荷を軽減することができる。つまり、対応の正確さより、副詞を設けることによる負荷の回避となる。その際、一般的な様態動詞が用いられていないと、英語の様態からの対応に当たって、一般的な様態動詞以外からの意味の拡張に適しているのだろう。

以上、日本語と韓国語の非主要部において、一般的な様態動詞が用いられていない場合を見た。前述したように、動詞の連用形や連結語尾の「-어/아(-e/a)」以外では、一般的な様態動詞が用いられていない場合が見られる。動詞の連用形や連結語尾の「-어/아(-e/a)」以外では、主動詞との結びつきが強くないので、情報の背景化がそれほど進んでおらず、必ずしも一般的な様態動詞である必要はない。英語の様態に対応する両言語の非主要部において一般的な様態動詞が用いられていないことは、一般的な様態動詞による様態の中立化を回避する動きにつながる。同時に、様態の副詞を回避する動きにもつながる。また、一般的な様態動詞以外で対応することは、別の移動の側面を示す役割とも言える。最後に、意味の拡張にも貢献し、意味の拡張された英語の様態動詞にも対応している。いずれにしても、様態の副詞を設けることによる負荷を回避しながら、かつ英語の様態の詳細にも対応しようとする戦略である。このように、両言語の非主要部における一般的な様態動詞以外の動詞の役割があるため、両言語の非主要部の様態が多い結果になっている。主動詞との結びつきの強い動詞の連用形や連結語尾の「-어/아(-e/a)」でも、一部そのような役割が見られるため、主動詞との結びつきの強い非主要部の高頻度にも貢献していると考えられる。

#### 4.1.4 様態の副詞を回避しない場合

これまで、新たに様態の副詞を設けるのは負荷がかかるため、動詞の連用形やテ形、連結語尾の「-어/아(-e/a)」などの非主要部での対応で様態を表している日本語と韓国語の例を見てきた。しかし、特定の英語の様態動詞に対しては、両言語では様態の副詞を設けることを回避していない。例えば、次のような例が挙げられる。

- (100) a. He **hurried** back to the entrance and unlocked the door. (Brown[original] 2009:141)  
 b. ヌニェスは**あわてて**入館口へもどり、ドアを解錠した。 (越前[訳] 2010:201)  
 c. 그는 **서둘러** 현관으로 **달려**가 방금 잠근 문을  
 ku-nun **setwulle** hyenkwan-ulo **talli-e**-ka pangkum camkun mwun-ul  
 彼-TOP 急いで 玄関-to 走る-PART-行く さっき 閉める-ADN 門-ACC  
 열었다. (An[訳] 2009:232)  
 yel-essta  
 開く-PS  
 ‘彼は急いで玄関に走って行き さっき閉めた門を開けた’

(100)は、英語の様態動詞に対して様態の副詞が設けられている日本語と韓国語の例を示している。英語の *hurried* に対し、日本語は様態の副詞の「あわてて」で対応している。一方、韓国語では、連結語尾の「-어/아(-e/a)」のついた「달려(走って)」と副詞の「서둘러

(急いで)」で対応している。両言語とも、様態の副詞での対応が見られる。本稿の調査では、英語の *hurry* に対応する両言語において様態の副詞が多数見られた<sup>114</sup>。

このような様態の副詞は、これまで見てきた様態の副詞の回避とは矛盾しているように見える。しかし、前節の調査で様態の副詞も少なくなく、様態の副詞の半分ほどが英語の副詞に対応するために設けられていないことを考えると（表 18 を参照）、このように、特定の英語の様態動詞に対して設けられる様態の副詞が、副詞全体の頻度を引き上げているとも考えられる。特定の英語の様態動詞には、上記の *hurry* のほかにも、次のような *tiptoe* も挙げられる。

(101) a. She **tiptoed** to the door as fast as she could hobble. (Jones[original] 1986:126)

b. ソフィーは足を引きずって、**こっそり** 戸口を目ざしました。 (西村[訳] 1997:122)

c. 소피는 다리를 절면서도 최대한 빠르게 문 쪽으로

sophi-nun tali-lul cel-myenseto choytayhan ppalukey mwun ccok-ulo

ソフィー-TOP 足-ACC 引きずる-PART 最大限 速く 門 方-to

**살금살금** **걸어**갔다.

(Kim[訳] 2004:112)

**salkumsalkum** **kel-e**-ka-ssta

こそこそ 歩く-PART-行く-PS

‘ソフィーは足を引きずりながらも、できるだけ速く門の方へこそこそと歩いて行った’

(101)は、英語の *tiptoe* に対して様態の副詞が設けられている日本語と韓国語を示している。日本語では、様態の副詞の「こっそり」で対応している。一方、韓国語では、連結語尾の「-어/아(-e/a)」のついた「걸어(歩いて)」と副詞の「살금살금(こそこそ)」で対応している。両言語とも、英語の *tiptoe* に対応するために様態の副詞が設けられている。本稿の調査では、英語の *tiptoe* に対応する全ての両言語において副詞や動詞のテ形が新たに設けられていた<sup>115</sup>。面白いのは、両言語とも、英語の副詞の *as fast as she could hobble* からの対応があるのに、様態動詞の *tiptoe* のための様態の副詞が新たに設けられていることである。日本語では、英語の副詞からの対応で「足を引きずって」という動詞句があるのに、英語の様態動詞に対応するための副詞の「こっそり」が設けられている。一方、韓国語でも、英語の副詞からの対応で「다리를 절면서도 최대한 빠르게(足を引きずりながらもできるだけ速く)」という動詞句があり、英語の様態動詞に対応するための副詞の「살금살금(こそこそ)」もある。このように、英語の副詞からの対応があるにもかかわらず、英語の様態

<sup>114</sup> 本稿の調査では、*hurry* の計 20 件のうち、日本語は 7 件、韓国語では 16 件が新たに副詞の様態を設けて対応していた。

<sup>115</sup> 本稿の調査では、英語の *tiptoe* が 3 例しか見られなかったが、3 例に対応する日本語と韓国語の全てにおいて副詞や動詞のテ形の様態が新たに設けられていた。

動詞からの対応で様態の副詞が設けられているのは、特定の英語の様態動詞に対しては、様態の副詞を避けようとしていないと言える。

では、日本語と韓国語では、どのような英語の様態動詞からの対応で様態の副詞を避けようとするのか。本稿の調査は頻度があまり充分ではないので、特定の英語の様態動詞を一般化するのは難しいが、代わりに、どのような日本語や韓国語の様態の副詞がよく設けられているのかを取り上げていく。例えば、*hurry* からの対応のような速度の副詞が挙げられる。

(102) a. They **hurried** through the town, pursued by throbbing screams. (Jones[original] 1986:117)

b. 二人は耳が痛くなるような叫び声に追いたてられながら、町を**急ぎ足で**とおりにぬけていきました。(西村[訳] 1997:115)

c. 그들은 고막을 찌르는 비명에 쫓기면서 **허둥지둥**  
ku-tul-un komak-ul ccilu-nun pomyeng-ey ccochki-myense **hetwungcitwung**  
彼-PL-TOP 鼓膜-ACC 刺す-ADN 悲鳴-by 追われる-ながら そそくさと  
마을 안을 지나갔다. (Kim[訳]  
2004:105)

maul an-ul cina-ka-ssta

町 中-ACC 過ぎる-PART-行く-PS

‘彼らは鼓膜を刺すような悲鳴に追われながら、そそくさと町中を過ぎていった’

(102)は、英語の様態動詞に対して速度の副詞が設けられている日本語と韓国語の例を示している。英語の *hurried* に対し、日本語は副詞の「急ぎ足で」で対応している。英語の *hurry* は急いで何かをすることなので、その行動に移動が含まれると、移動の速度は速くなるのだろう。日本語の対応で見られる「急ぎ足で」は速度の様態に注目して、様態の副詞として設けられていると言える。一方、韓国語では、副詞の「허둥지둥(そそくさと)」で対応している。「허둥지둥(そそくさと)」は、急いで何かをする英語の様子にそのまま対応しているが、速度の様態の側面があると言える。このように、両言語とも、英語の様態動詞に対して速度の副詞が設けられている。このような速度の様態は、英語の様態動詞に速度の様態の側面がなくても、日本語と韓国語が速度の様態に注目して様態の副詞が設けられている場合もある。例えば、次のような例が挙げられる。

(103) a. Mal'akh tipped his hat and **drove** through. (Brown[original] 2009:123)

b. マラークは制帽のつばに軽く手をふれて車を進めた。(越前[訳]  
2010:176)



- c. 말라크는 모자를 살짝 기울여 보이고는 유유히 초소를  
 mallakhu-nun moca-lul salccak kiwuli-e poi-konun yuyuhi choso-lul  
 マラーク-TOP 帽子-ACC 軽く 傾く-PART 見せる-PART ゆっくり 警戒所-ACC  
 통과했다. (An[訳] 2009:204)  
 thongkwaha-essta  
 通過する-PS  
 ‘マラークは帽子を軽く傾けて見せてゆっくり警戒所を通過した’

(103)は、英語に速度の様態の側面がなくても、様態の副詞が設けられている韓国語の例を示している。英語の *drove* に対し、韓国語は副詞の「유유히(ゆっくり)」で対応している。英語の *drive* は「(自律移動において) 乗り物で」という道具の様態を表していて、速度の様態は見られない。しかし、韓国語の対応で見られる「유유히(ゆっくり)」は、駐車する場所を探すためにはゆっくり移動するという文脈上の速度の様態に注目して、様態の副詞が設けられている。一方、日本語では、乗り物を被使役者とする使役移動で対応している(車を進めた)。実は、日本語では、英語の *drive* に対して道具の副詞が設けられている場合が目立つ。例えば、次のような例が挙げられる。

- (104) a. I would drive to his gravesite every Friday and [...] (Hosseini[original] 2003:166)  
 b. 毎週金曜日、墓地まで車で行くと、[...] (佐藤[訳] 2007:284)  
 c. 매주 금요일마다 그의 묘로 차를 몰고 가서 보면 [...] (Lee[訳] 2005:272)  
 maecwyu kwumyoil-mata ku-uy myo-lo cha-lul mol-ko ka-se po-myen  
 毎週 金曜日-毎に 彼-GEN 墓-to 車-ACC 駆る-PART 行く-PART 見る-PART  
 ‘毎週金曜日、彼の墓へ車を走らせて行ってみると[...]’

(104)は、英語に対して道具の副詞が設けられている日本語を示している。英語の *would drive* に対して、日本語は「車で」という対応が見られる。前述したように、英語の *drive* は「乗り物で」という道具の様態を表しているが、日本語も同様に道具の様態で対応していると言える。一方、韓国語では、乗り物を被使役者とする使役移動として、非主要部の「차를 몰고(車を走らせる)」で対応している。このように、日本語では、英語の *drive* に対して道具の副詞が設けられている。本稿では、英語の *drive* に対応する日本語の道具の副詞が目立った<sup>116</sup>。他にも、日本語では、次のような道具の副詞が見られる。

<sup>116</sup> 本稿の調査では、*drive* の計 20 件に対して、副詞が設けられている日本語は 5 件だった。いずれも道具の副詞で、続いて使役移動での対応が 4 件、自律移動での対応だが、経路動詞でも様態動詞でもない動詞が 4 件、結果状態が 2 件、副詞と結果状態での対応が 1 件、英語との不一致が 2 件、対応なしが 1 件、名詞修飾が 1 件見られた。一方、韓国語では、副詞での対応が 1 件見られたが、(103)で取り上げたような速度の副詞となっている。そのほか、経路動詞での対応が 7 件、使役移動での対応が 6 件、英語との不一致が 3 件、使役移動が 2 件、省略が 1 件見られた。

- (105) a. (I) drive south on Highway 17, push the Ford up the winding road through the mountains to Santa Cruz. (Hosseini[original] 2003:125)
- b. (私は) フォードでハイウェイ十七号線を南に走り、山間のワンデングを抜けてサンタクルーズへドライブした。(佐藤[訳] 2007:215)
- c. (나는)17 번 고속도로를 타고 산 속으로 구불거리 는 길을  
 17-pen kosoktolo-lul tha-ko san sok-ulo kupwulkeli-nun kil-ul  
 17-番 高速道路-ACC 乗る-PART 山 中-to 曲がりくねる-ADN 道-ACC  
 따라 남쪽으로 산타크루즈까지 차를 몰았다.  
 ttal-a namccok-ulo santhakhulwucu-kkaci cha-lul mol-assta  
 沿う-PART 南方-to サンタクルーズ-until 車-ACC 駆る-PART  
 ‘十七号の高速道路に乗り、山の中へ曲がりくねる道に沿って南の方へサンタクルーズまで車を走らせた’ (Lee[訳] 2005:206)

(105)は、英語の *drive* に対して道具の副詞が設けられている日本語の例を示している。日本語では、動詞の連用形の「走り」のほか、「フォードで」という副詞句が見られる。ハイウェイ十七号線の移動に当たり「フォードで」という道具の副詞句が設けられているのである。厳密に言うと、英語になかった道具の副詞が新たに設けられているというより、後続する *push the Ford up the winding road* からの情報を明示している。後続する移動も含めて「フォードで」の道具が用いられているので、前節で「フォードで」を明示した方が、「フォード」という道具と図(私)が一体になって移動していることがはっきり伝えられる(cf. 私はハイウェイ十七号線を南に走った)。一方、韓国語では、「타고(乗って)」という動詞で対応している。前後する副詞は見られないが、「타고(乗って)」が場所の「고속도로(高速道路)」を目的語としてとっているので、「フォード」という道具と図(私)が一体になっていることがわかる。このように、日本語では、英語の *drive* に対して道具の副詞が設けられている。

このような速度の副詞や道具の副詞は、移動の様態でも非主要部の動詞での対応が難しいため、負荷がかかっても回避していないのだと思われる。特に、道具の様態は、動詞の連用形やテ形、連結語尾の「-어/아(-e/a)」などの非主要部で一般的な様態動詞を用いても対応が難しく、一般的な様態動詞以外の動詞でも対応が難しい。一方、速度の様態は、一般的な様態動詞の「走る」でも対応できるが、対応の正確さを重視して一般的な様態動詞による様態の中立化を回避したり、一般的な様態動詞以外の動詞が移動動詞として用いられていない(서두르다(急ぐ))。一般的な様態動詞以外の動詞が移動動詞として用いられても(急ぐ)、様態の副詞よりは多く用いられていなかった<sup>117</sup>。前節では、様態の副詞は負荷がかかるので、対応の正確さより負荷の回避を重視するとしたが、移動の様態でも道具

<sup>117</sup> 本稿の調査では、*hurry* の計 20 件に対応する日本語で副詞の様態が 7 件見られた。一般的な様態動詞ではない「急ぐ」は 6 件で、副詞の様態より多く用いられていなかった。

や速度のような特定の様態は、非主要部の動詞での対応が難しいので、負荷の回避より対応の正確さを重視した対応になっている。

以上、自律移動では、日本語と韓国語の非主要部での様態が多い要因をいくつか取り上げた。まず、両言語の非主要部の様態が多くても、主動詞との結びつきが強いものは少ない調査結果について、事象の連続性を指摘した。複数の事象が連なる物語では、常に後続する事象があるので、先行する移動事象を後続する事象とは独立したものとして捉えるかどうか、また、後続する事象との連続性を重視して複数の節で表しても、どの節を主節として捉えるかという捉え方の違いが生じる。このような捉え方によっては、主動詞との結びつきが強い両言語の非主要部でも、主動詞ではない後項動詞を強いられるだろう。次に、両言語の非主要部での様態は、様態の中立化や様態の副詞の上位カテゴリー、意味の拡張、別の移動の側面への注目といった様々な役割をしていることを取り上げた。その結果、両言語の非主要部の様態は頻度が高いと考えられる。最後に、特定の様態に対しては、両言語で副詞での対応が目立つことを指摘した。移動の様態でも速度や道具の様態は、非主要部の動詞での対応が難しく、負荷のかかる様態の副詞でも回避せずに対応しているので、副詞での対応の頻度が低くないと考えられる。

## 4.2 使役移動の様態表現

次に、日本語と韓国語の使役移動では、移動の様態より使役手段が非主要部によって表現される場合が多かったので、その要因として、継続操作型と開始時起動型の使役移動を取り上げる。特に、継続操作型は前節の調査で最も多く見られた使役移動の下位分類だが、継続操作型が典型的な使役移動だとすると、手段の頻度と経路の含意との関連づけから説明できる。しかし、実際の結果としては、使役手段でも使役移動の様態でもない「その他」の動詞が多い。使役手段は移動の様態より多いものの、その他よりも少ないことになる。

「その他」の中から、①自律移動としての対応、②活動動詞への拡張、③図や地の情報を含む動詞を取り上げ、両言語の使役移動の特徴を分析していく。最後に、経路以外の動詞が複合動詞の前項動詞にも後項動詞にも現れる場合について、使役移動における段階別の明示化という動機づけを考察していく。

### 4.2.1 事象の連続性における使役移動

まず、両言語で非主要部の使役手段が多い要因を見ていく前に、非主要部の手段における事象の連続性を指摘する。両言語の使役手段は、主要部より非主要部に置かれるものが多いものの、非主要部の手段では、主動詞との結びつきが強いものが少なかった<sup>118</sup>。このような結果からは、一見、非主要部にある手段と主動詞との結びつきの強さとは関係ないようにも見えるが、次のような事象の連続性を考えると、主動詞との結びつきの強さを調べ直す必要がある（四角で囲った部分が手段）。

<sup>118</sup> 前節の調査結果については表22を参照のこと。

- (106) a. Howl meanwhile **picked** up his guitar from its corner, turned the doorknob green-down, and stepped out among the scudding heather above Market Chipping. (Jones[original] 1986:107)
- b. ハウルはすみに立てかけてあったギターを**とり**あげ、ダイヤルの緑色の面を下にした扉から、すべるようにすぎていく〈がやがや町〉の北のヒースの丘に降りていきました。  
(西村[訳] 1997:106)
- c. 한편 하울은 방구석에서 기타를 **집어**들더니  
hanphyen hawul-un pang-kwusek-eyse kitha-lul **cip-e**-tul-teni  
一方 ハウル-TOP 部屋-隅-LOC ギター-ACC とる-PART-上げる-PART  
초록색이 아래로 가도록 손잡이를 돌려 놓고  
choloksayk-i alay-lo ka-tolok soncapi-lul tolli-e noh-ko  
緑色-NOM 下-to 行く-ように 取っ手-ACC 回す-PART 置く-PART  
마켓치핑이 굽어보이는 언덕 위에서 획획  
makheyschiphing-i kwup-e-poi-nun entek wi-eyse hwikhwik  
Market Chipping-NOM 曲がる-PART-見える-ADN 丘 上-LOC びゅうびゅう  
지나가는 히스 덩불 사이로 발을 내디뎠다  
cina-ka-nun hisu tempwul sai-lo pal-ul nay-titi-essta  
過ぎる-行く-ADN 히스 茂 間-to 足-ACC 出す-PART-踏む-PS  
‘一方、ハウルは部屋の隅でギターを取り上げては、緑色が下にいくようにダイヤルを回しておき、〈がやがや町〉が見える丘の上でびゅうびゅう過ぎていくヒースの茂の中へ足を踏み出した’  
(Kim[訳] 2004:96)

(106)は、英語の使役移動に対して、非主要部の手段で対応する日本語と韓国語を示している。英語の *picked* に対し、日本語は動詞の連用形の「とり」で対応している。その際、後項動詞の「あげ」は主動詞ではない。しかし、扉のダイヤルを回したり、扉から降りていくという事象が続くので、事象の連続性を重視するために、先行する使役移動は後項動詞が主動詞ではないことがわかる。先行する使役移動を「ハウルはすみに立てかけてあったギターをとりあげました」という単文にして、後項動詞を主動詞にすることもできるので、使役移動の非主要部が主動詞との結びつきが強くないことではない。

一方、韓国語でも、連結語尾の「-어/아(-e/a)」のついた「집어(とり)」で対応しているが、後項動詞の「들더니(上げては)」は主動詞ではない。韓国語でも、日本語と同様に、後続する事象があるので、後続する事象との連続性を重視するために、先行する使役移動では主動詞ではない後項動詞が強いられているだろう。このように、両言語では、英語の使役移動を非主要部の手段で対応しているが、後続する事象との連続性を重視するために、非主要部の手段の後項動詞が主動詞ではないとわかる。複数の事象が連なる物語では、常に後続する事象があるので、先行する移動事象を独立した事象として捉えるかどうかとい

う違いでは、主動詞との結びつきの強さは変わらない。従って、両言語の非主要部の手段では、主動詞との結びつきが強いものが少ないとは言えないだろう。このような事象の連続性は、次のような例でも確認できる。

- (107) a. (and he) **shoved** some papers this way and that, (Maguire[original] 1995:114)  
 b. (彼は) 書類を何枚かあちこちへ**押し**こんだ。 (服部・藤村[訳] 2007:151)  
 c. (나는) 종이를 이리저리 **밀쳐**<sup>119</sup> 놓고, [...] (Song[訳] 2004:162)
- cong-i-lul iliceli **mil-chi-e** noh-ko  
 紙-ACC あちこち 押す-打つ-PART 置く-PART  
 ‘紙をあちこち（強く）押しておいて[...]’

(107)は、英語を非主要部の手段で対応する日本語と韓国語において、後項動詞に違いが見られる場合を示している。英語の *shoved* に対し、日本語は動詞の連用形の「押し」で対応している。その際、後項動詞の「こんだ」は主動詞になっている。一方、韓国語では、連結語尾の「-어/아(-e/a)」のついた「밀쳐(押して打って)」で対応しているが、後項動詞の「놓고(おいて)」は主動詞ではない。同じ英語の動詞への対応でも、（書類を押しこんだあと）ハンカチをかき出して鼻をかむという一連の動作を連続的に捉えるかどうかによって、先行する使役移動の対応が分かれることになる。日本語は先行する使役移動を単文で捉えている一方で、韓国語では複文で捉えながらも、主節だとは捉えていない。

このように、両言語では、複数の事象への捉え方によっては、主動詞の対応が分かれる。しかし、このような捉え方の違いは、主動詞との結びつきには影響しない。なぜならいくらでも捉え方を変えて、主動詞との結びつきの強さを示すことができるからである。従って、非主要部の手段は多いものの、主動詞との結びつきが強いものは少ないとした前節の調査結果を調べ直す必要がある。その結果、非主要部の動詞の連用形と連結語尾の「-어/아(-e/a)」では、次のように、主動詞との結びつきが強いものが多いことがわかった。

日本語	連用形	結びつきが強い	韓国語	連結語尾の-e/a	結びつきが強い
作品①	18	17	作品①	5	2
作品②	10	10	作品②	10	4
作品③	4	4	作品③	11	6
作品④	5	5	作品④	4	2

<sup>119</sup> 「밀쳐다(押して打つ)」は「밀다(押す)」と「치다(打つ)」による複合動詞として見なしている。詳しくは、韓国国立国語院の答弁を参照 ([http://www.korean.go.kr/front/onlineQna/onlineQnaView.do?mn\\_id=61&qna\\_seq=79779&pageIndex=1](http://www.korean.go.kr/front/onlineQna/onlineQnaView.do?mn_id=61&qna_seq=79779&pageIndex=1))。

作品⑤	8	6	作品⑤	12	8
-----	---	---	-----	----	---

表 3 2 動詞の連用形と連結語尾の「-어/아(-e/a)」の結びつきの強さ

表 3 2 は、非主要部の動詞の連用形と連結語尾の「-어/아(-e/a)」のつく動詞の結びつきの強さを調べ直した結果を示している。これは後項動詞が主動詞ではなくても、後続する事象があったり、後続の主節があれば、主動詞との結びつきの強さは変わらないと見なして調べ直したものである。その結果、動詞の連用形と連結語尾の「-어/아(-e/a)」のつく動詞の殆どは、主動詞との結びつきが強かった。作品①と作品②の韓国語では、主動詞との結びつきが強くない例が多いものの<sup>120</sup>、作品③と作品④の日本語を中心に、多くの作品の殆どは、主動詞との結びつきが強い。このように、使役移動を表す非主要部の動詞の連用形や連結語尾の「-어/아(-e/a)」のつく動詞の殆どは、主動詞との結びつきが強い。動詞の連用形や連結語尾の「-어/아(-e/a)」のつく動詞は、常に主動詞との結びつきが強いわけではないが、事象の捉え方を考えると、その殆どは主動詞との結びつきが強いと言える。そうになると、検証結果 2 からは、両言語の非主要部の手段において、主動詞との結びつきが強いものが少ないとしたが、次のように書き直すことができる。

(108) 検証結果 2' : 使役移動を表す日本語と韓国語では、移動の様態より手段の方が多かった。使役手段の表現では、主動詞との結びつきが強いものが多かった<sup>121</sup>。

<sup>120</sup> 作品①の韓国語では、英語に対応する連結語尾の「-어/아(-e/a)」のつく動詞の計 5 件のうち 3 件、作品②の韓国語では、計 10 件のうち 6 件が主動詞との結びつきが強くなかった。例えば、次のような例が挙げられる。

- (1) a. (he) **picked** up the poker. (Jones[original] 1986:142)  
 b. (彼は) 火かき棒を**とり**あげました。 (西村[訳] 1997:138)  
 c. (그는) 부지깥이를 **집어** 들었다. (Kim[訳] 2004:125)  
 pwucikkayngi-lul **cip-e** tul-essta  
 火かき棒-ACC とる-PART 上げる-PS  
 ‘火かき棒を取り上げた’

英語の **picked** に対し、韓国語は連結語尾の「-어/아(-e/a)」のついた「**집어**(とり)」で対応しているが、一見、主動詞の「**들었다**(上げた)」とは結びつきが強く見えても、辞書には「**집어들다**(取り上げる)」が登録されていない。従って、「**집다**(取る)」と「**들다**(上げる)」の間に連結語尾の「-어/아(-e/a)」が入っても、その結びつきが強いとは判断していない。

<sup>121</sup> 表 3 2 の結果を受けて、両言語における非主要部の手段表現での主動詞との結びつきの強さを調べた表 2 2 は、次のように修正して示すことができる (強い=主動詞との結びつきが強い、強くない=主動詞との結びつきが強くない、弱い=主動詞との結びつきが弱い)。表 2 2 では、主動詞との結びつきが強くないものが多かったが、動詞の連用形や連結語尾の「-어/아(-e/a)」のつく動詞では主動詞との結びつきが強いとした表 3 2 の結果からすると、主動詞との結びつきが強いものが多かった (作品①と作品②、作品④の韓国語は除く)。表 2 2 では、主動詞との結びつきが強いものが 1 例しかない作品や 1 例もなかった作品も複数あったが、表 3 2 の結果から調べ直してみると、主動詞との結びつきが強いものが 1 例しかない作品は、作品①の韓国語を除いた全ての作品で頻度が増えた。主動詞との結びつきが強いものが 1 例もなかった作品④の韓国語も一部頻度が増えた。一方、主動詞との結びつきが強くないものは頻度が減っていた。作品③の日本語では、主動詞との結びつきが強くないものが 1 例もなく、作品②と作品④の日本語では、主動詞との結びつきが強くないものが 1 例しかなかった。また、韓国語では、主動詞との結びつきが弱いものが多いように見えるが、注 121 で後述するように、英語の副詞に対応するためのものもあり、英語の副詞からの対応ではないものだけだと、それほど多くない。

日本語	強い	強くない	弱い	計	韓国語	強い	強くない	弱い	計
作品①	17	2	5	24	作品①	1	5	6	12
作品②	10	1	6	17	作品②	3	10	6	19

このように、両言語における非主要部の使役手段は、主動詞との結びつきが強いと言えるので、そこでは手段についての情報の背景化が進んでいると言える。しかしながら、それを考慮しても両言語での非主要部の手段では副詞が少ない。副詞は主動詞との結びつきが弱いので、情報の背景化が進まないために、その頻度が低いとも説明できるが、副詞の様態が少なくなかった自律移動とは対照的である<sup>122</sup>。使役移動の副詞でも、使役の手段が移動の様態より多く<sup>123</sup>、様態の副詞は殆どないことを考えると、使役移動では、被使役者による移動の様態が表されにくいという側面があるかもしれない。使役移動は、自律移動とは違い、図（被使役者）に対する使役者の働きかけがあるので、移動の経路のほか、さらに移動の情報を明示するとしたら、それは使役者による働きかけであることが妥当で、図による移動の様態を明示することは、使役移動の表現にとって重要度が低い。副詞以外の非主要部でも、移動の様態より使役の手段が多いのも、被使役者による移動の様態が表されにくい側面があるためかもしれない。

#### 4.2.2 継続操作型と開始時起動型の使役移動

前節の調査では、両言語とも継続操作型の使役移動が多かった。確かに、英語の使役移動でも継続操作型が多かったため、対応する日本語と韓国語でも継続操作型が多いのも当然と言える。しかし、英語の随伴運搬型は、対応する日本語と韓国語にはあまり見られな

作品③	4	0	3	7	作品③	7	6	3	16
作品④	5	1	0	6	作品④	1	4	0	5
作品⑤	9	3	1	13	作品⑤	8	6	2	16

<sup>122</sup> 英語の使役移動に対応する日本語と韓国語の副詞の頻度を自律移動と比べてみると、以下の通りとなる（自律移動の頻度は表16と表17を参照）。

自律移動	日本語	韓国語	使役移動	日本語	韓国語
作品①	15	17	作品①	5	6
作品②	11	21	作品②	6	6
作品③	14	17	作品③	3	3
作品④	12	13	作品④	0	0
作品⑤	14	4	作品⑤	1	2

このように、両言語で使役手段の副詞の頻度は少ないが、その中には英語の副詞に対応したものもある。さらに英語の副詞との対応を除いてみると、両言語の使役手段の副詞の少なさが明らかになる（自律移動は表18を参照）。

自律移動	日本語	韓国語	使役移動	日本語	韓国語
作品①	7	9	作品①	0	3
作品②	7	14	作品②	2	3
作品③	7	9	作品③	1	0
作品④	7	8	作品④	0	0
作品⑤	12	3	作品⑤	0	2

<sup>123</sup> 英語の使役移動に対応する日本語と韓国語の使役手段の副詞の頻度は、次のように、使役移動の様態の副詞より多い（使役手段の副詞の頻度は注121も参照）。

使役手段	日本語	韓国語	使役様態	日本語	韓国語
作品①	5	6	作品①	0	0
作品②	6	6	作品②	2	2
作品③	3	3	作品③	0	0
作品④	0	0	作品④	0	0
作品⑤	1	2	作品⑤	0	0

い。英語と日本語、韓国語の使役移動を下位分類した表 2 3 と表 2 4、表 2 5 をまとめると、次のようになる。

英語	継	開	随	日本語	継	開	随	韓国語	継	開	随
作品①	43	5	7	作品①	21	2	0	作品①	11	2	0
作品②	35	12	7	作品②	16	3	2	作品②	16	6	0
作品③	21	6	10	作品③	5	0	1	作品③	11	6	0
作品④	18	5	9	作品④	5	2	0	作品④	6	2	0
作品⑤	35	10	33	作品⑤	12	4	0	作品⑤	13	7	0

表 3 3 英語と日本語、韓国語の使役移動の下位分類<sup>124</sup>

表 3 3 は、英語と日本語、韓国語の使役移動の下位分類をまとめたものである。前述したように、いずれの言語も継続操作型が最も多いが、随伴運搬型は、日本語と韓国語は殆ど見当たらないのに対し、英語では一定の頻度で見られる。特に、作品⑤の英語では、随伴運搬型が 33 件見られ、継続操作型の 35 件に迫る頻度となっているが、日本語と韓国語では対応が見られない。このように、英語と日本語、韓国語の使役移動の下位分類では、継続操作型が多いことは共通しているが、随伴運搬型に関する傾向は一致していない。英語の随伴運搬型に対し、日本語と韓国語では、自律移動で対応している。

- (109) a. “Yes, you **take** him home.” (Hosseini[original] 2003:119)  
 b. 「よし。うちへ連れていく、いい考えね」 (佐藤[訳] 2007:203)  
 c. “**좋아, 아버지를 집으로 데리고 가게나.**” (Lee[訳] 2005:195)

coha apeci-lul cip-ulo teyli-ko ka-keyna  
 よし 父-ACC 家-to 連れる-PART 行く-FP  
 ‘よし、父を家に連れて行きな’

(109)は、英語の随伴運搬型を自律移動で対応している日本語と韓国語の例を示している。英語の *take* は使役的直示動詞で、随伴運搬型の使役移動事象を表しているが、日本語は「連れていく」で対応している。直示動詞の「いく」は自律移動で使われるもので、使役移動では「いく」の対が存在しない。「連れる」それ自体は「実質的に随伴運搬型」（松本 2017）でも、自律移動での対応と言える（疑似客体移動表現）。一方、韓国語は、

<sup>124</sup> 表 3 3 における略語は以下の通りである。継＝継続操作型、開＝開始時起動型、随＝随伴運搬型



「데리고 가거나(連れていきな)」で対応している。韓国語でも、経路動詞の「가거나(いきな)」は自律移動で使われているもので、使役移動での対は存在しない。あくまでも「連れながら移動する」という意味の自律移動を表している。このように、両言語では、英語の随伴運搬型に対し、自律移動を主要部とした表現で対応している。

以上を踏まえると、両言語では、使役移動が継続操作型か開始時起動型になる。つまり、常に使役者の移動はなく、使役行為が起こる時間の違いだけの問題になる。例えば、次のように、常に使役者の移動がなく、開始時起動型は、使役行為を被使役者の移動開始時のみ行う。

(110) a. He pulled open the steel door and **tossed** the key to the guard. (Brown[original] 2009:170)

b. (彼は) 鋼鉄の扉を引きあげ、鍵を警備官に**投げて**よこす。 (越前[訳] 2010:240)

c. 그는 문을 열어 놓고 열쇠를 누네스에게  
 ku-nun mwun-ul yel-e noh-ko yelsoy-lul nwunyeysu-eykey  
 彼-TOP ドア-ACC 開く-PART おく-PART 鍵-ACC ヌネス-DAT

**던져** 주었다.

(An[訳] 2009:280)

**tenci-e** cwu-essta  
 投げる-PART あげる-PS

‘彼はドアを開けておいて、鍵をヌネスに投げてあげた’

(110)は、英語の開始時起動型に対応する日本語と韓国語をの例を示している。英語の *tossed* という使役手段動詞は、使役行為が被使役者の移動の開始時に行われる開始時起動型の使役移動を表している。被使役者（鍵）は使役者（彼）から離れることになるので、移動のない使役者（彼）はそれ以上使役行為を行うことができない。これに対し、日本語では「投げてよこす」で対応し、使役者の使役行為を動詞のテ形の「投げて」で対応している。一方、韓国語では「던져 주었다(投げてあげた)」で対応している。その際の使役者の使役行為は、連結語尾の「-어/아(-e/a)」のついた「던져(投げて)」で対応している。このように、両言語では、英語の開始時起動型に対し、使役行為を非主要部で対応している。使役者の移動がなくても、使役行為が被使役者の移動開始時のみ起こる際は、その使役行為を非主要部で対応しているのである。

しかし、使役者の移動はないにもかかわらず、使役行為が被使役者の移動中に継続的に行われるためには、被使役者の移動は使役者の手が届く範囲内という身体部位による小規模の移動に限る必要がある（継続操作型）。例えば、次のような例が挙げられる。

(111) a. Howl **picked** up the poker. (Jones[original])

1986:142)

b. ハウルは火かき棒を**とり**あげました。 (西村[訳] 1997:138)

c. 하울은 부지깥이를 **집어** 들었다. (Kim[訳]

2004:125)

hawul-un pwucikkayngi-lul **cip-e** tul-essta

ハウル-TOP 火かき棒-ACC つかむ-PART 上げる-PS

‘ハウルは火かき棒をつかんで上げた’

(111)は、英語の継続操作型に対応する日本語と韓国語の例を示している。英語の *picked* という使役手段動詞だと、使役者（ハウル）の移動はないが、被使役者（火かき棒）の移動中に使役の行為が継続的に行われるためには、被使役者（火かき棒）の移動が地面から使役者（ハウル）の手が届く高さまでの範囲内に限られる必要がある。これに対し、日本語では「とりあげました」で対応し、使役者の使役行為を動詞の連用形の「とり」で対応している。一方、韓国語では、「집어 들었다 (つかんで上げた)」で対応している。使役者の使役行為は、連結語尾の「-어/아(-e/a)」のついた「집어(つかんで)」で対応している。このように、両言語では、英語の継続操作型に対し、使役行為を非主要部で対応している。使役者の移動はないが、被使役者の移動があるので、その移動範囲は使役者の身体部位による小規模の移動に限る必要があり、その際の使役行為は非主要部で対応しているのである。また、英語の継続操作型への対応には、次のような例も挙げられる。

(112) a. Bellamy **picked** up the little cube-shaped package, weighing it in his hand.

(Brown[original] 2009:194)

b. (ベラミーは)四角い包みをつかみあげ、手で重みをたしかめる。(越前[訳] 2010:272)

c. 벨라미는 육면체 형태의 조그만 상자를 **집어** 들고

peyllami-nun yukmyenchey hyengthay-uy cokuman sangca-lul **cip-e** tul-ko

ベラミー-TOP 六面体 形態-GEN 小さな 箱-ACC とる-PART 上げる-PART

손으로 무게를 가늠해 보았다. (An[訳] 2009:318)

son-ulo mwukey-lul kanumha-e poassta

手-by 重さ-ACC 測る-PART みる-PS

‘ベラミーは六面体の形態の小さな箱を取り上げ、手で重さを測ってみた’

(112)は、英語の継続操作型に対応する日本語と韓国語を示している。英語の *picked* は、使役者（ベラミー）の移動はないが、被使役者（包み）の移動がある継続操作型の使役移動を表している。これに対し、日本語では「つかみあげ」で対応している。ここでは、「あげ」という経路動詞と、動詞の連用形の「つかみ」で対応しているが、「つかみ」は、被使役者に対する移動の働きかけというより、単なる使役者の活動動詞に近い。しかし、

「つかむ」による手の動作は、被使役者が使役者から離れることはなく、使役移動が終了した後もなお使役者の手の中にある継続操作型の使役行為とも類似しているので、継続操作型からの拡張で用いられていると言える。一方、韓国語では、「집어 들고(取り上げ)」で対応している。「들고(上げ)」という経路動詞に、連結語尾の「-어/아(-e/a)」のついた「집어(取り)」で使役行為に対応している。

このように、継続操作型では、使役者の移動はないが、被使役者の移動はあり、使役者から離れていない。被使役者の移動が終了しても使役者の手の中にある状態が続くので、その際の使役行為を非主要部で対応したり、使役行為から拡張した活動動詞で対応している。このような活動動詞への拡張もあるので、英語の継続操作型に対応する日本語と韓国語では、活動動詞もしばしば見られる。例えば、韓国語では、次のような例が見られる。

(113) a. Mal'akh wadded up the monogrammed napkin and **stuffed** it into Solomon's mouth.  
(Brown[original] 2009:126)

b. (マラークは)モノグラムのナプキンをまるめてソロモンの口に**押し**こんだ。  
(越前[訳] 2010:181)

c. 말라크는      냅킨을      솔로몬의      입속에      쑤셔      넣었다.  
mallakhu-nun    naypkhin-ul    sollomon-uy    ip-sok-ey    sswusi-e      neh-essta  
マラーク-TOP ナプキン-ACC ソロモン-GEN    口-中-LOC    ほじくる-PART    入れる-PS  
'マラークはナプキンをソロモンの口の中にほじくって入れた' (An[訳] 2009:209)

(113)は、英語の使役移動を活動動詞で対応している韓国語の例を示している。英語の *stuffed* は継続操作型の使役移動を表しているが、日本語は「押しこんだ」で対応している。経路動詞の「こんだ」と、動詞の連用形の「押し」で使役行為に対応している。一方、韓国語では、「쑤셔 넣었다(ほじくって入れた)」で対応している。ここでは、「넣었다(入れた)」という経路動詞に、連結語尾の「-어/아(-e/a)」のついた「쑤셔(ほじくって)」で対応しているが、「쑤셔(ほじくって)」自体は使役移動を働きかける使役行為とは言えない。しかし、手を用いる「쑤셔(ほじくって)」という動作は、常に被使役者が使役者から離れず、使役移動が終了しても使役者の手の中にある継続操作型の使役行為とも類似しているところがあるので、継続操作型からの拡張で用いられていると言える。このように、継続操作型は、活動動詞と類似する側面があるので、英語に対応する日本語と韓国語では、活動動詞を用いた対応も見られる。

被使役者が使役者から離れていない継続操作型では、対応する日本語と韓国語において被使役者の経路が含意される場合もある。例えば、次のような例が挙げられる。

(114) a. I **drew** her up again, (Fitzgerald[original] 1925:105)  
b. (私は彼女を) さらに**引き**寄せ、[...] (小川[訳] 2009:130)

c. 나는 그녀를 다시 한번 끌어당겼다. (Kim[訳] 2009:102)

na-nun kunye-lul tasi hanpen kkul-e-tangki-essta  
私-TOP 彼女-ACC もう 一度 引きずる-PART-引く-PS  
‘私は彼女をもう一度引きずって引いた’

(114)は、英語の継続操作型に対して、被使役者の経路が含意されている韓国語の例を示している。英語の *drew* が表す継続操作型の使役移動では、被使役者（彼女）が使役者（私）の方へ移動するように働きかけている。被使役者（彼女）は使役者（私）から離れることなく、被使役者（彼女）が移動した後も使役者（私）と一緒にいることになる。これに対し、日本語では「引き寄せ」で対応しており、「寄せ」という経路動詞と、動詞の連用形の「引き」で使役行為を対応しているのである。一方、韓国語では、「끌어당겼다(引きずって引いた)」で対応している。主動詞の「당겼다(引いた)」も、連結語尾の「-어/아(-e/a)」のついた「끌어(引きずって)」も使役行為で、被使役者の経路は見られない。しかし、被使役者（彼女）が使役者（私）から離れることはなく、使役者の方への被使役者の経路は推測できる。このように、継続操作型では、被使役者が使役者から離れず、移動した後も使役者と一緒にいるので、被使役者の経路が含意される場合もある。日本語では、次のような例が挙げられる。

(115) a. The man pressed down harder, driving her whole head under the ethanol.

(Brown[original] 2009:153)

b. 男はさらに強く押し、首まですっかりエタノールのなかに沈めた。

(越前[訳] 2010:219)

c. 말라크가 더 힘을 주자, 그녀의 머리 전체가  
mallakhu-ka te him-ul cwu-ca kunye-uy muli cenche-y-ka  
マラーク-NOM さらに 力-ACC あげる-PART 彼女-GEN 頭 全体-NOM  
에탄올에 잠겨 버렸다. (An[訳] 2009:254)

eytanol-ey camki-e peli-essta  
エタノール-by 沈む-PART しまう-PS

‘マラークがさらに力を加えると、彼女の頭の全体がエタノールに沈んでしまった’

(115)は、英語の継続操作型に対して、被使役者の経路が含意されている日本語の例を示している。英語の *pressed* は継続操作型の使役移動を表しているが、使役者（男）の移動はなく、被使役者（死体）の移動はあるが、使役者（男）の手が届く範囲内での移動となっている。使役者（男）の手が被使役者（死体）に付いたまま、使役の行為は被使役者の移動中に継続的に行われ、被使役者の移動が終了した後も、使役者の手は被使役者に付いている。これに対し、日本語は動詞の連用形の「押し」で対応している。程度の強さを示し

ている副詞の「さらに強く」は、英語の副詞の *harder* からの対応だろう。後続する「首まですっかりエタノールのなかに沈めた」では経路動詞が見られず、先行する「男はさらに強く押し」でも経路動詞は見られないが、被使役者の経路を明示しなくても、使役者の使役行為から推測できる。

一方、韓国語では、「더 힘을 주자(さらに力を加えると)」という動詞句で対応している。日本語と同様に、被使役者の経路は見られないが、被使役者が使役者から離れないという継続操作型の特徴からは、被使役者は使役者の身体部位による小規模の移動に伴う経路になっていることが推測できる。このように、両言語では、英語の継続操作型への対応で、被使役者の経路が含意されている。このような経路の含意があるため、英語の継続操作型に対応している両言語では、活動動詞で対応しながらも、被使役者の経路が含意される場合もある。例えば、次のような例が挙げられる。

- (116) a. “I’ll **pick** it up” (Fitzgerald[original] 1925:164)  
 b. 「拾うよ」 (小川[訳] 2009:206)  
 c. “내가 **집을게**” (Kim[訳] 2009:159)  
 nay-ka **cip-ulkey**  
 私-NOM とる-FP  
 ‘私がとるよ’

(116)は、英語の継続操作型を活動動詞で対応しているが、被使役者の経路は見られない日本語の例を示している。英語の(*will*) *pick* で表す継続操作型の使役移動では、使役者(私)の移動はなく、被使役者(何らかの物)を地面から上げる程度の身体部位による小規模の移動に留まるが、日本語は「拾うよ」で対応している。日本語の「拾う」による動作は、被使役者(物)が使役者(私)から離れず、被使役者(物)が移動した後もなお使役者(私)の手の中にある継続操作型の使役行為とも類似しているため、継続操作型からの拡張で「拾う」が用いられていると言える。その際の被使役者(物)の経路は、使役者(私)の活動動詞から推測される。一方、韓国語では、「집을게(とるよ)」で対応している。

「집다(とる)」は、本稿では使役手段動詞だと想定しているが、被使役者の経路は見られない。しかし、被使役者は使役者の手から離れないので、地面からの被使役者の経路は容易に推測できる。このように、日本語では、英語の継続操作型を活動動詞で対応し、かつ被使役者の経路の含意も見られる。

以上、日本語と韓国語では、使役移動が継続操作型か開始時起動型になるが、最も多い継続操作型には、活動動詞での対応と被使役者の経路の含意も見られる。一方、開始時起動型でも、経路の含意は見られる場合がある。例えば、次のような「送る」という動詞は経路を含まない。

- (117) a. “So now he **sends** them to his Nessarose to keep her beautiful feet warm and dry and

- beautiful,” (Maguire[original] 1995:191)
- b.それで今回、愛娘ネッサローズの美しい足が温かく、濡れることなく、美しく保たれるように、愛をこめてこの靴を[送る]、ということです  
(服部・藤村[訳] 2007:253)
- c.“그래서 네사로즈 양의 예쁜 발이 추위와 습기를  
kulayse neysalocu yang-uy yeypu-n pal-i chwuwi-wa supki-lul  
それで ネッサローズ 様-GEN 美しい-ADN 足-NOM 寒さ-AND 湿気-ACC  
피하면서 아름답게 보이도록 이 구두를 [보내신대요].”  
phiha-myense alumtapkey poi-tolok i kwutwu-lul [ponay-si-ntayyo]  
避ける-ながら 美しく 見える-ように この 靴-ACC 送る-HON-FP  
‘それでネッサローズ様の美しい足が寒さと湿気を避けながら、美しく見えるようにこの靴を送ってくださるそうで’  
(Song[訳] 2004:263)

(117)は、英語の開始時起動型への対応で、経路の含意が見られる日本語と韓国語の例を示している。英語の *sends* は開始時起動型の使役移動を表しているが、使役者の移動はない。被使役者の移動はあるが、被使役者が使役者から離れていくため、使役者の使役行為は被使役者の移動の開始時にしか行われていない開始時起動型である。これに対し、日本語では「送る（ということです）」で対応しており、経路動詞は見られない。一方、韓国語でも、「보내신대요(送ってくださるそうで)」で対応しているが、経路動詞は見られない。このように、開始時起動型は、継続操作型とは違い、被使役者が使役者から離れていくが、それでも被使役者の経路が見られないのは、経路の着点が想定できないので、経路を明示することができないためであろう。開始時起動型は、被使役者の移動中に継続的に使役を行うことができないので、着点までの移動のコントロールはできない。被使役者の移動は使役者の意図通りになるとは限らず、途中で移動が止まったり、着点を行き過ぎる可能性もある。このように、経路の着点が想定できないと、経路を明示することは難しいだろう。開始時起動型では、一見経路の含意のように見えるが、正確に言うと、被使役者の経路の着点が予測できないために経路を明示することができないと言える。一方、被使役者の経路の着点が想定できる場合は、次のように、経路動詞を明示していると考えられる。

- (118) a. Baba sighed and, this time, [tossed] a whole handful of cardamom seeds in his mouth.  
(Hosseini[original] 2003:125)
- b. 手のひらにあったカルダモンシードを全部口に[放り]こんだ。(佐藤[訳] 2007:214)
- c. 바바가 한숨을 쉬더니 카르다뭉 씨를 한줌 가득  
papa-ka hanswum-ul swi-teni khalutamom ssi-lul han-cwum katuk  
ババ-NOM ため息-ACC つく-PART カルダモン シード-ACC 一握り いっぱい  
입에 [던져]넣었다.  
(Lee[訳] 2005:205)

ip-ey tenci-e-neh-essta

口-to 投げる-PART-入れる-PS

‘ババがため息をついて、カルダモンシードを一握りいっぱい口に投げ入れた’

(118)は、英語の開始時起動型への対応で、経路動詞が見られる日本語と韓国語の例を示している。英語の *tossed* は、使役者（ババ）の使役行為が被使役者（カルダモンシード）の移動の開始時にしか行われていない開始時起動型を表しているが、日本語は「放りこんだ」で対応している。使役行為は動詞の連用形の「放り」で対応し、経路動詞の「こんだ」は被使役者の経路を表しているが、その経路の着点は「口に」で明示されている。一方、韓国語では、「던져넣었다(投げ入れた)」で対応している。使役行為は連結語尾の「-어/아(-e/a)」のついた「던져(投げ)」で対応し、経路動詞の「넣었다(入れた)」は被使役者の経路を示している。その際の着点は「입에(口に)」となる。このように、両言語では、英語の開始時起動型への対応で、被使役者の経路の着点が想定できる場合は、経路が見られる。このような被使役者の経路の着点は、捉え方によっては、想定できない場合もある。例えば、次のような例が挙げられる。

(119) a. our feet tucked under the kursi, while Ali tossed apple skin into the stove and [...]

(Hosseini[original] 2003:132)

b. わたしとハッサンはコルシのなかに足を入れて夜更かしをし、アリは[...]林檎の皮をストーブに放りこみながら、[...] (佐藤[訳] 2007:226)

c. 나는 하산과 함께 쿠르시 아래쪽에 발을  
na-nun hasan-kwa hamkkey khwulusi alay-ccok-ey pal-ul  
私-TOP ハッサン-AND 一緒に コルシ 下-方-to 足-ACC  
집어넣고[...] 알리는 난로에 사과 껍질을 던지면서[...]  
cip-e-neh-ko alli-nun nanlo-ey sakwa kkepcil-ul tenci-myense  
つかむ-PART-入れる-PART アリ-TOP 暖炉-to りんご 皮-ACC 投げる-ながら  
‘私はハッサンと一緒にコルシの下に足を入れ[...]、アリは暖炉にりんごの皮を投げながら[...]’ (Lee[訳] 2005:217)

(119)は、英語の開始時起動型に対して、経路が見られない韓国語の例を示している。英語の *tossed* は、使役者（アリ）の移動がなく、使役行為が被使役者（林檎の皮）の移動の開始時にしか行われていない開始時起動型を表しているが、日本語は「放りこみながら」で対応している。使役行為は動詞の連用形の「放り」で対応し、経路動詞の「こみながら」は被使役者の経路を表している。その経路の着点は「ストーブに」で明示されている。

一方、韓国語では、「던지면서(投げながら)」で対応している。経路動詞は見られないが、「난로에(暖炉に)」という経路の着点は見られる。後続する経路動詞があるため

、先行する使役移動で経路動詞が見られない可能性もあるが、この場合は該当しない(알리는 난로에 사과 껍질을 던지면서[...]옛날이야기들을 들려주곤 했다)。もう一つの可能性としては、「난로에(暖炉に)」の助詞「에(ey)」が場所格ではなく、方向の格助詞として用いられ、使役者は「난로에(暖炉に)」に向かって被使役者の移動を働きかけている可能性が考えられる。そうなると、経路の着点が必ずしも「난로(暖炉)」になるとは限らないので、経路の着点を想定することが難しく、被使役者の経路を明示するのは難しい。

つまり、英語では被使役者の経路の着点が想定できても(into the stove)、対応する韓国語では、被使役者の経路の着点が想定できないと捉えているので、被使役者の経路動詞が見られない。このように、英語の開始時起動型に対して、捉え方によっては、経路動詞が見られない。また、被使役者の経路の着点が想定できなくても、架空の着点を設けることで、経路動詞が見られる場合もある。例えば、次のような例が挙げられる。

(120) a. “**Throw** this in the air when the duel starts,” (Jones[original] 1986:191)

b. 「決闘がはじまったらこれを**投げ**つけてごらん」 (西村[訳] 1997:182)

c. “결투가 시작될 때 이걸 공중에 뿌리면[...]”

kyelthwu-ka sicaktoy-l ttay ike-l kongcwung-ey ppwuli-myen

決闘-NOM はじまる-ADN 時 これ-ACC 空中-toward 撒く-たら

‘決闘がはじまる時これを空中に撒いたら[...]' (Kim[訳] 2004:168)

(120)は、英語の開始時起動型に対して、経路動詞での対応が見られる日本語の例を示している。英語の *throw* は、使役者(決闘する人)の移動がなく、使役行為が被使役者(これ=文脈上トウガラシという赤い粉)の移動の開始時にしか行われていない開始時起動型を表している。これに対し、日本語は「投げつけてごらん」で対応している。動詞の連用形に接続助詞「て」を添えた形に付いて補助動詞的に用いられる「ごらん」が主動詞となっているものの、使役行為を動詞の連用形の「投げ」で対応しており、経路動詞である「つけて」も見られる。被使役者(赤い粉)の経路の着点が空中のどこなのかは特定できないが、英語が空中のどこか(in the air)を着点として設けているように、日本語でも空中のどこかの架空の着点を設け、経路動詞の「つけて」が用いられていると考えられる。つまり、被使役者の付着する架空の着点(決闘の相手の近く)を設けることで、着点までの被使役者の移動を使役者に促していると言える。一方、韓国語では、「뿌리면(撒いたら)」で対応している。被使役者が粉という特徴を反映した(活動)動詞での対応となっている。このように、日本語では、架空の着点を設けることで、被使役者の経路を想定し、経路動詞での対応が見られる。

以上、英語の開始時起動型に対応する日本語と韓国語の特徴を見た。両言語では、被使役者の経路が予測できない場合は、経路動詞が見られないが、一見、被使役者の経路が予測できるために経路動詞が見られないとした継続操作型とは逆のように見える。しかし、それは開始時起動型と継続操作型の特徴を反映した結果とも言える。開始時起動型は、使



役者の移動がなく、使役行為が被使役者の移動の開始時にしか行われていないので、常に被使役者の経路の着点が想定できるとは限らない。一方、継続操作型は、使役者の移動がなくても、被使役者が使役者から離れることなく、使役行為が被使役者の移動中に継続的に行われているので、被使役者の経路の着点が想定できる場合が多い。このように、経路の着点が想定できるかどうかに分かれているので、経路動詞が見られる条件もそれぞれ違うのであろう。

以上の両言語の継続操作型と開始時起動型では、経路が見られない場合はあるものの、使役の行為には対応している。その頻度は、次のように、非主要部での対応が多い（非主要部での頻度／継続操作型または開始時起動型全体の頻度）。

継続操作型	日本語	韓国語	開始時起動型	日本語	韓国語
作品①	21 / 21	10 / 11	作品①	2 / 2	2 / 2
作品②	13 / 16	16 / 16	作品②	3 / 3	3 / 6
作品③	4 / 5	7 / 11	作品③	0 / 0	4 / 6
作品④	5 / 5	4 / 6	作品④	1 / 2	1 / 2
作品⑤	12 / 12	12 / 13	作品⑤	1 / 4	4 / 7

表 3 4 日本語と韓国語の非主要部の使役行為の頻度

表 3 4 は、日本語と韓国語の継続操作型または開始時起動型（右：分母＝表 3 3 の各合計）のうち、使役行為を非主要部で対応している頻度（左：分子）を示している。前述した経路の含意で、使役行為が主要部での対応もあるものの、継続操作型または開始時起動型全体では、非主要部の使役行為が多い。特に、継続操作型では、全体の半分以上で非主要部の使役行為が見られる。このように、両言語では、使役行為を非主要部で対応しているので、前節の調査で非主要部の移動の様態より使役の手段の方が多いただろうと考えられる。

さらに、両言語の非主要部の使役行為における主動詞との結びつきの強さを調べてみると、次のように、動詞の連用形と連結語尾の「-어/아(-e/a)」のつく動詞が多いことがわかる（動詞の連用形または連結語尾の「-어/아(-e/a)」の頻度／継続操作型または開始時起動型全体の頻度）。

継続操作型	日本語	韓国語	開始時起動型	日本語	韓国語
作品①	18 / 21	3 / 11	作品①	1 / 2	2 / 2
作品②	7 / 16	8 / 16	作品②	3 / 3	1 / 6
作品③	3 / 5	4 / 11	作品③	0 / 0	3 / 6
作品④	5 / 5	3 / 6	作品④	0 / 2	1 / 2
作品⑤	9 / 12	11 / 13	作品⑤	0 / 4	2 / 7

表 3 5 継続操作型における主動詞との結びつきの強い非主要部の頻度

表35は、日本語と韓国語の継続操作型または開始時起動型（右：分母＝表33の各合計）のうち、動詞の連用形または連結語尾の「-어/아(-e/a)」が用いられている頻度（左：分子）を示している。実質的には、表34の非主要部の頻度（左：分子）のうち、主動詞との結びつきが強い非主要部の頻度となる。動詞の連用形と連結語尾の「-어/아(-e/a)」のつく動詞の頻度が全体の半分以下の作品も一部あるものの、両言語とも多くの作品では、全体の半分か半分以上のものが多くいことがわかる。特に、継続操作型では、日本語を中心に、非主要部の殆どが主動詞との結びつきが強い動詞の連用形となっている。このように、両言語では、非主要部の使役行為と主動詞の結びつきが強いものが多いと言える。使役行為の主体（使役者）は主動詞の主体（被使役者など）と必ずしも一致しないが、活動動詞への拡張などの被使役者に対する使役者の影響力の強さを考えると、非主要部の使役行為と主動詞の結びつきは強いのだろう。

以上、日本語と韓国語の継続操作型と開始時起動型について分析・考察した。両言語では、英語の随伴運搬型が自律移動で対応しているため、使役移動を継続操作型か開始時起動型で対応している。言い換えると、日本語と韓国語の使役移動は、使役者の移動がなく、使役行為が被使役者の移動の開始時のみか、被使役者の移動中継続的に行われることになる。両言語で最も多い継続操作型は、使役者の移動がなくても、被使役者の移動があるので、活動動詞への拡張や被使役者の経路の含意も見られた。開始時起動型では、経路動詞が見られない場合が見られた。開始時起動型は使役者の移動がなく、使役行為が被使役者の移動の開始時にしか起こらないので、常に被使役者の経路の着点が想定できないので、経路動詞が見られない場合も出てくると考えられる。いずれにしても、両言語の継続操作型と開始時起動型は、使役行為を非主要部で対応している場合が多いため、前節の調査では両言語で非主要部の使役の手段が多いという結果にもつながるのだろう。両言語の非主要部の使役行為では、主動詞との結びつきが強い動詞の連用形と連結語尾の「-어/아(-e/a)」のつく動詞が多く、使役行為の主体（使役者）が主動詞の主体（被使役者など）に対する影響力が強いことがわかる。

#### 4.2.3 使役移動の手段でも様態でもない動詞

前述したように、日本語と韓国語では、使役移動の経路のほか、使役の手段、様態以外の「その他」の概念を主要部や非主要部が表すことが多い。使役の手段が使役移動の様態より多いとしても、「その他」より少ないことになる。ここでは、「その他」として、①活動動詞、②図や地の情報が含まれた動詞、③自律移動の動詞を取り上げる。

まず、活動動詞は、継続操作型からの拡張で見られると前節で既に指摘した。活動動詞は、使役の手段でも移動の様態でもないが、継続操作型における被使役者が使役者の手から離れず、被使役者の移動後もなお使役者の手の中なので、手を用いて何らかの動作を行う活動動詞と類似する側面がある。そのため、英語の使役移動からの対応で活動動詞が用

いられる場合がある。ほかにも、次のような例が挙げられる。

(121) a. he **picked** up Solomon's iPhone and keys from the hall table. (Brown[original] 2009:126)

b. (彼は) 玄関ホールのテーブルからソロモンの iPhone と鍵束をつかみとった。

(越前[訳] 2010:181)

c. (그는) 홀 테이블에 놓인 솔로몬의 아이폰과 열쇠 꾸러미를  
 hol theyipul-ey noh-in sollomon-uy aiphon-kwa yelsoy kkwulumi-lul  
 ホール テーブル-LOC 置く-ADN ソロモン-GEN iPhone-and 鍵 束-ACC

**집어** 주머니에 넣었다.

(An[訳] 2009:209)

**cip-e** cwumeni-ey neh-essta

とる-PART 袋-toward 入れる-PS

‘(彼は) ホールのテーブルに置いたソロモンの iPhone と鍵束をとって、袋に入れた’

(121)は、英語の使役移動が活動動詞と対応している日本語の例を示している。英語の *picked* に対し、日本語は「つかみとった」で対応している。主動詞の「とる」は、被使役者 (iPhone と鍵束) をその場から離れるようにしている経路動詞(FROM)だが、動詞の連用形の「つかみ」は、被使役者に対して移動を働きかける使役行為というより、単なる使役者の活動動詞に近い。しかし、「つかむ」による手の動作は、被使役者の移動が終わっても、なお使役者の手の中にある継続操作型の使役行為とも類似しているため、継続操作型からの拡張で用いられていると言える。一方、韓国語では、「집어(とって)」と「넣었다(入れた)」による複文の対応になっている。このように、両言語では、英語の使役移動を活動動詞で対応している。本稿の調査で見られる活動動詞の頻度をまとめると、以下の通りになる。

	作品①	作品②	作品③	作品④	作品⑤
日本語	15	14	7	11	19
韓国語	4	7	2	2	10

表 3 6 日本語と韓国語の使役移動における活動動詞の頻度<sup>125</sup>

表 3 6 は、英語の使役移動に対して活動動詞が用いられる日本語と韓国語の頻度を示している。一部の韓国語の作品では頻度が少ないので、日本語の方が活動動詞を用いて使役移動を表現するケースが多い傾向がある。両言語の活動動詞の頻度は、使役の手段 (表 2 0 など) よりやや落ちるものの、両言語の使役移動の様態よりは多く、かなりの頻度となっている。このような活動動詞は、限られた両言語の使役手段動詞を補うために用いられて

<sup>125</sup> 英語の使役移動に対応する日本語と韓国語の活動動詞での頻度には、主要部と非主要部の両方が含まれている。

いると思われる。既に取り上げたように、活動動詞が経路動詞の前項動詞として用いられる場合もあるが、次のように、活動動詞のみが見られる場合もある。

- (122) a. (he) **picked** off yellowing leaves, and planted rösebushes. (Hosseini[original] 2003:193)  
 b. (彼は) 枯れた葉を摘んで、バラも植えてくれた。 (佐藤[訳] 2007:25(vol.2))  
 c. (그는) 누렇게 변한 잎을 따내고 녁쿨장미를 심었다.  
 nwulehkey pyenha-n iph-ul tta-nay-ko nengkhwulcangmi-lul sim-essta  
 黄色く 変わる-ADN 葉っぱ-ACC 摘む-出す-PART つるバラ-ACC 植える-

PS

‘(彼は) 黄色く変わった葉っぱを摘み出してつるバラを植えた’(Lee[訳] 2005:313)

(122)は、英語の使役移動を活動動詞で対応している日本語と韓国語の例を示している。英語の *picked* に対し、日本語は「摘んで」で対応している。日本語の「摘む」は、もともとつながっている葉っぱなどを指先や爪ではさみとる動作で、被使役者の移動を働きかける使役行為というより、活動動詞に近い。「摘む」による手の動作は、*pick* の継続操作型における使役者の身体部位（手）による小規模の移動とも類似しているので、継続操作型からの拡張として用いられていると言える。その際、「摘む」という動作によって、その場から離れるという経路が含意できる。一方、韓国語では、「따내고(摘み出して)」で対応している。「내다(出す)」という経路動詞での対応はあるものの、「내다(出す)」の先項動詞となる「따(다)(摘む)」は、付いているものをもって分離するような動作なので、本来は使役行為ではない。しかし、手を用いることで、付いていた場所からものを離すような小規模の移動とも捉えられるので、継続操作型からの拡張として用いられている。このように、英語の使役移動に対応する両言語の活動動詞では、その動作で経路が含意され、活動動詞のみが使われている。また、両言語の活動動詞は、継続操作型からの拡張がさらなる拡張を遂げている場合もある。例えば、次のような例が挙げられる。

- (123) a. She **stuffed** the flashlight into his now empty palm. (Brown[original] 2009:148)  
 b. (彼女は) 空になったアンダーソンの手のひらに懐中電灯を**押し**つける。  
 (越前[訳] 2010:212)  
 c. (그녀는) 손전등을 그의 손에 쥐어 주었다. (An[訳] 2009:245)  
 soncentung-ul ku-uy son-ey cwi-e cwu-essta  
 懐中電灯-ACC 彼-GEN 手-to 握る-PART あげる-PS  
 ‘(彼女は)懐中電灯を彼の手に握ってあげた’

(123)は、英語の使役移動に対応する日本語と韓国語を示している。英語の *stuffed* は、使役者（彼女）の移動はなく、被使役者（懐中電灯）の移動はある継続操作型で、被使役者

(懐中電灯)の移動中に使役が継続的に行われている。これに対し、日本語では「押しつける」で対応している。「つける」という経路動詞(ONTO)に、動詞の連用形の「押し」で使役者の使役行為が対応している。一方、韓国語では、「쥐어 주었다(握ってあげた)」で対応している。「주다(あげる)」という経路動詞(TO)に、連結語尾の「-어/아(-e/a)」のついた「쥐어(握って)」で対応しているが、「주다(握る)」は、被使役者の移動を働きかけるような使役行為ではない。しかも、「주다(握る)」の主体は使役者(彼女)ではなく、着点にいる第3者(彼)なので、使役者の活動動詞というより、第3者の活動動詞となる。つまり、継続操作型の使役行為からの拡張で用いられる使役者の活動動詞がさらに拡張され、第3者の活動動詞となっている。このように、英語の使役移動に対応する両言語では、使役行為との類似性による活動動詞への拡張がさらに別の活動動詞へ拡張されている。

次に、両言語の使役移動の「その他」には、図(Figure)や地(Ground)の情報が表される場合も少なくない。例えば、次のような例が挙げられる。

(124) a. Sophie **poured** a generous heap of it on a square of paper. (Jones[original] 1986:191)

b. ソフィーは紙の上にたっぷりと粉を注ぎ、[...] (西村[訳] 1997:182)

c. 소피는 사각형 종이 위에 고춧가루를 듬뿍 쏟았다.

sophi-nun sakakh cong-i wi-ey kochwus-kalwu-lul tumpwuk ssot-assta

ソフィー-TOP 四角い 紙 上-LOC 唐辛子-粉-ACC たっぷり 注ぐ-PS

‘ソフィーは四角いの紙の上に唐辛子の粉をたっぷり注いだ’ (Kim[訳] 2004:168)

(124)は、英語の使役移動に対し、図の情報が表されている日本語と韓国語の例を示している<sup>126</sup>。英語の *poured* に対し、日本語は「注ぎ」で対応している。英語の *poured* も液体状という図の情報が含まれているが、日本語では、「注ぐ」という動詞に液体状の図(粉)の情報が含まれている。一方、韓国語では、「쏟았다(注いだ)」で対応している。韓国語でも、動詞の「쏟다(注ぐ)」に液体状の図(고춧가루(唐辛子の粉))の情報が含まれている。このように、両言語では、英語の使役移動に対して使役移動であると同時に図である液体状のものも動詞によって表されている。使役移動の経路や様態、手段は表されていない。地の情報が含まれている対応には、例えば、次のような例がある。

(125) a. At the lobby’s security checkpoint, a lone guard quickly **pulled** off his headphones, and Trish could hear the Redskins game blaring. (Brown[original] 2009:142)

b. ロビーのセキュリティ・ゲートで、守衛がイヤフォンをあわてて<sup>127</sup>はずしたが、レッドスキンの試合の実況はしっかり漏れ聞こえた。 (越前[訳] 2010:204)

<sup>126</sup> 日本語の副詞「たっぷり」は、英語の *a generous heap* からの対応で設けられていると判断したので、*poured* の対応には含めていない。一方、韓国語の副詞「듬뿍(たっぷり)」も、英語の *a generous heap* に対応する表現だと判断したので、*poured* の対応には含めていない。

<sup>127</sup> 日本語の副詞「あわてて」は、英語の副詞の *quickly* に対応する表現だと判断したので、*pulled* の対応には含めていない。一方、韓国語の副詞「재빨리(急いで)」も、英語の *quickly* に対応する表現だと判断したので、*pulled* の対応には含めていない。

c. 로비에서 혼자 근무를 서고 있던 경비원이  
 lopi-eyse honca kunmwu-lul se-ko iss-te-n kyengpiwen-i  
 ロビー-LOC 一人 勤務-ACC 立つ-PART いる-PRF-ADN 警備員-NOM  
 트리를 발견하고 재빨리 헤드폰을 벗었지만,  
 thulisi-lul palkyenha-ko cayppalli heytuphon-ul pes-ess-ciman  
 トリッシュ-ACC 発見する-PART 急いで 헤드フォン-ACC 脱ぐ-PS-AVS  
 레드스킨스 경기의 중계방송이 새어나왔다. (An[訳] 2009:236)  
 reytusukhinsu kyengki-uy cwunkyey-pangsong-i say-e-na-o-assta  
 レッドスキンズ 競技-GEN 中継-放送-NOM 漏れる-PART-出る-くる-PS  
 ‘ロビーで一人勤務を立っていた警備員がトリッシュを発見して、急いでヘッドフ  
 オンをはずしたが、レッドスキンズ競技の中継放送が漏れ出てきた’

(125)は、英語の使役移動に対し、地の情報が表されている日本語と韓国語の例を示している。英語の一般的な移動を表す *pulled* に対し、日本語では「はずしたが」で対応している。日本語の「はずす」だと、地（耳のように装着する場所がある）に取り付けたり、掛けたりしていた図（イヤホン）をとって離すという意味なので、図と地がぴったり接触して固定されるという情報が表されている。一方、韓国語では「벗었지만(はずしたが)」で対応している。韓国語の「벗다(脱ぐ)」は、使役者（守衛）の特定の身体部位が地となっているという情報が含まれている。このように、両言語では、英語の使役移動に対して地の情報が含まれた動詞で対応している。英語の使役移動に対して図や地の情報が含まれている両言語の頻度をまとめると、次のようになる。

	作品①	作品②	作品③	作品④	作品⑤
日本語	2	5	3	1	3
韓国語	10	8	0	1	2

表 3 7 図や地の情報が含まれた動詞で対応する両言語の頻度<sup>128</sup>

表 3 7 は、英語の使役移動に対して図や地の情報が含まれている日本語と韓国語の頻度を示している。作品③の韓国語のように、全く見られない作品もあるが、図や地の情報が含まれている両言語の頻度は、使役移動の様態よりは多い頻度となっている。このように、両言語では、英語の使役移動に対して図や地の情報が含まれた動詞で対応している。Bowerman and Choi (1991)が取り上げた使役移動(caused motion)における韓国語の結合(joining)や分離(separation)の意味とも関連があるのだろう。このような対応だと、同じ英語の使役動詞に対しても、図や地の情報によっては異なる対応になる場合もある。例えば、

<sup>128</sup> 英語の使役移動に対して図や地の情報が含まれている日本語と韓国語の動詞の頻度には、主要部と非主要部の両方が含まれている。

次のような例が挙げられる。

- (126) a. “**Put** the tape back on as best as you can.” (Brown[original] 2009:170)  
 b. 「テープはできるかぎり貼りなおせ」 (越前[訳] 2010:240)  
 c. “테이프도 최대한 원래대로 붙여 놓고.” (An[訳] 2009:280)  
 theiphu-to choytayhan wenlay-taylo pwuthi-e noh-ko  
 テープ-も 最大限 もと-通り 貼る-PART おく-PART  
 ‘テープも最大限にもとの通りに貼っておいて’

- (127) a. “I’d like to just get one of those pink clouds and **put** you in it and push you around.” (Fitzgerald[original] 1925:124)  
 b. 「ああいうピンクの雲を取ってきて、あなたを詰め込んで転がしてみたい」 (小川[訳] 2009:152)  
 c. “저 분홍색 구름 하늘 가졌으면 좋겠어.  
 ce pwunhong-sayk kwulum hana-l kaci-ess-umyen coh-keyss-e  
 あの ピンク色 雲 ひとつ-ACC 持つ-PS-COND いい-PROB-FP  
 거기다가 당신을 **집어**넣고 밀고 다닐  
 keki-taka tangsin-ul **cip-e**-neh-ko mil-ko tani-l  
 そこ-LOC あなた-ACC とる-PART-入れる-PART 押す-PART 行き来する-ADN  
 거야.” (Kim[訳] 2009:176)  
 ke-ya  
 もの-FP  
 ‘あのピンク色の雲がひとつ持てたらいいな。そこにあなたをとって入れて行き来するの’

(126)と(127)は、同じ英語の *put* への対応でも、図や地の情報が含まれる動詞が異なる日本語の例を示している。(126)では、日本語は「貼りなおせ」で対応している。動詞の連用形の「貼り」には、図(テープ)の粘着性という情報が含まれている。また、地の表面の一面に覆うような図(テープ)の形態上、ものの表面という地の情報も特定できる。一方、韓国語では、「붙여 놓고(貼っておいて)」で対応している。連結語尾の「-어/아(-e/a)」のついた「붙여(貼って)」も、図(テープ)の粘着性という情報が含まれ、ものの表面という地の情報が特定できる。

しかし、(127)では、同じ英語の *put* への対応でも、日本語は「詰め込んで」で対応している。動詞の連用形の「詰め」からは、地(雲)は図(あなた)だけでいっぱいになるような大きさで、図と地の間には空間の余裕がないという情報が含まれている。一方、韓国語では、「집어넣고(とって入れて)」で対応している。連結語尾の「-어/아(-e/a)」のつい

た「집어(とって)」は、使役者の身体部位による使役の手段なので、図や地の情報は見られない。このように、同じ英語の使役移動動詞に対しても、日本語では、図や地の情報によって、異なる対応をしている。韓国語では、例えば、次のような例がある。

(128) a. “Oh, **put** the damn hat on, really.” (Maguire[original] 1995:100)

b. 「ねえ、帽子をかぶってみて。お願い」 (服部・藤村[訳] 2007:132)

c. “아, 제발 그 모자 좀 써 보라니까.” (Song[訳] 2004:144)

a ceypal ku moca com sse po-la-nikka

あ お願い その 帽子 ちょっと かぶる-PART みる-IMP-FP

‘あ、お願い、その帽子ちょっとかぶってみて’

(129) a. He **put** the films up on a viewing box in the hallway and pointed with the eraser end of his pencil to the pictures of Baba's cancer. (Hosseini[original] 2003:146)

b. 医者は廊下にあるレントゲンフィルム観察器にフィルムを差し込み、鉛筆の頭についた消しゴム部分で、ババの癌の画像を指し示した。 (佐藤[訳] 2007: 251)

c. 그는 복도에 설치된 필름 관찰대에 필름을

ku-nun pokto-ey selchitoy-n phillum kwanchaltay-ey phillum-ul

彼-TOP 廊下-LOC 設置される-ADN フィルム 観察台-LOC フィルム-ACC

걸고, 바바의 암 사진들을 연필 끝으로 가리켰다.

kel-ko papa-uy am sacin-tul-ul yenphil kkuth-ulo kalikhi-essta

かける-PART ババ-GEN 癌 写真-PL-ACC 鉛筆 端っこ-by 指す-PS

‘彼は廊下に設置されたフィルム観察器にフィルムをかけて、ババの癌の写真を鉛筆の頭で指した’ (Lee[訳] 2005:241、一部修正)

(128)と(129)は、同じ英語の *put* への対応でも、図や地の情報が含まれる動詞が異なる韓国語の例を示している。(128)では、韓国語は「써 보라니까(かぶってみて)」で対応している。連結語尾の「-어/아(-e/a)」のついた「써(かぶって)」は、帽子などを頭にのせる着衣動詞なので、特定の図(帽子)と特定の地(頭)の情報が含まれている。一方、日本語では、「かぶってみて」で対応している。動詞のテ形の「かぶって」も着衣動詞で、図と地の情報が含まれている。

しかし、(129)では、同じ英語の *put* への対応でも、韓国語は「걸고(かけて)」で対応している。連結語尾の「고(ko)」のついた「걸고(かけて)」は、本来壁などに固定しても落ちないような図の形態の情報が含まれているが、ここでは、図(フィルム)が地(レントゲンフィルム観察器)から落ちないような尖っている形態になっているとは思えない。しかし、図の情報がさらに拡張され、図の形態が尖っていなくても、壁などから落ちないよ



うなものとして捉えられていると思われる。一方、日本語では、「差し込み」で対応している。動詞の連用形の「差し」は、紙挟みのように、ものが固定できる地（レントゲンフィルム観察器）に対する図（フィルム）への移動の働きかけを表している。このように、韓国語でも、同じ英語の使役移動に対して、図や地の情報によって、異なる対応をしている。

このように、英語の使役移動を図や地の情報が含まれた動詞で対応する場合、異なる英語の使役動詞に対しても、同じ図や地の情報で対応することがある。例えば、次のような例が挙げられる。

(130) a. Michael sprinted up before Sophie could move and **dragged** the boot off her foot. (Jones[original] 1986:157)

b. ぱっと駆けつけたマイケルが、靴を脱がせてくれたのです。 (西村[訳] 1997:152)

c. 그녀가 미처 움직이기도 전에 마이클이 허둥지둥  
 kunye-ka miche wumci-ki-to ceney maikhul-i hetwungcitwung  
 彼女-NOM まだ 動く-NMLZ-も 前に 마이ケル-NOM あたふた  
 달려와 장화를 벗겼다. (Kim[訳] 2004:139)  
 talli-e-o-a canghwa-lul peski-essta  
 走る-PART-来る-PART 長靴-ACC 脱がせる-PS  
 ‘彼女がまだ動く前に、マイケルがあたふた走って来て長靴を脱がせた’

(131) a. Elphaba lifted her sister’s feet and slipped off the common house slippers, and replaced them with the dazzling shoes. (Maguire[original] 1995:192)

b. エルフアバは妹の足を持ちあげると、普段用の室内履きを脱がせ、代わりにまばゆく輝く靴を履かせた。 (服部・藤村[訳] 2007:254)

c. 엘파바는 동생의 발을 들어 평범한 실내화를  
 eylphapa-nun tongsayng-uy pal-ul tul-e phyengpemhan silnayhwa-lul  
 エルフアバ-TOP 妹-GEN 足-ACC 上げる-PART 平凡な 室内履き-ACC  
 벗겨 내고 눈부시게 빛나는 구두로  
 peski-e nay-ko nwunpwusikey pichna-nun kwutwu-lo  
 脱がせる-PART 出す-PART まばゆく 輝く-ADN 靴-by  
 갈아신겨 주었다.  
 kal-a-sinki-e cwu-essta  
 替える-PART-履かせる-PART あげる-PS  
 ‘エルフアバは妹の足を上げて平凡な室内履きを脱がせ、まばゆく輝く靴で履き替

(130)と(131)は、異なる英語の使役移動に対して、同じ図や地の情報で対応している日本語と韓国語の例を示している<sup>129</sup>。(130)では、英語の *dragged* は、被使役者に対して「引く(引っばる)」ような使役者側の働きかけを表しているが、日本語では「脱がせてくれたのです」で対応している。動詞のテ形の「脱がせて」は着衣動詞で、図(被使役者)が身体部位につけるもの(靴)という情報が含まれている。英語のような使役者側の働きかけは見られない。一方、韓国語では、「벗겼다(脱がせた)」で対応している。「벗기다(脱がせる)」という着衣動詞が主動詞として用いられ、特定の図(身につけるもの)と特定の地(身体部位)の情報が含まれている。

しかし、(131)でも、両言語は同じ動詞で対応している。英語の *slipped* は、被使役者(室内履き)側の移動の様態を表しているが、日本語は「脱がせ」で対応している。従属節における「脱がせ」は、(130)と同様の着衣動詞で、靴などを身体部位から離すという図と地の情報が含まれている。一方、韓国語では、「벗겨 내고(脱がせて出して)」で対応している。連結語尾の「-어/아(-e/a)」のついた「벗겨(脱がせて)」も同様の着衣動詞で、特定の図と地の情報が含まれている。このように、両言語では、異なる英語の使役移動に対して、同じ図と地の情報が含まれた動詞で対応している。両言語は、使役移動における図や地の情報に注目しているので、英語の使役手段や移動の様態には対応されず、同じ対応になることもある。

このように、英語の使役移動を図や地の情報で対応する日本語と韓国語では、大きく3つのパターンが見られる。まず、英語の使役移動に図や地の情報が含まれているため、対応する日本語と韓国語でも図や地の情報が見られるパターンがある。上記の *pour* の例がその一例になるだろう。(124)のように、英語の *pour* には図が液体などの情報が含まれている。対応する日本語や韓国語でも「注ぐ」や「쏟다(注ぐ)」で図の情報が表されている。ほかにも、次のような例が挙げられる。

(132) a. Boq longed to take Galinda in his arms, (Maguire[original]  
1995:164)

b. ボックはガリンダを腕の中に抱きしめたいと思った。

(服部・藤村[訳] 2007:216、一部修正)

c. 보크는 갈린다를 안아 주고 싶었다.

pokhu-nun kallinta-lul an-a cwu-ko siph-essta

ボック-TOP ガリンダ-ACC 抱く-PART あげる-PART ほしい-PS

‘ボックはガリンダを抱きあげてほしかった’

(Song[訳] 2004:226、一部修正)

<sup>129</sup> (130)では自律移動も見られるが、ここでは使役移動を対象としているため、四角で囲った部分で表示しない。

(132)は、英語にもある地の情報に対応している日本語と韓国語の例を示している。英語の *longed to take* に対し、日本語は「抱きしめたいと思った」で対応している。動詞の連用形は「抱き」では、使役者の身体部位という地の情報が特定できるので、一見、英語になかった地の情報のように見えるが、英語でも *in his arms* という前置詞句で明示している。つまり、英語でも非主要部に地の情報が含まれていて、対応する日本語でも地の情報が見られる。一方、韓国語では、「안아 주고 싶었다(抱きあげてほしかった)」で対応している。連結語尾の「-어/아(-e/a)」のついた「안아(抱き)」は地で使役者の胸部という情報が特定できる。韓国語でも、英語にある地の情報が見られる。このように、両言語では、英語にもある地の情報が非主要部の動詞と対応している。英語では、図や地のような移動の側面も、経路と同様に、前置詞句などの動詞の衛星で表されているのに対し、日本語と韓国語では、経路と同様の主動詞ではないが、主動詞との結びつきが強い非主要部で図や地の移動の側面が表されている。

次に、英語に図や地の情報はないが、対応する日本語や韓国語では図や地の情報が見られるパターンがある。例えば、次のような例が挙げられる。

(133) a. He **picked** up his guitar and opened the door with the knob green-down, onto the wide, cloudy hills. (Jones[original] 1986:148)

b. ハウルはギターをかかえあげると、ダイヤルの緑色の面を下にして、曇天が広がる丘に通じる扉をあけました。 (西村[訳] 1997:144)

c. 그는 기타를 **집은 뒤** 손잡이를 초록색으로 돌려  
 ku-nun kitha-lul **cip-un twi** soncapi-lul cholok-sayk-ulo tolli-e  
 彼-TOP ギター-ACC とる-ADN 後 取っ手-ACC 緑-色-to 回す-PART

높고 문을 열었다. 구름 낀 넓은 언덕이 펼쳐졌다.  
 noh-ko mwun-ul yel-essta kwulum kki-n nelpun entek-i phyelchyeeci-essta  
 置く-PART 門-ACC 開ける-PS 雲かかる-ADN 広い-ADN 丘-ACC 広がる-PS  
 ‘彼はギターをとった後、取っ手を緑色に回しておいてドアを開けた。雲のかかった広い丘が広がった’ (Kim[訳] 2004:131)

(133)は、英語にはない地の情報が見られる日本語の例を示している。英語の *picked* に対し、日本語は「かかえあげると」で対応している。動詞の連用形の「かかえ」は、腕で囲むようにして胸に抱いたり、脇の下にはさんだりする持ち方なので、地は使役者の胸などの身体部位という情報が特定できる。英語の *picked* になかった地の情報と言える。一方、韓国語では、「집은 뒤(とった後)」で対応している。経路動詞は見られないが、使役手段動詞の「집다(とる)」による継続操作型の使役移動では、被使役者が使役者から離れないので、被使役者の経路が容易に推測できる。このように、日本語では、英語になかった地の情報

が見られる。このような図や地の情報が含まれた動詞は、限られた両言語の使役手段動詞を補うために用いられていると思われる。

最後に、英語の意味の拡張に対して、図や地の情報が含まれた動詞で対応するパターンがある。例えば、次のような例が挙げられる。

(134) a. “we put ice on her forehead and **hooked** her back into her dress.”

(Fitzgerald[original] 1925:102、一部修正)

b. 「あとは氷で頭を冷やして、どうにか服を着せた」 (小川[訳] 2009:124、一部修正)

c. “우리는 얼음을 이마에 갖다대고 드레스를 입혀  
wuli-nun elum-ul ima-ey kac-ta-tay-ko tuleysu-lul iphi-e  
我々-TOP 氷-ACC 額-to 持つ-PART-当てる-PART ドレス-ACC 着せる-PART  
주었지요.” (Kim[訳] 2009:98、一部修正)

cwu-ess-ciyo

あげる-PART-PS

‘我々は氷を額に持たせてドレスを着せてあげたよ’

(134)は、英語に対して図と地の情報が含まれた動詞で対応している日本語と韓国語の例を示している。英語の *hooked* は、ものを留め金などで引っ掛けるという意味だが、ここでは、(服を着るのを嫌がる) 人に対して、引っ掛けるようにして服の中に入れたという意味に拡張していると言える。これに対し、日本語では「着せた」で対応している。着衣動詞の「着る」を主動詞で対応することで、図(被使役者の身体部位)と地(ドレスなどの衣類)の情報が特定できる。英語の *hooked* のような拡張された使役手段の意味とは全く同じ対応ではないが、図と地という移動の別の側面を示すことで、何らかの対応をしていることがわかる。一方、韓国語では、「입혀 주었지요(着せてあげたよ)」で対応している。連結語尾の「-어/아(-e/a)」のついた「입혀(着せ)」も着衣動詞で、特定の図(被使役者の身体部位)と地(衣類)の情報が含まれている。「입혀(着せ)」でも、英語の *hooked* の拡張された使役手段の意味は見られないが、代わりに図と地の情報を示すことで、何らかの対応はしている。このように、両言語では、英語の意味の拡張に対して、図や地の情報が含まれた動詞で対応している。図や地の情報が含まれた動詞は、限られた両言語の使役手段動詞を補うために用いられていると考えられるが、意味の拡張された英語の使役手段にも対応している。

以上、日本語と韓国語の使役移動で多い「その他」の一つとして、図や地の情報が含まれた動詞を見た。英語の使役移動に対して図や地の情報が含まれた動詞で対応しているため、同じ英語の使役動詞に対しても、図や地の情報によっては、異なる対応をしたり、異なる英語の使役動詞に対して同じ図や地の情報で対応している。このように、英語の使役移動に対して図や地の情報で対応する両言語では、大きく3つのパターンが見られ、①英

語にも図や地の情報が含まれているため、対応する日本語と韓国語でも図や地の情報が見られるパターン、②英語には図や地の情報がなく、対応する日本語や韓国語で図や地の情報が見られるパターン、③英語の意味の拡張に対して、図や地の情報が含まれた動詞で対応するパターンが見られた。

最後に、両言語の使役移動で多い「その他」には、自律移動の動詞がある。使役移動を自律移動で対応する場合は、既に随伴運搬型の使役移動で指摘した。ほかにも、次のような例が挙げられる。

(135) a. “**Take** this to the front desk,” (Hosseini[original] 2003:142)

b. 「これを受付デスクへ持って行ってください」 (佐藤[訳] 2007:243)

c. “이걸 프론트 데스크로 가져가세요.” (Lee[訳]

2005:233)

ike-l phulonthu teysukhu-lo kaci-e-ka-seyyo

これ-ACC フロント デスク-to 持つ-PART-行く-IMP.POL

‘これをフロントへ持って行ってください’

(135)は、英語の随伴運搬型の使役移動を自律移動で対応している日本語と韓国語の例を示している。英語の *take* に対し、日本語は「持って行ってください」で対応している。自律移動の経路動詞の「いく」が用いられた対応となっている。一方、韓国語では「가져가세요(持って行ってください)」で対応している。韓国語でも、自律移動の経路動詞の「가다(行く)」が用いられている。このように、両言語では、英語の使役移動を自律移動で対応している。「実質的に随伴運搬型(松本 2017)」だが、自律移動の経路動詞が用いられているため、疑似客体移動表現となっている。本稿における英語の使役移動を自律移動で対応する頻度をまとめると、次のように、作品⑤の頻度が目立つ。

	作品①	作品②	作品③	作品④	作品⑤
日本語	2	4	6	4	27
韓国語	3	7	8	9	26

表 3 8 英語の使役移動を自律移動で対応する両言語の頻度

表 3 8 は、英語の使役移動を自律移動で対応する日本語と韓国語の頻度を示している。両言語とも 1 桁の頻度になっているが、作品⑤だけは、他の作品の何倍もの頻度となっている。このように、両言語の作品⑤の頻度が高いのは、そもそも作品⑤では、英語の随伴運搬型の頻度が圧倒的に多いという事実の影響がある(表 2 3 や表 3 3 を参照)。つまり、作品の特殊性による英語の高頻度の随伴運搬型を、日本語と韓国語が自律移動として捉えているのである。

さらに、作品⑤を詳しく見ると、英語の随伴運搬型では、使役的直示動詞となる *take* と

*bring* の頻度が高い。英語の随伴運搬型の計 32 例のうち、*take* が 18 例、*bring* が 8 例となっている。*take* の 18 例だけでも、他の作品の英語の随伴運搬型を上回る頻度で、*bring* の 8 例も他の作品に迫る頻度となっている。残りは *drive* だが (6 例)、日本語と韓国語では、次のような自律移動で対応している。

(136) a. I **drove** us home in Baba's old, ochre yellow Buick Century. (Hosseini[original] 2003:123)

b. ババの古い黄土色のビュイック・センチュリーをわたしが運転して、二人でアパートに向かった。(佐藤[訳] 2007:211)

c. 집으로 올 때에는 내가 바바의 낡은 황토색  
cip-ulo o-l ttay-ey-nun nay-ka papa-uy nalk-un hwangtho-sayk  
家-toward 来る-ADN 時-DAT-TOP 私-NOM ババ-GEM 古い-ADN 黄土-色  
뷰익 센트리를 운전했다. (Lee[訳] 2005:202)

pyuik seynthuli-lul uncenha-essta

ビュイック センチュリー-ACC 運転する-PS

‘家に帰る時は私がババの古い黄土色のセンチュリーを運転した’

(136)は、英語の使役移動の *drive* を自律移動で対応している日本語と韓国語の例を示している。英語の *drove* は、目的語の *us* を図としている使役移動だが、日本語は「運転して」と「向かった」という複文で対応している。「運転して」で使役者の行為を表し、「向かった」で使役者を図とする自律移動の方向を表した対応となっている。一方、韓国語では、「운전했다(運転した)」で対応している。一見、「운전했다(運転した)」の対応しか見えないが、名詞修飾の「올 때는(来る時は)」には自律移動の情報も含まれている。言い換えると、「내가 바바의 센트리를 운전해서 집으로 왔다(私がババのセンチュリーを運転して家に来た)」という対応になり、「운전해서(運転して)」と「왔다(来た)」という複文での対応と言える。韓国語でも、使役者による運転の行為と使役者による自律移動として捉えている。このように、両言語では、英語の *drive* の被使役者を図として捉えず、使役者を図とした自律移動で対応している。このような自律移動の対応が目立ち、かつ英語の使役的直示動詞の *take* と *bring* の頻度も高いので、作品⑤では、結果的に両言語の自律移動の対応が多くなっているのだろう。

このような自律移動での対応では、使役者の行為は自律移動を表す経路動詞との結びつきは強くない。例えば、次のような例が挙げられる。

(137) a. **Bring** it to me.” (Maguire[original] 1995:151)

b. 「持ってきてくれないか」 (服部・藤村[訳] 2007:198)

c. “나한테 갖고 와 봐.” (Song[訳] 2004:209)

na-hanthey kac-ko o-a po-a

私-DAT 持つ-PART 来る-PART みる-FP

‘私に持ってきてみて’

(137)は、英語の使役移動が日本語と韓国語では自律移動で対応している例を示している。英語の *bring* に対し、日本語は「持ってきてくれないか」で対応している。主動詞は補助動詞の「てくれる」になるため、自律移動の直示動詞の「来る」が「きて」で接続しているとしても、それに先行する「持って」も動詞のテ形になっている。先行する「持って」は、経路動詞との結びつきが強いとは言えない。一方、韓国語では、「갖고 와 봐(持ってきてみて)」で対応している。韓国語でも、補助動詞の「-어/아 보다(てみる)」が主動詞になっていて、自律移動の直示動詞の「오다(来る)」が「와(きて)」で接続しているものの、それに先行する「갖고(持って)」には連結語尾の「고(ko)」がついている。韓国語でも、先行する「갖고(持って)」は、経路動詞との結びつきが強いとは言えない。このように、両言語では、英語の使役移動を自律移動で対応する際は、使役者の行為と自律移動を表す経路動詞とは結びつきが強くない。

特に、韓国語では、経路動詞との間に結びつきの強い連結語尾の「-어/아(-e/a)」が入っても、連結語尾の「고(ko)」への入れ替えができるので、使役者の行為と経路動詞の結びつきが強いとは言えない。例えば、次のような例が挙げられる。

(138) a. So I **took** him to the country hospital in San Jose. (Hosseini[original] 2003:141)

b. そこでわたしはババを、サンホセの郡病院へ連れていった。(佐藤[訳] 2007:242)

c. 바바를 산호세에 있는 국립 병원으로 데려갔다.

papa-lul sanhosey-ey issnun kwuklip pyengwen-ulo teyli-e-ka-ssta

ババ-ACC サンホセ-LOC ある-ADN 国立 病院-toward 連れる-PART-行く-PS

‘ババをサンホセにある国立病院へ連れていった’

(Lee[訳] 2005:233)

(138)は、英語の使役移動に対して連結語尾の入れ替えができる韓国語の例を示している。英語の *took* に対し、韓国語では、「데려갔다(連れていった)」で対応している。自律移動の経路動詞の「갔다(いった)」に先行する「데려(連れて)」には、結びつきの強い連結語尾の「-어/아(-e/a)」がついている。しかし、結びつきが強くない連結語尾の「고(ko)」に入れ替えることもできる(데리고 갔다(連れていった))。一方、日本語では、「連れていった」で対応している。自律移動の経路動詞の「いった」に先行する「連れて」は動詞のテ形で、経路動詞とは結びつきは強くない。このように、韓国語では、英語の使役移動を自律移動で対応する際は、連結語尾の入れ替えができる。ほかにも、「가져가다(持っていく)」と「가지고 가다(持っていく)」、「모셔가다(お連れしていく)」と「모시고 가다(お連れしていく)」などがある。日本語でも、英語の使役移動を自律移動で対応する際は、動詞のテ形や複文での対応が多い。表38のうち、経路動詞との結びつきが強くない頻度をさらに調べてみると、次のように、殆どの結びつきが強くないことがわかる(経路動詞と

の結びつきが強くない頻度 / 英語の使役移動を自律移動で対応する頻度)。

	作品①	作品②	作品③	作品④	作品⑤
日本語	1 / 2	4 / 4	5 / 6	3 / 4	21 / 27
韓国語	1 / 3	7 / 7	7 / 8	9 / 9	19 / 26

表 3 9 主動詞との結びつきが強くない自律移動で対応する頻度

表 3 9 は、英語の使役移動を自律移動で対応する頻度 (右: 分母=表 3 8) のうち、経路動詞との結びつきが強くない頻度 (左: 分子) を示している。経路動詞との結びつきが強くない頻度には、動詞のテ形や複文、「-어/아(-e/a)」以外の連結語尾、そして、「-어/아(-e/a)」でも、連結語尾の「고(ko)」への入れ替えができるものが含まれている。両言語とも、英語の使役移動を自律移動で対応する例の殆どが、経路動詞との結びつきは強くないことがわかる。作品②の日本語と韓国語は、自律移動で対応する例の全てが経路動詞との結びつきが強くない。頻度の多い作品⑤でも、日本語は 27 例中の 21 例、韓国語は 26 例中の 19 例が経路動詞との結びつきは強くなかった。

このように、両言語では、英語の使役移動を自律移動で対応する際は、使役者の行為と経路動詞との結びつきは強くない。自律移動の経路動詞の主体も、経路動詞に先行する動詞の主体も同一主語なのに、その結びつきが強くないのは、実質的には使役移動なので、検証結果 1' と一致する必要はないだろう。検証結果 1' では、自律移動を表す両言語は、非主要部の様態が多く、非主要部の様態には主動詞との結びつきの強いものが多いとしたが、ここでは、非主要部の様態はあまり見られず、実質的には使役移動となる。例えば、次のような例が挙げられる。

(139) a. they would all **take** their cheese sandwiches by the banks of the Suicide Canal and[...]

(Maguire[original] 1995:134)

b. 三人でよくチーズサンドを持って自殺運河の土手に行き[...]

(服部・藤村[訳] 2007:177)

c. (그는) 함께 치즈샌드위치를 들고 수어사이드 운하로 나가서[...]

hamkkey chicu-sayntuwichi-lul tul-ko swuesaitu wunha-lo na-ka-se

一緒に チーズサンドイッチ-ACC 上げる-PART Suicide 運河-to 出る-行く-PART

‘(彼は) 一緒にチーズサンドを上げて、自殺運河へ出ていき[...]

(Song[訳]2004:188)

(139)は、英語の使役移動を自律移動で対応している日本語と韓国語の例を示している。英語の *would take* に対し、日本語は「持って」と「行き」による複文で対応している。自律移動の経路動詞「行き」に先行する「持って」は、移動に伴う様態というより、移動する



前の使役者（三人）の活動動詞とも言える。「持って」によって、被使役者（チーズサンド）も使役者と一緒に移動できるようになるが、あくまでも経路動詞「行き」の主体は使役者で、「持って」は被使役者の移動の様態とは関係のない活動動詞となる。一方、韓国語では、「들고(上げて)」と「나가서(出ていき)」の複文で対応している。「들고(上げて)」も「나가서(出ていき)」も経路動詞だが、前者は使役移動、後者は自律移動の経路動詞になっている。捉え方の違いはあるものの、複数の経路での対応となっている。

このように、両言語では、英語の使役移動を自律移動で対応する際は、非主要部の様態があまり見られない。日本語では、主動詞との結びつきが強くないテ形（持って）で「持って行き」にしたり、「持って」と「行き」の複文で対応している。韓国語では、主動詞との結びつきが強くない連結語尾の「고(ko)」が用いられったり、主動詞との結びつきが強い連結語尾の「-어/아(-e/a)」を「고(ko)」に入れ替えたりして対応できるのも、必ずしも主動詞との結びつきが強い必要がないためであろう。

以上、日本語と韓国語の使役移動で多く見られる「その他」の一つとして、自律移動の動詞について見た。実質的には随伴運搬型の使役移動だが、自律移動で対応しているので、疑似客体移動表現とも言える。本稿の調査では、特定の作品において自律移動での対応が多かったが、ソース言語の英語では使役的直示動詞の *take* と *bring* が多かった上に、残りの *drive* に対しても、使役者を図とした自律移動での対応が目立っていた。このような自律移動での対応では、経路動詞との結びつきが強くないが、検証結果 1' とは違い、非主要部の様態のようなものがあまり見られないので、必ずしも主動詞とは結びつきが強い必要はないのだろう。

以上の両言語の使役移動の「その他」では、①活動動詞、②図や地の情報が含まれた動詞、③自律移動の動詞を見た。まず、活動動詞では、継続操作型の使役移動からの拡張がよく見られた。継続操作型とは、使役者の身体部位による小規模の移動や被使役者の移動後もなお使役者の手の中という側面が活動動詞と類似しているので、活動動詞での対応が見られた。次に、図や地の情報が含まれた動詞は、英語の使役移動における図や地の情報に注目しているため、同じ英語の使役動詞に対しても、異なる図や地の情報で対応したり、異なる英語の使役動詞に対して同じ図や地の情報で対応していた。よく見られるパターンとしては、①英語にも図や地の情報が含まれているため、対応する日本語と韓国語でも図や地の情報が見られるパターン、②英語には図や地の情報がなく、対応する日本語と韓国語で図や地の情報が見られるパターン、③英語の意味の拡張に対して、日本語と韓国語が図や地の情報の含まれた動詞で対応するパターンが見られた。最後に、自律移動の動詞は、随伴運搬型の使役移動への対応でよく見られた。特に、英語の使役的直示動詞の *take* と *bring* への対応や *drive* への対応では、自律移動での対応が目立っていた。このような自律移動での対応では、自律移動の経路動詞との結びつきは強くないが、検証結果 1' で見られるような非主要部の様態があまり見られないので、非主要部の様態のように、主動詞との結びつきが強い必要はないのだろう。いずれにしても、「その他」での対応は、限られ

た両言語の使役手段動詞を補うために用いられていると思われる。

#### 4.2.4 被使役者に対する働きかけの詳細化

検証3では、日本語と韓国語の使役移動において、使役の様態と手段の両方が複合動詞の前項動詞と後項動詞に分けて表されている場合が殆どなかった。しかし、前節では、使役の様態、手段以外の「その他」が多かったので、「その他」も含めて前項動詞と後項動詞の両方に経路以外の動詞が表される例について考察する必要がある。経路以外の動詞に範囲を広げてみると、経路以外の動詞が前項動詞と後項動詞の両方に表される際は、被使役者に対する働きかけの詳細化が見えてくる。

まず、使役移動の様態と手段が複合動詞の前項動詞と後項動詞の両方に表されている例では、次のような使役移動の各段階が見られる（四角で囲った部分が様態や手段）。

(140) a. The newcomer **kicked** the gun away and then wheeled toward Langdon.

(Brown[original] 2009:168)

b. 侵入者はその銃を**蹴飛ばして**、ラングドンに向きなおった。 (越前[訳] 2010:238)

c. 침입자는 그 총을 저만치 발로 **차** 버린 다음,

chimipca-nun ku chong-ul cemachi pal-lo **cha** peli-n taum

侵入者-TOP その銃-ACC あそこまで 足-by 蹴るしまう-ADN 後

랭던을 향해 돌아섰다.

(An[訳] 2009:277)

layngten-ul hyanghay tol-a-se-ssta

ラングドン-ACC 向かって 回る-PART-立つ-PS

‘侵入者はその銃をあそこまで蹴ってしまったあと、ラングドンに向きなおった’

(140)は、英語の使役移動に対し、複合動詞の前項動詞と後項動詞の両方に移動の様態と手段が表されている日本語の例を示している。英語の *kicked* に対し、日本語は「蹴飛ばして」で対応している。使役の手段は前項動詞の「蹴」で、移動の様態は後項動詞の「飛ばして」で表されている。被使役者に対する「蹴る」という働きかけの段階があって、その後被使役者による「飛ばす」という移動の段階を示していると言える。被使役者の経路は見られないが、「飛ばす」の段階では移動それ自体が否定できないので、「飛ばす」の段階に含意されていると言える。一方、韓国語では、「차 버린 다음(蹴ってしまったあと)」で対応している。使役の手段は前項動詞の「차(蹴って)」で表されているが、後項動詞は補助動詞の「-어/아 버리다(てしまう)」の非主要部となっている。このように、日本語では、使役移動の様態と手段が複合動詞の前項動詞と後項動詞の両方に表されている。それぞれ被使役者に対する働きかけの段階と被使役者による移動の段階が示されていると言える。このうち、被使役者に対する働きかけの段階は、使役の手段以外の動詞によっても示すこ

とができる。例えば、次のような例が挙げられる。

(141) a. The soldier **flicked** his unfinished cigarette (Hosseini[original] 2003:107)

b. ソ連兵は喫っていた煙草を弾き **飛ばした**。(佐藤[訳]

2007:184、一部修正)

c. 군인이 아직 다 피우지 않은 담배를 **훅** **던져**버렸다.

kwunin-i acik ta phiwu-ci anh-un tampay-lul **hwik** **tenci-e**-peli-essta

軍人-NOM まだ 全て 吸う-NEG-ADN タバコ-ACC ポイと 投げ-PART-しまう-PS

‘軍人がまだ吸いきっていないタバコをポイと投げてしまった’

(Lee[訳] 2005:176、一部修正)

(141)は、英語の使役移動に対し、使役の手段以外の動詞も含めて使役移動の各段階を示している例である。英語の *flicked* に対し、日本語は「弾き飛ばした」で対応している。前項動詞の「弾き」は、本稿では使役手段動詞として想定していないが、「曲げた物が元に戻る力で打つ」という意味からは、被使役者に対する働きかけの段階であると推測できる。後項動詞の「飛ばした」では移動の様態が表され、被使役者による移動の段階を示している。一方、韓国語では、副詞の「훅(ポイと)」と複合動詞の「던져 버렸다(投げ捨てた)」で対応している。使役の手段は前項動詞の「던져(投げ)」で表されているが、後項動詞は補助動詞の「-어/아 버리다(てしまう)」となっている。副詞の「훅(ポイと)」は、前項動詞の「던져(投げ)」に伴うオノマトペで、複数の使役の手段での対応とも言える。このように、日本語では、使役の手段以外の動詞も含めて使役移動の各段階を示している。使役の手段以外の動詞でも、被使役者に対する働きかけの段階を示すことができるが、韓国語でも、次のように、同様のことが言える。

(142) a. and so I **drew** up the girl beside me, tightening my arms. (Fitzgerald[original] 1925:105)

b. だから (私は) 腕に力を入れて、隣にいる女を抱き寄せた。(小川[訳] 2009:130)

c. 그래서 나는 팔에 힘주어 내 곁에 있는 여자를

kulayse na-nun pha-ey him-cwu-e nay kye-ey iss-nun yeca-lul

だから 私-TOP 腕-LOC 力-あげる-PART 私の 隣-LOC ある-ADN 女-ACC

**끌어**당겼다.

(Kim[訳] 2009:102)

**kkul-e**-tangki-essta

引きずる-PART-引く-PS

‘だから私は腕に力を入れて、私の隣にいる女を引きずって引いた’

(142)は、英語の使役移動に対し、使役の手段以外の動詞で働きかけの段階を示している韓国語の例である。英語の *drew* に対し、日本語は「抱き寄せた」で対応している。前項動詞の「抱き」には地が使役者の身体部位という情報が含まれていて、後項動詞の「寄せた」

で経路が表されている。一方、韓国語では、「끌어당겼다(引きずって引いた)」で対応している。後項動詞の「당겼다(引いた)」は、本稿では使役手段動詞として想定していないが、「物などに力を入れて、自分の方や一定の方向へ近寄るようにする(물건 따위를 힘을 주어 자기 쪽이나 일정한 방향으로 가까이 오게 하다)」という意味からは、被使役者に対する働きかけの段階を示していると言える。しかし、前項動詞の「끌어(引きずって)」では使役の手段が表され、同じ働きかけの段階を示している。つまり、前項動詞も後項動詞も働きかけの段階を示していることになり、働きかけの段階の詳細化につながると考えられる。このような働きかけの詳細化は、次のような日本語の例でも見られる。

- (143) a. (and Madame Morrible) **sent** Grommetik away. (Martel[original] 2001:199)  
 b. (マダム・モリブルは) グロメティックも追い払った。 (唐沢[訳] 2012:264)  
 c. (마담 모리블은) 그로메틱을 내**보냈다**. (Kong[訳] 2004:273)

kulomeythik-ul	nay- <b>ponay-ssta</b>
グロメティック-ACC	出す-(PART-)送る-PS
‘(マダム・モリブルは) グロメティックを送り出した’	

(143)は、英語の使役移動に対し、働きかけの詳細化が見られる日本語の例を示している。英語の *sent* に対し、日本語は「追い払った」で対応しているが、前項動詞の「追い」も後項動詞の「払った」も、本稿では使役手段動詞として想定していない。しかし、前項動詞の「追い」の「無理にその場所や地位などを去らせる」という意味からは、使役者がその主体となって、被使役者に対する働きかけを示していると解釈できる。後項動詞の「払った」も「本体にとって邪魔・不要・無益なものなどを手や道具を用いて取り除く」という意味からは、同じ働きかけの段階を示していると思われる。このように、前項動詞も後項動詞も働きかけの段階を示し、働きかけの段階の詳細化となっているが、後項動詞の「払った」の意味からは、前項動詞の「追い」による働きかけの完了も示している。つまり、その場から去らせるようとする「追う」の働きかけが、取り除かれたという意味の「払う」で完了することになっている。一方、韓国語では、「내보냈다(送り出した)」で対応している。前項動詞の「내(出し)」は移動の経路、後項動詞の「보냈다(送った)」は使役の手段が表されている。

このように、日本語でも、前項動詞と後項動詞による働きかけの段階の詳細化が見られるが、意味的にも後項動詞は前項動詞による働きかけの完了を示している。しかし、後項動詞の意味は、必ずしも前項動詞による働きかけの完了を示す必要はない。例えば、次のような働きかけの詳細化も見られる。

- (144) a. She scooped up loads of ash and **dumped** them in the biggest pools of slime.

(Jones[original] 1986:120)

b. (彼女は) 灰をひとすくいすると、いちばん大きな池に入れました。

(西村[訳] 1997:117)

c. (그녀는) 몇 번이나 재를 퍼올려                    제일 큰                    오물을  
myech pen-ina    cay-lul phe-olli-e                    ceyil khu-n                    omwul-ul  
何    度も    灰-ACC 汲む-上げる-PART 一番 大きい-ADN 汚物-ACC

웅덩이에    쏟아 부었다.

(Kim[訳] 2004:107)

wungtengi-ey ssot-a pwu-essta

水溜り-LOC 注ぐ-PART 注ぐ-PS

‘(彼女は) 何度も灰を汲み上げ、一番大きい汚物を水溜りに注いだ’

(144)は、英語の使役移動に対し、働きかけの詳細化が見られる韓国語の例を示している。英語の *dumped* に対し、日本語は「入れました」という経路動詞で対応している。一方、韓国語では、「쏟아 부었다(注いだ)」で対応している。前項動詞の「쏟아(注ぎ)」は、「液体などを容器から外へ出させる (액체나 물질을 그것이 들어 있는 용기에서 바깥으로 나오게 하다)」という意味からは、図が液体という情報が含まれていて、その主体は使役者となる働きかけの段階が推測できる。後項動詞の「부었다(注いだ)」も、「液体や粉などを他のところに盛る (액체나 가루 따위를 다른 곳에 담다)」という意味からは、図が液体や粉などの情報が含まれているが、さらに、地が他のところ (容器) という情報も含まれている。後項動詞からも使役者を主体とする働きかけの段階であることが推測できるが、前項動詞の「쏟아(注ぎ)」による働きかけの完了を示すような意味は特に見られない。前項動詞と後項動詞のどちらも働きかけの段階を示しているので、その一部を省いても容認度は変わらない (오물을 웅덩이에 쏟았다, 오물을 웅덩이에 부었다)。

このように、両言語の前項動詞と後項動詞による働きかけの段階の詳細化は、後項動詞の意味が前項動詞による働きかけの完了を示すとは限らない。後項動詞では、完了のAspectへの意味の拡張があったり、主動詞としての経路動詞が表されやすいので、前項動詞と後項動詞による働きかけの段階の詳細化でも、後項動詞が前項動詞の意味の完了や、主動詞の経路動詞のような前項動詞を使役の手段とする (移動の) 結果が一部見られるのかもしれない。いずれにしても、実際の頻度としては、英語の使役移動に対応する経路動詞との組み合わせ (表 27 を参照) や経路動詞での対応 (表 26 を参照) が多く、使役移動の様態と手段が前項動詞と後項動詞の両方に表される例は少ない。理論上、使役移動における経路の含意は可能でも、働きかけの段階の詳細化という動機づけは一つの可能性に留まっているのだろう。

以上、日本語と韓国語の使役移動において、経路以外の動詞が前項動詞と後項動詞の両方に表される例について見た。両言語では、使役移動の様態と手段が前項動詞と後項動詞の両方に表される例が殆どないが、使役移動の様態でも手段でもない「その他」の動詞も

含めると、被使役者に対する働きかけの詳細化が見られた。つまり、使役の手段以外の動詞でも、使役者による働きかけの段階を示すことができ、使役の手段以外の動詞も含めて前項動詞や後項動詞で同じ働きかけの段階を示すことで、働きかけの段階の詳細化が見られた。その際、後項動詞の意味が前項動詞による働きかけの完了を示す場合も見られたが、必ずしもそうなる必要はない。このような前項動詞と後項動詞による働きかけの詳細化は、実際の頻度として経路動詞との組み合わせや経路動詞での対応が多いことを考えると、理論上の可能性の一つにすぎないかもしれない。

## 5章 まとめと今後の課題

本稿では、Talmy の類型論では V 言語として分類される日本語と韓国語が、移動の様態に注目すると、非主要部によって様態が表されやすい言語である可能性を指摘した。両言語では、典型的な V 言語のスペイン語とは違い、主動詞以外の選択肢が複数のものであり、中には主動詞との結びつきが強い動詞的表現もある。先行研究では、節同士の結びつきが強いと、情報の背景化が進み、その頻度は高いとしているので、両言語の移動事象でも、主動詞との結びつきの強い非主要部で表される様態の頻度は高くなると予想した。その結果、概ね予想通りの結果となったが、一部の使役移動では一致しない結果も見られた。以下、英語小説を翻訳した日本語と韓国語の小説の中から、自律移動の 263 例、使役移動の 275 例を対象に検証を行った結果をまとめてみる。

- (145) a. 検証結果 1 : 自律移動を表す日本語と韓国語では、非主要部の様態が多かった。非主要部の様態では、主動詞との概念的な結びつきが強いものが多かった。
- b. 検証結果 2 : 使役移動を表す日本語と韓国語では、移動の様態より手段の方が多かった。使役手段の表現では、主動詞との結びつきが強いものが多かった。
- c. 検証結果 3 : 日本語と韓国語では、使役移動の様態と手段が複合動詞の前項動詞と後項動詞の両方に表されている場合が殆どなかった。その要因として、両言語の経路動詞での対応と経路動詞との組み合わせが挙げられる。

第 1 の検証では、英語の自律移動に対応する日本語と韓国語は、非主要部の様態が多かったが、主動詞との結びつきが強いものは少なかった。しかし、複数の事象が連なる物語の特徴を考えると、主動詞との結びつきが強い両言語の非主要部でも、主動詞ではない後項動詞を強いられている例は、主動詞との概念的な結びつきが強いと見なすべきであろう。その結果、両言語の非主要部の様態では、主動詞との概念的な結びつきが強いものが多かった。両言語の非主要部で様態が表される例が多い要因としては、非主要部の様態が果たす様々な役割が考えられ、様態の中立化や副詞の上位カテゴリー、別の移動の側面への注目、意味の拡張を取り上げた。いずれにしても、様態の副詞を設けることによる負荷を回避しながら、かつ英語の様態の詳細にも対応しようとする戦略であるが、道具や速度のような特定の様態の副詞については、非主要部の動詞での対応が難しいため、負荷がかかっても回避しない例も見られた。

第 2 の検証では、英語の使役移動に対応する日本語と韓国語は、非主要部の様態より非主要部の手段が多かったが、非主要部の手段では、主動詞との結びつきが強いものが少なかった。しかし、使役移動でも事象の連続性を考えると、非主要部の手段では、主動詞と

の概念的な結びつきが強いものが少なくないことがわかった。両言語の非主要部の手段が多い要因としては、継続操作型と開始時起動型の使役移動が考えられる。両言語では、継続操作型と開始時起動型の対応が多く見られたが、経路動詞が見られない場合はあるものの、使役行為を非主要部で対応し、主動詞との結びつきが強い非主要部での対応が多かった。

しかし、両言語の使役移動では、使役の手段でも移動の様態でもない「その他」が多く、非主要部の手段より多かった。本稿では、「その他」として、①活動動詞、②図や地の情報が含まれた動詞、③自律移動の動詞を取り上げた。まず、活動動詞は、継続操作型の使役移動からの拡張でよく見られるが、使役者の身体部位による小規模の移動や被使役者の移動後もなお使役者の手の中という継続操作型の側面が活動動詞と類似しているため、活動動詞が用いられていると思われる。次に、図や地の情報が含まれた動詞は、英語の使役移動における図や地の情報に注目して対応しているため、同じ英語の使役動詞に対しても、異なる図や地の情報で対応したり、異なる英語の使役動詞に対して同じ図や地の情報で対応していた。最後に、自律移動の動詞は、随伴運搬型の使役移動からの対応でよく見られた。特に、英語の使役的直示動詞への対応では、自律移動での対応が目立っていた。いずれにしても、「その他」での対応は、限られた両言語の使役手段動詞を補うために用いられていると思われる。

第3の検証では、英語の使役移動に対応する日本語と韓国語は、使役移動の様態と手段の両方が複合動詞の前項動詞と後項動詞に分けて表されている場合は殆どなかった。その要因として、両言語の経路動詞での対応と経路動詞との組み合わせが挙げられるが、使役移動の様態でも手段でもない「その他」の動詞も含めると、被使役者に対する働きかけの詳細化が見られた。しかし、実際の頻度としては、英語の使役移動を経路動詞で対応したり、経路動詞との組み合わせで対応するケースが多かったため、働きかけの段階の詳細化は理論上の可能性の一つにすぎないのかもしれない。

本稿で検証した日本語と韓国語の様態動詞は、今後の課題として、さらにパラレルコーパスのデータを増やし、作品の偏りによる影響をなくす必要があるだろう。同じ英語小説からの複数の翻訳小説との比較と、同じ文章からの広範囲な容認度テストを行い、本稿の議論を補うこともできると思われる。また、英語小説からの翻訳だけでなく、日本語の小説からの翻訳、韓国語の小説からの翻訳も併せて検証すると、より多角的な議論が期待できるが、残念ながら、日本語小説の翻訳は特定の作家に集中しており、韓国語小説は、英語に翻訳されているものが殆ど見られないのが現状である。今後、日本語と韓国語の小説が英語にも多く翻訳され、研究の環境が整うことを期待したい。さらに、スペイン語をはじめ、他のV言語も取り込めば、より体系的なV言語内の多様性の研究もできるだろう。

また、分析対象としては、今回は図の物理的移動に限ったが、抽象的移動にも議論を広げることができるだろう。「空を見上げた」のような視線の移動や *The mountain range goes from Canada to Mexico*(Matsumoto 1996:183)のような抽象的移動に関する先行研究もいくつ



か見られるので、本稿の議論を踏まえつつ、より広範囲での検証もできると考えられる。ただし、今後の研究の課題においても、本稿で提示したような類型論と認知言語学の視点が重要であると考え。

#### 謝辞

本稿を執筆するにあたり、東京大学大学院総合文化研究科博士課程の奥村晶子さんと嶋田紀之さんには、日本語のネイティブチェックして頂いて大変お世話になった。その他、多くの方々にご助力いただいたことに感謝する。

#### 参考文献

- Aske, J. (1989). Path predicates in English and Spanish: A closer look. *Proceedings of the Berkeley Linguistics Society*, 15, 1-14.
- Bowerman, M., & Choi, S. (1991). Learning to express motion events in English and Korean: The influence of language-specific lexicalization patterns. *Cognition*, 41, 83-122.
- Brown, R. (1958). *Words and Things*. Glencoe, Ill: Free Press.
- Brown, R., & Lenneberg, E. H. (1954). A study in language and cognition. *Journal of Abnormal and Social Psychology*, 49, 454-462.
- Croft, W., Jóhanna, B., Willem, H. Violeta, S., & Chiaki, T. (2010). Revising Talmy's typological classification of complex event constructions. In H. C. Boas (Ed.), *Contrastive Studies in Construction Grammar*. Amsterdam: Benjamins. 201-235.
- Koga, H., Koloskova, Y., Aoki, Y. & Mizuno, M. (2006). Spatial motion expression in English, German, and Russian: With reference to Japanese. *Paper presented at the Workshop on the Semantics of Motion*, the University of Kobe, Japan.
- Koga, H., Koloskova, Y., Mizuno, M., & Aoki, Y. (2008). Expression of spatial motion events in English, German, and Russian: With special reference to Japanese. In C. Lamarre, T. Ohori, & T. Morita (Eds.), *Typological Studies of the Linguistic Expression of Motion Events, vol. 2: A Contrastive Study of Japanese, French, English, Russian, German and Chinese*. Center for Evolutionary Cognitive Sciences at the University of Tokyo.
- Lakoff, G. (1987). *Women, Fire, and Dangerous Things*. Chicago: The University of Chicago Press.
- Lakoff, G., & Johnson, M. (1980). *Metaphors We Live By*. Chicago: The University of Chicago Press.
- Matsumoto, Y. (1996a). How abstract is subjective motion? a comparison of coverage path expressions and access path expressions. In A. Goldberg (Ed.), *Conceptual structure, discourse, and language*. Stanford: CSLI Publications. 359-373.
- Matsumoto, Y. (1996b). *Complex Predicates in Japanese: A Syntactic and Semantic Study of the Notion 'Word'*. Stanford: CSLI Publications.
- Mayer, M. (1969). *Frog, Where Are You?* New York: Dial Press.
- Ohara, K. H. (2002). Linguistic encodings of motion events in Japanese and English: A preliminary look. In *Hiyoshi Review of English Studies*, 41, 122-153.

- Ohuri, T. (2000). Goal-orientedness in Two Event Framing Typologies. In *OST-WEST Kolloquium zur Sprachwissenschaft. Teil II: Sprachtypen in Ost und West*. Tuebingen: Max Niemeyer.
- Ohuri, T., Kessakul, R., Kimbara, I., & Takubo, K. (2000). Discourse framing of motion events: Some typological implications from east Asian languages. In *International Conference on Cognitive Typology*, Antwerp.
- Slobin, D. I. (1996). Two ways to travel: Verbs of motion in English and Spanish. In M. Shibatani, & S. A. Thompson (Eds.), *Grammatical constructions: Their form and meaning*. Oxford: Clarendon Press. 195-220.
- Slobin, D. I. (2000). Verbalized events: A dynamic approach to linguistic relativity and determinism. In S. Niemeier, & R. Dirven (Eds.), *Evidence for linguistic relativity*. Amsterdam: John Benjamins. 107-138.
- Slobin, D. I. (2003). Language and thought online: Cognitive consequences of linguistic relativity. In D. Gentner, & S. Goldin-Meadow (Eds.), *Advances in the Investigation of Language and Thought*. 157-191. Cambridge, MA: MIT Press.
- Slobin, D. I. (2004). The many ways to search for a frog: Linguistic typology and the expression of motion events. In S. Strömquist, & L. Verhoeven (Eds.), *Relating events in narrative, vol. 2: Typological and contextual perspectives*. New Jersey: Lawrence Erlbaum Associates. 219-257.
- Slobin, D. I. (2005). Relating narrative events in translation. In D. Ravid, & H. B. Shyldkrot (Eds.), *Perspectives on language and language development: Essays in honor of Ruth A. Berman*. Dordrecht: Kluwer. 115-129.
- Slobin, D. I. (2006). What makes manner of motion salient? Explorations in linguistic typology, discourse, and cognition. In M. Hickmann, & S. Robert (Eds.), *Space in Languages: Linguistic Systems and Cognitive Categories*. Amsterdam: John Benjamins. 59-81.
- Slobin, D. I., Bowerman, M., Brown, P., Eisenbeiss, S., & Narasimhan, B. (2011). Putting things in places: Developmental consequences of linguistic typology. In J. Bohnemeyer & E. Pederson (Eds.), *Event Representation in language and cognition*. New York: Cambridge University Press. 134-165.
- Sugiyama, Y. (2005). Not all verb-framed languages are treated equal: The case of Japanese. *Linguistic Society*, 31, 299-310.
- Tagashira, Y., & Hoff, J. (1986). *Handbook of Japanese compound verb* [日本語複合動詞ハンドブック]. Tokyo: Kinseidou[北星堂書店].
- Talmy, L. (1985). Lexicalization patterns: Semantic structure in lexical forms. In T. Shopen (Ed.), *Language typology and lexical description, Vol. 3: Grammatical categories and the lexicon*. Cambridge, MA: Cambridge University Press.
- Talmy, L. (1991). Path to Realization: a Typology of Event Conflation. *Proceedings of the Seventeenth Annual Meeting of the Berkeley Linguistic Society*, 17. Berkeley, CA: Berkeley Linguistic Society. 480-519.
- Talmy, L. (2000). A typology of event conflation. Reprinted, with permission, From Talmy, L. *Toward a cognitive semantics*. Cambridge, MA: MIT Press. [高尾享幸訳 (2000) 「イベン

- ト統合の類型論」．坂原茂（編）『認知言語学の発展』東京：ひつじ書房. 347-451.]
- Talmy, L. (2000). *Toward a cognitive semantics*, vol. 2: *Typology and process in concept structuring*. Cambridge, MA: MIT Press.
- Wienold, G. (1995). Lexical and conceptual structures in expressions for movement and space: With reference to Japanese, Korean, Thai, and Indonesian as compared to English and German. In U. Egli, P. Pause, C. Schwarze, A. Von Stechow, & G. Wienold (Eds.), *Lexical Knowledge in the Organisation of Language*. John Benjamins. 301-340.
- Vendler, Z. (1967). *Linguistics in Philosophy*. New York: Cornell University Press.
- Yoneyama, M. (1986). Motion verbs in conceptual semantics. *Bulletin of the Faculty of Humanities*, 22. 1-15.
- 秋田喜美・松本曜・小原京子（2010）．「移動表現の類型論における直示的経路表現と様態語彙レパトリー」．影山太郎（編）『レキシコンフォーラム No.5』．東京：ひつじ書房. 1-25.
- 伊藤たかね・杉岡洋子（2002）．『語の仕組みと語形成』．東京：研究社.
- 小原京子（2002）．「日本語主観移動表現のコーパス分析：英語との比較から」
- 影山太郎（1993）．『文法と語形成』．東京：ひつじ書房.
- 影山太郎（2001）．『動詞の意味と構文』．東京：大修館書店.
- 影山太郎（2014）．『複合動詞研究の最先端—謎の解明に向けて』．東京：ひつじ書房.
- 黒田亘（1975）．『経験と言葉』．東京大学出版会.
- 古賀裕章（2008）．「「てくる」のヴォイスに関連する機能」．森雄一，西村義樹，山田進，米山三明（編）『ことばのダイナミズム』．東京：くろしお出版. 241-257.
- 古賀裕章（2017）．「日英独露語の自律移動表現—対訳コーパスを用いた比較研究—」．松本曜（編）『移動表現の類型論』．東京：くろしお出版. 303-336.
- 高橋清子（2015）．「中国語とタイ語の移動事象表現」．『神田外語大学紀要』第 27 号. 61-81.
- 田中茂範・松本曜（1997）．『日英語比較選書 6：空間と移動の表現』．東京：研究社.
- 坪井栄治郎・大堀壽夫・西村義樹（2002）．「事態把握のタイポロジーについての認知言語学的研究」．『平成 11-13 年度科学研究費助成金（基盤研究(C)(2)）研究成果報告書』．東京大学.
- 寺村秀夫（1984）．『日本語のシンタクスと意味Ⅱ』．東京：くろしお出版.
- 西村義樹（1998）．「行為者と使役構文」．中右実・西村義樹『日英語比較選書 5：構文と事象構造』．東京：研究社.
- 日本語記述文法研究会（2008）．『現代日本語文法 6』．東京：くろしお出版.
- 松本曜（1998）．「日本語の語彙的複合動詞における動詞の組み合わせ」．『言語研究』114. 37-83.
- 松本曜（2003）．「タルミーによる移動表現の類型をめぐる問題—移動の意味論 I—」．『明治学院論叢』第 695 号. 51-82.
- 松本曜（2017）．『シリーズ言語対照 第 7 巻 移動表現の類型論』．東京：くろしお出版.

- 守田貴弘 (2008). 「日本語とフランス語の空間移動表現—動詞枠付け言語と類型内の多様性—」. ラマール・クリスティーン, 大堀壽夫, 守田貴弘 (編) 『空間移動の言語表現の類型論的研究』2, 東京大学 21 世紀 COE プログラム「心とことば—進化認知科学的展開」報告書. 45-68.
- 守田貴弘 (2011). 「移動表現における様態動詞の分類」. 『R sonances』7. 107-112.
- 守田貴弘・石橋美由紀 (2017). 「日本語とフランス語の移動表現—話し言葉と書き言葉のテキストからの考察—」. 松本曜 (編) 『移動表現の類型論』. 東京: くろしお出版. 275-302.
- 由本陽子 (1996). 「語形成と語彙概念構造」. 奥田博之教授退官記念論文集刊行会 (編) 『語彙と文化の諸相』. 東京: 英宝社. 105-118.
- 由本陽子 (2005). 『複合動詞・派生動詞の意味と統語—モジュール形態論から見た日英語の動詞形成—』. 東京: ひつじ書房.
- 고영근 (2004b). 국어 문법의 방향 탐색. 우리말연구 제 15 호, 23-51.
- 고영근, 구분관 (2008). 우리말 문법론. 집문당.
- 고영근, 남기심 (2014). 표준국어문법론 제 4 판. 도서출판 박이정.
- 국립국어원 (2005). 외국인을 위한 한국어 문법. 커뮤니케이션북스.
- 김종록 (2008). 외국인을 위한 표준 한국어 문법. 도서출판 박이정.
- 이숙 (2007). 한국어에 나타나는 이동의 어휘화 형식—Talmy (1985)에 어휘화 유형론으로 중심으로—. 이중언어학 제 33 호, 169-188.
- 임지룡 (2000). 한국어 이동 사건의 어휘화 양상. 현대문법연구 제 20 호, 23-45.
- 임홍빈, 홍경표, 장숙인 (2012). 외국인을 위한 한국어 문법. 연세대학교 출판부.
- 황병순 (1986). 국어 복합동사에 대하여. 영남어문학 제 13 호, 191-203.

#### 例文出典

- Brown, D. (2009). *The Lost Symbol*. New York: Doubleday. [日本語訳. 越前敏弥 (2010). 로스트・シンボル. 東京: 角川書店] [韓国語訳. 안종설(2009). 로스트 심벌. 문학수첩]
- Fitzgerald, F. S. (1925). *The Great Gatsby*. New York: Scribner. [日本語訳. 小川高義 (2009). グレート・ギャッツビー. 東京: 光文社] [韓国語訳. 김영하(2013). 위대한 개츠비. 문학동네]
- Hosseini, K. (2003). *The Kite Runner*. New York: Bloomsbury Publishing. [日本語訳. 佐藤耕士 (2007). 君のためなら千回でも. 東京: 早川書房] [韓国語訳. 이미선(2005). 연을 쫓는 아이. 도서출판 열림원]
- Jones, D. W. (1986). *Howl's Moving Castle*. New York: HarperCollins Publishers. [日本語訳. 西村醇子 (1997). ハウルの動く城. 東京: 徳間書店] [韓国語訳. 김진준(2004). 하울의 움직이는 성. 문학수첩 리틀북]
- Maguire. G. (1995). *Wicked: The Life and Times of the Wicked Witch of the West*. New York: HarperCollins Publishers. [日本語訳. 服部千佳子・藤村奈緒美 (2007). ウィキッド.

東京：ソフトバンク クリエイティブ] [韓国語訳. 송은주(2004). 위키드. 민음사]  
Tolkien, J. R. R. (1937). *Hobbit*. New York: HarperCollins Publishers. [日本語訳. 山本史郎  
(2012). ホビットーゆきてかえりし物語. 東京：原書房] [韓国語訳.  
이미애(2005). 호빗. (주)씨앗을 뿌리는 사람]

#### 辞書類

표준국어대사전(標準国語大辞典) <https://stdict.korean.go.kr>

英辞郎 on the WEB (アルク) <https://eow.alc.co.jp>

デジタル大辞泉 大辞泉第三版 (小学館) <https://kotobank.jp/>

#### コーパス関係

筑波ウェブコーパス(NINJAL-LWP for TWC(NLT)) <http://nlt.tsukuba.lagoinst.info/>

국립국어원 말뭉치(韓国国立国語院のコーパス) <https://ithub.korean.go.kr/user/main.do>

Appendix

ここでは、抽出したデータの一部を示す。コーディングの略語は以下の通りである。

1. 自律移動

- ad : 副詞(adverb)
- non-finite : 非定形動詞
- N/A : (対応が) 省略
- 強 : 主動詞との結びつきが強い
- 弱 : 主動詞との結びつきが弱い
- 弱[ad欄] : 主動詞との結びつきが弱い非主要部の様態表現
- D : 方向(direction of motion)
- M : 様態(manner of motion)
- P : 経路位置関係(path of motion)
- V : (様態でも経路でもないその他の) 動詞
- 2 : 複文 (辞書に登録されていない複数の動詞)

1	source language	page	verb	ad	target language 1	page	verb	分類	強さ	ad	target language 2	page	verb	分類	強さ	ad
1	trudged dejectedly through the dark s	185	trudge	ad	ヘイヴンの暗い通りをとぼと歩いてい	177	歩く	M		ad	거리를 텅덜텅 힘없이 걷고 있	162	걷다	M		ad
2	loaf off the bench as he ran to the door.	128	run		り残りをかっさつらって、扉へ急ぎました。	124	急ぐ	M			를 닦아내고 문 쪽으로 달려갔다.	113	달리다	MD	強	
3	a bit as they walked across the common	158	walk		フックス夫人の家まで歩いてるとき	152	歩く	M			인의 집으로 걸어가는 동안에도	139	걷다	non-finite	弱	
4	"So I tore down to Market Chipping tod	137	tear		<がやがや町>へとんでいったんです	132	とぶ	MD	弱		"그래서 오늘 부리나케 마켓치핑	120	달리다	MD	強	ad
5	ward and jumped out onto the windy h	128	jump		、風が吹いている丘にとびおりました。	124	とぶ	MD	強		람부는 언덕 비탈로 뛰어내렸다.	114	뛰다	MP	強	
6	and ran across the nearest flower bed.	159	run		けると、近くの花壇に走りこんだので、	153	走る	MP	強		일 가까운 꽃밭 위로 달려가면서	140	달리다	non-finite	弱	
7	and dash up to his bedroom to look afte	103	dash		何か隠してある物を見に寝室へ駆け	101	駆ける	MPD	強		자기 방으로 급히 달려 올라갔다	92	달리다	2	弱	ad
8	and people were running out with their	117	run		耳をおおひながらとびだしてきました。	115	とぶ	MPD	強	弱	두 손으로 귀를 막은 사람들이 두	105	뛰다	MPD	強	
9	ad thither. whining in a disturbed way.	159	run		鳴きながら、あちこちと走りまわり、	153	走る	non-finite	弱		듯 갱깁거리며 이리저리 뛰었고,	140	뛰다	M	弱	
10	She ran to the window to see if the thim	130	run		ソフィーは窓に駆け寄り、かかしがまだ	127	駆ける	non-finite	弱		지 보려고 창문 앞으로 달려갔다.	116	달리다	MD	強	
11	and ran for the stairs.	199	run		ハウルは階段に駆け寄り、	189	駆ける	non-finite	弱		하울은 계단 쪽으로 달려갔다.	175	달리다	MD	強	
12	She tiptoed to the door as fast as she c	126	tiptoe	ad	ずつて、こっそり戸口を目ざしました。	122	とぶ	non-finite	弱	ad	게 문 쪽으로 살금살금 걸어들었다.	112	걷다	MD	強	ad
13	He jumped indoors across his guitar, to	150	jump		ギターをとびこえてきて、ソフィーのひ	146	とぶ	non-finite	弱		그는 기타를 훌쩍 뛰어넘어 집 인	133	뛰다	non-finite	弱	ad
14	e doorstep and jumped down to meet it.	149	jump		一を戸口に置く、下へとひおり、かか	144	とぶ	non-finite	弱		뛰어내려 허수아비를 가로막았다.	132	뛰다	non-finite	弱	ad
15	and then shortly race out into the yard t	103	race		かと思うとすぐに裏庭へ走って行って、	101	走る	non-finite	弱		다시 마당으로 뛰쳐나가서 흰가	93	뛰다	non-finite	弱	
16	It was hopping from clump to heather	132	hop		な勇猛さでとび移り、斜面でバランスを	128	とぶ	non-finite	弱		를 툭툭툭 건너뛰는 중이었다.	117	뛰다	PM		ad
17	He walked forward slowly, still with his	149	walk	ad	ハウルが片手をつきだして、ゆっくり	144	とぶ	P		ad	그는 손을 벌은 채로 천천히 앞으	132	2	2	弱	ad
18	and crawled dimly indoors through t	162	crawl	ad	つて寝るそうの中へ入っていきま	155	とぶ	PD		ad	통해 집 안으로 기어 들어갔다.	142	2	2	弱	ad
19	She screwed the paper up and hobbled	191	hobble		包みを持って戸口へ引き返しました。	182	とぶ	VV			그녀는 종이를 여미어 쥐고 절뚝	168	2	2		
20	and Mrs. Fairfax and Sophie ran after	159	run		かりそうになって犬を追いかけました。	153	とぶ	VV			리적거리면서 개를 쫓아 달렸고,	140	2	2	弱	
21	Sophie hobbled over and opened it, bh	189	hobble		ソフィーはダイヤルを書に合せて扉を	181	とぶ	N/A			소피는 절뚝거리며 걸어가서 파	166	2	2		
22	When Sophie hobbled over, Michael wa	184	hobble		ソフィーが近寄ると、マイルは黒い水	176	とぶ	派生語			소피가 절뚝거리며 다가갔을 때	162	2	2		

図1 作品②の自律移動の例

1	source language	page	verb	ad	target language 1	page	verb	分類	強さ	ad	target language 2	page	verb	分類	強さ	ad
2	and hurried along the road, in t	123	hurry		の大きな山をできるだけ避けながら道を急ぐ。	162	急ぐ	M			피하면서 서둘러 길을 걸어들었다.	173	걷다	MD	強	ad
3	rolled out onto the cold floor.	100	roll		どりの三つの帽子が冷たい床にころがった。	131	転がる	M			디찬 마룻바닥으로 굴러 떨어졌다.	143	구르다	MP	強	
4	"I squelch when I walk.	112	walk		「だから、ビチャビチャ音を立てて歩くよ。	148	歩く	M	弱		"그래서 걸어 다닐 때는 철벽거리	160	걷다	non-finite	弱	
5	She strode away.	157	stride		そして、大胆に歩いていった。	208	歩く	MD	弱	ad	엘파바는 성큼성큼 걸어들었다.	217	걷다	MD	強	ad
6	And I would walk over as best	193	walk	ad	するとわたしは、一生懸命歩いて行ったものよ。	255	歩く	MD	弱	ad	서 혼자 힘으로 있는 힘껏 걸어가	265	걷다	non-finite	強	ad
7	Boq and Avaric hurried up to t	164	hurry		ソックとアヴァリックは、友人のもとへ駆けつけた。	216	駆ける	MP	強		서둘러 친구들에게로 가 보았다.	226	DV	ad	ad	
8	her roommates hurried to the	194	hurry		ームメイトたちは急いで診療所に駆けつ	258	駆ける	MP	強	弱	기트들은 서둘러 병실로 달려갔다.	267	달리다	MD	強	ad
9	urry and rushed out, knocking	163	rush		りしながら、あたふたと店を飛び出して	216	とぶ	MPD	強	ad	주섬주섬 쟁거 들고 뛰쳐나갔다.	225	뛰다	MPD	強	
10	then jumped manfully the rest	128	jump	ad	ると降りたが、残りも勇気に飛び降り、	168	とぶ	non-finite	強	ad	남머지는 남자답게 뛰어내렸다.	179	뛰다	MP	強	ad
11	"Or else just climb quietly dow	125	climb	ad	ひよと飛ぶか、あるいはおとなしく観念の反	165	這う	non-finite	強	ad	으로 기어내려가서 본래 내 생활	176	2	2	弱	ad
12	and I dash to the Crage Hall lib	143	dash		クレージ・ホールの図書館へ駆け込んで、	189	駆ける	non-finite	強		크레이지홀 도서관으로 달려가	199	달리다	non-finite	強	
13	Or maybe, he thought as he hu	161	hurry		ち合わせ場所に急ぎながら、ソックは考	212	急ぐ	non-finite	弱		개를 만나러 달려가면서 생각했다.	222	달리다	non-finite	強	ad
14	The sorcery students were all ju	182	jump		が全員椅子の上に飛びあがり、檸檬な角	241	とぶ	non-finite	強		로 뛰어 올라가 이 사람 짐을 서슴	251	뛰다	non-finite	弱	
15	Head over thighs he rolled out	124	roll		のおもちゃのように真逆さまにころげ	163	転がる	non-finite	強		를 머리 위로 쳐들고 굴러 떨어	175	구르다	non-finite	強	
16	and Ama Vimp ran forward to	164	run		アマ・ヴィンプが駆け寄って毛布を直す。	217	駆ける	non-finite	強		뛰어나가 담요 끝자락을 여었다.	227	뛰다	non-finite	強	
17	Though as they walked along t	105	walk		廊下を歩いていくと、大きな窓から日光	138	歩く	non-finite	弱		복도를 따라 걸어갈 때는	150	걷다	non-finite	弱	
18	or they would walk about and	188	walk		ソックの街を歩き回ってすぐれた建	249	歩く	non-finite	強		그들은 산책을 허가나 시즈의 맛	259	V			
19	Galinda walked back to her roo	119	walk	ad	ゆっくりと自分の部屋へと戻りながら、	157	とぶ	P		ad	갈린다는 천천히 방으로 되돌아	168	2	2	弱	ad
20	and he marched out of the roo	109	march		憤然と部屋から出ていった。	144	とぶ	PD		ad	달리곤드는 방에서 걸어 나가 버	176	2	2	弱	
21	The boys rambled away, rattlin	121	ramble		いて傾けたりしながら、ぶらぶらと出	159	とぶ	PD			드리는 등 소란을 떨며 가 버	207	2	2	弱	
22	let's sneak out and get a tea at	188	sneak		「さあ、教室を抜けだして、駅前広	248	とぶ	PD			"솔쩍 빠져나가서 절도액 광장의	259	VPD		ad	
23	had wandered into an abattoir.	164	wander		すっぴりと元の元を切り裂けていたの	217	とぶ	N/A			마지 도살장에 들어갔던 것처럼	227	PD			

図2 作品④の自律移動の例

2. 使役移動

ad : 副詞(adverb)

non-finite : 非定形動詞

繼 : 継続操作型

隨 : 隨伴運搬型

開 : 開始時起動型

強 : 主動詞との結びつきが強い

弱 : 主動詞との結びつきが弱い

C : 使役移動の手段

M : 使役移動の様態(manner)

P : 使役移動の経路位置関係(path)

V : (様態でも経路でもないその他の) 動詞

V : 補助動詞(auxiliary verb)

MOVE : 自律移動

種	source language	page	verb	ad	target language 1	page	verb	分類	強さ	ad	種	target language 2	page	verb	分類	強さ	ad	種
2	door and tossed the key to the guard.	170	toss		引きあげ、鍵を警備官に投げてよこす。	240	投げる	CP	弱		開	鍵を 누네스에게 던져 주었다.	280	던지다	CV	弱		開
3	The guard reluctantly pulled out his	178	pull	ad	やむなく、またイヤフオンを引き抜いた。	251	引く	CP	強	ad	繼	귀에 꽂힌 이어폰을 뽑았다.	293	V			ad	繼
4	After using Trish's key card, he had	187	ram		カードスロットの奥へ押しこんだので、	263	押す	CP	強		繼	전을 하나 쑤셔 박아 놓았다.	308	VVP	弱			弱
5	ad stuffed it into Solomon's mouth.	126	stuff		ンをまるめてソロモンの口に押しこんだ。	181	押す	CP	強		繼	로몬의 입속에 쑤셔 넣었다.	209	VP	弱			
6	She stuffed the flashlight into his no	148	stuff		ンの手のひらに懐中電灯を押しつけた。	212	押す	CP	強		繼	등을 그의 손에 쥐어 주었다.	245	VV	弱			
7	Nunez pulled out his radio.	141	pull		ヌエスは無線機を引っ張り出した。	203	引っ張る	CP	強		繼	누네스가 무전기를 꺼내며	234	P				
8	The man pressed down harder, driv	153	press	ad	男はさらに強く押し、首まですっかりエタ	219	押す	non-finite	強	ad	繼	말라크가 더 힘을 주자,	254	N-CONF				
9	reading desks, pulled up two chairs,	183	pull		な机を選んで二脚の椅子を引き寄せ、	258	引く	non-finite	強		繼	음, 의자 두 개를 끌어다 놓고	301	끌다	non-finite	弱		繼
10	led out his radio, raising it to his lips,	115	pull		無線機を引っ張り出して口もとにあてた。	166	引っ張る	non-finite	強		繼	다가 결국 무전기를 꺼냈다.	192	P				
11	Solomon reached in his pocket and p	102	pull		手を入れて小さな包みを取り出すと、ラ	146	取る	non-finite	強		繼	게서 조금만 꾸러미를 꺼내 령	172	P				
12	Smiling, he now pulled out Peter So	111	pull		ラー・ソロモンのiPhoneを引っ張り出し、	160	引っ張る	non-finite	強		繼	피터 솔로몬의 아이폰을 꺼내	172	P				
13	Anderson pulled out his radio again ;	116	pull		たたび無線機を引っ張り出し、その要請	167	引っ張る	non-finite	強		繼	무전기를 꺼내 사토의 요구	193	P				
14	The guard pulled out his radio and s	137	pull		備員は無線機を取り出して話しかけた。	196	取る	non-finite	強		繼	요원은 무전기를 꺼내 동료	227	P				
15	The guard pulled out a photocopy o	138	pull		らは青写真のコピーを取り出して渡した。	197	取る	non-finite	強		繼	으로 복사한 종이를 꺼내 엔드	228	P				
16	ed the door, took out her cell phone,	163	take		いでドアを開め、携帯電話を取り出して	231	取る	non-finite	強		繼	은 마음으로 휴대전화를 꺼내	268	P				
17	et and yanked out a cigarette lighter.	157	yank		に手を突っこんでライターを取り出すと、	224	取る	non-finite	強		繼	라이터를 꺼내는 것이었다.	260	P				
18	and she yanked the device from her	165	yank		サトウはポケットから引っ張り出して	233	引っ張る	non-finite	強		繼	는 재빨리 블랙베리를 꺼내	271	P			ad	繼
19	Trish stopped short, pulled out her k	134	pull		を取り出すと、壁を手探りして突っ込	193	取る	non-finite	強		繼	쇠를 꺼내 든 다음, 벽을 더듬	223	PP				
20	he picked up Solomon's iPhone and	126	pick		ソロモンのiPhoneと鍵束をつかみと	181	VP	強			繼	미를 집어 주머니에 넣었다.	209	2		弱		繼
21	and stashed his snacks beneath the c	122	stash		スナック菓子をカウンターの下に隠した。	174	V				繼	간식거리를 책상 밑으로 숨	202	V				
22	d quickly pulled off his headphones,	142	pull	ad	守衛がイヤフオンをあわててはずしたが、	204	V			ad	繼	재빨리 헤드폰을 벗었지만,	236	C			ad	繼
23	"Pull it aside."	158	pull		「それをどけて」	227	V				繼	"그걸 치워 봐요."	263	VV	弱			

図3 作品①の使役移動の例

種	source language	page	verb	ad	target language 1	page	verb	分類	強さ	ad	種	target language 2	page	verb	分類	強さ	ad	種	
2	ol and all, toward the bathroom.	120	push		と、椅子ごと浴室にむけて押しました。	118	押す	C			繼	결상패 화장실 쪽으로 밀고 갔다.	107	MOVE					
3	He took Sophie by her skinny ol	154	tow		きっている城へ戻ろうとひっぱりました。	149	引っ張る	C			繼	고 있는 성 쪽으로 끌고 올라갔다.	136	MOVE					
4	and picked up the poker,	142	pick		火かき棒をとりあげました。	138	取る	CP	強		繼	부지깅이를 집어 들었다.	125	집다	2	弱		繼	
5	she thrust a mugful into How's	122	thrust		みなさいと、)ハウルに押しつけました。	119	押す	CP	強		繼	에 부어 허울의 손에 쥐어 주었다.	109	쥐다	2	弱		繼	
6	Michael eagerly thrust a strange	175	thrust	ad	につやのある紙を押しつけてきました。	168	押す	CP	強	ad	繼	장을 열른 그녀에게 쥐어 주었다.	155	쥐다	2	弱	ad	繼	
7	and sent him out into the street ;	107	send		色あざやかな町並へとマイケルを送り	105	送る	CP	強		開	있는 거리로 마이클을 내보냈다.	96	보내다	PC			開	
8	"Throw this in the air when the	191	throw		がはじまったらこれを投げつけてごらん」	182	投げる	CPV	強		開	가 시작될 때 이걸 공중에 뿌리면	168	V	non-finite				
9	"I brought her here to see Lett	159	bring		こいはいというので、お連れしました」	153	VP				開	반드시겠다고 해서 오셔 왔어요」	140	MOVE					
10	and swept all the slime out onto	121	sweep		荒野にへどろを掃きました。	118	VP	強			繼	물을 언덕 위 황무지로 쓸어 냈다.	108	VP	2	弱	ad	繼	
11	He picked up the skull and knoc	141	knock		マネギの薄切りをたたき落としました。	136	VP				繼	쳐서 눈구멍 속에 박혀 있던 고리	124	치다	2	弱	ad	開	
12	Michael threw two logs on Cal	142	throw		マイケルはまきを二本燃炉に投げこ	137	投げる	non-finite	強		開	앨시퍼에게 장작 두 개를 던지	125	던지다	non-finite				
13	Howl meanwhile picked up his ;	107	pick		かに立てかけてあったギターをとりあげ、	106	取る	non-finite	強		繼	은 방구석에서 기타를 집어들	96	집다	2	弱		繼	
14	Michael took a withered root fr	171	take		鼠をとりだし、それを煤の中につこみ、	164	取る	non-finite	強		繼	를 꺼내어 검댕 속에 집어넣었다.	151	P					
15	She waited until he dragged	big	151	drag	の書物をひっぱりだすと、とほうにくれ	146	引っ張る	non-finite	強		繼	에서 가죽 장정의 커다란 책들을	133	끌다	non-finite	強		繼	
16	Michael pulled a three-legged st	113	pull		椅子を燃炉際に引き寄せて座ると、	111	引く	non-finite	強		繼	하나를 불가에 끌어다 놓고 앉	101	끌다	non-finite	弱		繼	
17	Michael explained as he carried	155	carry		品物を外へ運びながら説明しました。	149	運ぶ	non-finite	弱		隨	이운 물건을 문 쪽으로 가져오	137	MOVE					
18	Sophie sewed buttons on Mich	104	sew		のシャツにボタンを縫いつけながら、	103	VP	non-finite	弱		繼	클의 셔츠에 단추를 달면서	94	V	non-finite	弱			
19	he took him out into the yard to	106	take		裏庭へ連れだして王様の注文の品	104	VP	non-finite	強		繼	하울은 그를 마당으로 데리고 나	95	MOVE					
20	He picked up the skull and knoc	141	pick		ハウルは頭蓋骨を持ちあげると、目の	136	VP	強			繼	하울은 해골을 집어 들고 턱 쳐	124	집다	2	弱		繼	
21	He picked up his guitar and	148	pick		ハウルはギターをかかえあげると、	144	VP	non-finite	強		繼	그는 기타를 집은 뒤	131	집다	non-finite				
22	Sophie threw her apron into th	120	throw		をおおい、燃炉用のスコップをつか	117	V	non-finite	弱			繼	소피는 벽난로 속에 앞치마를 던	107	던지다	2	弱		開
23	the beams and put it in the soot.	171	put		鼠をとりだし、それを煤の中につこ	164	V	non-finite	弱		繼	를 꺼내어 검댕 속에 집어넣	151	집다	CP	強		繼	

図4 作品②の使役移動の例